

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第727集

か ぬか はま
鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

第1分冊 本文・遺構図版・写真図版

2021

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第727集

鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書(第1分冊) 2021
(公財) 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第727集

か ぬか はま
鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

第1分冊

2021

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

(公財)岩手県文化振興事業団

鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

第1分冊 本文・遺構図版・写真図版

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設に関連して平成29・30年度に発掘調査を行った鹿糠浜I遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の調査によって縄文時代～奈良時代の竪穴建物や土坑などの遺構が検出され、その周辺からは生活に使われた土器などの遺物が見つかりました。これらの結果から、当時、この地に集落があり、そこで暮らしていた人々の様子の一端が明らかになりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、洋野町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和3年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋嘉行

例 言

- 1 本報告書は岩手県九戸郡洋野町種市15地割字鹿糠浜地内に所在する鹿糠浜Ⅰ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに『平成29年度発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集)、『平成30年度発掘調査報告書』(同708集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 岩手県遺跡登録台帳に登録されている遺跡コードと遺跡略号は次の通りである。
遺跡コード I F 58-1399/遺跡略号 KHI-17-18
- 5 野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。
[平成29年度] 調査期間 平成29年6月1日～12月15日
調査面積 6,450㎡
担当者 杉沢昭太郎・趙哲済・河本純一・村木 敬・西澤正晴・光井文行・山川純一・中村隼人・河村美佳・中島康佑・藤田崇志
[平成30年度] 調査期間 平成30年4月5日～5月30日
調査面積 1,350㎡
担当者 高木 晃・溜 浩二郎・藤田崇志
- 6 室内整理の期間・担当者は次の通りである。
[平成29年度] 整理期間 平成29年10月2日～平成30年3月30日
担当者 杉沢昭太郎・趙哲済・河村美佳・光井文行
[平成30年度] 整理期間 平成30年11月1日～平成31年3月29日
担当者 溜 浩二郎・藤田崇志
[令和元年度] 整理期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日
担当者 村上絵美
[令和2年度] 整理期間 令和2年7月1日～令和2年9月30日
令和3年1月4日～令和3年1月29日
担当者 丸山直美
- 7 野外調査および室内整理における委託業務は次の機関に依頼した。
基準点測量：株式会社ダイヤ
AMS炭素年代測定分析：バリノ・サーヴェイ株式会社
黒曜石分析：株式会社第四紀地質研究所
石材鑑定：花崗岩研究会
石器実測・トレース：株式会社ラング
- 8 本報告書の執筆分担は次のとおり。
Ⅰ：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
Ⅱ：杉沢

Ⅲ：杉沢・溜・藤田

Ⅳ：杉沢・丸山

Ⅴ：高木・溜・丸山

Ⅵ：(株) 加速器分析研究所・バリノサーヴェイ(株)・(株) 第四期 地質研究所

Ⅶ：杉沢・丸山・趙

- 9 本遺跡の調査及び本書の作成に際し、以下の方々の協力を得た(敬称略、順不同)。
熊谷常正(盛岡大学)、千田政博(洋野町教育委員会)、飯塚義之(台湾中央研究院地球科学研究所)、高橋 満(福島県立博物館)
- 10 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は各遺構の規模により異なるため、各図版にスケールおよび縮尺を付した。
- 2 基本土層にはローマ数字、各遺構の堆積層にはアラビア数字を使用した。
- 3 土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- 4 遺物の実測図の掲載縮尺は土器1/3・1/4、礫石器1/3～1/5、剥片石器2/3・1/2、鉄製品1/2、陶磁器1/3、銭貨1/1、鉄滓1/4を原則とし、各図版にスケールを付した。
- 5 遺構の網掛処理および表現は各図版に凡例を付した。遺構内の土器はPと表記した。
- 6 第7～12表の計測値における表記については()が推定値、< >が残存値を表している。
- 7 今回の調査では遺構種別ごとに堅穴建物→S I、土坑→S Kなどの略号を使用している。その後、属性の変更や欠番(不掲載)となったものが少なからず存在するが、整理時の混乱を避ける為、あえて新たな名称を付けず欠番のままとしている。また、「土坑」の中には後に属性の変更により「陥し穴」とされたものが存在する。これについては本文中の遺構名を「2号土坑(陥し穴)」などと併記することで区別している。純粋な属性に基づく遺構数については抄録の項を参照されたい。なお、S I→堅穴建物は従来の「堅穴住居跡・堅穴状遺構」であるが、新版の「発掘調査のてびき」(文化庁文化財部記念物課2010)に従い「堅穴建物」の名称を使用した。
- 8 写真図版47～124において遺物掲載番号に後続する「*」印があるものについては、後掲の写真図版125～133に各種文様拡大写真を掲載している。
- 9 土器観察表中の<胎土>の項目を「粗」「中間」「緻密」の3段階に区分した。「粗」は胎土中の砂粒混入が多めの状態、「緻密」は精選された粘土を素材としており堅緻な仕上がりとなっている状態、それらの中間を「中間」とした。
- 10 第55～67図 捨て場1・2土器集成図の掲載縮尺は1/6である。

第1分冊

目次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	
	1 遺跡の位置と立地	1
	2 周辺の地形と地質	1~3
	3 歴史的環境	3~10
III	野外調査と室内整理の方法	
	1 野外調査	11~15
	2 室内整理	15~20
IV	平成29年度調査区の遺構と遺物	
	1 概要・基本土層	21~35
	2 遺構	
	(1) 配石遺構	35~39
	(2) 捨て場	39~45
	(3) 竪穴建物	45~49
	(4) 土坑・陥し穴	49~71
	(5) その他	71~75
	3 遺物	
	(1) 土器	71~106
	(2) 土製品	106
	(3) 石器	107~129
V	平成30年度調査区の遺構と遺物	
	1 概要・基本土層	130
	2 遺構	
	(1) 竪穴建物	131~138
	(2) 土坑	138~146
	(3) 炭窯	147~148

VI 自然科学分析

1 放射性炭素年代(AMS測定)	149~151
2 土器付着炭化物による放射性炭素年代(AMS測定)	152・153
3 黒曜石分析	154~169

VII 総括

1 調査成果	170~172
2 捨て場出土土器について	172~178
3 遺跡に搬入された自然礫について	179~188
報告書抄録	383

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第29図 1、4、5、6号土坑	48
第2図 地形分類図	2	第30図 2、3号土坑(陥し穴)	50
第3図 地質分類図	4	第31図 8~11号土坑	52
第4図 周辺の遺跡	6	第32図 12、23号土坑(陥し穴)	54
第5図 調査範囲図	12	第33図 13~16号土坑	56
第6図 調査区地形図	14	第34図 17~21号土坑	58
第7図 調査区全体図	16	第35図 24、25、28、29号土坑	60
第8図 遺構分布図(1)	17	第36図 26、32号土坑(陥し穴)	62
第9図 遺構分布図(2)	18	第37図 30、31号土坑	64
第10図 遺構分布図(3)	19	第38図 33~36号土坑	66
第11図 遺構分布図(4)	20	第39図 37~40号土坑	68
第12図 基本土層1	22	第40図 1号竪穴状遺構	70
第13図 基本土層2	24	第41図 1号集石、2、4、5号焼土	72
第14図 基本土層3	26	第42図 柱穴状土坑(1)	74
第15図 基本土層4	28	第43図 柱穴状土坑(2)、1号溝	75
第16図 調査区(捨て場1・2)ベルト位置図	29	第44図 土器集成図第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群A~E類	76
第17図 調査区(捨て場)ベルト1	30	第45図 縄文時代前期初頭から前葉にかけての 関連遺跡(道南~北東北)	79
第18図 東西ベルト(捨て場)	31	第46図 第Ⅲ群F類・器形	80
第19図 南北ベルト(捨て場)	32	第47図 土器集成図第Ⅳ群(1)	82
第20図 1号配石全体図	33	第48図 土器集成図第Ⅳ群(2)	84
第21図 1号配石北側	34	第49図 土器集成図第Ⅳ群(3)・第Ⅴ・Ⅵ群	85
第22図 1号配石南側	36	第50図 土器集成図第Ⅶ群	86
第23図 1号配石断面図(1)	38	第51図 Ⅰ・Ⅱ群土器分布図	86
第24図 1号配石断面図(2)	40	第52図 Ⅴ群・製塩土器分布図	86
第25図 捨て場1 遺物出土状況	42	第53図 土器重量分布図(調査区全域)	88
第26図 捨て場2 遺物出土状況	44	第54図 土器重量分布図(捨て場1・2)	92
第27図 1号竪穴建物	46	第55図 捨て場1 土器集成図(1)	93
第28図 2号竪穴建物	47		

第56図	捨て場1 土器集成図(2)	94	第75図	3号堅穴建物(2)	133
第57図	捨て場1 土器集成図(3)	95	第76図	4号堅穴建物(1)	135
第58図	捨て場1 土器集成図(4)	96	第77図	4号堅穴建物(2)	136
第59図	捨て場1 土器集成図(5)	97	第78図	41~44号土坑	137
第60図	捨て場1 土器集成図(6)	98	第79図	45~48号土坑	139
第61図	捨て場1 土器集成図(7)	99	第80図	49~54号土坑	141
第62図	捨て場1 土器集成図(8)	100	第81図	55~59号土坑	143
第63図	捨て場2 土器集成図(1)	101	第82図	2号炭竈跡	147
第64図	捨て場2 土器集成図(2)	102	第83図	1号配石平面図	171
第65図	捨て場2 土器集成図(3)	103	第84図	第Ⅲ群F類土器(抜粋)1	177
第66図	捨て場2 土器集成図(4)	104	第85図	第Ⅲ群F類土器(抜粋)2	178
第67図	捨て場2 土器集成図(5)	105	第86図	礫の円磨の程度のクラス分け	180
第68図	土製品分布図	106	第87図	礫の3軸測定法と形状分類	180
第69図	松原型石匙の形態分類[秦1991]	109	第88図	球形度曲線	180
第70図	石器出土数分布図	117	第89図	礫の形状と球形度	181
第71図	石器の石質(1)	128	第90図	グリッドごとの球形度	181
第72図	石器の石質(2)	129	第91図	礫の形状分類および円磨の程度	182
第73図	平成30年度調査区南端谷部土層断面	130	第92図	粒度別の礫の形状分類と円磨の程度	185
第74図	3号堅穴建物(1)	131	第93図	花崗岩類の形状分類と円磨の程度	186

表 目 次

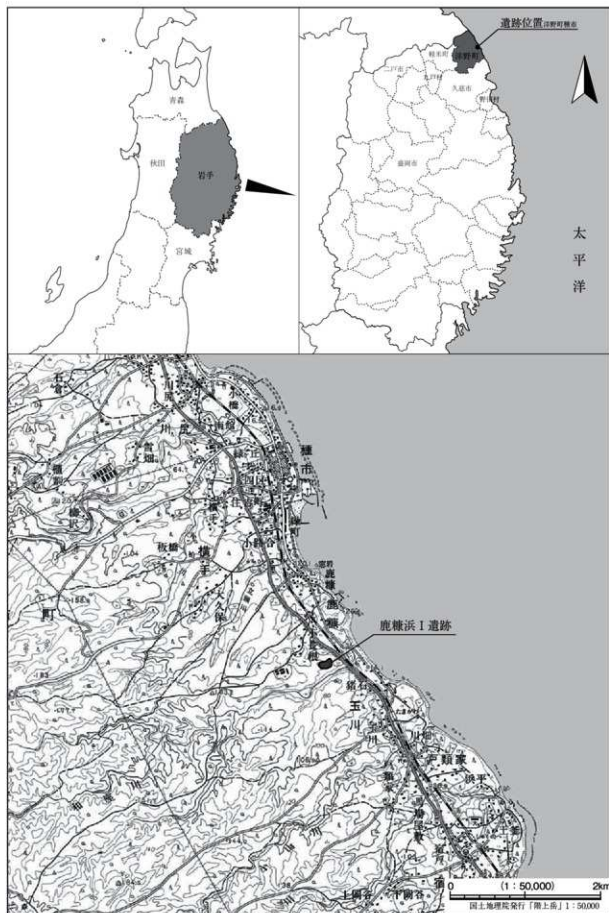
第1表	周辺遺跡一覧	8
第2表	洋野町内調査遺跡一覧	10
第3表	1号配石遺構使用礫一覧	37
第4表	柱穴状土坑一覧	74
第5表	東北部早期末葉~前期前葉の土器型式比較	78
第6表	出土地点別土器重量集計	89~91
第7表	出土地点別石器出土数一覧	118~125
第8表	石器の分類	126
第9表	石器の器種別掲載率一覧	126
第10表	石器の石質	127
第11表	各地区における円磨の程度別の形状比較	184
第12表	粒度別の礫個数と超円礫・円礫の個数およびその割合	184

写真図版目次

カラー写真図版1	遺跡全景(南から)……………	191	写真図版28	捨て場1(4)……………	226
カラー写真図版2	遺跡遠景……………	192	写真図版29	捨て場1(5)……………	227
カラー写真図版3	平成29年度調査区 1号配石遺構・基本土層……………	193	写真図版30	捨て場1(6)……………	228
カラー写真図版4	平成29年度調査区 捨て場1 遺物出土状況……………	194	写真図版31	捨て場1(7)……………	229
カラー写真図版5	平成29年度調査区 出土土器①……………	195	写真図版32	捨て場2(1)……………	230
カラー写真図版6	平成29年度調査区 出土土器②……………	196	写真図版33	捨て場2(2)……………	231
カラー写真図版7	平成29年度調査区 出土土器③・出土土器(石斧) ……………	197	写真図版34	捨て場2(3)……………	232
カラー写真図版8	平成29年度調査区 製塩土器……………	198	写真図版35	3号竪穴建物(1)……………	233
写真図版1	遺跡周辺、遺跡近景……………	199	写真図版36	3号竪穴建物(2)……………	234
写真図版2	調査区現況、調査区東端……………	200	写真図版37	3号竪穴建物(3)……………	235
写真図版3	調査区北側谷底部……………	201	写真図版38	4号竪穴建物(1)……………	236
写真図版4	調査区西壁(1)……………	202	写真図版39	4号竪穴建物(2)……………	237
写真図版5	調査区西壁(2)……………	203	写真図版40	4号竪穴建物(3)……………	238
写真図版6	1号配石遺構(1)……………	204	写真図版41	4号竪穴建物(4)、2号炭窯……………	239
写真図版7	1号配石遺構(2)……………	205	写真図版42	41～43号土坑……………	240
写真図版8	1号配石遺構(3)……………	206	写真図版43	44～47号土坑……………	241
写真図版9	1号配石遺構(4)……………	207	写真図版44	48～51号土坑……………	242
写真図版10	1号配石遺構(5)……………	208	写真図版45	52～55号土坑……………	243
写真図版11	1号配石遺構(6)……………	209	写真図版46	56～59号土坑……………	244
写真図版12	1号竪穴建物……………	210	平成29年度の遺物		
写真図版13	2号竪穴建物……………	211	写真図版47	遺構内出土土器(1)……………	245
写真図版14	1・4～6号土坑……………	212	写真図版48	遺構内出土土器(2)……………	246
写真図版15	8～11号土坑……………	213	写真図版49	縄文時代後期以降の土器(1)……………	247
写真図版16	13～16号土坑……………	214	写真図版50	縄文時代後期以降の土器(2)……………	248
写真図版17	17～21号土坑……………	215	写真図版51	縄文時代後期以降の土器(3)……………	249
写真図版18	24・25・28・29号土坑……………	216	写真図版52	縄文時代後期以降の土器(4)……………	250
写真図版19	30・31・33・34号土坑……………	217	写真図版53	縄文時代後期以降の土器(5)……………	251
写真図版20	35～38号土坑……………	218	写真図版54	製塩土器……………	252
写真図版21	39・40号土坑、2・3号土坑……………	219	写真図版55	縄文時代草創期～前期の土器(1)……………	253
写真図版22	12・23・26・32号土坑……………	220	写真図版56	縄文時代草創期～前期の土器(2)……………	254
写真図版23	1号竪穴状遺構、1号集石……………	221	写真図版57	縄文時代草創期～前期の土器(3)……………	255
写真図版24	2・4・5号焼土、1号溝……………	222	写真図版58	縄文時代草創期～前期の土器(4)……………	256
写真図版25	捨て場1(1)……………	223	写真図版59	縄文時代草創期～前期の土器(5)……………	257
写真図版26	捨て場1(2)……………	224	写真図版60	縄文時代草創期～前期の土器(6)……………	258
写真図版27	捨て場1(3)……………	225	写真図版61	縄文時代草創期～前期の土器(7)……………	259
			写真図版62	縄文時代草創期～前期の土器(8)……………	260
			写真図版63	縄文時代草創期～前期の土器(9)……………	261
			写真図版64	縄文時代草創期～前期の土器(10)……………	262
			写真図版65	縄文時代草創期～前期の土器(11)……………	263
			写真図版66	縄文時代草創期～前期の土器(12)……………	264
			写真図版67	縄文時代草創期～前期の土器(13)……………	265
			写真図版68	縄文時代草創期～前期の土器(14)……………	266

写真図版69	縄文時代草創期～前期の土器(15)	267	写真図版107	縄文時代草創期～前期の土器(53)	305
写真図版70	縄文時代草創期～前期の土器(16)	268	写真図版108	縄文時代草創期～前期の土器(54)	306
写真図版71	縄文時代草創期～前期の土器(17)	269	写真図版109	縄文時代草創期～前期の土器(55)	307
写真図版72	縄文時代草創期～前期の土器(18)	270	写真図版110	縄文時代草創期～前期の土器(56)	308
写真図版73	縄文時代草創期～前期の土器(19)	271	写真図版111	縄文時代草創期～前期の土器(57)	309
写真図版74	縄文時代草創期～前期の土器(20)	272	写真図版112	縄文時代草創期～前期の土器(58)	310
写真図版75	縄文時代草創期～前期の土器(21)	273	写真図版113	縄文時代草創期～前期の土器(59)	311
写真図版76	縄文時代草創期～前期の土器(22)	274	写真図版114	縄文時代草創期～前期の土器(60)	312
写真図版77	縄文時代草創期～前期の土器(23)	275	写真図版115	縄文時代草創期～前期の土器(61)	313
写真図版78	縄文時代草創期～前期の土器(24)	276	写真図版116	縄文時代草創期～前期の土器(62)	314
写真図版79	縄文時代草創期～前期の土器(25)	277	写真図版117	縄文時代草創期～前期の土器(63)	315
写真図版80	縄文時代草創期～前期の土器(26)	278	写真図版118	縄文時代草創期～前期の土器(64)	316
写真図版81	縄文時代草創期～前期の土器(27)	279	写真図版119	縄文時代草創期～前期の土器(65)	317
写真図版82	縄文時代草創期～前期の土器(28)	280	写真図版120	縄文時代草創期～前期の土器(66)	318
写真図版83	縄文時代草創期～前期の土器(29)	281	写真図版121	縄文時代草創期～前期の土器(67)	319
写真図版84	縄文時代草創期～前期の土器(30)	282	写真図版122	縄文時代草創期～前期の土器(68)	320
写真図版85	縄文時代草創期～前期の土器(31)	283	写真図版123	縄文時代草創期～前期の土器(69)	321
写真図版86	縄文時代草創期～前期の土器(32)	284	写真図版124	縄文時代草創期～前期の土器(70)	322
写真図版87	縄文時代草創期～前期の土器(33)	285	写真図版125	各種文様拡大写真(1)	323
写真図版88	縄文時代草創期～前期の土器(34)	286	写真図版126	各種文様拡大写真(2)	324
写真図版89	縄文時代草創期～前期の土器(35)	287	写真図版127	各種文様拡大写真(3)	325
写真図版90	縄文時代草創期～前期の土器(36)	288	写真図版128	各種文様拡大写真(4)	326
写真図版91	縄文時代草創期～前期の土器(37)	289	写真図版129	各種文様拡大写真(5)	327
写真図版92	縄文時代草創期～前期の土器(38)	290	写真図版130	各種文様拡大写真(6)	328
写真図版93	縄文時代草創期～前期の土器(39)	291	写真図版131	各種文様拡大写真(7)	329
写真図版94	縄文時代草創期～前期の土器(40)	292	写真図版132	各種文様拡大写真(8)	330
写真図版95	縄文時代草創期～前期の土器(41)	293	写真図版133	各種文様拡大写真(9)	331
写真図版96	縄文時代草創期～前期の土器(42)	294			
写真図版97	縄文時代草創期～前期の土器(43)	295			
写真図版98	縄文時代草創期～前期の土器(44)	296			
写真図版99	縄文時代草創期～前期の土器(45)	297			
写真図版100	縄文時代草創期～前期の土器(46)	298			
写真図版101	縄文時代草創期～前期の土器(47)	299			
写真図版102	縄文時代草創期～前期の土器(48)	300			
写真図版103	縄文時代草創期～前期の土器(49)	301			
写真図版104	縄文時代草創期～前期の土器(50)	302			
写真図版105	縄文時代草創期～前期の土器(51)	303			
写真図版106	縄文時代草創期～前期の土器(52)	304			

写真図版134	土製品	332	写真図版160	石器・石製品(26)	358
写真図版135	石器・石製品(1)	333	写真図版161	石器・石製品(27)	359
写真図版136	石器・石製品(2)	334	写真図版162	石器・石製品(28)	360
写真図版137	石器・石製品(3)	335	写真図版163	石器・石製品(29)	361
写真図版138	石器・石製品(4)	336	写真図版164	石器・石製品(30)	362
写真図版139	石器・石製品(5)	337	写真図版165	石器・石製品(31)	363
写真図版140	石器・石製品(6)	338	写真図版166	石器・石製品(32)	364
写真図版141	石器・石製品(7)	339	写真図版167	石器・石製品(33)	365
写真図版142	石器・石製品(8)	340	写真図版168	石器・石製品(34)	366
写真図版143	石器・石製品(9)	341	写真図版169	石器・石製品(35)	367
写真図版144	石器・石製品(10)	342	写真図版170	石器・石製品(36)	368
写真図版145	石器・石製品(11)	343	写真図版171	石器・石製品(37)	369
写真図版146	石器・石製品(12)	344	写真図版172	石器・石製品(38)	370
写真図版147	石器・石製品(13)	345	写真図版173	石器・石製品(39)	371
写真図版148	石器・石製品(14)	346	写真図版174	石器・石製品(40)	372
写真図版149	石器・石製品(15)	347	写真図版175	石器・石製品(41)	373
写真図版150	石器・石製品(16)	348	写真図版176	石器・石製品(42)	374
写真図版151	石器・石製品(17)	349	写真図版177	石器・石製品(43)	375
写真図版152	石器・石製品(18)	350	写真図版178	石器・石製品(44)	376
写真図版153	石器・石製品(19)	351	平成30年度の遺物		
写真図版154	石器・石製品(20)	352	写真図版179	土器(1)	377
写真図版155	石器・石製品(21)	353	写真図版180	土器(2)	378
写真図版156	石器・石製品(22)	354	写真図版181	土器(3)	379
写真図版157	石器・石製品(23)	355	写真図版182	土器(4)・土製品	380
写真図版158	石器・石製品(24)	356	写真図版183	石器・石製品(1)	381
写真図版159	石器・石製品(25)	357	写真図版184	石器・石製品(2)	382



第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

鹿糠浜 I 遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(待浜～階上)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年1月11日付け国東整陸二調第1014号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年1月23日に試掘調査を行い、平成25年3月22日付け教生第1777号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年4月3日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

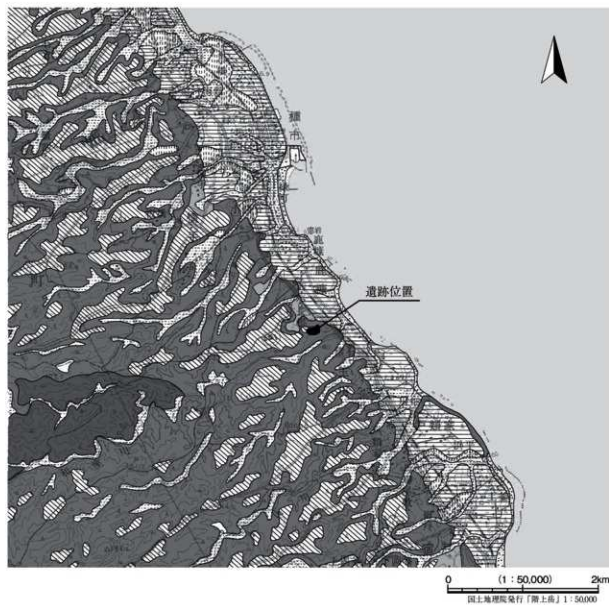
遺跡の所在する洋野町は、岩手県沿岸部最北端に位置し、北は青森県三戸郡階上町、西は九戸郡軽米町、南は久慈市と接し、東側は太平洋に面している。現在の洋野町は、平成18年1月1日に旧種市町と旧大野村が合併し、人口16,824人(平成30年12月31日現在)、面積303.20km²でこのうち山林が地域面積の約7割を占めている。気候は西部高原地域(旧大野村)と東部海岸地域(旧種市町)に大別され、西部高原地域は、夏季は東部海岸地域に比べて気温が4℃～5℃高く、冬季は積雪が多く、内陸型気候を示している。一方、東部海岸地域は、海岸気象の影響を受け、春から夏にかけてはオホーツク海高気圧(親潮)がもたらす冷湿な風「山背(偏東風)」に伴って濃霧が発生するため、湿度が高く日照時間が西部高原地域に比べて短い気象条件下にある。

鹿糠浜 I 遺跡は、洋野町役場から南方向へ約3km、岩手県九戸郡洋野町種市15地割字鹿糠浜地内の北緯40度23分22秒、東経141度43分16秒付近の地点に位置する。種市丘陵の東端、和座川左岸の標高53～61m前後に立地する。地図上では国土地理院発行の5万分の1地形図「階上岳」N K -54-18-2・6(八戸2号・6号)の図幅に含まれる。

2 周辺の地形と地質


(1) 地形

鹿糠浜 I 遺跡は北上山地の東北部、中央山岳地帯の西側にある九戸山地から海岸段丘へ移行する種市丘陵の東端に位置する(多田元彦,1974)。種市丘陵の西部は海拔250m前後の大起伏丘陵地であり、



凡例

山地


 P b: 山麓地及び他の緩斜面

丘陵地


 H I: 丘陵地 I (起伏量 200 ~ 100m)

 H II: 丘陵地 II (起伏量 100m 未満)


台地

 G t I: 砂礫段丘 I

 G t II: 砂礫段丘 II

 G t III: 砂礫段丘 III

低地

 P: 谷底平野

 D r: 浜

第2図 地形分類図

東部は海拔 150m 前後の低起伏丘陵地である。また、川尻川、和座川、大浜川、有家川などが、白亜紀の花崗岩類とこれを覆う堆積層を開析し、東北東方向に伸びのある丘陵を構成している。遺跡西方約 11km にある久慈平岳の東麓に源を発する和座川は、遺跡の南側を深さ 40m の渓谷を削り込んで東流し、鹿糠海岸で太平洋に流れ入る。

種市丘陵から種市段丘にかけての沿岸北部の段丘面は、米倉(1966)により、最上位段丘(水無面)、上位段丘群(広野面・三崎面・侍浜面)、中段段丘(麦生面)、下位段丘群(有家面、種市面)、沖積面などに区分されている。このなかで、下位段丘群の上部に属する有家面は、有家川以北に分布する海拔 60~80m 余に分布する海成面と考えられている。有家川の北、海拔高度 60~65m の丘陵頂部に載る鹿糠浜 I 遺跡は、有家面に属するとみられる。有家面の海側には、海拔 15~30m の海成面が海岸線に沿って帯状に分布している。小池ほか(2005)によれば、有家面は酸素同位体ステージ 7 (約 22 万年前)に、種市面はステージ 5e (最終間氷期、約 12 万年前)に対比されている。さらに、海拔 50m 前後にも小段丘が分布することがあるという。ステージ 7a や 7c に当たるのであろう。

(2) 地質

国立研究開発法人産業技術総合研究所(online)が公開するシームレス地質図によれば、三陸沿岸北部の種市丘陵は、前期白亜紀の花崗閃緑岩(約 1 億 4600 万年前~1 億年前にマグマが地下深部で冷えて固まった北上花崗岩類)が構成し、海岸地域の種市段丘の段丘崖にはこれに接触された後期白亜紀の海成堆積岩類(約 1 億年前~6500 万年前の海成地層)が分布する。これら基盤岩類を覆って、後期更新世の海成または非海成堆積岩類(約 15 万年前~1 万 8000 年前に堆積した地層)と、完新世の降下テフラ(約 1 万 8000 年前~現在の火山灰層)が広く重なっているとされ、本調査地では、後期更新世の非海成堆積岩類は、主として高館火山灰層に相当する。また、完新世テフラとは、更新世末の噴出物である八戸火山灰層と 6 層以上のローム質土層・黒ボク土層が構成する。

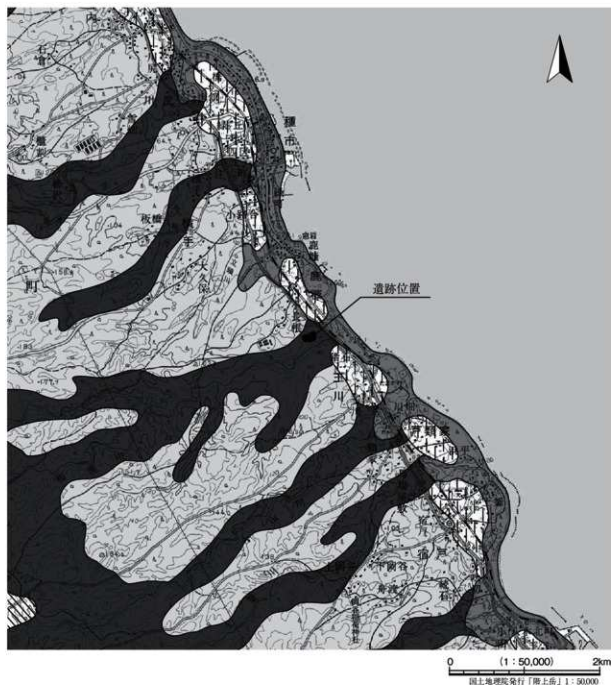
ところで、鹿糠浜の海岸から和座川の渓谷斜面や丘陵中の浅谷には、海成礫層が花崗岩類の凹部を埋めて分布している。和座川の北崖海拔 45~47m には、円礫層の露頭がある。円礫層は有家面と種市面の間の小段丘堆積層にあたる可能性があり、調査地内の谷底の海拔 51.5m 前後に分布する 6 層中にも、多くの円礫が含まれている。この円礫は八戸浮石層の下位に分布しているものと推測され、斜面の緩慢なクリークや凍結融解作用などにより再堆積したものと考えられる。この円礫層は、前述の有家面を構成するおよそ 22 万年前の酸素同位体ステージ 7 の海成礫層と推定される。

なお、間氷期のステージ 7 の年代は、長橋ほか(2003)は Bassinot et al.(1994)を引用して、19~24 万年前とし、その中に 19 万年前のステージ 7.1、21 万年前の同 7.3、24 万年前の同 7.5 の 3 度の温暖期を対比している。

沿岸北部地域は隆起地であるが、最終間氷期の海水準は、南極大陸では現在より 5.5~9 m 高い(Dutton et al. 2012)。この値を援用すれば、遺跡地周辺の種市面は、最終間氷期以降、最大で 20m 余り隆起したことになるが、小池ほか(2005)の推定値 0.2~0.3m/1000 年より少し小さく、0.16m/1000 年となり、それ以前の 10 万年間が 0.4m/1000 年となる。

3 歴史的環境

岩手県遺跡情報検索システム令和 2(2020)3 月 31 日によると、洋野町内(旧種市町・旧大野村)には 232 箇所の遺跡がある。それを元に鹿糠浜 I 遺跡周辺の遺跡を抽出し作成したのが第 4 図、及び第 1 表



凡例

火山灰層

v : 火山灰及び軽石



中位段丘堆積層 (高館層など)



t 2 : 砂

水無層



M n : 砂、砂鉄層を伴う

種市層

T n : 砂岩、礫岩及び凝灰岩を伴う

階上岩体など



g 3 : 角閃石黒雲母花崗閃緑岩

第3図 地質分類図

である(以下、カッコ内の番号は第4図及び第2表内に対応する)。

町内の発掘調査は、岩手大学草間俊一教授により昭和30年(1955)～36年(1961)にかけて、旧種市町内の遺跡調査と踏査を合わせて行ったのが最初で、「種市の歴史(原始-中世)種市町諸遺跡の調査報告」にはゴッソー遺跡や、上のマッカ遺跡、大宮A遺跡(現在の大宮I遺跡)など、多くの遺跡資料が収録、報告されている(草間1963)。報文の中で上のマッカ遺跡は「前期ははじめの単純遺跡として相当内容のある遺跡で、県下で重要な遺跡の一つと云うことが出来る」と記述されている。その後、平成25年まで町内の発掘調査はゴッソー遺跡、平内II遺跡、上水沢II遺跡(旧大野村)など数件の実施に留まる。平成26年(2014)以降、東日本大震災の復興道路と位置付けられた三陸沿岸道路建設等に伴い、発掘調査は急増する状況となる。当埋蔵文化財センターでは、平成26年～令和元年の間に三陸沿岸道路関連20箇所と国道45号整備事業関連1箇所の、合わせて21箇所を調査している。

さて、第2表には、岩手県教育委員会、洋野町教育委員会、当埋蔵文化財センターにより調査が実施された遺跡を取り上げた。それらを時代毎に概観してみる。補足として、ここでは当該期の遺構が未検出であっても土器などの遺物の出土が確認された遺跡を対象に当該期として取り上げることをお断りしておきたい。また、発掘調査実施時や調査報告書発刊時段階から、現在の登録遺跡名が変更されたものが幾つかある。それらについては、現在の登録名で記載する。サンニヤ遺跡→サンニヤI遺跡、下向遺跡→下向I遺跡、小田ノ沢遺跡→小田ノ沢I遺跡、北玉川遺跡→北玉川I遺跡などである。

【旧石器時代】旧石器時代の遺跡は、令和元年度に洋野町教育委員会が調査を実施した尺沢遺跡からナイフ形石器が出土している。また、「角川日本地名辞典3」によれば、旧石器遺物出土遺跡として鉄山遺跡と有家遺跡で高館山灰沢の上層から石器が確認されているとの記述があるものの、この2つは現在の登録遺跡に該当がなく、詳細は不明である。千田政博氏は尺沢遺跡の報文において、鉄山遺跡は大谷鉄山、有家遺跡は上のマッカ遺跡の可能性があると述べている(洋野町教育委員会2020)。

【縄文時代】縄文時代の遺跡は全体の約7割を占める。三陸沿岸道路建設に関連して実施された調査遺跡を概観するなら20箇所中、後期初頭～前葉の土器出土は17箇所、陥し穴の検出19箇所と非常に高い割合にあり、加えて前期初頭～前葉も10箇所ある。その反面、中期や晩期をはじめ、上記以外の時期、例えば前期中葉～後葉、後期中葉～末葉などは非常に少ない。三陸沿岸道路の建設に関連して調査された遺跡は、標高60～80mの中位段丘への立地を中心とするが、地形・地理的な環境に起因して前期前半や後期前半が多いのか、若しくは立地による偏りではなく町内全体的な傾向が反映しているのか、今後の検討課題としては興味深い内容といえる。

◆草創期は、平成30・31年に調査を行った板橋II遺跡(93)より爪形土器が数点出土している。さらには、鹿糠浜I遺跡(74)でも5点の爪形土器が確認され、爪形文は横位多段に施文される特徴がある。

◆早期は、田ノ端II遺跡(12)、平内II遺跡(32)、西平内I遺跡(16)、サンニヤIII遺跡(58)、ゴッソー遺跡(64)、南鹿糠I遺跡(72)、北玉川I遺跡(75)、宿戸遺跡(82)、統石遺跡(95)・上のマッカ遺跡・尺沢遺跡・中野城内遺跡(図幅外)などが挙げられる。中野城内遺跡では前期中葉の白浜式が纏まって出土している。田ノ端II遺跡では前期中葉～後葉の堅穴住居や土坑が多数検出されている。南鹿糠I遺跡では前期末葉赤御堂式の堅穴住居などを検出している。特記事項として、尺沢遺跡では日計式の付着物の年代測定を2点実施し、8,800BP前後の測定値が得られている。この年代値は十和田南部浮石よりも古く整合的である。また、青森県階上町町貝遺跡で検出した日計式の堅穴住居の年代測定値とも近似する。

◆前期は、田ノ端II遺跡、伝吉II遺跡(13)、北ノ沢I遺跡(17)、西平内I遺跡、ゴッソー遺跡、北鹿糠遺跡(68)、南鹿糠I遺跡、鹿糠浜II遺跡(73)、鹿糠浜I遺跡、北玉川I遺跡、宿戸遺跡、小田ノ沢I遺跡(90)、統石遺跡、上のマッカ遺跡、上水沢II遺跡(図幅外※旧大野村)などが挙げられる。そのほとんど



第4図 周辺の遺跡

どが前期初頭～前葉である。また、前期と限定はできないが To-Cu テフラを埋土に含む円形の陥し穴を検出した遺跡も多い(構築時期は To-Cu テフラ降下時期である前期中葉より古いと捉えられる)。前期中葉以降、前期円筒式土器が出土した遺跡は非常に少ない状況の中、北ノ沢 I 遺跡で前期末葉～中期初頭円筒下層 d 式～上層 b 式の大規模な捨て場が検出されている。

特記事項として、ゴッソー遺跡では前期前葉と推定される北海道系押型文土器が出土している。

◆中期は、北ノ沢 I 遺跡、平内 II 遺跡、ゴッソー遺跡、荒津内遺跡(65)、宿戸遺跡、上のマッカ遺跡、黒坂遺跡・南八木遺跡・下向 I 遺跡(図幅外)などが挙げられる。上のマッカ遺跡は縄文中期の堅穴住居 3 棟、土坑 25 基が見つかっており、琥珀片や寛永通寶も発見されている。ゴッソー遺跡は、円筒上層 a 式期の堅穴住居が検出され、その炉は埋設土器が三重の入れ子状に設置される特異な形態が見られた。黒坂遺跡では、中期前葉の堅穴住居 1 棟が検出され、同住居からは円筒上層 b 式や同 c 式が多量に出土している。

◆後期は、田ノ端 II 遺跡、伝吉 II 遺跡、西平内 I 遺跡、平内 II 遺跡、南川尻遺跡(52)、サンニヤ I 遺跡(55)、サンニヤ III 遺跡、ゴッソー遺跡、板橋 II 遺跡、荒津内遺跡、北鹿糠遺跡、南鹿糠 I 遺跡、鹿糠浜 II 遺跡、鹿糠浜 I 遺跡、北玉川 I 遺跡、宿戸遺跡、小田ノ沢 I 遺跡、続石遺跡、南八木遺跡、上のマッカ遺跡、尺沢遺跡、下向 I 遺跡、上水沢 II 遺跡がある。調査遺跡のほとんどで遺構、遺物が発見されているが、そのほとんどが初頭～前葉で、それ以降としては後葉が南川尻遺跡で確認されているのみである。堅穴住居は、鹿糠浜 II 遺跡で 15 棟、上水沢 II 遺跡で 13 棟を検出している以外は少数棟にある。特記事項として、西平内 I 遺跡では縄文後期初頭～前葉にかけて作られたとみられる配石遺構とその周囲の複数の配石墓群、それらを覆う整地層が見つかり、祭祀用の土製品や土偶、ヒスイ製裝飾品などが出土している。

後期の初頭～前葉は、上記に示したとおり調査遺跡の大半で土器が出土しているものの、大規模な集落は認められない。このことから、町内の当該期は小規模集落が数多く点在する様相で捉えられよう。

◆晩期は、サンニヤ I 遺跡、サンニヤ III 遺跡、ゴッソー遺跡、宿戸遺跡が挙げられるが、全体的にみて非常に少ない。堅穴住居など遺構を検出しているのは宿戸遺跡だけである。また、サンニヤ III 遺跡で「独鈷石」が出土していることは特記事項の一つである。

晩期の可能性もある製塩土器についてここで補足する。町内で縄文期の製塩土器が出土した遺跡としては、南平内 I 遺跡(36)、たけの子遺跡(67)、ゴッソー遺跡、ホックリ貝塚、八木貝塚がある。これら製塩土器出土遺跡の立地をみると、ゴッソー遺跡は低位段丘と中位段丘の境付近に、それ以外の遺跡は低位段丘(植子段丘)で海岸線に近い場所に立地する。

[弥生時代] 平内 II 遺跡、サンニヤ I 遺跡、荒津内遺跡、鹿糠浜 II 遺跡、北玉川 I 遺跡、宿戸遺跡、尺沢遺跡、下向 I 遺跡、上水沢 II 遺跡が挙げられる。堅穴住居は、平内 II 遺跡で前期 2 棟、北玉川 I 遺跡で中期 4 棟、上水沢 II 遺跡で後期 1 棟を検出している。県内全般的に少ない弥生中期～後期の事例が確実に増加をみた。これらの遺跡の地形を見る限り、谷若しく沢から台地に続く緩斜面地が適地と考えられる。

[古代] 古代の遺跡は、サンニヤ I 遺跡、サンニヤ II 遺跡(56)、サンニヤ III 遺跡、荒津内遺跡、南鹿糠 I 遺跡、鹿糠浜 II 遺跡、鹿糠浜 I 遺跡、北玉川 I 遺跡、続石遺跡、南八木遺跡、上のマッカ遺跡、八森遺跡(図幅外)がある。その中で堅穴住居検出遺跡を挙げると、サンニヤ II 遺跡(2 棟)、南鹿糠 I 遺跡(1 棟)、鹿糠浜 II 遺跡(1 棟)、鹿糠浜 I 遺跡(2 棟)、八森遺跡(1 棟)がある。また、上のマッカ遺跡で古代～中世の製塩工房と推定される堅穴建物も検出されている。平成 26 年以降の調査で町内の古代集落事例が急に増えた。それらは出土土器から 7 世紀後半～8 世紀前半が主体時期で、明確

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代	備考
1	二十一平	銅器遺跡	古代	平成15年度新規発見・ 範囲変更(平成23年度)
2	塚中山Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
3	塚中山Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
4	アイヌ森	散布地	縄文・弥生・古代	浜通遺跡から名称・範囲 変更(平成23年度)
5	角川日Ⅰ	散布地	縄文	頼内森(アイヌ)遺跡から 名称・範囲変更(平成23年度)
6	角川日Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
7	角浜	散布地	縄文	範囲変更(平成23年度)
8	笹花Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
9	笹花Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
10	笹花Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
11	田ノ端Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
12	田ノ端Ⅱ	井戸・散布地	縄文	平成25年5月8日新規発見
13	伝吉Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
14	笹花Ⅳ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
15	伝吉Ⅰ	散布地	縄文・古代	伝吉遺跡から名称・ 範囲変更(平成23年度)
16	西平内Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
17	北ノ沢Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見・ 範囲変更(平成25年度)
18	北ノ沢Ⅱ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
19	北ノ沢Ⅲ	散布地	縄文・古代	平成23年度新規発見
20	北ノ沢Ⅳ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
21	伝吉Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
22	伝吉Ⅳ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
23	北ノ沢Ⅴ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
24	北ノ沢Ⅵ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
25	北ノ沢Ⅶ	散布地	縄文・古代	平成23年度新規発見
26	北ノ沢Ⅷ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
27	北平内Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
28	北平内Ⅱ	散布地	縄文・古代	平成23年度新規発見
29	北平内Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
30	北平内Ⅳ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
31	北平内Ⅴ	散布地	縄文・弥生	平成23年度新規発見
32	平内Ⅱ	散布地	縄文・弥生・近世	範囲変更(平成23年度)
33	浜平内	散布地	縄文	平成23年度新規発見
34	北平内Ⅵ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
35	平内Ⅳ	散布地	縄文・古代	平成23年度新規発見
36	南平内Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
37	南平内Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
38	平内Ⅴ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
39	南平内Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
40	東平内Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
41	平内Ⅲ	散布地	縄文	範囲変更(平成23年度)
42	平内Ⅰ	散布地	縄文	平内遺跡から名称・ 範囲変更(平成23年度)
43	東平内Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
44	石倉	集落跡	縄文・古代	範囲変更(平成23年度)
45	西平内Ⅱ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
46	東平内Ⅳ	銅鉄関連	不明(近世か?)	平成23年度新規発見
47	越沢Ⅳ	散布地	縄文	平成23年度新規発見

No	遺跡名	種別	時代	備考
48	越沢Ⅲ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
49	越沢Ⅰ	散布地	縄文	平成23年度新規発見
50	越沢Ⅱ	散布地	縄文・古代	平成23年度新規発見
51	南館	城館跡	中世	昭和59年度調査
52	南川尻	散布地	縄文	平成25年度新規発見
53	藤原	散布地	縄文	
54	千敷平	集落跡	縄文	
55	サンニヤⅠ	散布地	縄文	平成25年度新規発見
56	サンニヤⅡ	集落跡	古代	平成26年度新規発見
57	横手	散布地	縄文・古代	範囲変更(平成23年度)
58	サンニヤⅢ	井戸跡	縄文	平成28年度調査
59	トチの水	散布地	縄文	
60	小手野沢田	城館跡	中世	昭和59年度調査
61	小手野沢山	砂金採取跡	近世	小手野山金山より名称 変更(平成13年度)
62	土橋館	城館跡	中世	昭和59年度調査
63	荒原館跡 (頼内森)	城館跡	中世	昭和59年度調査
64	ゴッソー	集落跡	縄文	範囲変更(平成23年度)
65	荒川内	井戸・散布地	縄文	平成28年5月24日新規発見
66	板橋館	城館跡	中世	昭和59年度調査
67	たけの子	散布地	縄文	
68	北原藤	散布地	縄文	平成25年度新規発見
69	大久保	散布地	縄文・古代	
70	高取Ⅰ	散布地	縄文	
71	高取Ⅱ	集落跡	縄文	
72	田尻Ⅰ	集落跡	縄文	平成26年度新規発見
73	鹿嶋ⅡⅠ	散布地	縄文	平成25年度新規発見
74	鹿嶋ⅡⅡ	散布地	縄文	平成25年度新規発見
75	北玉川Ⅰ	散布地	縄文	平成27年6月24日・25日 新規発見
76	玉川Ⅱ	散布地	縄文	
77	玉川Ⅰ	散布地	縄文	
78	戸棚家	散布地	縄文	
79	館	集落跡	縄文	
80	馬場	散布地	縄文	平成16年度新規発見・ 範囲変更(平成23年度)
81	宿戸館	城館跡	中世	昭和59年度調査
82	宿戸	散布地	縄文	平成25年度新規発見
83	向山	散布地	縄文	
84	西の館	井戸・城館跡	縄文・中世	
85	西の館跡	城館跡	中世	昭和59年度調査
86	西館の田	散布地	縄文	
87	上岡谷	散布地	縄文	
88	田ノ沢	散布地	縄文	
89	松ヶ沢	散布地	縄文・弥生	平成28年度新規発見
90	小田ノ沢Ⅰ	散布地	縄文	平成25年度新規発見
91	大浜	集落跡	縄文	
92	小田の沢山	銅鉄関連	近世	
93	板橋Ⅱ	集落跡	縄文	平成30年度新規発見
94	南玉川Ⅰ	散布地	縄文	令和元年度新規発見
95	碓石	集落跡・井戸	縄文・古代	平成29年度新規発見・ 範囲変更(令和元年度)

ではないが焼失家屋が多い様相にある。縄文の陥し穴を検出した遺跡や、弥生中・後期と複合する場合が多いことから、現時点の事例から導かれる立地の傾向は、低地ではなく中位段丘相当と考えられる。なお、古代の十和田 a テフラの検出された遺跡は全体的に少ないが、南八木遺跡では良好な堆積が観察された。

[中世] 中世は、城館跡などを含め震災復興関連の調査では該当事例がない。古代～中世と時代幅を持って報告されているものを挙げると、南八木遺跡の製鉄遺構と上のマッカ遺跡の製塩工房がある。補足として、町内の城館跡は小手野沢館(60)、板橋館(66)で堀や郭などが確認されている。

以上のように、縄文時代の集落跡、狩猟場等の遺跡が新たに多数発見された。また、それに伴って弥生時代や古代の遺跡も複合的に確認されている。今回の震災復興関連の調査で洋野町内の遺跡内容の情報が大幅に増加した。

参考文献

- 草間俊一1963 『種市の歴史(原始～中世)種市町遺跡の調査報告』種市町役場
 角川書店1985 『角川 日本地名辞典3 岩手県』
 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県文化財報告書第82集
 岩手県教育委員会 2016 『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成26年度復興関係)』岩手県文化財報告書第146集
 種市町教育委員会 2004 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』種市町埋蔵文化財報告書第1集
 種市町教育委員会 2005 『種市町内遺跡詳細分布調査報告書1』種市町埋蔵文化財報告書第2集
 洋野町教育委員会 2013 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第1集
 洋野町教育委員会 2015 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第2集
 洋野町教育委員会 2017 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第3集
 洋野町教育委員会 2019 『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第4集
 洋野町教育委員会 2019 『下向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第5集
 洋野町教育委員会 2019 『碓石遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第6集
 洋野町教育委員会 2020 『南玉川Ⅰ遺跡・小田ノ沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第7集
 洋野町教育委員会 2020 『尺沢遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第8集
 洋野町教育委員会 2020 『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財報告書第9集
 青森県教育委員会 2019 『柄貝遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第604集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第238集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第357集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第391集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015 『平成26年度発掘調査報告書』岩埋文報第647集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016 『平成27年度発掘調査報告書』岩埋文報第661集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017 『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第673集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 『北鹿種遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第686集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 『サンニヤⅠ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第687集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 『平成29年度発掘調査報告書』岩埋文報第692集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『南鹿種Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第697集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『上のマッカ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第698集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『小田ノ沢遺跡』岩埋文報第699集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『荒津内遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第701集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『鹿糠浜Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第702集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『南八木遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第703集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020 『サンニヤⅢ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第714集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020 『田ノ端Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第715集

第2表 洋野町内調査遺跡一覧

No.	遺跡名	調査地標高 (m)	地理 区分	旧石器	縄 文							弥生	古 代	中 世	調査主体	備 考
					早期	前期	中期	後期	晩期	陥し穴						
12	田ノ原Ⅱ	89前後	白前		○	○		○	○					縄文 (三箇)	縄文早期・前期・後期の住居	
13	伝吉Ⅱ	64～77	白前			○		○	○					縄文 (三箇)	縄文前期前葉の個人型住居	
16	西平内Ⅰ	61～63	白前		○	○		○	○					縄文 (三箇)	縄文後期の大型横な配石遺構群	
17	北ノ沢Ⅰ	50前後	種市			○	○							縄文 (三箇)	円筒下層d～上層bの捨て場	
32	平内Ⅱ	42～54	白前		○	○	○	○	○	○				町	縄文後期住居	
52	康川尻	47～58	白前					○	○					縄文 (三箇)	縄文後期後葉住居2棟	
55	サンニヤⅡ→ サンニヤⅠ	46～56	白前					○	○	○	○			縄文 (三箇)	後期住居	
56	サンニヤⅡ	49～52	白前							○	○			集	古代住居	
58	サンニヤⅢ	52～65	白前		○		○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	陥し穴09基(溝状・円形)	
64	ゴッソウ	22～35	種市		○	○	○	○	○	○				縄文 (三箇)	住居は縄文中・後期	
65	荒津内	70～72	白前					○	○	○	○			縄文 (三箇)	フラスコ、陥し穴	
68	北鹿糠	50～75	白前			○	○	○	○					縄文 (三箇)	縄文後期住居	
72	南鹿糠Ⅰ	40～75	白前			○				○				縄文 (三箇)	縄文早期末～前期の住居12棟、古代1棟	
73	鹿糠浜Ⅱ	49～62	白前			○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	縄文後期・古代住居	
74	鹿糠浜Ⅰ	53～65	白前		○	○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	縄文後期・古代住居、配石	
75	北玉川→ 北玉川Ⅰ	60～70	白前			○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	弥生中期住居4棟	
82	前戸	35～53	種市・白前		○	○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	縄文早・前・晩期・弥生住居	
90	小田ノ沢→ 小田ノ沢Ⅰ	47～53	白前			○	○							縄文 (三箇)	縄文早～前期住居	
93	板橋Ⅱ	58～65	白前	○			○	○	○					縄文 (三箇)	縄文早期期の瓜型土器、後期住居	
94	南玉川Ⅰ	120前後	九戸							○				町	土坑、陥し穴 非遺物なし	
95	板石	120～170	九戸		○	○	○	○						町	縄文後期住居1棟	
100番外	小田ノ沢Ⅱ	170前後	九戸							○				町	陥し穴 非遺物なし	
100番外	南八本	27前後	種市				○	○			○			縄文 (三箇)	新鉄路、鉄路多量	
100番外	上のマッカ	80～102	白前～九戸		○	○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	縄文前・中・後期の住居、古代～中世の 製塩工房	
100番外	八森	54～62	白前									○		縄文 (四遺)	7世紀半～8世紀前半	
100番外	下向→ 下向Ⅰ	136～138	九戸				○	○	○	○				縄文 (三箇)	陥し穴、土器は弥生中～後期主体	
100番外	下向Ⅱ	185～189	九戸						○					町	土坑、陥し穴 非遺物なし	
100番外	黒坂	120～130	九戸				○							集	円筒上層b・c式	
100番外	中野堀内	128～130	九戸			○				○				縄文 (三箇)	白浜式	
100番外	尺沢	160～170	九戸	○	○	○	○	○	○	○				町	ナイフ型石器1点出土	
100番外	上水沢Ⅱ	229～235			○	○	○	○	○	○	○			縄文 (三箇)	住居は縄文前期1棟・後期11棟、弥生後 期1棟	

調査主体凡例
 集：岩手県教育委員会
 町：洋野町教育委員会
 理文：尚絅蔵文化財センター

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1 野 外 調 査

(1) 基準点の設定

調査では、3級基準点と区割付杭の打設(世界測地系)を測量業者に委託し、その成果を使用した。以下に座標値を記載している。

[平成29年度]

基準点1	X = 43340.533m	Y = 75606.790m	H = 63.946m
基準点2	X = 43294.774m	Y = 75640.588m	H = 61.567m
付 杭1	X = 43340.000m	Y = 75585.000m	H = 64.848m
付 杭2	X = 43365.000m	Y = 75580.000m	H = 58.331m
付 杭3	X = 43310.000m	Y = 75605.000m	H = 64.714m
付 杭4	X = 43285.000m	Y = 75625.000m	H = 62.544m

[平成30年度]

基準点3	X = 43642.244m	Y = 75381.124m	H = 48.627m
基準点4	X = 43432.945m	Y = 75542.725m	H = 59.493m
付 杭5	X = 43414.509m	Y = 75545.596m	H = 58.865m
付 杭6	X = 43432.879m	Y = 75529.125m	H = 60.971m
付 杭7	X = 43451.558m	Y = 75517.698m	H = 59.277m

遺構はレベル水準器、光波測量器と電子平板システム(Cubic社製実測支援システム「遺構くん」)を用いて図化した。遺構外出土遺物の取り上げは、40m×40mの大グリッド(A～F)の中に4×4m(1～100)の小グリッドを設定し、層位ごとに取り上げた。(第7図)

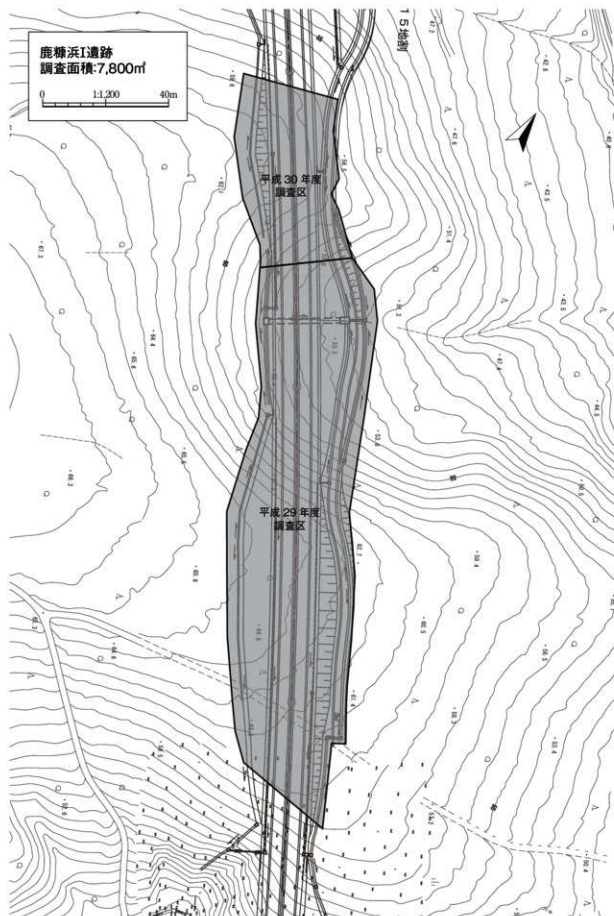
(2) グリッドの設定

平面直角座標第X系のX = 43,505、Y = 75,325を原点として、125×125mの大グリッドを設定し、これを25等分し、5×5mの小グリッドとした。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向はA、B、C…とアルファベット大文字、東方向にはI、II、III…とローマ数字をあてて設定した。小グリッドの呼称は北から南方向へa～yのアルファベット小文字、西から東方向へ1～25のアラビア数字をあて、これらの組み合わせで小グリッドを表し「I A 1 a」のように呼称した。

(3) 野外調査の経緯と経過

[平成29年度]

- 6月1日 調査開始。
- 6月2日 現地協議 調査区の拡張(2,800㎡→約8,000㎡となる見通し)、工事日程に伴う優先調査範囲などの確認。
- 6月5日 人力による試掘トレンチ掘り開始。
- 6月6日 重機による表土除去開始。
- 6月7日 検出、精査、実測順次開始。



第5図 調査範囲図

- 7月19日 現地協議・部分終了確認(主に南側478㎡)。
- 7月25日 熊谷常正盛岡大学教授来跡。
- 8月24日 配石遺構の空中写真撮影(ドローン)。
- 9月12日 建設業労働災害防止協会 小林豊所長による安全講話。
- 9月13日 現地協議 遺跡内に積み置きされている貯木についての協議。
- 9月13～14日 現場進入路の変更に伴い、新進入路である調査区西側に隣接する山道の整備。
- 10月4日 部分終了確認(主に東側の側道予定部分1,632㎡)。
- 10月11日 現地協議 谷部ボックス設置予定地の調査の進め方について。
- 12月13日 終了確認 調査対象面積は当初の2,800㎡から7,800㎡に変更確定。今年度終了面積6,450㎡、来年度継続調査面積1,350㎡。
- 12月15日 器材撤収。

[平成30年度]

- 4月5日 調査開始。
 - 4月9日 人力による試掘、重機による表土除去開始。
 - 4月10日～ 検出、精査、実測作業を順次開始。
 - 5月22日 航空写真撮影実施(東邦航空)
 - 5月28日 終了確認。
 - 5月31日 調査終了。撤収作業。
- (＊終了確認は委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による)

(4)遺構精査について

遺構の精査は、二分法・四分法を使い分けたが、陥し穴については、土層断面を横断面で、遺構の縦方向はエレベーション図を作成した。個々の遺構は、堆積状況を観察後に遺構の全景を撮影し土層断面図は人手によって、平面図は電子平板で作成した。

配石遺構については、対象となる遺構にポイントを入れて写真を撮り、その後電子平板でその座標を計測、写真上で重ね合わせてデジタルトレースを行った。撮影の際は、配石に使われた礎の稜線を白チョークで描き、明瞭に写るように心がけた。

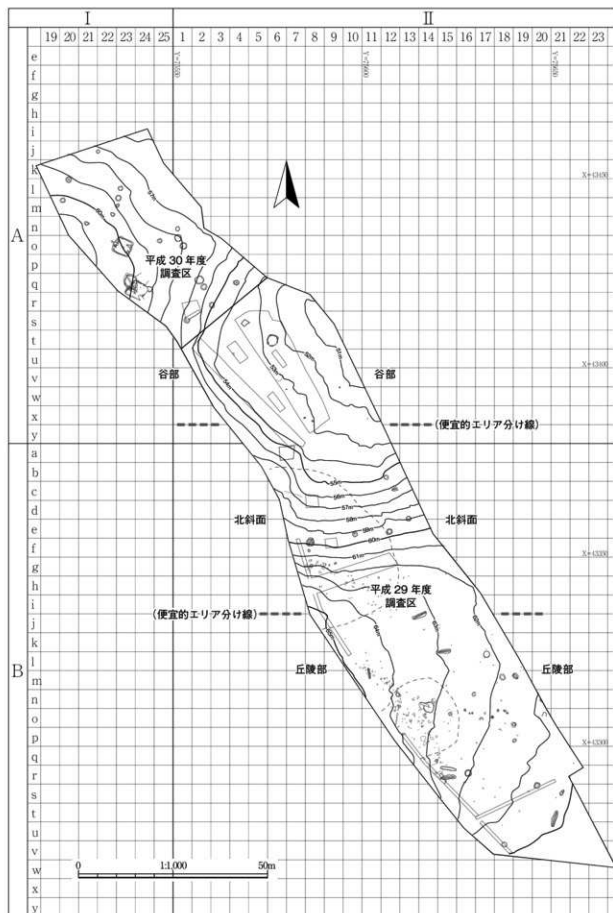
地層及び各遺構の埋土は第12図 基本土層1を基準とし、複数の現場調査員が記録した。その際の表記は敢えて統一することはせずに各調査員の視点・表現方法を重視した。

遺構名は種別ごとに発掘調査で見つかった順番で1号堅穴建物、2号堅穴建物…、1号土坑、2号土坑…とした。遺構精査の結果、種別が変わったものや遺構にならなかったもの、極端に時代が新しいものなどは欠番になっている。

(5)写真撮影

野外調査時の写真撮影には、平成29年度は中判モノクロームフィルムカメラ1台とデジタル1眼レフカメラ(フルサイズ)1台を使用した。撮影では、日付や遺構名、方角などを記したカードを写し込み、室内整理時の作業に活用した。

なお平成29年度には無人撮影機ドローンにより空撮を実施している。



第6図 調査区地形図

(6)その他

遺跡への進入路が私有地で高且つ公道から遺跡まで徒歩で1km弱歩かなければならなかったことから現地説明会は行わないこととした。

2 室内整理

(1)作業経過

平成29年10月2日～平成30年3月30日、平成30年11月1日から平成31年3月29日、平成31年4月1日～令和2年3月31日、令和2年7月1日から令和2年9月30日・令和3年1月4日～1月29日までの述べ4年間に亘り進められた(例言参照)。

(2)遺物整理の方法

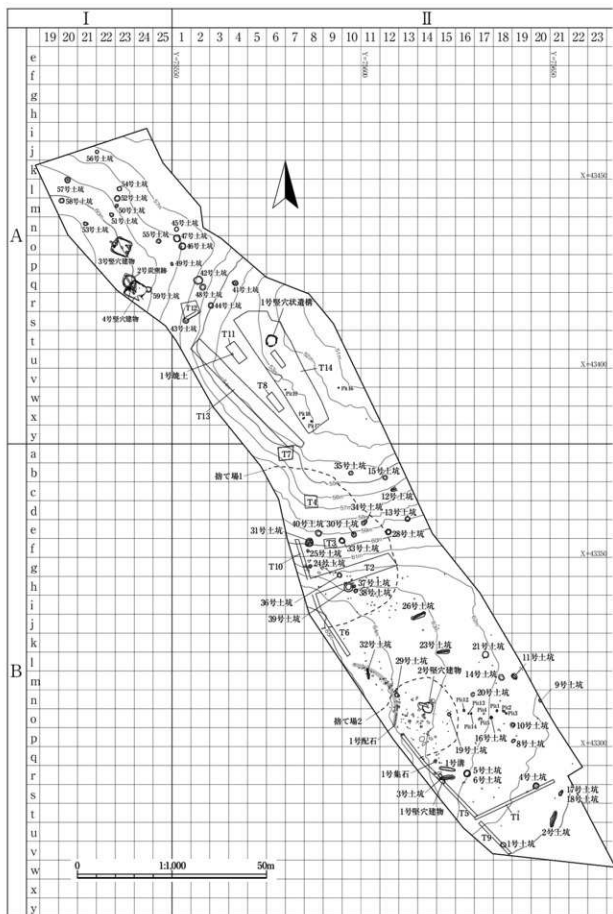
平成29年度調査では大量の土器・石器類が出土したため、主に水洗と大まかな仕分け作業が中心となった。平成30・31年度に遺物ごとに分類、その後重量計測を行った。土器類は接合復元も実施している。すべての遺物を整理担当者が観察した後で遺跡を代表する遺物を掲載遺物として選別し、登録作業後に実測図を作成、点検・修正を済ませたものをトレースし、それをスキャナーで読み込んでデジタル化して報告書に用いた。石器類の実測図作成は外注したものを含んでいる。

(3)写真撮影と整理

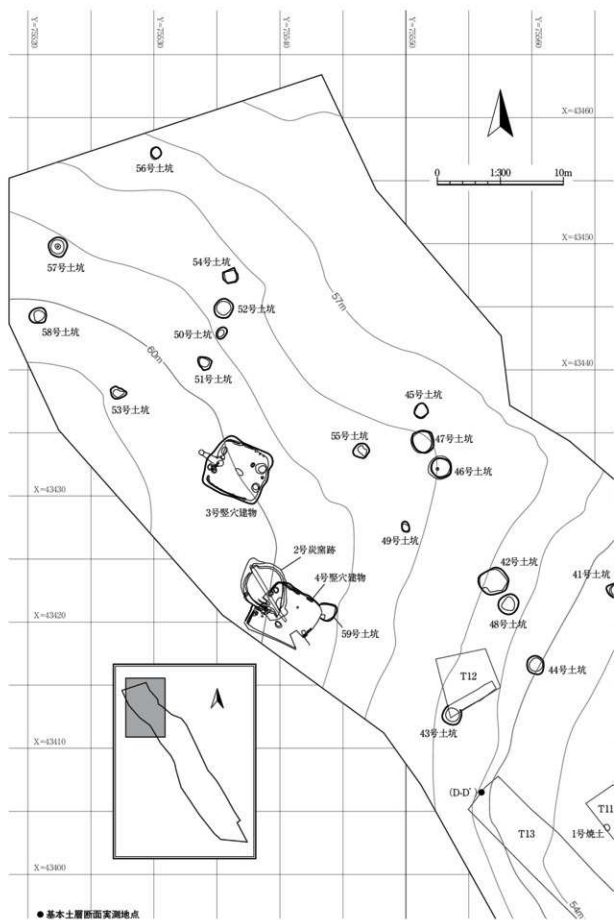
野外調査時に撮影した遺構写真のうち、中判モノクローム写真はネガフィルムとともに紙焼きをアルバムに貼付けし、デジタルカメラで撮影したRAWデータは、遺構ごとに個別のフォルダにまとめて収納要綱に従って収納した。

遺物の写真撮影は、当センターの撮影技師がデジタル一眼レフカメラ(フルサイズ)を使用し撮影している。

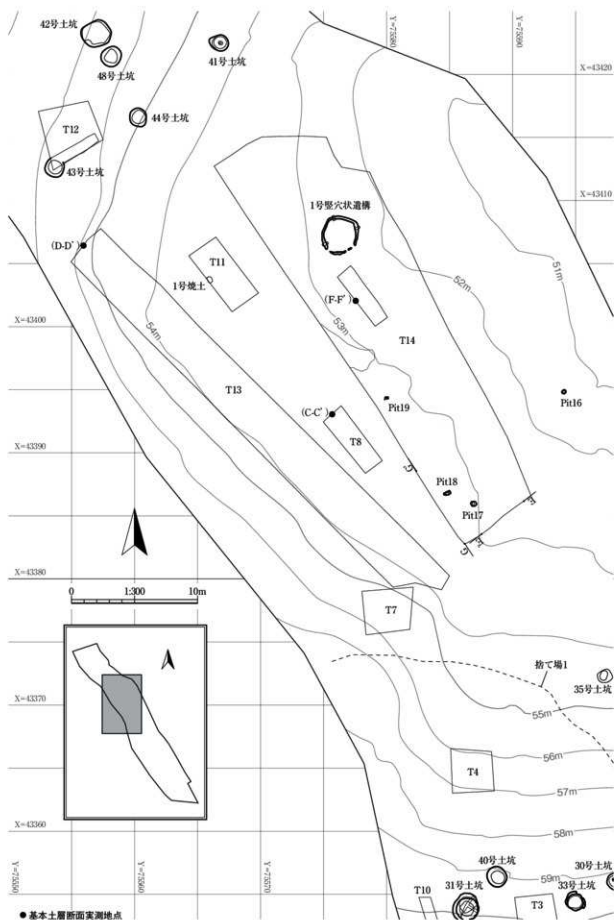
(杉沢・溜)



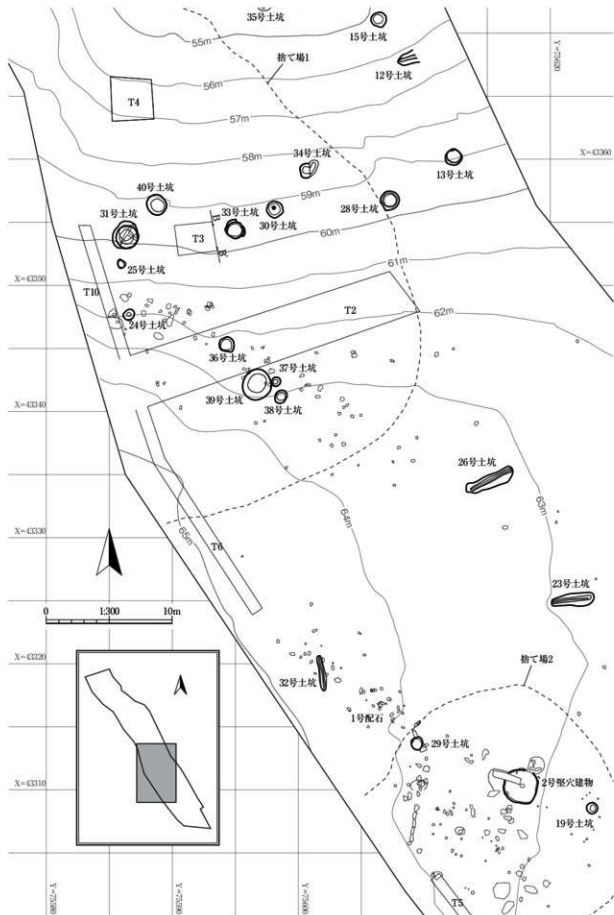
第7図 調査区全体図



第8図 遺構分布図(1)



第9図 遺構分布図(2)



第10図 遺構分布図(3)

IV 平成29年度調査区の遺構と遺物

1 概要・基本土層

丘陵部にある鹿糠浜1遺跡の地層は、基本的に風成層で構成される。地表下2.8mまでの地層は8層に大別できる。これらを本遺跡の地名を冠して鹿糠浜1～8層とよぶ(第12図 基本土層1)。なお、三浦ほか(2009)は暗色帯や黒色帯と呼ばれる土層を「黒ボク土層」とよび、土壌調査で下位のローム層まで含めて呼ばれる「黒ボク土」とを区別した。本稿でもこれに倣い、黒ボク土層の用語を使う。また、黒ボク土層の構成物質を指す場合は、単に黒ボクとよぶ。

以下の層序記載では、全体が把握できるT3トレンチの層序(第14図 基本土層3)を中心に述べ、岩相変化や同時異相の地層は随時加えて説明することにする。

鹿糠浜1層

黒色(7.5YR2/1)の黒ボク質シルトからなり、ササや樹木の根が張るとともに、それらが朽ちた痕跡が多数見られる。また、団粒構造が顕著に認められる。本層は本来、下位層に由来したものであるが、植生条件の変化により[樹木の増加と、これに伴う土壤生物の変化、または腐食の集積作用の低下・鈍化?]、シルト分が増加したものとみられる。層厚は15～20cmであり、下限はシルト分の差で明瞭な部分もあるが、不明瞭な部分では、根の密な部分の下限で下位層と暫定的に区分する。

鹿糠浜2層

黒ボク土層の特徴であるボクボク感が強い土壤層であり2層に区分できる。2層上部は黒色(7.5YR1.7/1)の黒ボクからなり、遺跡の地層のなかでは最も明度が低い。層厚は数～20cm程度であり、下位層とは比較的明瞭に区分できる。調査地東部の丘陵頂部から緩やかに下るあたり(東西ベルト1・3で確認)や、北側谷斜面では、上部が若干明るくかつシルト質になり、上下に区分できる(第12図)。その際、黒さとボクボク感は2層上部下半が最も強い。2層下部は黒褐色(10YR2/1.5)の黒ボクからなる。層厚は数～10cmであり、下位層とは漸移している。本層の上面が1号配石遺構の遺構面である。2層下部の黒ボクは一部でシルト質となり、やや締まりがよくなる。層中からは、縄文時代後期の遺物のほか、縄文時代前期のものも多く出土している。

鹿糠浜3層

火山灰質の黒ボク土層である。丘陵頂部では黒ボクが漠然と火山灰質になる程度だが、北側斜面から谷底にかけて明瞭になる。中位に軽石質の火山灰層を挟んで3分できる。3層上部は黒褐色(10YR2/2)の火山灰質黒ボクからなる。層厚は15cm前後で、下限は3層中部と漸移している。3層中部にはふい黄褐色(10YR7/4)の軽石質火山灰層であり、層厚が厚く、擾乱をあまり受けていない部分では、下部の明黄褐色(2.5YR7/6)粗粒～中粒砂サイズの軽石層;最大層厚8cmと、これに漸移して上方細粒化するふい黄褐色(10YR6/4)軽石質細粒火山灰層;最大6cmからなり、下限は明瞭である。この火山灰は62千載正年前(工藤ほか 2007)に十和田火山から噴出した中振浮石層と考えられる。谷底では中振浮石層本体の上位にも粗粒～中粒砂サイズ軽石や細粒火山灰が厚く再堆積する場所がある。3層下部は黒褐色(7.5YR2/2)の火山灰質黒ボクからなり、層厚は10cm前後である。下限は下位層と漸移している。

なお、3層中部の中振浮石層の下限は明瞭であり、地層区分の優位な境界ではあるが、中部をも認

1 概要・基本土層

層序区分	模式柱状図	土色・岩相	遺構・遺物	自然現象	時代	
産種浜 1層 (KH-1)		7.5YR2/1黒色	黒ボク質シルト (黄土)	・古代土器 ・縄文後期遺物 ・竪穴建物 ・堀穴ほか ・配石遺構	現代 古代 縄文時代 後期	
上部(2U)		7.5YR1.7/1黒色	黒ボク、ボクボク感が明瞭	↓ ↑	黒ボク顕著に発達 →地すべり	前期後半 (6.2千年前)
2層		下部(2L)	10YR2/1.5黒褐色			
3層		上部(3U)	10YR2/2黒褐色	黒ボク	← 中層浮石降下	前期前半
3層		中部(3M)	10YR7/4にぶい黄褐色	粗粒～中粒砂サイズ軽石～細粒火山灰		
3/4寄土層(3/4)		下部(3L)	7.5YR2/2黒褐色	黒ボク	↑ ↓	前期前半
4層		4層 (4)	10YR2/2黒褐色 10YR3/2黒褐色	軽石混り炭素質黒ボク、および 軽石混り火山灰質シルト炭層 からなる寄土 (炭質土)		
5層		上部(5U)	7.5YR1.7/1黒色	軽石点在する黒ボク	← 南部浮石降下	早期後半 早期中頃 (9.6千年前)
5層		下部(5L)	7.5YR2/1黒色 10YR7/8黄褐色	軽石多数に点在する黒ボク、団子状に顕著大 主体で軽石の軽石層(南部)浮石(本体)が分布		
6層		上部(6U)	7.5YR3/2黒褐色	軽石混りローム質黒ボク	黒ボク形成開始	早期前半
6層		下部(6L)	7.5YR3/3暗褐色 10YR3/4暗褐色 10YR4/6褐色	黒ボク質 (炭素質) ローム、軽石は 上部と下部に多く、中部に少ない。 上部の軽石は黄褐色で5層に由来し、 下部の軽石は透黄褐色で7層に由来す る。	このころ沿岸部に 大地震	早期前半
7a層(7a)		7a層(7a)	10YR5/6黄褐色 pm: 10YR8/3透黄褐色	軽石質火山灰層(上部)と陸下軽石層の 互層(下部)、細礫～中粒砂大主体	八戸火山灰層の 降下 (15千年前)	
7b層(7b)		7b層(7b)	10YR6/6明黄褐色 pm: 10YR6/3透黄褐色	軽石質火山ガラス質火山灰層(上部)と陸 下軽石層(下部)、軽石の最大径25mm、細 粒細礫が多い		
7c層(7c)		7c層(7c)	10YR6/6明黄褐色 pm: 10YR6/8明黄褐色	軽石質火山ガラス質火山灰層(上部)と陸 下軽石層の互層(下部)、軽石は細礫～中粒 砂大主体、下底にガラス質火山灰層		
高館 火山灰層		8層(8)	7.5YR5/5にぶい褐～明褐色 灰沢り泥質ローム黄土 [「ミルクチョコ」層] 10YR5/6黄褐色	泥質ローム黄土、ホンボン感あり	多量のレス降下	旧石器時代

cl, sil, sd, gy

50cm

0



第12図 基本土層 1

識できない地域では、漠然と火山灰質の3層としか把握できない。そのため、作業効率を考慮して、中振浮石層の降灰層準を含み、生物擾乱により火山灰質になった上位・下位の黒ボク土層の範囲を含めて3層としてまとめておく。

また、本遺跡には、3層と後述する4層の間に、比較的広い範囲に搬入された人為層が分布する。これを鹿糠浜3/4客土層とよぶ。黒褐色(10YR2/2)の軽石混り腐植質黒ボクや、黒褐色(10YR3/2)の軽石混り火山灰質シルト偽礫などからなる。層厚は最大で40cm余りあり、上・下限とも明瞭である。分布範囲は1号配石遺構より外側の南・東側と北・東側に広がる[第16図 調査区(捨て場1・2)ベルト位置図]。客土体の外側へ傾斜する偽礫の並びから、最も高い丘陵頂部から周囲の低い方へ順次客土されていった様子がうかがえる[第17図 調査区(捨て場)ベルト1]。丘陵頂部の西側から搬入されたのであろう。本客土層には多量の縄文時代前期の土器や石器遺物が含まれており、捨て場と考えられている。

鹿糠浜4層

黒色(7.5YR1.7/1)の黒ボクからなり、少量の軽石を含む。2層に次いで明度が低い。層厚は15~25cm程度であり、下限は漸移している。丘陵頂部の北斜面上部の3/4客土層の末端部付近に多量の遺物を包含する。

鹿糠浜5層

黒色(7.5YR2/1)の黒ボクからなり、軽石が散在する。2層に岩相区分でき、下部が南部浮石層本体とその擾乱部である。5層上部は黒色(7.5YR2/1)の黒ボクからなり、軽石粒は下部で散在し、上方で減少する。層厚は10~30cmで下限は漸移している。5層下部は黒色(7.5YR2/1)の黒ボクからなり、軽石粒が散在~かなり密に分布する。層厚は10~20cmであり、下位層とは部分明瞭で、漸移するところもある。

この層準の丘陵頂部の北斜面から谷底にかけては、軽石粒が一見するとブロックのように集合し、塊状に分布するところがある。軽石粒にはぶい黄橙色(10YR7/4)で最大径9mm、中粒中礫~粗粒砂サイズで細礫サイズが主体であり、長径数~20cm程度の塊に集合している。これは南部浮石層の本体が擾乱を免れて残存したものである。すなわち、黒ボクの中に軽石が散るように見える現象は、軽石層が黒ボク土層形成中に生物擾乱や凍結・融解作用により擾乱されて攪拌した結果であり、軽石粒は本来、南部浮石層に由来する。降灰年代は、大池ほか(1970)による8600±250yBP(GaK-2513)を校正した細野ほか(2017)により、9633calBP(約9600年前)の較正年代が出されている。

鹿糠浜6層

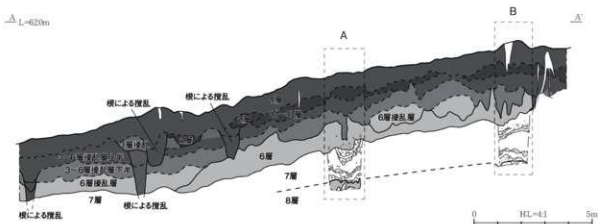
腐植質のローム質土層であり、2層に区分できる。6層上部は黒褐色(7.5YR3/2)ローム質黒ボクからなり、軽石粒を含む。層厚は10~15cm程度で、下限は漸移している。6層上面は南部浮石層の堆積面であるが、5層下部と同様の著しい擾乱により堆積面が攪乱され、層中に軽石粒が混在している。6層下部は暗褐色(7.5YR3/3-10YR3/4)~褐色(10YR4/6)の黒ボク質ロームからなり、軽石は上部と下部に多く、中部に少ない。上述の擾乱により、上部の軽石は黄橙色で5層に由来し、下部の軽石は浅黄橙色で7層に由来する。層厚は40~50cmで、下限は概ね明瞭である。

鹿糠浜7層

黄褐色~明黄褐色の軽石と軽石質火山灰の互層からなる八戸浮石層である。最大層厚は60cmであり、粗粒相~細粒相のセットにより3区分できる。

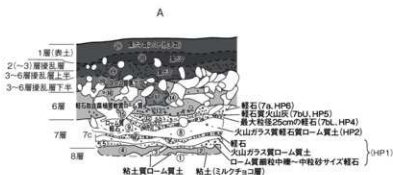
7a層は上部が黄褐色(10YR5/6)の軽石質火山灰(層厚7cm)で、下部が降下軽石層の互層(層厚13cm)である。下部の軽石粒は浅黄褐色(10YR8/3)で細礫~中粒砂サイズが主体である。

T1 南壁基本土層



620m

620m

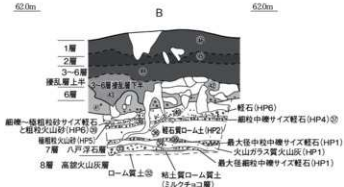


T1 南壁基本土層 A

- ① 7.5YR5.6明褐色
- ② 7.5YR6.4c.c.c.黄褐色
- ③ 7.5YR5.5.6暗色・明褐色
- ④ 7.5YR6.4暗色
- ⑤ 10YR6.8明黄褐色
- ⑥ 10YR6.8明黄褐色
- ⑦ 10YR6.8明黄褐色+わずかに暗色
- ⑧ 10YR5.8黄褐色
- ⑨ 10YR5.5.7黄褐色
- ⑩ 10YR5.8暗褐色
- ⑪ 10YR6.7明黄褐色
- ⑫ 10YR6.8明黄褐色
- ⑬ 10YR5.6黄褐色
- ⑭ 10YR4.6褐色
- ⑮ 10YR4.4褐色
- ⑯ 10YR2.3黑褐色
- ⑰ 10YR3.4暗褐色
- ⑱ 10YR2.2黑褐色
- ⑲ 10YR2.1.5黒色・灰褐色
- ⑳ 10YR2.1黒色
- ㉑ 10YR2.2.3黑褐色

620m

620m



T1 南壁基本土層 B

- ① 7.5YR5.6明褐色
- ② 7.5YR6.4c.c.c.黄褐色
- ③ 7.5YR5.5.6暗色・明褐色
- ④ 10YR6.8明黄褐色
- ⑤ 10YR6.8明黄褐色
- ⑥ 10YR6.8明黄褐色
- ⑦ 10YR6.8明黄褐色
- ⑧ 10YR5.8黄褐色
- ⑨ 10YR5.5.7黄褐色
- ⑩ 10YR6.8明黄褐色
- ⑪ 10YR4.6褐色
- ⑫ 10YR4.4褐色
- ⑬ 10YR2.3黑褐色
- ⑭ 10YR2.2.3黑褐色
- ⑮ 10YR2.1.5黒色・灰褐色
- ⑯ 10YR2.1黒色
- ⑰ 10YR2.2.3黑褐色



第13図 基本土層2

7 b層は上部が明黄褐色(10YR6/6)軽石質火山ガラス質火山灰(層厚10cm)で、下部が降下軽石層(層厚7cm)である。下部の軽石粒は浅黄橙色(10YR8/3)で大きく、最大径2.4cm、細粒中礫～細礫サイズが多い。

7 c層は上部が明黄褐色(10YR6/6)軽石質火山ガラス質火山灰(層厚7cm)で、下部がのろみ質降下軽石互層(層厚14cm)である。下部の軽石互層は明黄褐色(10YR6/8)で細粒中礫～中粒砂サイズの軽石が薄層をなす。最下部に層厚1cmのシルト質火山ガラス質火山灰を挟む。

大池ほか(1979)や早川(1986)に示された[八戸浮石層]のHP1～VIのユニット区分によれば、7 c層がHP1に、7 b層下部がHP4に、7 b層上部がHP5に、7 a層がHP6に当たり、HP2・3は当地には分布しない。八戸浮石層は1.5ka(約15千較正年前)の降下と推定されている(町田・新井,2003)。

鹿糠浜8層

黄褐色(10YR5/6)の泥質のろみからなる[高館火山灰層]である。軟質でボンボン感がある。層厚10cm余りを観察しただけであるが、最上部4cmのぶい褐色～明褐色(7.5YR5.5)炭混じり泥質のろみからなる通称「ミルクチョコ層」は、レスの付加層として寒冷期層準を示すと考えられている(細野ほか1995)。

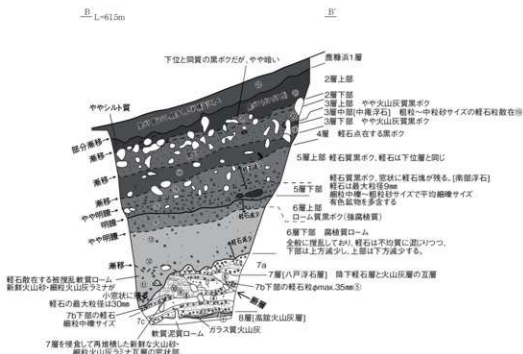
▽地層とその構成物の攪乱・侵食と再堆積について

・丘陵頂部の南側緩斜面では、各層の攪乱が甚だしく、層準認定が極めて難しい。T1トレンチでは、2層の分布も断続的で、下半部は3層との区別がつきにくい部分がある(第13図 基本土層2)。3層～6層では、樹木の根の攪乱により地層境界が壊されるとともに、黒ボクとのろみ質土が攪拌されたため、黒ボクとのろみ質土が混在しつつ漠然と移り変わっているように見える。そのため、上半部は3～5層に由来する黒ボク～のろみ質黒ボクが主体ではあるが、下半部では5～6層に由来するのろみ質黒ボク～腐植質のろみが主体となり、その漸移部は曖昧模倣としている。しかも、6層自体も、攪拌の著しい部分と、そうでない部分で地層が異なるように見える箇所もある。そこで、不正確に地層名をつけて地層を区分することで引き起こす混乱と誤認を避けるため、全体として3～6層擾乱層とし、暗褐色の土色が強くなる付近で、その上半・下半を暫定的に区分するものとする。また、6層も見えたままに、攪乱された6層と不攪乱の6層とを分けることにする。

・谷部の6層は腐植質のろみを主体としつつ、上部・下部ともに少なからず円礫が含まれる。この岩相は一般的な風成のそれではなく、腐植質のろみが礫とともに再堆積したものと考えられる。しかし、水成のラミナ構造は認められず、礫のa・b軸が立つものや傾くものが多く、全体としては基質支持である。したがって、この再堆積層は土石流のような斜面流下物の可能性がある。また、凍結融解を要因とする礫と堆積物の緩慢な移動であるクリープの一種ではないかとも考えられるが、クリープによる礫の集合や、基質の流出による舗石は見つかっていない。

・第14図 基本土層3に示すように、鹿糠浜5層下部の[南部浮石]から上位では、丘陵頂部の黒ボク土層と斜面～谷底の黒ボク土層を比較すると、斜面～谷底の方が丘陵頂部のそれよりはるかに厚い。しかも、丘陵頂部のAや琥珀トレンチでは、2～5層の黒ボク土層が薄く、かつ攪乱を伴って収斂している。また、5層下部の軽石粒をほとんど含まない。これに対し、T3～T7やT11～T12では、2層～5層が相対的に厚く、また、2層上部・下部や3層上部・中部・下部、5層上部・下部など、各層が細かく区分できる。5層の軽石粒も多く含んでいる。この相違は丘陵頂部では土層形成が進行中の黒ボクが雨水や風で侵食され、斜面から谷底へ再堆積したのが原因と考えられる。これは従

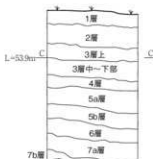
T3東壁基本土層



T3東壁基本土層

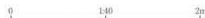
- 00 75YR2/1黒色
- 01 75YR17/1黒色
- 02 10YR2/2暗褐色
- 03 10YR7/4いぶい黄褐色(中細浮石)
- 04 75YR2/2黒褐色
- 05 75YR17/1黒色
- 06 75YR2/1黒色
- 07 10YR7/3黄褐色 軽石：内部も同様、もっと白いものもある。
- 08 10YR3/4暗褐色、75YR2/1黒色
- 09 75YR3/2暗褐色
- 10 75YR3/2暗褐色
- 11 10YR3/4暗褐色
- 12 10YR4/5褐色
- 13 10YR4/3いぶい黄褐色 細粒火山砂
- 14 10YR5/4いぶい黄褐色 細粒火山灰
- 15 10YR6/2灰黄褐色 粗粒火山砂
- 16 75YR5/6黄褐色
- 17 10YR8/3灰黄褐色 大きな軽石
- 18 10YR6/6明黄褐色
- 19 10YR8/3灰黄褐色 最大粒径の軽石(南部浮石)
- 20 10YR6/6明黄褐色
- 21 10YR6/8明黄褐色
- 22 75YR5/4いぶい黄～明褐色
- 23 10YR5/6黄褐色

T8基本土層



T8基本土層

- 1層 10YR2/1黒色砂質シルト 粘性弱、締まり中
- 2層 10YR2/2暗褐色砂質シルト 粘性弱、締まり中
- 3層上部 10YR2/1暗褐色砂質シルト 粘性弱、締まり中
- 3層中～下部 10YR3/2暗褐色砂質シルト 粘性弱、締まり中
- 4層 10YR2/2暗褐色シルト1～2mm大の軽石粒を3%含む、粘性中、締まり中
- 5層 a 10YR2/3暗褐色砂質シルト 1～2mm大の軽石粒を40%含む、粘性弱、締まり中
- 5層 b 2.5Y3/2暗褐色シルト1～2mm大の軽石粒を40%含む、粘性中、締まり中弱
- 6層 10YR3/4暗褐色砂質シルト 1～2mm大の軽石粒を3%含む、粘性中、締まり中不堅
- 7層 a 10YR5/6明黄褐色シルト 1～2mm大の軽石粒を7%含む、粘性弱、締まり中
- 7層 b 10YR7/6明黄褐色シルト質砂～礫(軽石層) 粘性なし、締まり型



第14図 基本土層3

来の残積土壌の見方とは異なり、黒ボク土層も堆積性であることを示している。

▽変位・変形について

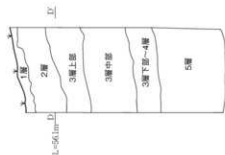
鹿糠浜 I 遺跡には、7層堆積直後の縄文時代早期、2層堆積時の縄文後期ごろの層間に、変位・変形が認められる。

- ・ T3 トレンチの7層～6層下部にかけて、特異な現象が観察された(第14図)。
- ・ 7層(八戸浮石層)中に、八戸浮石層とは層相が明瞭に異なる部分が窓状に認められた。窓状部分は新鮮で非風化の粗粒火山灰(火山砂)～細粒火山灰の薄層が互層しており、基底から上方へ粗粒火山砂、中粒火山砂、シルト～シルト質細粒火山灰の薄層が重なっていた。この現象は、八戸浮石層が堆積後、何らかの影響で(例えば、地下水により)地中に空洞(水道)ができ、この中を火山砂と細粒火山灰が徐々に堆積して空洞を埋めたものと考えられる。しかも、この窓状新鮮部には南北走向の剪断が認められた。約45°の逆断層センスで上盤が約10cmせり上がっており、何らかの変動のあったことが推測される。さらに斜面下方では、窓状新鮮部は擾乱により軽石の散在する軟質ロームに変化し、新鮮な堆積層は偽礫状の小さな窓状部分として残った。この状況は、細粒砂層の液状化・流動化時の非液状化部の様子(風岡ほか、2003)とよく似ている。新鮮部(火山砂・細粒火山灰薄互層)が液状化して軟質ローム相に変化し、その中に非液状化の新鮮部が偽礫状に残ったと考えられる。
- ・ 谷底の西側トレンチでも、小規模の地すべりとみられる現象が観察された。トレンチ中央付近で、中振浮石層を斜めに切り、西から東に滑っている。また、トレンチ内だけの観察であるため、全容は把握できていないが、滑り面は長さ5m以上、幅約10m、傾斜30～50°で東へ1～2cm滑っていて、地すべりの発生面は中振浮石層より上位の2層内にある。断層ガウジの幅は1～7mmで、中振浮石の細粒砂～粗粒砂サイズ軽石が上方粗粒化している。(趙)

引用文献

- 大池昭二・中川久夫 1979 三戸地域広域農業開発基本調査 地形並びに表層地質調査報告書 20.
- 風岡 修・榎井 久・香村一夫・楠田 隆 2003 液状化・流動化の地層断面。アークバンクボタ、40、4-17.
- 小池一之・宮内崇裕 2005 リアス海岸の発達する三陸海岸。日本の地形 3、東北、東海大学出版会、68-66.
- 工藤 崇・佐々木 寿 2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年。地学雑誌、116(5)、653-663.
- 国立研究開発法人産業技術総合研究所、日本シームレス地質図。https://gbank.gsj.jp/seamless/seamless2015/2d/index.html?lang=en(2017年11月2日)
- 多田元彦 1974 地形区分とその性状等の概要。縮尺 20 万分の 1 土地分類図付属資料(岩手県)、経済企画庁総合開発局、1-11.
- 日本の地質[東北地方]編集委員会(1989)早川由紀夫(1983)十和田火山八戸火山灰の噴火。日本地質学会学術大会講演要旨、90、342.
- 細野 衛・佐瀬 隆 2017 コラム 9 植物珪酸体から分かる土層累積断面における植生履歴—十和田火山テフラ分布域を事例として—。日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—改訂版、下部富士インターナショナル、393-397.
- 細野 衛・佐瀬 隆・青木潔行 1995 八戸浮石直下の炭化片粒子を含む埋没土壌の植生履歴と腐植。ペドロジスト、39、1、42-49.
- 町田 洋・新井房夫 2003 新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺。東京大学出版会、336.
- 三浦秀樹・佐瀬 隆・細野 衛・菊谷愛彦 2009 第四紀土壌と環境変動—特徴的土層の生成と形成史—。デジタルブック最新第四紀学、日本第四紀学会、SD-ROM および解説集、30.

T13北端基本土層



- T13北端基本土層
 1層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 2層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層 4層 10YR4.1/6.0暗褐色シルト 粘質泥、締まり中
 3層下部-4層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 5層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中

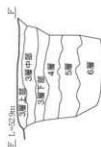
T14基本土層1



- T14基本土層1
 3層中部 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層下部 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 4層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中

第15図 基本土層4

T14基本土層3

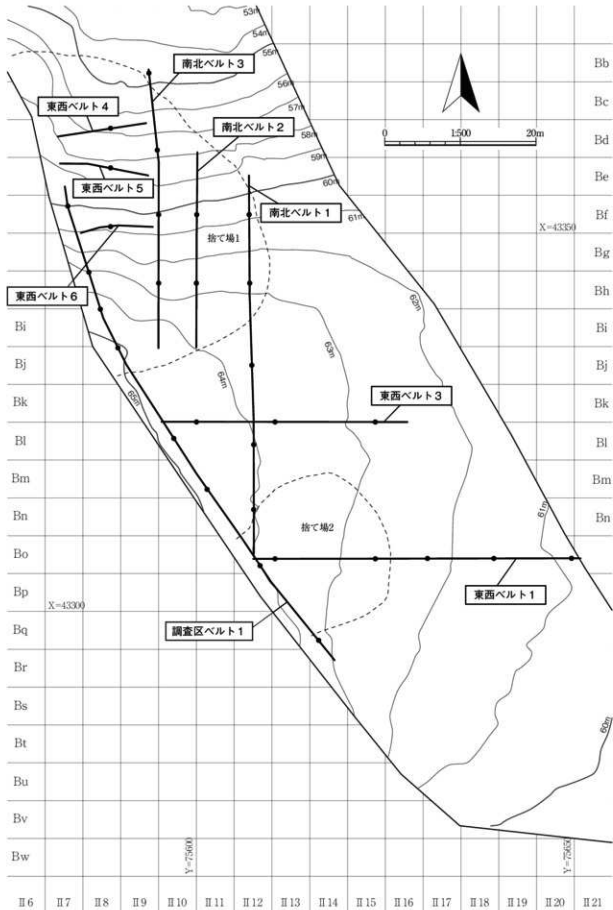


- T14基本土層3
 3層上部 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層下部 3層上部、粘質泥、締まり中
 4層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 5層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 6層 粘質泥、締まり中

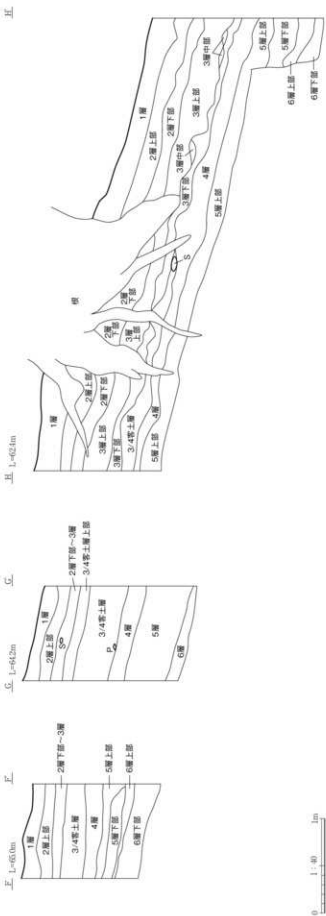
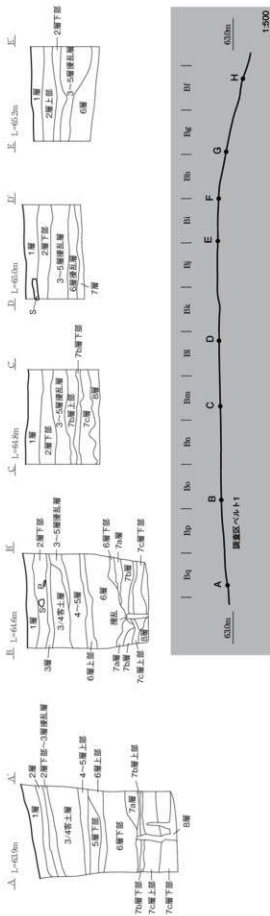
T14基本土層4・5



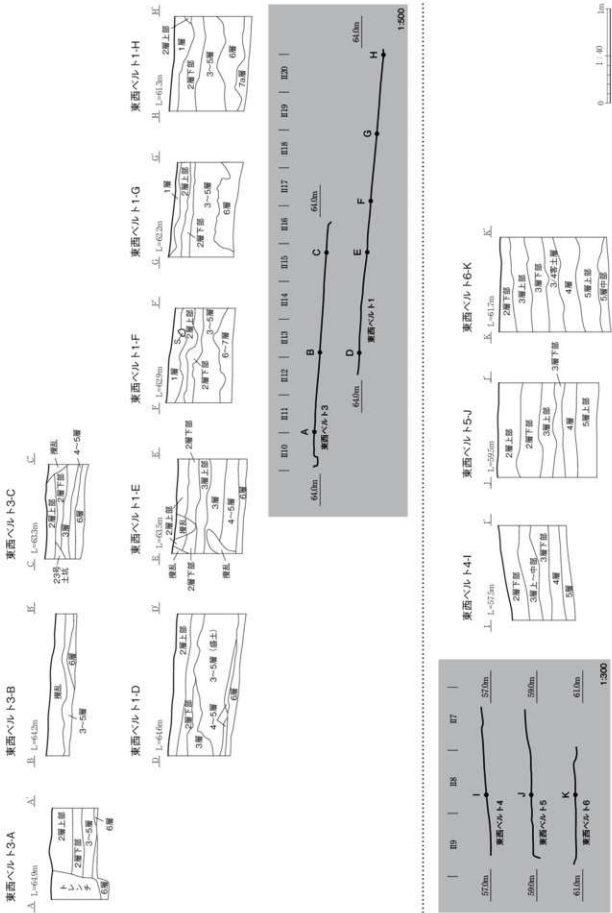
- T14基本土層4・5
 2層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層上部 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層中部 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中
 3層下部-4層 10YR2.2/3.0暗褐色砂質シルト 粘質泥、締まり中



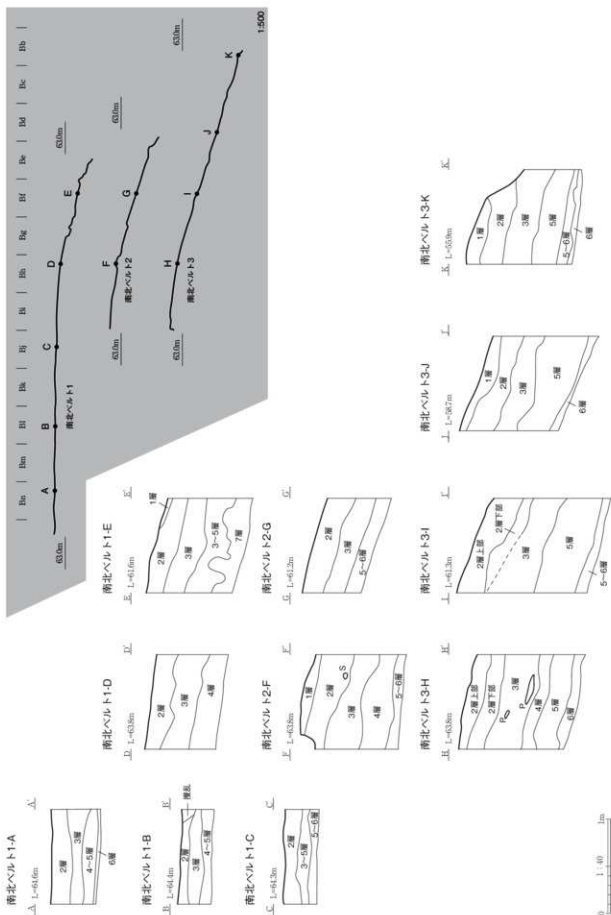
第16図 調査区(捨て場1・2)ベルト位置図



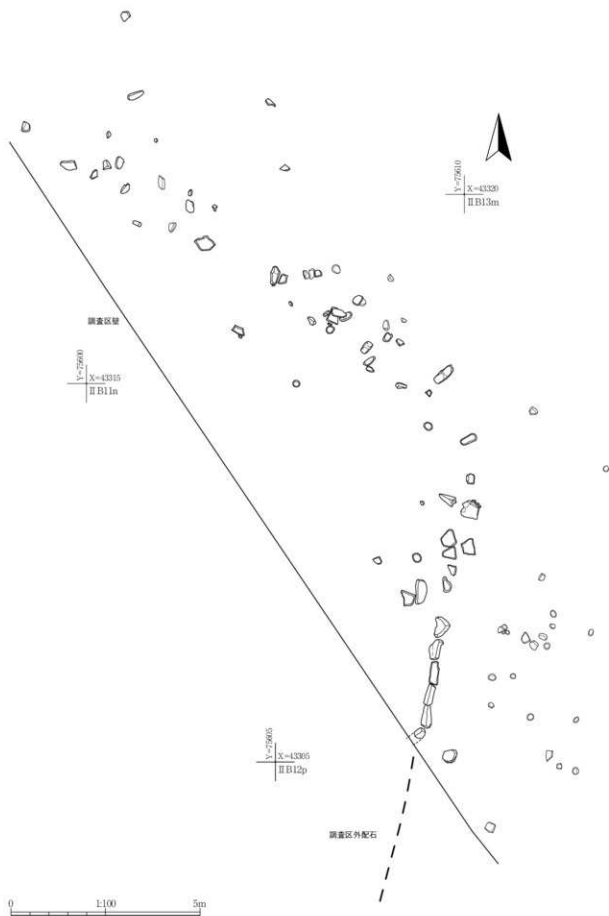
第17図 調査区(捨て場)ヘルト1



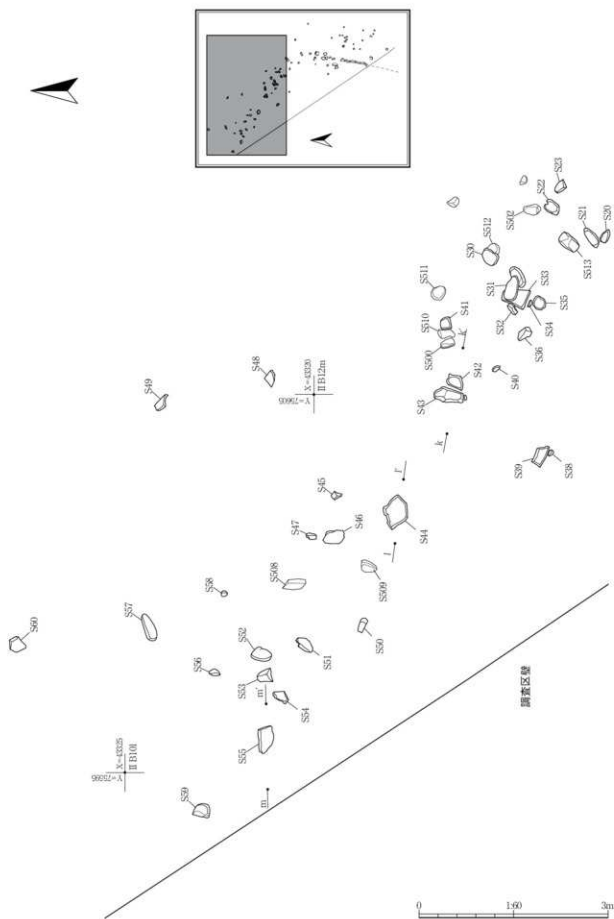
第18図 東西ベルト (捨て場)



第19図 南北ベルト (捨て場)



第20図 1号配石全体図



第21図 1号配石北側

Dutton and Lambeck 2012 Ice volume and sea level during the Last Interglacial. Science, 337, 216-219.

Siddall, M. Rohling, E.J. et al. 2003 Sea-level fluctuations during the last glacial cycle. Nature, 423, 853-858.

米倉伸之 1966 陸中北部沿岸地域の地形発達史. 地理学評論, 39, 311-323.

東北農政局計画部 1986 十和田火山噴出物の分布と性状. 48.

松山力・大池昭二 1986 十和田火山噴出物と火山活動. 十和田科学博物館, 4, 64.

2 遺 構

基本的に掲載されている遺構は縄文時代か、その可能性が高いものである。他時期の遺構については各節で記述している。

(1) 配石遺構

平成29年度の調査開始直後、表土直下の2層とした面から大きな礫の並びが確認され、周囲にもそれが広がっていることが分かった。最終的に確認できた連なりを構成する礫の総数は65個、その周辺には規則性を見いだせないものの大小の礫が分布していた。何れもこの場所を起源とする礫ではなく、縄文人によって持ち込まれた大小の礫群であった。これらと共に出土する土器が、縄文時代後期前葉及びその前後を含む時期を主体とすることから、所謂「縄文時代の配石遺構」の可能性が高いことが明らかとなった。

調査にあたっては、配石遺構を構成する礫群の把握とその構成礫の実測、礫が原位置を保っているのか動いているのか、保っている中でも傾いてしまったのか、石を据えるときに根固め石を用いるか否か、礫の下或いは周辺に墓壇や柱穴(掘立柱建物)があることを念頭に置いて作業した。そして各礫の形状を測量、石質鑑定を実施したうえで、取り外して計量した。

1号配石遺構(第20～24図、写真図版6～11)

[位置]平成29年度調査区のはほぼ中央、丘陵頂部の平坦面に位置している。北側はⅡB10Ⅰグリッド、東側がⅡB13nグリッド、南側ⅡB12oグリッド、西側は調査区外へと続いている。

[検出面]2層面で検出された。

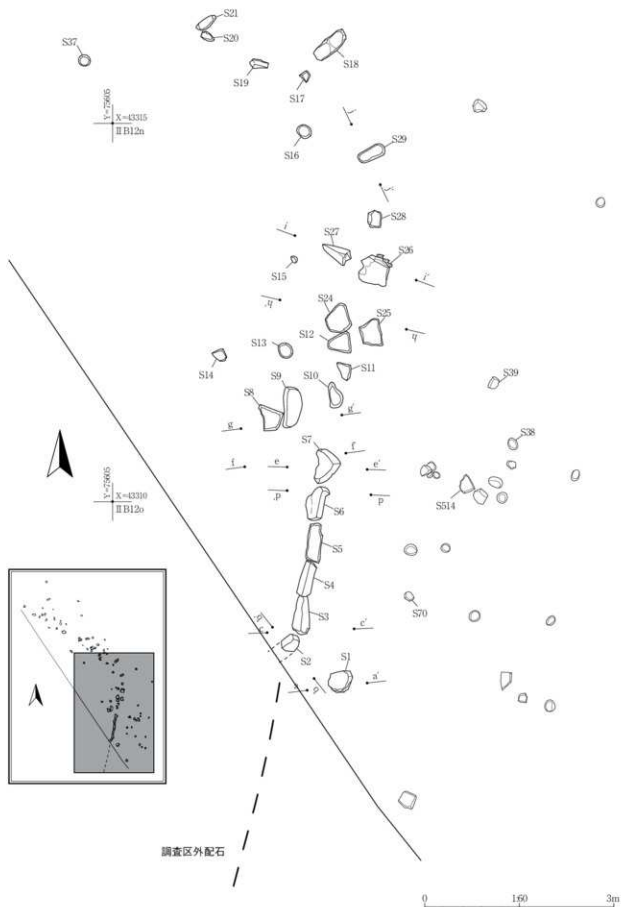
[重複関係]29号土坑、32号土坑(陥し穴)、捨て場2と重複し本遺構のほうが新しい。

[規模・広がり]大凡の規模は東西15m、南北16mで、検出された範囲の中で最も南側の部分(ⅡB13p杭付近)からはほぼ北方向へ5m程直線的に並び、さらに北西方向へと15m程若干弧を描くように延びており調査区外へと続いていく。

[配置の特徴]検出された最も南側から見ると、最南端にある配石2～配石10までは長円形の礫を用い長軸を南北方向へ揃えるように、礫と礫の間隔も詰めて接するように並べられている(配石9は本来配石7と配石10の間に据えられていた可能性がある)。この部分はかなり直線的に並べられており、座標北からは9度東に振れている。

ここまでは長円形の礫が多く用いられていたのに、配石24や25に来ると平たい円礫に変わり、石列の延びる方向や配置も変化が見られる。

先ず延びる方向は、北西方向になる。配石24～配石55まで約15mあり、これまでは直線的であった石列は、やや弧を描くように配置されている。そしてこれまでは1列の並びであったものが2列に分



第22図 1号配石南側

第3表 1号配石遺構使用確一覽

石No	グリッド	層位	幅 (cm)	長さ (cm)	高さ (cm)	重さ (kg)	石質	備考
S1	II B12a	2層	32.6	40.2	8.3	18.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S2	II B12a	2層	24.4	60.3	21.8	36.1	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S3	II B12a	2層	22.4	61.2	20.5	61.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S4	II B12a	2層	22.3	60.8	15.5	41.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S5	II B12a	2層	25.0	62.3	13.1	44.1	花崗閃緑岩	中世代前期
S6	II B12a	2層	25.5	49.2	18.9	44.6	砂岩	中世代白帯紀
S7	II B12a	2層	37.5	54.9	28.9	46.8	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S8	II B12a	2層	36.7	38.7	9.2	19.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S9	II B12a	2層	29.2	62.8	19.1	45.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S10	II B12a	2層	20.4	45.3	21.8	31.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S11	II B12a	2層	27.8	44.1	25.0	40.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S12	II B12a	2層	32.1	33.7	6.2	12.1	花崗流石	中世代白帯紀
S13	II B12a	2層	19.3	24.5	7.8	6.0	デイスイト	中世代白帯紀
S14	II B12a	2層	17.9	18.9	5.7	2.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S16	II B12m	2層	17.0	24.6	12.3	6.9	滑結凝灰岩	中世代白帯紀
S17	II B12m	2層	12.1	14.5	7.3	2.8	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S18	II B12m	2層	21.0	59.0	18.6	31.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S19	II B12a	2層	18.1	32.1	11.3	9.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S20	II B12m	2層	17.6	26.5	12.4	7.0	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S21	II B12m	2層	28.5	33.2	12.1	10.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S22	II B12m	2層	17.0	25.7	10.6	8.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S23	II B12m	2層	14.0	21.2	8.4	4.3	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S24	II B12a	2層	38.6	44.7	7.2	22.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S25	II B13a	2層	29.1	42.3	12.5	30.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S26	II B12a	2層	24.5	61.8	22.5	54.0	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S27	II B13a	2層	41.5	45.7	10.6	46.0	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S28	II B13a	2層	20.8	26.4	8.6	5.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S29	II B13a	2層	19.8	42.5	17.1	20.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S30	II B12m	2層	24.3	24.5	6.1	8.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S31	II B12m	2層	20.6	29.3	6.5	8.3	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S32	II B12m	2層	13.6	19.9	5.6	2.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S33	II B12m	2層	33.7	40.6	12.5	38.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S35	II B12m	2層	18.8	22.1	5.8	3.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S36	II B12m	2層	16.2	23.0	9.5	3.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S37	II B12m	2層	17.4	20.1	6.5	4.1	デイスイト	中世代白帯紀
S39	II B11m	2層	16.9	32.9	6.3	6.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S41	II B12m	2層	17.0	18.5	7.9	4.3	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S42	II B12m	2層	18.0	26.6	8.9	6.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S43	II B12m	2層	22.5	48.0	19.7	25.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S44	II B11m	2層	38.5	52.8	12.0	24.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S45	II B11m	2層	10.3	13.8	5.0	0.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S46	II B11m	2層	36.9	31.7	6.9	6.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S47	II B11m	2層	8.3	15.4	2.5	0.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S48	II B12l	2層	18.0	18.5	1.8	0.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S49	II B11l	2層	12.9	30.1	5.8	2.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S50	II B11m	2層	21.3	27.9	8.5	10.1	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S51	II B11l	2層	26.3	33.9	16.6	15.5	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S52	II B11l	2層	17.8	31.5	10.8	10.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S53	II B11l	2層	15.3	24.9	15.4	9.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S54	II B11l	2層	18.9	32.0	11.9	8.1	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S55	II B10l	2層	24.7	43.2	12.2	20.3	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S56	II B11l	2層	16.7	19.3	6.8	3.0	流紋岩	中世代白帯紀
S57	II B11l	2層	18.5	44.8	15.0	17.1	デイスイト	中世代白帯紀
S59	II B10l	2層	21.0	21.3	11.9	10.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S60	II B11l	2層	20.6	28.0	5.4	5.8	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S500	II B12m	2層	15.0	24.2	7.4	4.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S501	II B12m	2層	23.6	30.5	13.4	13.4	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S502	II B12m	2層	18.0	28.4	10.5	5.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S508	II B11m	2層	28.2	30.1	8.2	11.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S509	II B11m	2層	18.4	32.0	11.8	7.7	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S510	II B12m	2層	20.5	25.8	7.9	4.2	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S511	II B12m	2層	21.5	25.3	9.0	5.9	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S512	II B12m	2層	23.5	27.9	13.0	8.6	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S513	II B12m	2層	28.6	29.5	14.5	23.0	花崗閃緑岩	中世代白帯紀
S514	II B13a	2層	22.0	27.9	7.1	7.0	花崗閃緑岩	中世代白帯紀

配石1



配石1

- ① 75YR2-1黒色 黒ボク質シルト、細粒、稠密に入る
 ② 75YR2-1黒色 黒ボク質シルト
 ③ 75YR2-1黒褐色 シルト質黒ボク、根多い
 ④ 75YR2-1黒色 土と同
 ⑤ 75YR2-1黒色 黒ボク質シルト
 ⑥ 75YR2-2黒褐色 腐植質火山灰質シルト
 ⑦ 75YR2-2黒褐色 腐植質火山灰質シルト

配石2



配石2

- ① 75YR2-1黒色(よりやや褐色がかる)黒ボク質シルト、
 細粒交通、稠密に入る
 ② 75YR2-1黒褐色 シルト質黒ボク、根多い
 ③ 75YR2-1黒色(よりやや褐色がかる)シルト質黒ボク
 ④ 10YR2-2黒褐色 黒ボク質火山灰質シルト
 ⑤ 10YR2-2.5-3黒褐色 黒ボク質火山灰質シルト

配石3



配石3

- ① 75YR2-1黒色(やや褐色をおびる)黒ボク、根収多敷
 ② 75YR2-1黒色(やや明るい)黒ボク
 ③ 75YR2-1黒色(やや明るい)黒ボク
 ④ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑤ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑥ 75YR2-1黒色 シルト質黒ボク
 ⑦ 75YR2-1黒色 シルト質黒ボク
 ⑧ 75YR2-2黒褐色 火山灰質黒ボク質シルト(ローム質上)
 ⑨ 10YR2-2.5黒褐色 軽石質黒ボク質シルト(ローム質上)

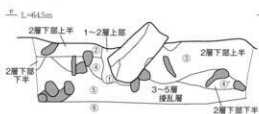
配石6



配石6

- ① 75YR2-1黒色 黒ボク 細粒稠密
 ② 75YR2-1黒色 黒ボク 細粒稠密
 ③ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ④ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑤ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑥ 10YR2-2.5黒褐色 火山灰質黒ボク
 ⑦ 10YR2-2.5黒褐色 火山灰質黒ボク
 ⑧ 10YR2-2.5黒褐色 火山灰質黒ボク

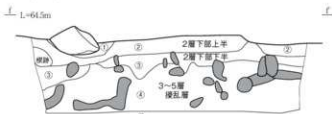
配石7(南側)



配石7(南側)

- ① 75YR2-2黒褐色 黒ボク、細粒稠密
 ② 75YR2-1黒色 黒ボク
 ③ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ④ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑤ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑥ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑦ 75YR2-2黒褐色 火山灰質黒ボク
 ⑧ 10YR2-3黒褐色 火山灰質黒ボク

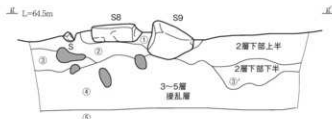
配石7(北側)



配石7(北側)

- ① 75YR2-1黒色 黒ボク、細粒交通
 ② 75YR2-1黒色(やや暗い)黒ボク
 ③ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ④ 75YR2-2黒褐色 10YR2-2.5黒褐色色状
 ⑤ 火山灰質黒ボクの不整形な塊(縦径φ約20cm±)
 ⑥ 10YR2-2.5黒褐色

配石8、配石9



配石8、配石9

- ① 25YR2-1黒色 黒ボク、根・細粒稠密(特に上部)
 ② 75YR1.85-1黒色 黒ボク
 ③ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ④ 75YR2-1黒色 黒ボク
 ⑤ 10YR2-2黒褐色 火山灰質黒ボク(配石7北側の⑤に連続)
 ⑥ 10YR2-3黒褐色 火山灰質黒ボク



0 120 1m

第23図 1号配石断面図(1)

かれるように見える。その詳細については「総括」で後述したい。

北西方向に連なる礫群の特徴を幾つか指摘しておく。南側で用いられていた礫は長円形であった。それが南側から北西方向に向きを変えらるる部分に置かれていたのは平たい円礫に変わっている。そして北西方向の石列に用いられる礫は、長円形・平たい円礫の他に不整形な大小の礫も加わる。石列の並び方についても、互いの礫が接するように並べられていたものが、50～160cm程間隔を空けて配置されている。各配石の置き方についても「総括」で触れるが、配石29や18は何れも長円形の礫で南から北へ向かって石列が、北西へと向きを変えらるる部分に位置し、礫長軸は石列の方向とは直交するような北東方向を向いている。直立していたものが倒れた可能性も考慮し、断面でも観察したが分からなかった。(後述するが配石29が内側、配石18が外側である。)

〔構成礫の石質〕9割強が花崗閃緑岩、若干のデイサイト・砂岩・流紋岩等で構成されていた。花崗閃緑岩は本遺跡近くによく分布する岩石である。それでも9割強という比率はかなり意図的なものといえよう。

〔断面観察〕主な目的は個々の礫が原位置を保っているのか否か、土坑や根固め石といった下部構造を有するのかを確認するために代表的な礫に限定して実施している。

配石2・3・6では礫が傾いてしまった可能性があることが分かった。現在は礫の角が上方を向いた状態となっているが、本来は平坦な面を上にし、周りの礫も同様に平坦な面を上方にして揃えて並べられていた可能性が高いことが指摘できる。礫下部の土の左右で硬さに違いが生じていることをその根拠としている。礫下部に土坑(土墳墓)を有するものは無かった。礫を据えるための根固め石を持つものも無い。

〔下部土坑〕本遺構に伴う下部土坑、下部とは言えないが関連性が窺われる土坑・墓壇も無かった。29号土坑は配石の下から出土しているが、検出面は3層となるため時期差があると判断した。

〔性格〕配石遺構は西側の調査区外へも続いており、全容を確認できたわけではない。しかし、反対に東側へは配石遺構及びその関連遺構が分布しないことは調査で確認できたので、今回検出された部分が配石遺構全体の中でも東端部に相当するとみることができる。仮にこの配石遺構が他事例と同じく内帯と外帯によって出来ているのであれば、外帯にあたる可能性が高い。

〔遺物〕配石遺構に明らかに伴った状態で出土した遺物は無い。

〔時期〕明らかに配石に伴った状態で出土した土器は無い。精査中に供出した土器は後期前葉が主体であったが、本遺構に隣接して後期前葉の2号竪穴建物があることから、両遺構の同時存在は考えにくい。よって1号配石遺構を2号竪穴建物の直前段階か、直後の時期に位置付けるのが最も妥当と考えらるる。

(2) 捨て場

捨て場1(第25図、写真図版25～31)

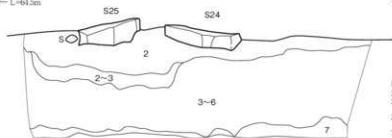
〔位置・検出状況〕丘陵頂部から北側は谷地形となっている。この丘陵頂部の平坦面と谷部の間にあり、北側に面する斜面部から土器や石器類が大量に出土した。その量は、土器が大コンテナ107箱、石器類が中コンテナで100箱、他に石器ではないが遺跡に持ち込まれた大小の礫(石)が200箱であった。

平成29年度の調査開始段階ではこの斜面部の途中(標高60mより高い部分)までが調査範囲であった。しかし試掘を調査区各所で実施したところ、北側斜面部の殆どすべて(標高60mより低い部分)から遺物が出土することが判った。これにより調査対象の範囲は変更され、今の調査範囲になった。

1層からはあまり遺物は出土しないが、2層面から遺物・礫の出土量が増え、3～4層から最も多

配石24、配石25

上 L=64.5m

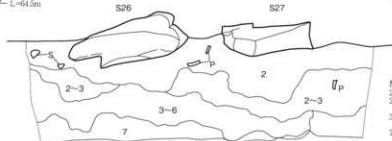


下

- 配石24、配石25
 2. 10YR3/1黒色シルト
 2-3. 10YR2/1黒色シルトに暗褐色シルト30%含む、配石の下は2層が僅より厚くみられた
 3-6. 10YR4/4褐色シルトに暗褐色シルト30%、軽石5%、黄褐色シルト5%含む
 7. 10YR6/8明黄褐色シルト、入江火山灰

配石26、配石27

上 L=64.5m

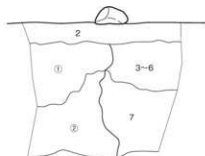


下

- 配石26、配石27
 2. 10YR3/1黒色シルト
 2-3. 10YR2/1黒色シルトに暗褐色シルト30%含む、配石の下は2層が僅より厚くみられた
 3-6. 10YR4/4褐色シルトに暗褐色シルト30%、軽石5%、黄褐色シルト5%含む
 7. 10YR6/8明黄褐色シルト、入江火山灰

配石29

上 L=64.4m

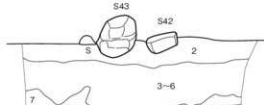


下

- 配石29
 2. 10YR3/1黒色シルト
 3-6. 10YR4/4褐色シルトに暗褐色シルト20%、軽石5%、黄褐色シルト5%含む、入江火山灰
 7. 10YR6/8明黄褐色シルト、暗色シルト40%、軽石10%含む
 ①. 10YR3/2暗褐色シルト、暗色シルト40%、軽石10%含む
 ②. 10YR3/4暗褐色シルト、明黄褐色シルト40%、黒褐色シルト10-20%、軽石5%含む

配石42、配石43

上 L=64.6m

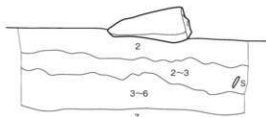


下

- 配石42、配石43
 2. 10YR3/1黒色シルト
 3-6. 10YR4/4褐色シルトに暗褐色シルト20%、軽石5%、黄褐色シルト5%含む
 7. 10YR6/8明黄褐色シルト、入江火山灰

配石55

上 L=64.8m



下

- 配石55
 2. 10YR3/1黒色シルト
 2-3. 10YR2/1黒色シルトに暗褐色シルト30%含む、配石の下は2層が僅より厚くみられた
 3-6. 10YR4/4褐色シルトに暗褐色シルト20%、軽石5%、黄褐色シルト5%含む
 7. 10YR6/8明黄褐色シルト、入江火山灰

0 120 1m

第24図 1号配石断面図(2)

く出土する。5～6層からの遺物出土は無い。

[層序]遺跡内の基本層序に準じている。6～7カ所で地層断面の観察ができるような状態にして記録してきた(第16～19図参照)。各地層の詳細は第IV章1節にあるので参照いただきたい。地層の概要は、1層:現在の表土、2層:黒ボク(縄文時代後期の配石遺構が確認される。後期・前期の遺物出土)。3層:中振火山灰、3/4層:縄文時代前期初頭の遺物を大量に含む暗褐色シルト、土器や石器類と共にこの暗褐色シルトも廃棄されたような雰囲気を持つ。4層:黒褐色シルト(中振火山灰降下前、縄文時代前期の生活面)。5層:南部浮石及びその軽石を含む黒褐色シルト。6層、5層から7層への漸移層。7層:八戸火山灰層となる。

今回の調査における最も大きな成果の一つに、3層(中振火山灰)と3/4層(捨て場1)の新旧関係が判明したことがあげられる。調査区西側断面第17図にて「捨て場1より中振火山灰のほうが新しい」ことが確認された。(3/4層出土試料のAMS年代測定の結果は第VI章に掲載している。)

[精査の状況]捨て場1のある北側斜面部を6～7カ所で地層断面を観察できる状態にし、遺跡のグリッド(5×5m)ごとに掘り下げていった。その際に4～3方向から地層観察が出来るような状態にし、分層線をはっきりと引いて、作業する人達による掘り過ぎや掘り残しが生じないようにした。調査員が遺物の出土状況を随時見て、遺物を残しながら掘るのか、取り上げて掘り下げるのかを判断した。土器は廃棄された際、その場で潰れたままの状態となっている(立体的に復元できそうな)個体も数多くあり、それらは個別に写真や出土地点を測った。層位も細分可能なものは3層の上部、3層の下部といった具合に分けて取り上げている。

遺物が出土する4層まではこのような面的な精査を行い、5層より下は部分的に掘り下げ遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は見つからなかった。

[重複関係]捨て場1(3層及び3/4層)より新しい遺構:25・33号土坑。

捨て場1(3層及び3/4層)より古い遺構:24・28・30・31・34・36～40号土坑。

[平面形・規模]北端(斜面下で傾斜が緩やかになり谷底地形の始まり)はⅡB7cグリッド、東端がⅡB12fグリッド、南端は丘陵頂部の平坦面から北側斜面部への地形変換点となるⅡB10iグリッド付近で、西側は調査区外へと続いている。

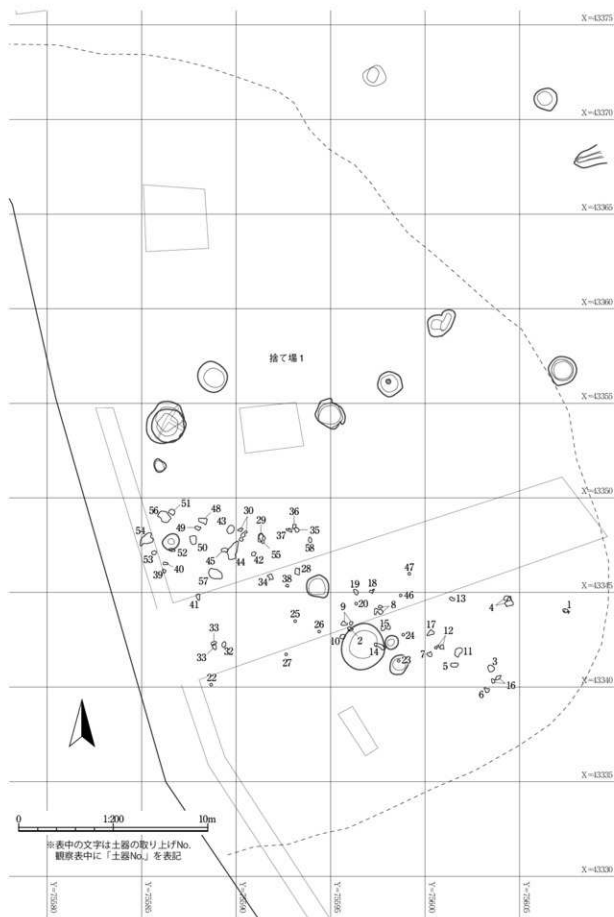
調査区内での規模は東西25m、南北38m、凡そ725m²である。

[遺物]土器・石器類と共に大小の礫も大量に出土した。各種別によって特徴を有するものではなく、混在する状態であった。これらの遺物を含む3/4層(暗褐色シルト)も人為的な雰囲気があり、遺物と共に廃棄された土砂を多く含むと考えている。遺物の多くはこの場で使われて残されたものではなく、丘陵頂部の平坦面方向から北側斜面部へ廃棄されたものとみるのが最も妥当である。殆どの遺物はこの北側斜面と同じような傾きで出土している。

土器の中には立体的に復元できそうな個体も数多くあったが、大半は破片の状態で出土している。特に斜面下方ではその破片も小さく、出土量も少なくなる。斜面に形成された捨て場であるから、上方から下方へと時間の経過とともに動いている遺物があることは想定されるが、3/4層についてはあまり流出した痕跡を見出すことはできない。むしろ原位置をよく保っているほうだと思われる。

石器類及び大小の礫も土器と混在する状態で出土した。この地に元々あった礫ではなく、すべて縄文時代の人々が持ち込んだものであることから、一旦全てを持ち帰り、仕分けし、計量・計測等を行った。それに基づく分布図も作成した(第70図)。

石器類の中に、石斧及び石斧の未完成品が大量にあることが判った。完成間近なもの、粗割段階のもの等々で石斧製作の工程を知るのに良好な資料が多い。大量に出土した大小の礫も、その多くが



第25図 捨て場1遺物出土状況

この石斧類と石質が同じであることから石斧作りに使う原石であった可能性が高い。

[時期]縄文時代前期初頭が卓越するが、後期の遺物も少量だが出土する。

捨て場2(第26図、写真図版32~34)

[位置・検出状況]丘陵頂部の中央からやや南側に位置している。2層を除去し、3~4層に達した段階で土器や石器類が他の場所より格段に多く出土するようになる。その量は、土器が大コンテナ26箱、石器類が中コンテナで8箱、他に石器ではないが遺跡に持ち込まれた大小の礫(石)が16箱であった。[層序]遺跡内の基本層序に概ね従っている。3~4カ所で地層断面の観察ができるような状態にして記録をとった(第16~19図参照)。遺跡基本層序の詳細は第IV章1節のものを参照願いたい。概略と基本層の中に於ける捨て場2の位置付けをここでは記したい。

1層:現在の表土、2層:黒ボク(縄文時代後期の配石遺構が確認される。後期・前期の遺物出土)。3層:中振火山灰層であるが、捨て場2のある丘陵頂部の平坦面に火山灰そのものは堆積していない。3/4層(捨て場2):縄文時代前期初頭の遺物を大量に含む暗褐色シルト、土器や石器類と共にこの暗褐色シルトも廃棄されたような雰囲気を持つ。4層:黒褐色シルト(中振火山灰降下前、縄文時代前期の生活面)であるが、ここには見られない。5層:南部浮石及びその軽石を含む黒褐色シルト。6層:5層から7層への漸移層。7層:八戸火山灰層となる。

[精査の状況]捨て場2の範囲を3~4カ所で地層断面を観察出来る状態にしてから遺跡のグリッド(5×5m)と層位ごとに掘り下げていった。その際に4~3方向から地層観察が出来るような状態にし、分層線をはっきりと引いて掘り過ぎや掘り残しが生じないようにした。遺物の出土状況を随時見て、遺物を残しながら掘るのか、取り上げて掘り進めるのかを判断した。その場で潰れたような状態の個体については写真を撮り出土地点を測量した。

遺物が出土しなくなる5層まではこのような精査を行い、5層より下は部分的に掘り下げ遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は見つからなかった。

[重複関係]捨て場2(3/4層)より新しい遺構:1号配石遺構、2号竅穴建物。

捨て場2(3層及び3/4層)より古い遺構:2・4・5号焼土。

[平面形・規模]北端はⅡB13lグリッド、東端がⅡB15nグリッド、南端は丘陵頂部の平坦面から南側斜面部へ緩やかに下り始める地形変換点、ⅡB14pグリッド付近で、西側は調査区外へと続いている。

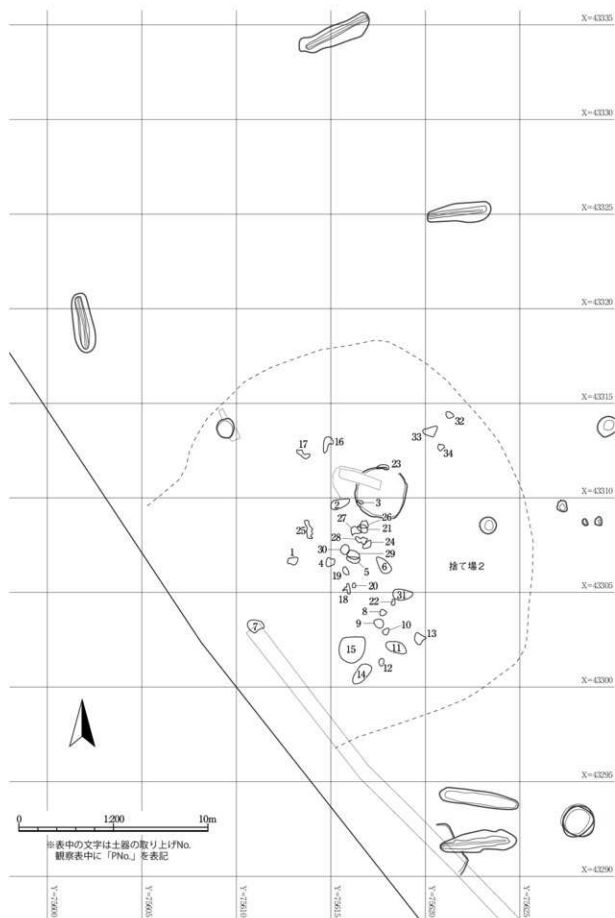
調査区内での規模は東西17m、南北20m、凡そ275㎡である。

[遺物]土器・石器類と共に大小の礫も大量に出土しているが、それぞれが出土状況に特徴を有するものではなく、混在する状態であった。これらの遺物を含む3/4層(暗褐色シルト)も人為的な雰囲気があり、遺物と共に廃棄された土砂を多く含むと考えている。遺物の多くはこの場で使われて残されたものではない。概ね平坦な場に形成された捨て場であること、その後は殆ど利用されていない土地であることから、後世に動いた遺物は極めて少ないといえる。

土器の中には立体的に復元できそうな個体も数多くあったが、大半は破片の状態で出土している。一つ一つの破片は大きなものが目立った。

石器類及び大小の礫も土器と共に出土している。この場に本来無かった礫であり、すべて縄文時代の人々が持ち込んだものであることから、一旦全てを持ち帰り、仕分けし、計量・計測を行った。それに基づく分布図も作成した(第70図)。

捨て場1出土の石器類と同様に、石斧及び石斧の未完成品が大量にあることが判った。大量に出土



第26図 捨て場2遺物出土状況

した大小の礫も、その多くがこの石斧類と石質が同じであることから石斧作りに使う原石であった可能性が高い。

[時期]縄文時代前期初頭が主体で、捨て場1とはほぼ同時期に形成されたと考えている。

(3) 竪穴建物

縄文時代の竪穴建物を2棟、検出している。いずれも尾根頂部に立地していた。

1号竪穴建物(第27図、写真図版12)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面であるⅡB15rグリッドに位置している。2層の残りは決して良いとは言えない場所であるが2層中からの検出である。

[重複関係]3号土坑(陥し穴)と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]調査区境にあるため全体の形状は把握できなかったが概ね円形であったと推測される。その規模についても推定でしか示せないが、直径250~320cmと考えている。

[埋土]炭粒を微量含む黒褐色シルトが上層、下層には暗褐色シルトが主に南側を中心にみられた。自然堆積である。地床炉の直ぐ上にも炭粒がみられる。

[床面・壁]底面は概ね平坦でやや硬い。北側の壁は切り株によって判然としなない。南側の壁は底面から20cm程、やや外傾しながら立ち上がっている。

[炉]調査区の境界部分にあるため詳細は不明であるが、地床炉である可能性が高い。南北方向で25cmの広がりがあり、焼土の厚さは3cm前後である。

[その他の付属施設]特になし。

[遺物](遺物図版1、写真図版47)

遺構内から土器64.5gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期]遺構検出面から縄文時代後期と見られる

2号竪穴建物(第28図、写真図版13)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦な場所(ⅡB14nグリッド)に位置しており、2層下~3層上面での検出である。

[重複関係]空間的には捨て場2と重なるが、本遺構のほうが新しい。直接重複しているわけではないが1号配石遺構とは、かなり近くにあるため同時存在とは考えにくい。それぞれの遺構検出面を比べると、1号配石遺構が2層、2号竪穴建物が2層下から3層上面であるから前者が新しい。但し2層は黒ボクであるため断面観察でも見極めは難しかった。

[平面形・規模]検出面での平面形は概ね円形となり、検出面での規模は268×264cmである。

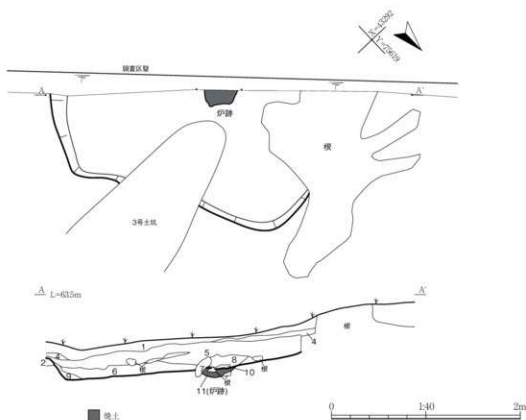
[埋土]黒褐色シルトが上層に、下層には炭物や焼土粒を不規則に含む黒褐色シルトが主にみられた。上層は自然堆積であるが下層はよく分からなかった。床の直ぐ上に大小の礫が数点あったが、炉に使われたものには見えなかった。

[床面・壁]ここでいう底面とは所謂掘方のことを指している。底面は概ね平坦でやや硬い。西側の壁は試掘時に掘削され、上部が失われている。東側の壁は底面から27cm程、ほぼ垂直に立ち上がっている。

[炉]床面の中央から地床炉が検出された。42×40cmのほぼ円形で焼土は2~4cmの厚さがあった。上述した床面より数cm浮いた状態で地床炉が検出されていることから、埋土下層にあたる4~6層が貼床的なものだったのではないかと思っている。

[その他の付属施設]確実に柱穴となるようなものは無かった。

1号竪穴建物

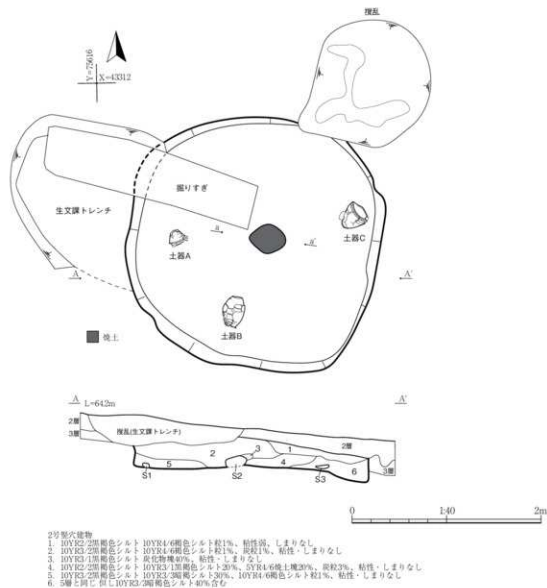


1号竪穴建物

1. 10YR3/2暗褐色シルト 草木根多、粘性やや有、締まりやや弱
2. 10YR2/1褐色シルト 粘性・締まりやや有
3. 文層
4. 10YR2/1褐色シルト 粘性・締まりやや有
5. 10YR2/2暗褐色シルト 6・7層の少し上に厚径(1~2cm)5%含む、粘性・締まりやや有
6. 10YR3/2暗褐色シルト 黄褐色シルトブロック(厚1~2cm)5%含む、粘性・締まりやや有
7. 10YR3/2暗褐色シルト 粘性・締まりやや有
8. 10YR2/1褐色シルト 炭粒5~10mm5%含む、粘性・締まりやや有
9. 10YR3/2暗褐色シルト 粘性・締まりやや有
10. 7.5YR5/4い・黄褐色シルト 焼土ブロック10%含む、粘性弱、締まり強
11. 5YR5/8明黄褐色シルト(焼土) 粘性弱、締まり強

第27図 1号竪穴建物

2号竪穴建物

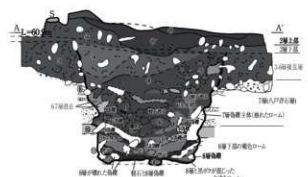
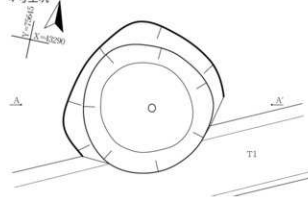


2号竪穴建物炉 (3号焼土)



第28図 2号竪穴建物

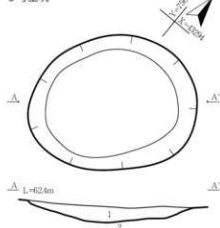
4号土坑



4号土坑

- ① 75YR2-1黒色 根多数の黒がク1層、元2層が間に上る擾乱を受ける
- ② 75YR2-1黒色 2層上部の粘土の黒がク、根少量入る
- ③ 10YR2-2黒褐色 褐色 2層下部黒がクと火山灰質黒がクが偽層状に混在
- ④ 10YR2-2黒褐色 褐色 3-6層後乱層やや織りのある火山灰質黒がクと黒がクが不定な偽層状に混在
- ⑤ 10YR2-2黒褐色 褐色 3-6層在粘土 黒がク褐色ローム偽層混在
- ⑥ 75YR2-1黒色 褐色 3-6層混在 軽石点在する黒がク主体の粘土
- ⑦ 5YR1.7/1黒色
- ⑧ 10YR2-3黒褐色 褐色+p+m
- ⑨ 10YR2-3黒褐色 褐色+p+m
- ⑩ 75YR2-1黒色 ローム混在黒がクと偽層混在
- ⑪ 10YR5-8黄褐色 褐色+p+m
- ⑫ 75YR6-6棕色 8層上部粘土質ローム質土
- ⑬ 75YR5-6明褐色

5号土坑

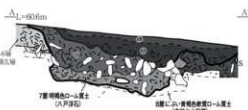
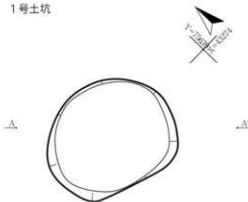


5号土坑

1. 10YR2-2黒褐色シルト 下部に1cm以下の黄褐色1-2%混在、粘性やや弱、締まりやや緩2層粘降
2. 10YR2-3黒褐色シルト 粘性やや弱、しまり中

0 1:40 2m

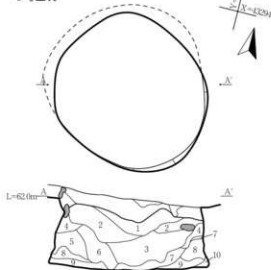
1号土坑



1号土坑

- 1号土坑
- ① 黒がク質シルト状土、1層根痕多数
- ② 黒がク2層上部
- ③ 黒がク質シルト4層と黒がク2層下部偽層が混在
- ④ ①土と、②-⑦層の境界不明な偽層が混在する粘土
- ⑤ 軽石と細粒中層-粗粒中サイズのローム質偽層7層由来の混在

6号土坑



6号土坑

1. 10YR2-2黒色シルト質細砂 浮石20%、10YR2-2黒褐色偽層を含む、粘性やや弱、締まり中
2. 5Y2-1棕色極細砂質シルト 浮石10%下に集中、目内層を含む、粘性強、締まり中
3. 10YR1.7/1黒色泥質シルト 浮石を10%含む、粘性やや強、締まり中
4. 10YR2-2黒褐色シルト 浮石を5%含む、粘性強、締まりやや弱
5. 10YR2-3黒褐色シルト 質粘土、粘石10%、明褐色、明褐色偽層を含む、粘性強、締まり中
6. 10YR2-1黒色シルト質粘土 浮石5%を含む、粘性強、締まり中
7. 10YR2-2黒褐色極細砂質シルト 浮石を10%含む、粘はやや弱平で中心に向かって下下がり、粘性強、締まりやや弱
8. 10YR2-2-3/4黒褐色粘土質シルト 浮石わずか、10YR2-1黒褐色偽層を含む、粘性やや強、締まり中
9. 10YR2-2黒褐色粘土質極細砂 扁平な褐色偽層をわずかに含む、粘性やや弱、締まり中
10. 2.5Y3-3/4黄オレンジ褐色シルト質粘土、褐色粘を3%含む、粘性強、締まり中

第29図 1、4、5、6号土坑

〔遺物〕(遺物図版1・87・128・136・152・171、写真図版47・134・155・159・166・176)

床面近くに置かれたままの状態で土器A・B・Cがあった(a3・a4・a2)。他は埋土内出土のものである。土器5,312.6g、土製品590g、石器2,562.2gが出土し、このうち土器5点、土製品1点、石器7点を図化・掲載した。

〔時期〕遺構検出面や出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉とみられる。

(4) 土坑・陥し穴

1号土坑(第29図、写真図版14)

〔位置・検出状況〕丘陵頂部平坦面の南端にあたるⅡB18vグリッドに位置し、表土の下、1～6層面で検出された。

〔遺構間の重複〕無い。

〔平面形・規模〕開口部径140×110cm、底部径125×112cm、深さ56cmである。

〔埋土〕上部は基本層2層主体、中部は2～3層主体、上部は5～7層が主体となる偽磔で人為堆積の可能性はある。

〔底面・壁〕底面は緩やかに傾斜しており、壁は外傾して立ち上がっている。

〔遺物〕遺構内から土器29.4gが出土しているが図化していない。

〔時期と性格〕縄文時代後期頃の土坑。

2号土坑(陥し穴)(第30図、写真図版21)

〔位置・検出状況〕ⅡB21t・uグリッド、2層内での検出。

〔遺構間の重複〕認めず。

〔形状〕長円形(溝状)。

〔規模〕開口部径443×116cm、底部径391×17cm、深さ150～160cm。

〔長軸方向〕N-16°-E。

〔埋土〕覆土は4層に区分できる。最下部①と上部2層③④は黒ボクが主体で、中部②はローム質土の偽磔が優勢であり、境界部は構成物が漠然と移り変わっていて不明確である。

最下部①25cm前後は8層の褐色偽磔が混じる2層黒ボク主体で上限は比較的明瞭である。

その上位②90cm前後は褐色ローム偽磔が多数混じる3層以下の擾乱層からなり、偽磔は7層由来のものが8層由来のものより多く、かつ、細粒中礫～細礫サイズが多い。覆土①-②には斜面の緩やかな堆積を示すような斜交ラミナは認められず、一度期に埋まったものと推定される。

さらに上位③20cm余りは2層黒ボク主8層で7層のローム質火山灰偽磔(中粒～細粒中礫サイズ)が散在する。

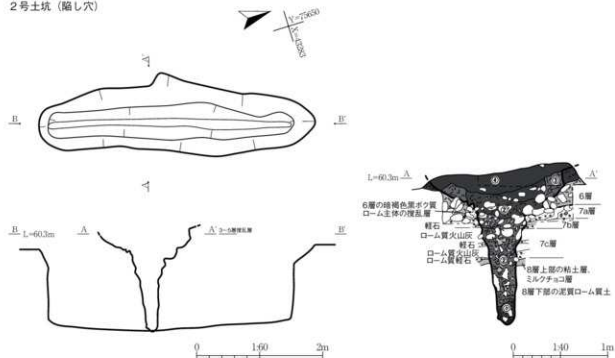
覆土③の高さの遺構壁面の両側に、3層以下の黒ボク主体でローム質黒ボク偽磔の密集部③'が分布する。崩落土か、掘り上げ時の整形土かと思われる。

最上部④20cm以上は偽磔が少ない2層黒ボクが主体の覆土であり、下面は浅い溝状に窪む。

〔壁・底面の形状〕壁面の下部2/3(覆土①-②の深度)はほぼ垂直で上部1/3(覆土③-④の深度)は開き気味である。底面は溝状で中央が深い。覆土①は仕掛け完了時の機能時層、②③は獲物の捕獲時の崩落土層～機能後の埋立て層、④は廃棄後の自然堆積層とみられる。

〔壁・底面〕壁面の下部2/3(覆土①-②の深度)はほぼ垂直で上部1/3(覆土③-④の深度)は開き気味である。底面は溝状で中央が深い。

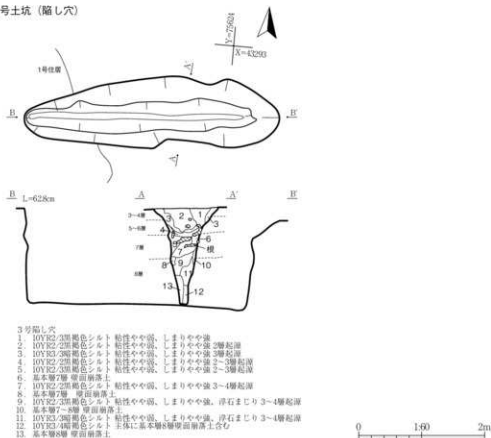
2号土坑 (陥し穴)



2号陥し穴

- ① 偽線少ないで層位ボタの順上
- ② 2層ボタの順上, 7層ローム質火山灰偽線中粒～細粒中粒中子式散在
- ③ 3層以下主体のローム質火山灰偽線の密集部, 崩落土か掘り上げ土か?
- ④ 褐色ローム偽線層=8層, 細粒中粒～細粒サイズ多いが多数認めらる3層以下の視乱層からなる層上
- ⑤ 2層ボタ主体, 8層偽線混じる

3号土坑 (陥し穴)



3号陥し穴

1. 10YR2/3暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
2. 10YR2/2暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
3. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
4. 10YR2/2暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
5. 10YR2/3暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
6. 基本層7層 壁面崩落土
7. 10YR2/2暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強
8. 基本層7層 壁面崩落土
9. 10YR2/3暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強, 浮石まじり
10. 基本層7～8層 壁面崩落土
11. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱, しまりや中強, 浮石まじり
12. 10YR3/4暗褐色シルト 主体に基本層8層壁面崩落土含む
13. 基本層8層 壁面崩落土

第30図 2、3号土坑(陥し穴)

[遺物] (遺物図版1・137、写真図版47・159)

遺構内から土器22.9g、石器850.0gが出土し、このうち土器1点、石器1点を図化・掲載した。

[時期] 2層での検出であること、出土遺物等から、縄文時代晩期に位置付けられる。

3号土坑(陥し穴) (第30図、写真図版21)

[位置・検出状況] 丘陵頂部の平坦面(ⅡB15rグリッド)に位置し、3～4層面で検出された。

[遺構間の重複] 1号竪穴建物と重複し、本遺構が古い。

[形状] 平面形は長円形(溝状)をしている、短軸部での断面形は底面付近が狭く、中場付近から上場にかけて広がるY字に似た形状をしている。

[規模] 開口部径408×110cm、底部径349×13cm、深さは150cmある。ほぼ原形を留めていると思われる。

[長軸方向] N-84°-E。

[埋土] 黒色シルト、黒褐色シルト、暗褐色シルトの他に、壁面崩落土もみられる。自然堆積。

[底面] 幅13cm程しかない。逆茂木痕は無かった。

[遺物] なし。

[時期] 縄文時代後期より古い。

4号土坑(第29図、写真図版14)

[位置・検出状況] ⅡB20r・sグリッドに位置し、2層下部上面で検出した。

[遺構間の重複] 無い。

[平面形・規模] 開口部での規模は東西で160cm、底部径98×98cm、深さ150cmを測る。

[埋土] 断面図は前後2面を合成してあり、60.7～60.8mのテラスを挟んで上方が約40cm奥にある。

覆土は最下部・下部・中部・上部に4大別できる。最下部は層厚5～25cmで壁面側が厚く、底が薄く、上面は浅く窪む。主として8層偽礫と黒ボクが混在し、その下部は8層偽礫と黒ボクが混じった水漬きローム質土であり、上部は2層に由来するとみられる黒味の強い黒ボクが薄層をなす。堆積時に土坑底に水が漬いていたと考えられる。

下部は層厚15～30cmで、壁面側が厚く、土坑底が薄く、浅く窪む。8～6層の比較的大きな偽礫と黒ボクからなる。周囲からドサッと一度期に落ち込んだようである。

中部は層厚約90cmの客土層であり、さらに下層・中層・上層に4細分できる。中部下層は軽石粒の多い主として5層由来の黒褐色の黒ボク偽礫と、基質を埋める軽石の少ない黒色の黒ボクからなる客土層である。中部中層は軽石の少ない黒色の黒ボクが主体を占め、軽石の多い黒ボクが偽礫として混じる。見かけ上、東側に厚く偏っており、東から西へ客土されている。中部上層は3-6層が混在する客土層で、黒ボクが褐色ローム偽礫より多い。中部中層の西側の凹みを埋めている。

中部の構成物は、全体として地中深くに分布する8層から浅くに分布する3-5層擾乱層の構成物へ移行している。掘上げられて積み重ねられた残土の山が、順次上から下へ埋め立てに用いられたようである。

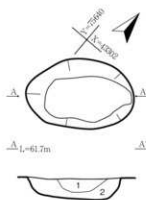
上部は層厚30cm余りある2層上部の黒ボクの自然堆積層であり、埋め残された土坑の凹みを埋めている。

[底面・壁] 壁面は少し開き気味の円筒状、底面は平坦。

[遺物] (遺物図版1、写真図版47)

遺構内から土器679.7gが出土し、4点を図化・掲載した。

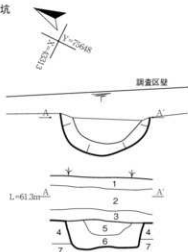
8号土坑



8号土坑

1. 10YR2-1黒色シルト 塊石あり、粘性・締まりやや有
2. 10YR2-2黒褐色シルト 草木根による塊石多、粘性・しまりやや有

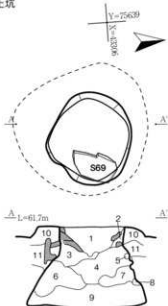
9号土坑



9号土坑

1. 10YR2-2黒褐色シルト 草木根多 表土
2. 10YR2-1黒色シルト
3. 10YR3-3暗褐色シルト
4. 10YR4-4褐色シルト 塊石目立つ
5. 10YR3-3暗褐色シルト 浮石1-2%含む、粘性やや有、締まっている
6. 10YR3-3暗褐色シルト 浮石1-2%含む、褐色シルトを30%含む、粘性・締まりやや有
7. 10YR5-6黄褐色シルト 浮石30%含む

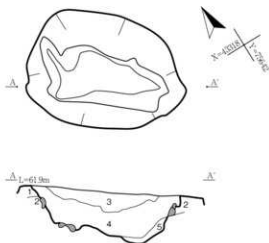
10号土坑



10号土坑

1. 10YR2-1黒色シルト 褐色ブロック小粒が11層との境にみられる、粘性やや有、締まり少し弱
2. 10YR2-2黒褐色シルト 粘性やや有、締まり少し弱
3. 10YR2-2黒褐色シルト 暗褐色シルトブロック30%、黄褐色シルト極小ブロック2%含む、粘性・締まりやや有
4. 10YR2-2黒褐色シルト 10YR2-3暗褐色シルト40%含む、粘性・締まりやや有
5. 10YR5-6黄褐色シルト 粘性やや有、締まっている
6. 10YR2-2黒褐色シルト 10YR3-2暗褐色シルトブロック40%、黄褐色シルト極小粒ブロック5%含む、粘性・締まりやや有
7. 10YR2-2黒褐色シルト 暗褐色シルトブロック30-40%含む
8. 10YR5-6黄褐色シルト 粘性やや有、締まっている
9. 10YR2-2黒褐色シルト 褐色シルトブロック5%、黄褐色シルト極小粒ブロック2-3%含む、粘性・締まりやや有
10. 10YR3-3暗褐色シルト 草木根による塊石多、粘性・締まりやや有
11. 10YR5-6黄褐色シルト 草木根による塊石多、粘性やや有、締まっている

11号土坑



11号土坑

1. 10YR4-4暗褐色シルト 草木による塊石多、粘性・締まりやや有
2. 10YR4-4暗褐色シルト 草木による塊石多、粘性やや有、締まっている
3. 10YR2-2黒褐色シルト 黄褐色シルト小-中粒5%、暗褐色ブロック10%含む、粘性やや有、締まり少し弱、人為
4. 10YR3-1暗褐色シルト 黄褐色シルトブロック30%、褐色シルトブロック40%、黒褐色シルトブロック10%含む、粘性やや有、締まり少し弱、人為
5. 10YR2-3暗褐色シルト 褐色シルトブロック40%含む、粘性・締まりやや有、人為

第31図 8~11号土坑

[時期・性格]縄文後期を中心とする時期(前期より新しい)の貯蔵穴。

5号土坑(第29図、写真図版14)

[位置・検出状況]ⅡB16rグリッドに位置し、3層上面で検出されているが本来は2層中位から掘り込まれていた可能性がある。

[遺構間の重複]6号土坑と上下に重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]長円形で開口部径175×137cm、底部径138×110cm、深さは16cmあった。

[埋土]黄褐色シルト小粒を微量に含む黒褐色シルトで自然堆積である。

[底面・壁]少し丸みを帯びているため、底面と壁の境界はやや不明瞭となっている。

[遺物](遺物図版2・112・128・144・168、写真図版47・48・147・155・163・174)

遺構内から土器499.2g、石器2,073.2gが出土し、このうち土器4点、石器4点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代後期の可能性がある土坑。

6号土坑(第29図、写真図版14)

[位置・検出状況]ⅡB16rグリッドに位置し、3～4層面で検出されている。

[遺構間の重複]5号土坑と上下に重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模]円形で開口部径166×145cm、底部径175×168cm、深さは79cmであった。

[埋土]黒褐色シルトや暗褐色シルトを中心とし、壁崩落土も見られた。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦に掘り込まれているが、小土坑は見られない。壁は底面から内傾して立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期]縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

8号土坑(第31図、写真図版15)

[位置・検出状況]ⅡB19pグリッドに位置し、3層面で検出している。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]円形に掘ったがプランは不明瞭であった。開口部径116×73cm、底部径95×53cm、深さ21cmであった。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルトからなる自然堆積である。

[底面・壁]底面は概ね平坦で、壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期]3層検出となれば、縄文時代前期の可能性がある。

9号土坑(第31図、写真図版15)

[位置・検出状況]ⅡB20nグリッドに位置し、4層面で検出された。

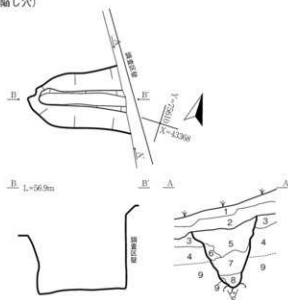
[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]東側が調査区外へと続く不整な円形である。規模は開口部径95×40cm、底部径80×30cm、深さ29cmを測る。

[埋土]暗褐色シルトの中に軽石粒を少量含む。自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦ではない。壁は外傾して立ち上がっている。

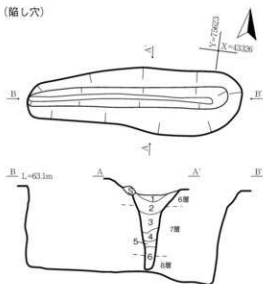
12号土坑 (陥し穴)



12号陥し穴

1. 10YR3/2黒褐色シルト 草木根多、粘性やや有、締まり弱 黄土
2. 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・締まりやや有
3. 10YR3/3暗褐色シルト 浮石粒5%含む、粘性・締まりやや有
4. 10YR4/4暗色シルト 草木根により混乱、浮石5%含む、粘性・締まりやや有
5. 10YR3/2黒褐色シルト 草木根により混乱、浮石5%含む、粘性・締まりやや有
6. 10YR4/4暗色シルト 浮石5%、黄褐色シルト20%、黄褐色シルト20%含む、粘性・締まりやや有
7. 10YR4/3に黄褐色シルト 浮石5%、暗褐色シルト、黄褐色シルトブロック 15~20%含む、粘性・締まりやや有
8. 10YR3/2黒褐色シルト 黄褐色シルトブロック40%含む、粘性・締まりやや有
9. 10YR5/8黄褐色シルト 粘性やや有、締まっている

23号土坑 (陥し穴)



23号陥し穴

1. 10YR2/1黒色シルト 基本土層2層起層
2. 10YR3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト5%含む
3. 10YR3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト5%、暗褐色シルト10%含む 基本土層3層起層
4. 10YR3/6黄褐色シルト 基本土層7層上部起層
5. 10YR6/4に黄褐色粘土質シルト
6. 10YR2/210YR2/2 黒褐色シルト に黄褐色シルト10%含む 基本土層7層下部起層

第32図 12、23号土坑 (陥し穴)

[遺物] (遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器30.0gが出土し、2点を図化・掲載した。

[時期と性格] 縄文時代の土坑である。

10号土坑 (第31図、写真図版15)

[位置・検出状況] II B19 o グリッドに位置し、3～5層面で検出された。

[遺構間の重複] 無い。

[平面形・規模] 円形であった。規模は開口部径93×85cm、底部径148×145cm、深さは84cmあった。

[埋土] 黒色シルト、黒褐色シルト、暗褐色シルトなどが流れ込むように堆積していた。自然堆積。

[底面・壁] 底面は平坦で、小土坑などは見られなかった。壁は底面から内傾して立ち上がり、中場付近から土場へはほぼ垂直になっている。

[遺物] (遺物図版2・131・144、写真図版48・156・163)

遺構内から土器1139g、石器497.0gが出土し、このうち土器1点、石器2点を図化・掲載した。

[時期と性格] 縄文時代の貯蔵穴である。

11号土坑 (第31図、写真図版15)

[位置・検出状況] II B19 m グリッドに位置し、5～6層面で検出された。

[遺構間の重複] 無い。

[平面形・規模] 不整な長円形であった。規模は開口部径166×122cm、底部径110×50cm、深さ54cmを測る。

[埋土] 上部に黒褐色シルト、下部は暗褐色シルトが主体となり、何れも黄褐色シルトブロックを不規則に含んでいた。よって人為堆積の可能性が高いと考えている。

[底面・壁] 底面は平坦ではない。壁の立ち上がりも歪である。

[遺物] (遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器101.7gが出土し、このうち1点を図化・掲載した。

[時期] 縄文時代。

12号土坑 (陥し穴) (第32図、写真図版22)

[位置・検出状況] 北側斜面部の II B12 c グリッドに位置している。3層上面から掘り込まれているようである。

[遺構間の重複] 無い。

[形状] 平面形は長円形(溝状)をしている。断面形はV字に近い形状をしている。

[規模] 開口部径160×110cm、底部径140×20cm、深さ93cmである。

[長軸方向] N-76°-E。

[埋土] 黒褐色シルトや黄褐色シルトが交互に堆積する。自然堆積である。

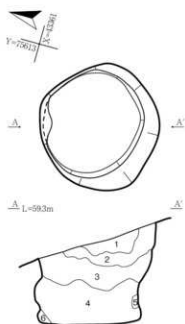
[底面] 概ね平坦で逆茂木痕は無かった。

[遺物] (遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器42.1gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期] 縄文時代。

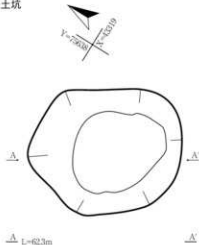
13号土坑



13号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 浮石10~15%含む、粘性・締まりやや有
 2. 10YR3/4暗褐色シルト 草木根による根乱、浮石15~20%含む、粘性・締まりやや有
 3. 10YR5/6黒褐色シルトブロックと暗褐色シルトブロック、浮石20%含む、粘性やや有、締まっている
 4. 10YR2/3黒褐色シルト 浮石5%含む、粘性・締まりやや有
 5. 10YR5/8暗褐色シルト 粘性やや有、締まっている
 6. 10YR4/4褐色シルト 粘性やや有、締まり弱
- ※1層以外は人為堆積、浮石含む土が主体、古い遺構か

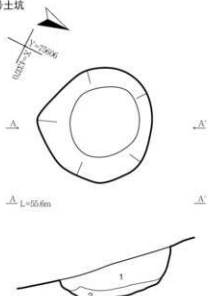
14号土坑



14号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 草木根による根乱、粘性やや有、締まり有
2. 10YR4/4褐色シルト 草木根による根乱、暗褐色シルト30%含む、粘性・締まりやや有

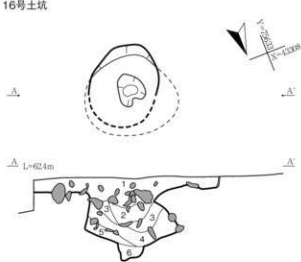
15号土坑



15号土坑

1. 10YR2/3黒褐色シルト 浮石(軽石)30%含む、粘性・締まりやや有
2. 10YR4/6褐色シルト 軽石を含む褐色シルトが40%含む、粘性・締まりやや有

16号土坑



16号土坑

1. 10YR17/1黒色細砂質シルト 生物根乱多、10YR2/2黒褐色ブロックを縦状に含む、粘性やや弱、締まりやや硬 人為堆積
2. 10YR17/1黒色シルト 浮石10%含む、粘性弱、締まり弱
3. 10YR2/2黒褐色細砂質シルト 浮石10%、10YR2/3黒褐色ブロックを5%含む、粘性やや弱、締まり著 人為堆積
4. 10YR2/3黒褐色シルト 質細砂 浮石30%、10YR3/3暗褐色ブロックを含む、粘性弱、締まり著 人為堆積
5. 10YR2/3黒褐色細砂質シルト 浮石10%、平面上層礫サイズ多、10YR3/3暗褐色ブロックを含む、粘性弱、締まり著 人為堆積
6. 10YR2/2黒褐色粗面砂質シルト 浮石を30%含む、粘性強、締まりやや有



第33図 13~16号土坑

13号土坑(第33図、写真図版16)

[位置・検出状況]北側斜面部のⅡB13dグリッドに位置し、3層で検出された。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]円形を呈し、規模は開口部径132×128cm、底部径108×98cm、深さは104cmを測る。

[埋土]黒褐色シルトや暗褐色シルトが流れ込んだ状態で見られるので自然堆積と判断した。

[底面・壁]底面は平坦で小土坑は無い。壁は中間でやや狭くなる。

[遺物](遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器128.8gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代前期の貯蔵穴。

14号土坑(第33図、写真図版16)

[位置・検出状況]ⅡB18mグリッドに位置し、3～5層面で検出された。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]不整な円形であった。規模は開口部径162×130cm、底部径102×89cm、深さ26cmを測る。

[埋土]黒褐色シルト、褐色シルトに暗褐色シルトや黒褐色シルト粒を少量含む。自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦ではない。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器50.8gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期と性格]縄文時代の土坑である。

15号土坑(第33図、写真図版16)

[位置・検出状況]北側斜面部にあたるⅡB12bグリッドに位置し、3～5層面で検出された。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]不整な楕円形であった。規模は開口部径126×125cm、底部径76×75cm、深さ38cmを測る。

[埋土]黒褐色シルトや褐色シルトの中に軽石粒を少量含む。自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦ではなく丸みを帯びている。壁は外傾して立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期と性格]縄文時代の土坑である。

16号土坑(第33図、写真図版16)

[位置・検出状況]ⅡB17oグリッドに位置し、3層で検出している。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]不整な楕円形であった。規模は開口部径85×62cm、底部径67×58cm、深さは60cmを測る。

[埋土]黒褐色シルト、黒褐色シルトに軽石や暗褐色ブロックを部分的に含む。

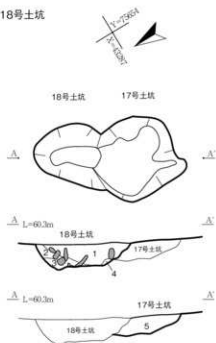
[底面・壁]底面は平坦ではない。西側の壁は緩やかに、東側の壁は急角度で立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2・138・154、写真図版48・160・167)

遺構内から土器220.4g、石器496.5gが出土し、このうち土器1点、石器2点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代。

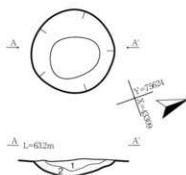
17・18号土坑



18号土坑

1. 10YR17/1黒色細砂質シルト 浮石5%、5層偽埋 (径1~3cm) 10%、10YR2/2黒粘土質に混じる、粘性強、締まりやや密
2. 10YR4/1褐色シルト 浮石30%、10YR5/1~5黄褐色砂質に混じる、粘性やや強、締まりやや弱
3. 10YR4/6褐色シルト 浮石わずか、粘性やや強、締まりやや密
4. 10YR4/3に多い黄褐色シルトまじり微細砂 締まりやや密 埋藏落土

19号土坑



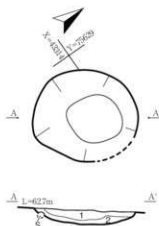
19号土坑

1. 10YR17/1黒色シルト 炭化物3%、浮石微細粒1%含む、粘性なし、しまりやや密 3層偽埋
2. 10YR2/1黒色シルト 炭化物1%、浮石微細粒~細粒3%含む、粘性なし、締まっている

17号土坑

5. 10YR4/3に多い黄褐色シルトまじり微細砂 浮石30%、黒色シルトの薄層を上層に含む、5層偽埋 (径2~5cm) を含む、粘性やや強、締まりやや密

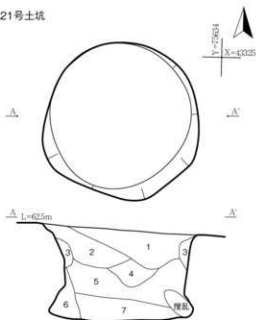
20号土坑



20号土坑

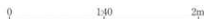
1. 10YR17/1黒色シルト 炭化物1%、10YR2/3黒褐色シルトブロック 3%、浮石無小細粒2%含む、粘性なし、締まっている
2. 10YR2/1黒色粘土質シルト 炭化物1%、10YR2/2黒褐色シルトブロック5%、浮石微細粒~細粒5%含む、粘性有、締まりやや有

21号土坑



21号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト粒3%含む、粘性弱、締まりなし
2. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト5%含む、粘性弱、締まりなし
3. 10YR2/3黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルトブロック3%、嵐山南麓
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト1%、粘性中、締まりなし
5. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト3%、粘性弱、締まりなし
6. 10YR2/2黒褐色シルト 20%、嵐山南麓
7. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト3%、粘性有、締まりなし



第34図 17~21号土坑

17号土坑(第34図、写真図版17)

[位置・検出状況]ⅡB21s グリッドに位置し、3層で検出している。

[遺構間の重複]18号土坑と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模]不整楕円形であった。規模は開口部径75×70cm、底部径56×23cm、深さは17cmを測る。

[埋土]軽石やにぶい黄褐色シルトブロックを部分的に含む人為堆積とみられる。

[底面・壁]底面は平坦ではない。西側の壁は緩やかに立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期・性格]縄文時代。

18号土坑(第34図、写真図版17)

[位置・検出状況]ⅡB21s グリッドに位置し、3層で検出している。

[遺構間の重複]17号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]不整楕円形であった。規模は開口部径98×92cm、底部径88×70cm、深さは20cmを測る。

[埋土]軽石やにぶい黄褐色シルトブロックを不規則に含むので人為堆積と判断した。

[底面・壁]底面は小起伏がある。西側の壁は東側の壁よりも緩やかに立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器27.3gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代。

19号土坑(第34図、写真図版17)

[位置・検出状況]ⅡB15o グリッドに位置し、5～6層目で検出された。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]円形であり、開口部径89×88cm、底部径55×45cm、深さ16cmを測る。

[埋土]炭化物を僅かに含む黒色シルトで自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦というよりも少し丸みを帯びている。壁も緩やかに外傾して立ち上がる。

[遺物]遺構内から土器8.7gが出土しているが図化していない。

[時期・性格]見つかった層位から縄文時代に位置付けられる。

20号土坑(第34図、写真図版17)

[位置・検出状況]ⅡB16n グリッドに位置する。検出面は5～6層である。

[遺構間の重複]無い。

[平面形・規模]概ね円形で開口部径110×97cm、底部径55×54cm、深さ15cmを測る。

[埋土]炭粒と軽石を僅かに含む黒色シルトで自然堆積。

[底面・壁]底面はやや丸みをおびているため、壁も緩やかに外傾して立ち上がっている。

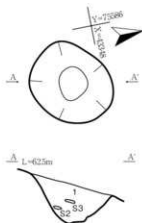
[遺物]遺構内から土器7.8gが出土しているが図化していない。

[時期・性格]遺構の見つかった地層から縄文時代の土坑と考えられる。

21号土坑(第34図、写真図版17)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(ⅡB17i グリッド)に位置している。5～6層面に検出されている。

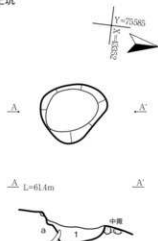
24号土坑



24号土坑

- 10YR2/2黒褐色砂質シルト 1~2mm大の軽石粒を10%含む。粘性弱、締まり中

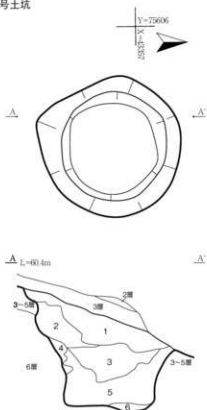
25号土坑



25号土坑

- 10YR2/1黒色砂質シルト 1~2mmの軽石粒を5%含む。粘性弱、締まりやや軟
- 10YR3/1黒褐色砂質シルト 1~2mm大の軽石粒を10%含む。粘性弱、締まり中、上部には中層式山坑が自立的

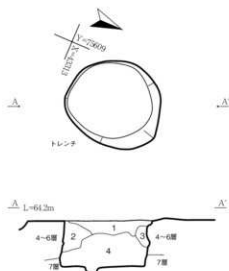
28号土坑



28号土坑

- 10YR2/2黒褐色シルト
- 10YR3/3暗褐色シルト 褐色シルト20%含む 3~5層が起層
- 10YR2/2黒褐色シルト 軽石5%含む
- 10YR4/6褐色シルト 軽石10%、暗褐色シルト10%含む
- 10YR3/3暗褐色シルト 軽石10~20%、褐色シルト5%含む 3~5層と3層が起層
- 10YR2/2黒褐色シルト 明褐色シルト10%含む 自然堆積

29号土坑



29号土坑

- 10YR2/1褐色シルト 2層が起層 配石遺構より含む
- 10YR2/2黒褐色シルト 暗褐色シルト30%含む 2層と4~6層が起層 埋前地上
- 10YR2/2黒褐色シルト 暗褐色シルト50%含む 2層と4~6層が起層 埋前地上
- 10YR2/2黒褐色シルト 暗褐色シルト5%、軽石10~20%含む 4層が起層 自然堆積



第35図 24、25、28、29号土坑

[遺構間の重複]重複する遺構は無い。

[平面形・規模]円形である。開口部径164×161cm、底部径150×149cm、深さは97cmあった。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルト、暗褐色シルトなどが流れ込んだような状態で堆積していた。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦に造られていた。基本的に壁は中場で少し狭く、上場とした場では広くなるように掘り込まれていたが、西壁よりも東壁のほうが垂直気味に立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2・141・154・155、写真図版48・162・167・168)

遺構内から土器548.1g、石器1,395.5gが出土し、このうち土器4点、石器4点を図化・掲載した。

[時期]検出面から縄文時代前期とみられる。

23号土坑(陥し穴)(第32図、写真図版22)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(ⅡB151グリッド)に位置し、3層で検出した。

[遺構間の重複]無い。

[形状]平面形は長円形(溝状)を呈する。短軸方向での断面形は、底面から壁中場までは垂直気味に、壁中場から上場までは外傾して立ち上がっている。

[規模]開口部径345×105cm、底部径300×10cm、深さ125cmである。

[長軸方向]N-83°-E。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルト、にぶい黄橙色シルトなどが交互に見られる自然堆積。

[底面]短軸の幅は14cm程で、底面に逆茂木痕は無かった。

[遺物](遺物図版2・108・117・128・129・132・138・150、写真図版48・146・150・155・156・160・166)

遺構内から土器402.9g、石器2,819.9gが出土し、このうち土器3点、石器8点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代の陥し穴。

24号土坑(第35図、写真図版18)

[位置・検出状況]ⅡB8gグリッドに位置し、3層下部の上にて検出している。

[遺構間の重複]捨て場1と重複し、本遺構のほうが古い。

[平面形・規模]円形である。開口部径92×84cm、底部径40×34cm、深さは56cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む黒褐色砂質シルト。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦というよりも少し丸みを持つ。壁は外傾して立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2、写真図版48)

遺構内から土器504.1gが出土し、2点を図化・掲載した。

[時期・性格]検出面から縄文時代前期の土坑とみられる。

25号土坑(第35図、写真図版18)

[位置・検出状況]ⅡB8fグリッドに位置し、3層中部の上面にて検出している。中振火山灰の面的な広がりの中に黒色シルトの円形プランがみられた。

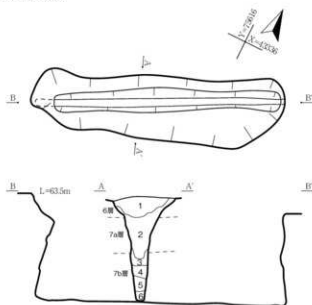
[遺構間の重複]捨て場1よりも新しい。

[平面形・規模]円形である。開口部径72×65cm、底部径60×45cm、深さは18cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む黒色砂質シルト。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦とは言い難い。壁は外傾して立ち上がっている。

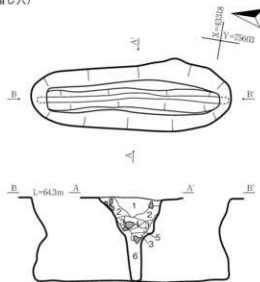
26号土坑 (陥し穴)



26号陥し穴

1. 10YR2-1黒色シルト 本底は2層だったもの
2. 10YR3-2黒褐色シルト 3層粘厚の黒褐色シルト20%、7a層粘厚の黄褐色シルト10%、5層粘厚の粘土3%含む
3. 10YR6-3にふい黄褐色粘土質シルト 7a層に黒褐色シルト30%含む
4. 10YR2-2黒褐色シルト 黄褐色シルト5%含む
5. 10YR6-3にふい黄褐色粘土質シルト 7a層に黒褐色シルト20%含む
6. 10YR2-2黒褐色シルト 黄褐色シルト20%含む

32号土坑 (陥し穴)



32号陥し穴

1. 10YR2-1黒色シルト 10YR5-6黄褐色シルト5%含む、粘性弱、しまりなし
2. 10YR2-2黒褐色シルト 10YR5-6黄褐色シルト30%含む、粘性弱、しまりなし
3. 10YR5-6黄褐色シルト 10YR2-2黒褐色シルト20%含む、粘性弱、しまりなし 地山崩落土
4. 10YR2-2黒褐色シルト 10YR5-6黄褐色シルト10%含む、粘性弱、しまりなし
5. 10YR2-2黒褐色シルト 10YR5-6黄褐色シルト42%含む、粘性弱、しまりなし
6. 10YR5-6黄褐色シルト 10YR6-4にふい黄褐色粘土3%含む、粘性弱、しまりなし

0 160 2m

第36図 26、32号土坑 (陥し穴)

[遺物]なし。

[時期・性格]検出面から縄文時代前期の土坑と考えている。

26号土坑(陥し穴) (第36図、写真図版22)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(ⅡB14j グリッド)にあり、5層下部～6層上面で検出した。

[遺構間の重複]無い。

[形状]平面形は長円形(溝状)を呈する。短軸方向での断面形は、底面から壁中場までは垂直気味に、壁中場から上場までは外傾して立ち上がるY字状を呈している。

[規模]ほぼ原形を保っていると思われる。開口部径407×109cm、底部径261×12cm、深さ164cmを測る。

[長軸方向]N-64°-E。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルトなどが交互に見られる自然堆積。

[底面]短軸の幅は14cm程で、底面に逆茂木痕は無かった。

[遺物](遺物図版112、写真図版147)

遺構内から石器339.7gが出土し、1点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代の陥し穴。

28号土坑(第35図、写真図版18)

[位置・検出状況]縄文時代の捨て場1のある北側斜面部、ⅡB12e グリッドに位置している。3～5層上面まで掘り下げてから検出されている。

[遺構間の重複]捨て場1と重複し、本遺構のほうが古い。

[平面形・規模]円形である。開口部径150×146cm、底部径107×94cm、深さは112cmあった。

[埋土]上部には黒褐色シルト。中下部には軽石粒交じりの黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色シルトが周囲から流れ込むように堆積する。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦であるが、副穴は無かった。壁は底面から一旦直立し、中場から上場へは外傾して立ち上がる。

[遺物]なし。

[時期・性格]遺構の検出面やその形状から縄文時代前期の貯蔵穴と考えている。

29号土坑(第35図、写真図版18)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(ⅡB12n グリッド)に位置し、4～6層上面で出されている。

[遺構間の重複]1号配石遺構と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模]円形である。開口部径105×93cm、底部径88×79cm、深さは52cmあった。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルト、暗褐色シルトなどが流れ込んだような状態で堆積していた。自然堆積である。

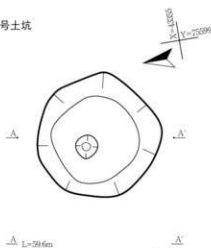
[底面・壁]底面は平坦に造られており、一部3cm程丸く掘り込まれている部分があった。南側の壁は内側に傾いて、北側の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

[遺物](遺物図版2、写真図版48)

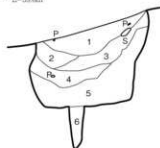
遺構内から土器119.7gが出土し、2点を図化・掲載した。

[時期と性格]本遺構が検出された面やその形・規模などから縄文時代前期の貯蔵穴とみられる。

30号土坑



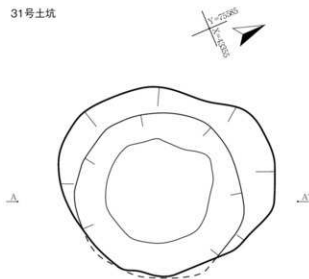
△ L=59.6m



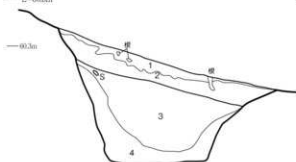
30号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト1~2mm大の浮石を20%含む、粘性中、締まりやや軟
2. 10YR2/3暗褐色砂質シルト1~2mm大の浮石を7%含む、粘性・締まり中
3. 10YR2/3暗褐色シルト1~2mm大の浮石を15%含む、粘性中、締まりやや軟
4. 10YR2/2黒褐色砂質シルト1~2mm大の浮石を5%含む、粘性中、締まりやや軟
5. 10YR2/3暗褐色砂質シルト及び10YR2/3暗褐色シルト1~2mm大の浮石を7%含む、粘性・締まり中
6. 10YR6/8明黄褐色砂質シルト及び10YR3/3暗褐色シルト1~2mm大の浮石を1%含む、粘性やや強、締まり軟

31号土坑



△ L=60.8m



31号土坑

1. 10YR5/4に濃い黄褐色及び25Y7/6明黄褐色 細一中砂（中兼火山灰）粘性なし、締まり軟
2. 10YR2/1黒色砂質シルト1~2mm大の軽石殻を1%含む、粘性・締まり中・3層下底~4層
3. 10YR2/1黒色シルトと10YR2/2黒褐色軽石まじりシルトの互層 粘性弱、締まり中
4. 10YR4/6褐色砂質シルトと10YR3/3暗褐色軽石まじり砂質シルト、10YR2/2暗褐色軽石まじりシルトの混合層、粘性弱、締まり中

0 1.40 2m

第37図 30、31号土坑

30号土坑(第37図、写真図版19)

[位置・検出状況]北側斜面に形成された捨て場1のあるⅡB10eグリッドに位置している。3層下部の上面にて黒褐色シルト内に中礫火山の面的な広がりが見られたが、精査は4層面まで掘り下げてから実施している。

[遺構間の重複]埋土の上部に中礫火山灰を含むことから捨て場1よりも古いと考えている。

[平面形・規模]円形である。開口部径136×130cm、底部径91×88cm、深さは103cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む黒褐色シルトや暗褐色シルトが交互に堆積する。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦で中央付近に1基の副穴があった。壁は少し内側に狭くなるころもあれば、外傾して立ち上がるところも見られる。

[遺物]なし。

[時期・性格]検出面及び形状や規模から縄文時代前期の貯蔵穴と考えている。

31号土坑(第37図、写真図版19)

[位置・検出状況]縄文時代の捨て場1のある北側斜面部、ⅡB8fグリッドに位置している。5層下部上面まで掘り下げてから検出されているが、3層下部の上面で検出出来たかもしれない。

[遺構間の重複]埋土の上部には中礫火山灰が多く含まれていたことから捨て場1よりも古い遺構の可能性が高い。

[平面形・規模]円形である。開口部径231×206cm、底部径123×111cm、深さは142cmあった。

[埋土]軽石粒交じりの黒色シルト、黒褐色シルト、褐色シルトが交互に流れ込んだ状態で堆積する。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦であるが、副穴は無かった。壁は外傾して立ち上がる。

[遺物]なし。

[時期・性格]遺構の検出面やその形状から縄文時代前期の貯蔵穴と考えている。

32号土坑(陥し穴)(第36図、写真図版22)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(ⅡB11mグリッド)に位置し、3～5層面で検出した。

[遺構間の重複]無い。

[形状]平面形は長円形(溝状)をしている。短軸方向での断面形は、底面から壁中場まではほぼ垂直に、壁中場から上場までは外傾して立ち上がり、Y字状を呈している。

[規模]ほぼ原形を保っている印象を持つ。開口部径323×119cm、底部径312×12cm、深さ153cmを測る。

[長軸方向]N-9°-W。

[埋土]黒色シルト、黒褐色シルト、黄褐色シルトなどが流れ込んだように堆積している。自然堆積。

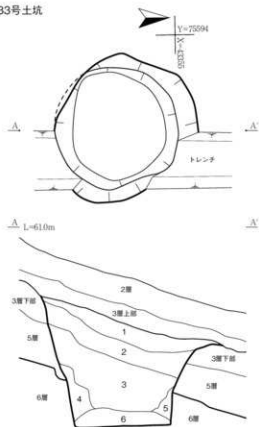
[底面]短軸の幅は17cm程で、底面に逆茂木痕は無かった。

[遺物](遺物図版155、写真図版167)

遺構内から土器75.9g、石器639.8gが出土し、このうち石器1点を図化・掲載した。

[時期・性格]縄文時代の陥し穴である。

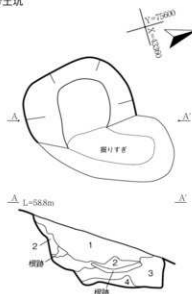
33号土坑



33号土坑

1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト 淡黄色砂質土山灰を30%含む、土坑の最上面に堆積
2. 10YR2/2黒褐色シルト 軽石を5%含む
3. 10YR2/2黒褐色シルト 軽石を40%含む
4. 10YR4/6褐色シルト 黒褐色シルト10~20%、軽石20~25%含む
5. 4と同じ
6. 10YR2/2黒褐色シルト 軽石を40%含む

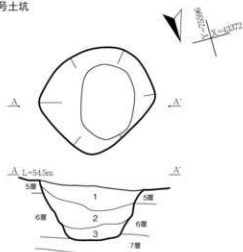
34号土坑



34号土坑

1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト及び10YR3/2黒褐色軽石まじり砂質シルト、粘性弱、締まり中
2. 10YR3/3褐色砂質シルト 1~3mm大の軽石を20%含む、粘性弱、締まり中
3. 10YR3/4褐色砂質シルト 1~5mm大の軽石を10%含む、粘性弱、締まり中
4. 10YR6/8明黄褐色砂質シルト 1~3mm大の軽石を2%含む、粘性弱、締まり中

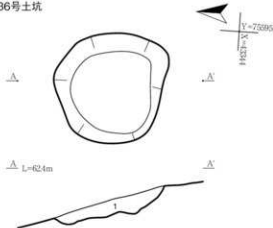
35号土坑



35号土坑

1. 10YR2/3黒褐色シルト 軽石20~30%含む
2. 10YR2/4褐色シルト 軽石30%含む
3. 10YR3/4褐色シルト 軽石40%含む

36号土坑



36号土坑

1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト 2~5mm大の軽石粒を30%含む、粘性弱、締まり中



第38図 33~36号土坑

33号土坑(第38図、写真図版19)

[位置・検出状況]捨て場1が形成された調査区北側斜面部、II B10 f グリッドに位置している。3層下部で検出した。

[遺構間の重複]捨て場1形成後に出来た遺構と判断した。

[平面形・規模]ほぼ円形である。開口部径165×136cm、底部径115×102cm、深さは128cmあった。

[埋土]軽石粒を少量含む黒褐色シルトや褐色シルトが流れ込んだ状態で見られる。自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦に整えられている。副穴は無かった。壁は底面から中場までは直立気味に、中場から上場へは外傾して立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期・性格]遺構の検出された地層や形体から縄文時代のかなでも前期よりも新しい(後期の可能性が高い)貯蔵穴である。

34号土坑(第38図、写真図版19)

[位置・検出状況]北側斜面に形成された捨て場1のあるII B11 e グリッドに位置している。5層面で検出した。

[遺構間の重複]検出面に依れば捨て場1よりも古い遺構となる。

[平面形・規模]不整形円形である。開口部径118×75cm、底部径60×55cm、深さは45～60cmあった。

[埋土]軽石粒を少量含む黒褐色シルトや暗褐色シルトからなる自然堆積。3～4層は掘り過ぎかもしれない。

[底面・壁]底面は小起伏を持つ。壁の立ち上がる角度も一定ではない。

[遺物]なし。

[時期・性格]検出面から縄文時代前期の土坑とした。

35号土坑(第38図、写真図版20)

[位置・検出状況]北側谷底部にあたるII B10 b グリッドに位置している。5層面にて黒褐色シルトの不整な広がりが見られた。

[遺構間の重複]重複する遺構は無い。

[平面形・規模]不整形円形である。開口部径130×120cm、底部径82×55cm、深さは57cmあった。

[埋土]軽石粒を少量含む黒褐色シルトや暗褐色シルトが流れ込んだ状態で堆積。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦で壁は、外傾しながら立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期・性格]検出面から縄文時代前期の土坑と考えている。

36号土坑(第38図、写真図版20)

[位置・検出状況]北側斜面部に形成された捨て場1のあるII B9 g グリッドに位置している。5層上部で検出された。

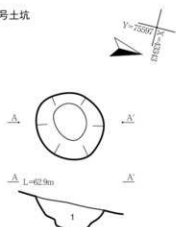
[遺構間の重複]遺構検出面から見れば、捨て場1よりも古い遺構となる。

[平面形・規模]ほぼ円形である。開口部径125×118cm、底部径89×87cm、深さは30cmあった。

[埋土]軽石粒を少量含む黒褐色シルトの単層。自然堆積と考えている。

[底面・壁]底面は平坦ではなく、少し起伏がある。壁は外傾して立ち上がる。

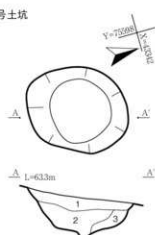
37号土坑



37号土坑

- 10YR2/2黒褐色砂質シルト及び10YR4/6褐色砂質シルト、2~5mm大の軽石粒を30%含む、粘性弱、締まり中

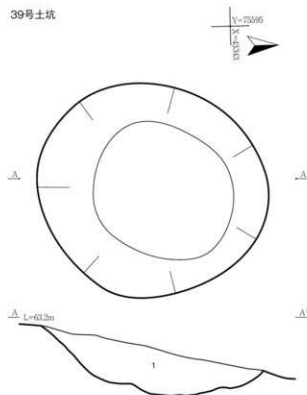
38号土坑



38号土坑

- 10YR3/4暗褐色砂質シルト 1~3cm大の10YR6/8明黄褐色シルト質砂ブロックを3%含む、粘性弱、締まり中
- 10YR3/3暗褐色砂質シルト及び10YR4/6褐色砂質シルト 2~5mm大の軽石粒を3%含む、粘性弱、締まり中
- 10YR4/4褐色砂質シルト 2~5mm大の軽石粒を3%含む、粘性弱、締まり中

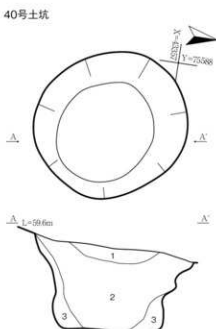
39号土坑



39号土坑

- 10YR4/6褐色砂質シルト及び10YR6/8明黄褐色砂質シルト 2~5mm大の軽石粒を7%含む、粘性弱、締まり中

40号土坑



40号土坑

- 10YR3/4暗褐色シルト 軽石30%含む
 - 10YR2/3黒褐色シルト 軽石20%含む
 - 10YR4/4褐色シルト 黄褐色シルトを10%、軽石5%含む
- 1、2層は基本層の露出部、自然埋填



第39図 37~40号土坑

[遺物]なし。

[時期・性格]遺構が検出された層位から縄文時代前期の土坑と思われる。

37号土坑(第39図、写真図版20)

[位置・検出状況]捨て場1が形成された北側斜面、ⅡB10hグリッドに位置している。5層下上面にて検出されている。

[遺構間の重複]捨て場1よりも古い遺構の可能性はある。

[平面形・規模]円形である。開口部径80×69cm、底部径43×35cm、深さは37cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む黒褐色シルトや褐色シルトから成る。自然堆積と見られる。

[底面・壁]底面は丸底となっている。壁は外傾して立ち上がっている。

[遺物]なし。

[時期・性格]検出された層位から縄文時代前期に位置付けられる土坑である。

38号土坑(第39図、写真図版20)

[位置・検出状況]北側斜面に形成された捨て場1のあるⅡB10hグリッドに位置している。6層上面にて検出している。

[遺構間の重複]捨て場1よりも古い遺構の可能性はある。

[平面形・規模]円形である。開口部径119×90cm、底部径69×64cm、深さは42cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む暗褐色シルトや褐色シルトなどで構成される自然堆積。

[底面・壁]底面は平坦ではない。壁は外傾して立ち上がっていた。

[遺物]なし。

[時期・性格]検出面から縄文時代前期の土坑と位置付けた。

39号土坑(第39図、写真図版21)

[位置・検出状況]捨て場1のある北側斜面部、ⅡB10hグリッドに位置している。5～6層面にて検出している。

[遺構間の重複]捨て場1よりも古い遺構と考えている。

[平面形・規模]不整形円形である。開口部径247×230cm、底部径155×137cm、深さは45cmあった。

[埋土]軽石粒を少量含む明黄褐色シルトや褐色シルトなどで構成される。自然堆積である。

[底面・壁]底面は平坦ではない。壁は緩やかに外傾して立ち上がっていた。

[遺物]なし。

[時期・性格]遺構が検出された層位から縄文時代前期の土坑といえる。

40号土坑(第39図、写真図版21)

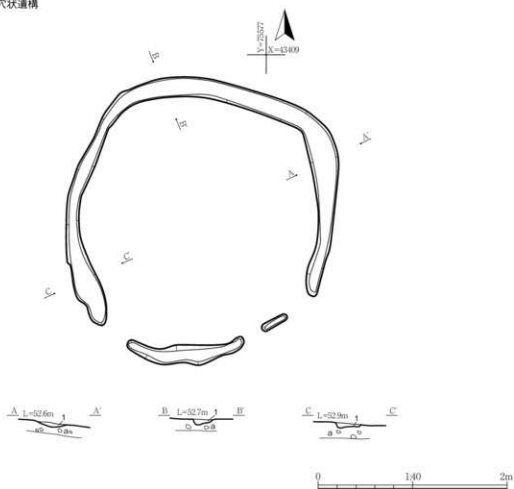
[位置・検出状況]調査区北側の斜面に形成された捨て場1のあるⅡB8eグリッドに位置している。5層下面にて検出された。

[遺構間の重複]捨て場1よりも下層で検出されているが、上層段階では見落としていた可能性もあると考えている。

[平面形・規模]円形である。開口部径163×155cm、底部径113×98cm、深さは100cmあった。

[埋土]軽石粒を微量含む黒褐色シルトや褐色シルトなどで構成される自然堆積。

1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構

A-A B-B C-C

1. 10YR2/1黒色砂質シルト 1~2mmの火山灰層を含有させる、粘性弱、締まりやや軟

2層山系

a. 10YR3/1黒褐色シルト質砂 下部に10YR4/4褐色シルト混じり細砂ブロック土を15%含む、粘性なし、締まり中

3層上部及び中部

第40図 1号竪穴状遺構

[底面・壁]底面は平坦であった。副穴は無かった。壁は底面から中場まではほぼ垂直に、中場から上場へは外傾して立ち上がっていた。

[遺物](遺物図版2・123、写真図版48・153)

遺構内から土器137.6g、石器76.2gが出土し、このうち土器1点、石器1点を図化・掲載した。

[時期・性格]検出面と遺構の形体から縄文時代前期の貯蔵穴とみられる。

(5)その他

1号竪穴状遺構(第40図、写真図版23)

[位置・検出状況]調査区北側の谷底底部にあたるII A 6 t グリッドに位置し、3層上面で検出した。

[重複関係]無い。

[平面形・規模]幅20cm程の溝(途切れ途切れであるが)が円形に巡るように延びていた。円の規模は南北310cm、東西280cmである。溝は上場幅20cm前後、深さ5～7cmである。

[埋土]黒色砂質シルトの単層である。

[床面・壁]底面は平坦とは言えない。壁は外傾して立ち上がっている。

[付属施設]竪穴建物の壁周溝の可能性のもとに精査してみたが、炉や柱穴は見られなかった。

[遺物]なし。

[時期]縄文時代。

2号焼土(第41図、写真図版24)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(II B 13 p グリッド)に位置し、3～5層面にて検出した。

[平面形・規模・厚さ]不整な長円形。231×28cm、焼土の厚さは最大で3cmある。この場で火を使って出来たものと判断した。

[遺物]なし。

[時期(ほか)]捨て場2と位置も層位も重なることから縄文時代前期の焼土とみるのが最も妥当である。竪穴建物の炉跡ではないかと考え、周りを精査したが、竪穴建物の痕跡は見つけられなかった。

4号焼土(第41図、写真図版24)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(II B 12 n グリッド)に位置し、5～6層面にて検出した。

[平面形・規模・厚さ]不整な長円形。56×30cm、焼土の厚さは最大で4cmある。この場で火を使って出来たものである。

[遺物]なし。

[時期(ほか)]縄文時代。検出面が5～6層面ということならば縄文時代早期となるが、その時期の土器は調査区全体からも全く出土していない。よって竪穴建物の炉跡の可能性が高いと考え、周辺を注意して精査したが住居の痕跡は見つけられなかった。

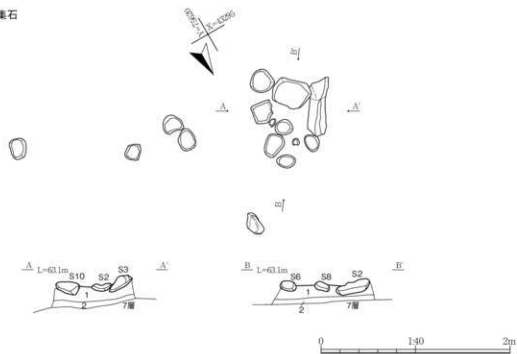
5号焼土(第41図、写真図版24)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面(II B 13 o グリッド)に位置し、5～6層面にて検出した。

[平面形・規模・厚さ]不整な円形。123×59cm、焼土の厚さは最大で2cmある。この場で火を使って出来たものと考えている。

[遺物]なし。

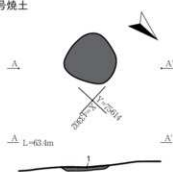
1号集石



1号集石

- 10YR2/2褐色粘土質シルト 粘性やや有、締まり極めて強、炭化物粒極微量、明黄褐色粘土質シルト（径1~20mm）微量含む
※基本層が3、5層の混在土
- 10YR2/2褐色粘土質シルト 粘性やや有、締まりやや強、明黄褐色粘土質シルト（径1~20mm）少量含む
※基本層が3、6層の混在土

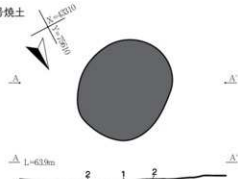
2号焼土



2号焼土

- 7.5YR4/6褐色焼土 粘性なし、締まりやや疎 現地性

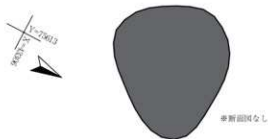
4号焼土



4号焼土

- 2.5YR4/8赤褐色焼土 現地性
- 5YR4/8赤褐色シルト 1層の焼土

5号焼土



第41図 1号集石、2、4、5号焼土

[時期ほか]縄文時代。検出面が5～6層面ということならば縄文時代早期となるが、その時代の土器は調査区全体からも全く出土していない。そのため堅穴建物の炉跡であった可能性が高いと考えて、周辺を注意して精査したが住居の痕跡は見つけられなかった。

1号溝(第43図、写真図版24)

[位置・検出状況]丘陵頂部の平坦面、II B15 r グリッドに位置している。3～6層で検出した。

[遺構間の重複]なし。

[規模]長さ423cm、幅68cm、深さ8cmを測る。

[埋土]黒色シルトの単層である。

[底面・壁]概ね平坦な底面から壁は外傾して立ち上がっている。

[遺物]遺構内から土器30.4gが出土しているが図化していない。

[時期・性格]検出面と遺構の形体から縄文時代に位置づけられるが、性格は不明である。陥し穴を途中で造るのを諦めたものかもしれない。

1号集石(第41図、写真図版23)

[位置・検出状況]丘陵頂部のやや南側(II B14 q グリッド)に位置し、3～5層面にて検出した。

[規模・特徴]本来であれば遺跡内には存在しない複数の自然礫によって構成されている。東西97cm、南北100cmの範囲に10個の円礫・亜角礫が寄せ集められた状態で見つかった。その周辺には同じ地層面で7個の円礫・亜角礫があった。まとまりのある礫群の下に付属施設があるかを確認したが、特に何もなかった。

[遺物](遺物図版2・129・144、写真図版48・155・163)

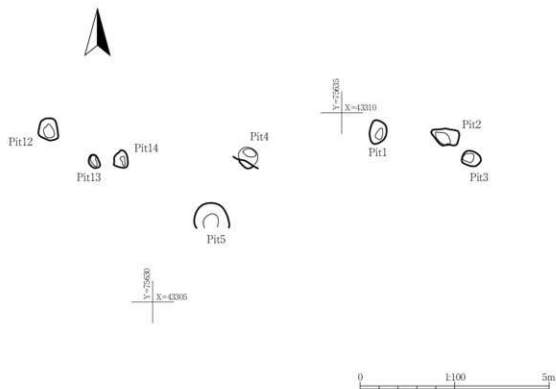
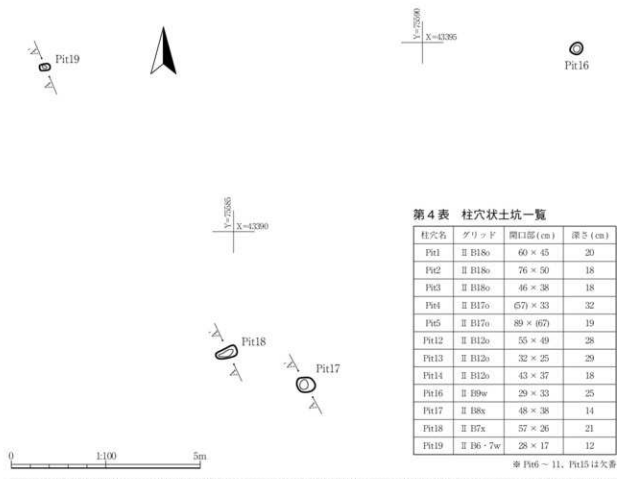
遺構内から土器108.8g、石器2,002.7gが出土し、このうち土器1点、石器2点を図化・掲載した。

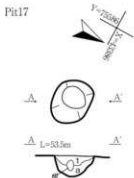
[時期ほか]検出面が3～5層面ということならば縄文時代前期となるが、その性格は不明である。土壙墓の上に据えられたものではない。

柱穴状土坑(第42・43図)

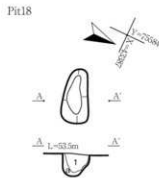
12基の柱穴状土坑を検出した。捨て場2の東側からが最も多く、次いで北側の谷部などに分布していた。遺物を伴うものは無いが3層よりも下部で見つかったことから縄文時代に位置付けている。柱穴個々の特徴は一覧表を作成し整理した。

[遺物]柱穴状土坑 Pit4の埋土から土器120g、柱穴状土坑 Pit12の埋土から土器60.9g、柱穴状土坑 Pit17の埋土から土器39gがそれぞれ出土しているが図化していない。(杉沢)

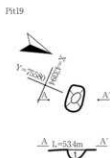




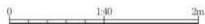
Pit17
 1. 10YR2-1黒色砂質シルト 粘性强、しまりやや軟 (2層由表)
 a. 10YR2-2黒褐色砂質シルト 1~2mm大の
 軽石粒を2%含む、粘性强、しまり中
 (3層中部)



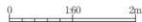
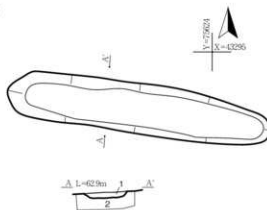
Pit18
 1. 10YR2-1黒色砂質シルト 粘性强、しまりやや軟 (2層由表)
 2. 10YR2-2黒褐色砂質シルト 1~3mm大の
 軽石粒を2%含む、粘性强、しまり中 (3層中部)



Pit19
 1. 10YR2-1黒色砂質シルト 粘性强、しまりやや軟 (2層由表)



1号溝



1号溝
 1. 10YR2-1黒色シルト 粘性强や有、しまり有
 2. 10YR3-3暗褐色シルト 粘強、しまりやや有

第43図 柱穴状土坑 (2)、1号溝

第I群土器

爪形土器



第II群土器



第III群土器

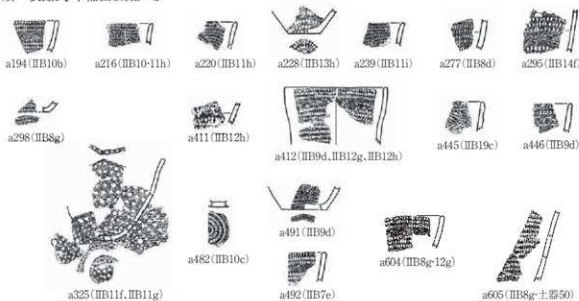
A類 長七谷地第III群



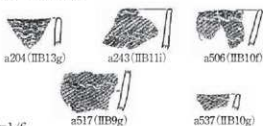
B類 上川名II式



C類 表館式・早稲田6類a~b



D類 大木2a式



S=1/6

E類 北海道前期押型文



第44図 土器集成図第I・II・III群A~E類

3 遺 物

(1)土 器

①概要

平成29年度調査区からは、縄文時代草創期、早期、前期初頭～前葉、後期、晩期、弥生時代の各時期の土器が合わせて大コンテナ(45cm×35cm・30cm)で133箱、合計1,650kg出土した。出土地点は調査区北側斜面部の捨て場1、南側丘陵部の捨て場2を中心としてその周辺部に集中する(第53・54図 土器重量分布図参照)。出土層位は時期によって異なり、縄文時代草創期・早期の土器は第3層～第5層にかけて、縄文時代前期初頭～前葉の土器は十和田中振テフラ直下にあたる第3層下部から第4層にかけて多く、縄文時代後期～弥生時代の土器は第2層を中心に出土している。

②分類

以下のとおり、土器の時期を基準として第Ⅰ群から第Ⅶ群に分類し、製塩土器を第Ⅶ群としてまとめた。

第Ⅰ群土器 縄文時代草創期の土器(爪形文土器)

第Ⅱ群土器 縄文時代早期の土器(日計式、大新町Ⅰb式、吹切沢式併行)

第Ⅲ群土器 縄文時代前期初頭～前葉にかけての土器(長七谷地Ⅲ群、上川名Ⅱ式、表館式、早福田6類、大木1式、大木2a式、北海道前期押型文土器併行)

第Ⅳ群土器 縄文時代後期初頭～前葉にかけての土器(前十腰内Ⅰ式、十腰内Ⅰ式古段階～新段階)

第Ⅴ群土器 縄文時代晩期末葉の土器(大洞A式)

第Ⅵ群土器 弥生時代の土器(弥生前期、赤穴式併行)

第Ⅶ群土器 製塩土器(縄文時代晩期)

③各土器群の特徴

第Ⅰ群土器 縄文時代草創期の土器(第44図 a649・a800・a864・a925・a980)

調査区北斜面から丘陵部にかけて5点出土した(a649・a800・a864・a925・a980)。出土層位は2層から5層である。胎土は粗く、繊維を含んでいる。器種は深鉢の口縁部～胴部片で、器形全体が判明するものはない。いずれも胴部に爪形状刺突文が施文されている。a649は胴部に左傾するD字状文が横位に巡る。a800は縦位の米粒状文が横位多段に、a925は縦位のC字状文が横位多段に施文されている。これらの土器は、文様の特徴から草創期爪形文土器に比定されるものと考えられる。

第Ⅱ群土器 縄文時代早期の土器(第44図 a441・a548・a692)

調査区北斜面部から3点出土した(a441・a548：同一個体の可能性あり・a692)。a441の出土層位は3層から5層、a548は3層下部、a692は4層から出土している。器種は深鉢の口縁部～胴部片で、器形全体の判明するものはない。a441・a548は胎土に繊維を多量に混入する。焼成は良好で、内面はナデ調整される。a441は口縁から胴部にかけてRL・LRの2種類の原体を用いた非結束羽状縄文が施文された後、口縁部に平行沈線を4条巡らせている。a548はRL横回転の地紋上に平行沈線が4条巡っている。これらは文様の特徴から早期前葉の日計式(大新町Ⅰb式)に比定されるものと考えられる。a692は胎土に繊維を少量混入する。胴部に貝殻復縁圧痕と見られるC字状の刺突列を持つ。以上、文

様の特徵から早期中葉の吹切沢式に比定されるものと考えられる。

第Ⅲ群土器 縄文時代前期初頭～前葉にかけての土器(第44図 A類～E類)

本群は縄文時代前期初頭～前葉にかけての土器群で、長七谷地Ⅲ群、上川名Ⅱ式、表館式、早稲田6類、大木1式、大木2a式、北海道前期押型文相当の時期幅を内包するものである。

921点を掲載した。重量・点数ともに本遺跡出土遺物中本群が最も多く、全出土土器の86%を占める。出土地点は調査区全域に及ぶが、調査区北側斜面部の捨て場1、南側丘陵部の捨て場2を中心としてその周辺部に集中する(第53・54図 土器重量分布図参照)。層位的には十和田中振テフラ直下にあたる第3層下部から第4層、および周辺の擾乱帯にかけて幅広く出土する傾向が認められた。先学による前期初頭土器型式に従い、以下のように細分した。

- A類 長七谷地Ⅲ群(前期初頭)
- B類 上川名Ⅱ式(前期初頭)
- C類 表館式・早稲田6類 a～b(前期初頭)
- D類 大木2a式(前期前葉)
- E類 北海道前期押型文土器
- F類 A～E類の特徴に該当しない土器

※該期土器型式の特徴については第5表「東北北部早期末葉～前期前葉の土器型式(土器分類)比較」におおまかな概略を示した。

【第Ⅲ群F類土器について】

A～E類の特徴に該当しない土器をF類とした。本類は従前の大木1式土器の特徴を内包するものであるが、観察の結果、これにそのまま当てはまらない特徴を有していることが判明した。おなじくA～E類の中でも一部の特徵が複数の形式間で共通していることや、原体や文様に多様な組み合わせのバリエーションがあることが判ってきた。

以下、下類について器形、地紋の原体、文様から更に細分を行う。

F類(第46図)

【底部形状】

- 1 極小平底(一部上げ底風を含む)
- 2 乳房状尖底
- 3 鈍角尖底
- 4 尖底
- 5 丸底
- 6 平底(底面に原体末端圧痕を伴う)
- 7 形状不明

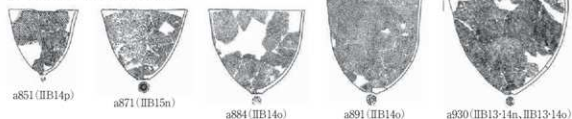


第45図 縄文時代前期初頭から前葉にかけての関連遺跡(道南～北東北)

F類 A～E類以外の特徴を持つもの

【器形】

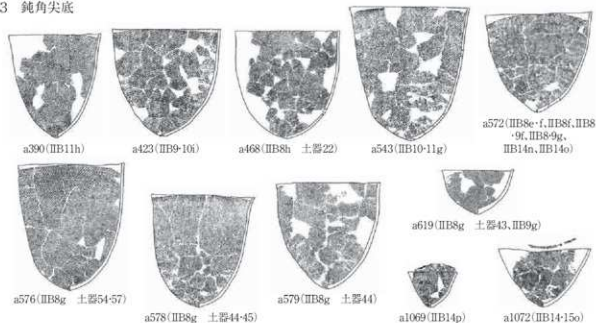
1 極小平底(一部揚底風を含む)



2 乳房状尖底



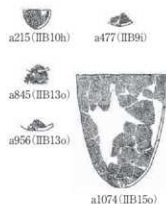
3 鈍角尖底



4 尖底



5 丸底



6 平底



S=1/12

第46図 第Ⅲ群F類・器形

器形については、底部形状から以下の7つに分類している。

1 極小平底(一部上げ底風を含む)

16点出土している。全体の器形が判明するものはそのうち5点で、底部から大きく外傾して開くもの(a851・a871・a884・a930)、底部から外傾して立ち上がり直線的に口縁部に至るもの(a891)がある。

底部径は直径2.0～3.7cm程度しかなく、器高20.9～37.8cmにもなる土器を自立させるには、明らかに本体に比して底径が小さくアンバランスな器形である。土器底面には縄文原体による末端圧痕文が施文されるものが殆どであるが、ナデ無紋のもの1点(a130)、胴部と同じ縄文が施文されるもの1点(a930)がある。底部がわずかに上げ底風を呈するものは8点存在する(a196・a341・a410・a542・a871・a884・a891・a896)。前期初頭に見られる上げ底の器形は上川名Ⅱ式においても認められるが、上川名Ⅱ式における丸底風上げ底とは雰囲気異なるように見受けられる。口縁部形状は平縁が多く一部口唇部に縄文が施文されるものもみられる(a891)。a930は4単位の波状口縁を呈するものである。

2 乳房状尖底

12点出土している。全体の器形が判明するものはそのうち2点で、いずれも底部から丸みを持って立ち上がり口縁部付近で微かに外反する(a217・a1007)。

3 鈍角尖底

底部が90度以上の角度を持つ尖底部を有するものを鈍角尖底とした。57点出土している。全体の器形が判明するものはそのうち11点で、底部から大きく外傾して開くもの(a619・a1069・a1072)、底部から外傾して立ち上がり直線的に口縁部に至るもの(a390・a423・a468・a543・a572・a576・a578・a579)がある。

4 尖底

底部が90度以下の角度を持つ尖底部を有するもの。17点存在する。全体の器形が判明するものはこの内5点で、いずれも底部から外傾して立ち上がり、その後大きく開いて口縁に至る器形を呈する。器高は6.7cm～15.3cm程度の範囲に収まり、総じて小ぶりである(a584・a588・a589・a839・a1006)。

5 丸底

5点出土している。このうち、全体の器形が判明するものは2点である(a215・a1074)。a1074は底部から丸みを持って立ち上がり僅かに外傾しながら口縁部に至る器形を呈する。a215は小形土器である。

6 平底(底面に原体末端圧痕を伴う)

5点出土している。すべて底部破片で、全体の器形が判明するものはない。底部径は3.0～6.0cm(推定値)の範囲に収まる。底面には原体末端圧痕文が施文されており、1「極小平底」の底部施文手法との共通点が見られる(a276・a490・a667・a706・a897)。

7 形状不明

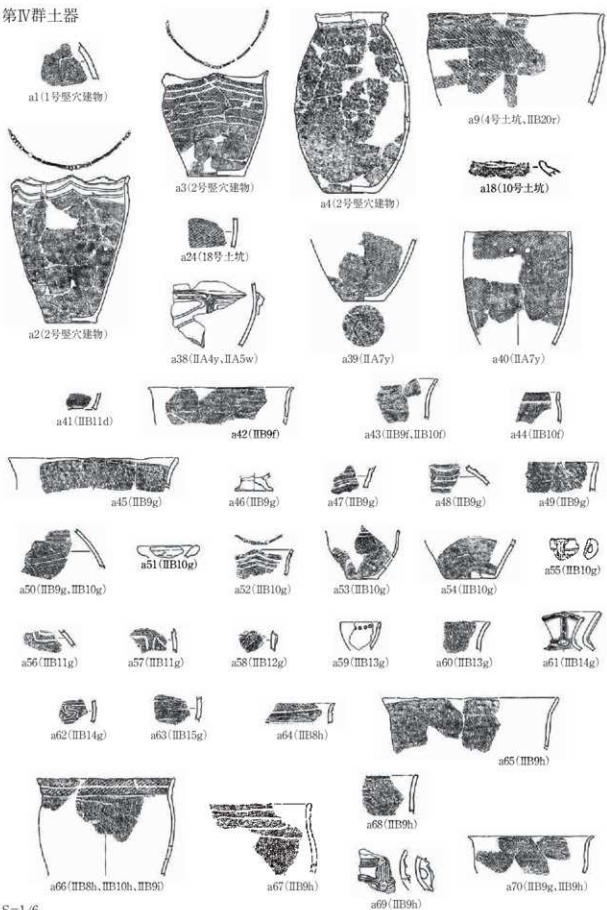
欠損により底部形状が不明なもの。748点存在する。

地紋の原体については以下、aからkの11細分とした。

【地紋の原体】

- a 組縄
- b 組紐
- c 付加条
- d 単軸絡条体

第IV群土器



S=1/6

第47图 土器集成图第IV群 (1)

- e 棒状施文具
- f 無節縄文
- g 単節縄文
- h 複節縄文
- i 上記に当てはまらない特殊な地紋を持つもの一括
(複々節、直前段3条、直前段合摺、直前段反摺、前々段合摺、前々段反摺)
- j 無紋
- k 不明

なお、0段多条が上記原体中に相当数存在することから、観察表の地紋の原体欄に網掛けして表示している。

文様については以下の14細分としている。

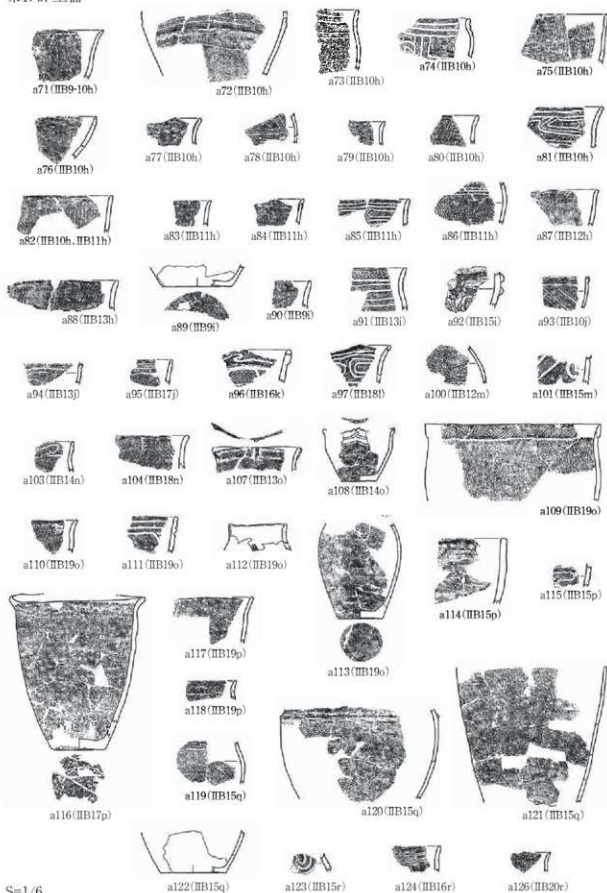
【文様】

- ① 重複縄文(同一原体を用いて網目状に近い文様を作出する)
- ② 斜行縄文(横位回転)
- ③ 斜行縄文(縦位回転)
- ④ 斜行縄文を多段施文するもので、段上端にループ文(半環状の原体圧痕文)を持つ
- ⑤ 斜行縄文を多段施文するもので、段上端に原体圧痕文を持つ(原体末端縛り止めも含む)
- ⑥ 非結束羽状縄文(横走・菱形状・綾杉状も含む)
- ⑦ 結束羽状縄文(横走・菱形状・綾杉状も含む)
- ⑧ 複数の原体や文様を組み合わせる施文するもの
- ⑨ 異方向(地紋の施文方向を意図的に変えるもの)・不整
- ⑩ 斜位回転(条を横走あるいは縦走させるもの)
- ⑪ 浅沈線
- ⑫ 表裏縄文(口縁部内面)
- ⑬ 撚糸文(単軸絡条体第1・第4・第5類)
- ⑭ 原体回転方向不明

第IV群土器 縄文時代後期の土器(第47～49図 a1～a165)

調査区北斜面部から丘陵部にかけて117点出土した。捨て場1・2にかかる範囲とその裾野に分布が集中する。本群土器は第III群について多く、全土器点数のおよそ11%を占める。出土層位は遺構内ものを除くと後期の遺物包含層である第2層が最も多く、1・2層を含んだ複数の層位をまたぐものや、擾乱帯に関連した層位からの出土がこれに次ぐ。器種には深鉢、台付鉢、鉢、壺がある。胎土は緻密で内面がミガキ調整されるものと、胎土が粗でナデ調整されるもの、それらの中間的なものに分けられる。器形は底部から外傾して立ち上がり、胴上部に最大径を持ち、その後一旦括れて外反するもの(a2・a3)、底部から丸みを持って立ち上がり胴中央付近に最大径を持ちその後内湾して頸部が短く直立するもの(a4)などがあるが、全体の形状が判明するものは少ない。口縁部形状には平縁・山形口縁・折り返し口縁が見られる。a55・a69は頸部に橋状把手を持つ。a38・a61・a69は胴部にボタン状の貼り付けを持つ。胴部文様は①隆帯による文様が施されるもの(a38・a69等)、②沈線による方形区画文・曲線文が施文されるもの(a3・a56・a57・a62・a67・a81・a97等)、③帯状文による文

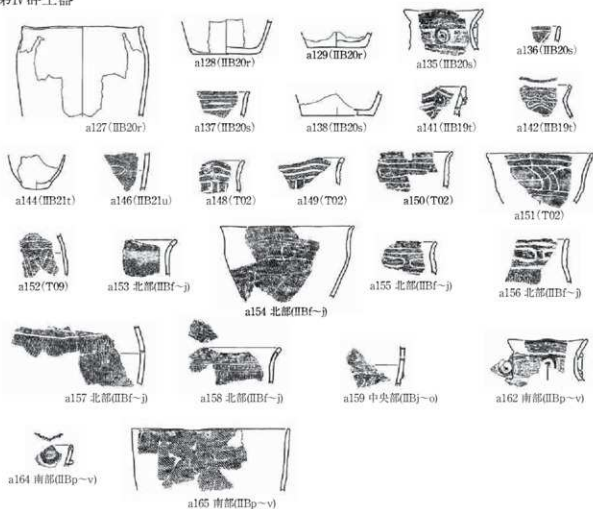
第IV群土器



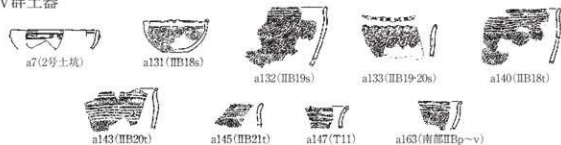
S=1/6

第48图 土器集成图第IV群(2)

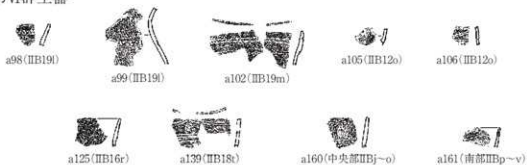
第IV群土器



第V群土器



第VI群土器

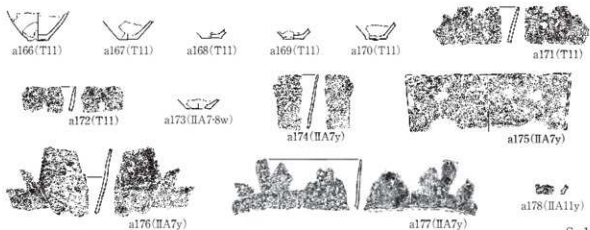


S=1/6

第49図 土器集成図第IV群(3)・第V・VI群

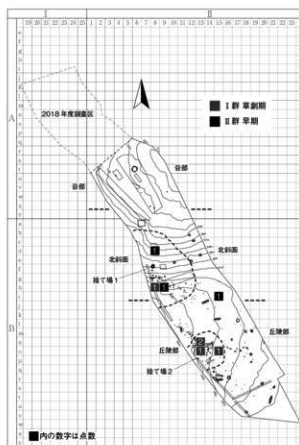
第Ⅶ群土器

製塩土器

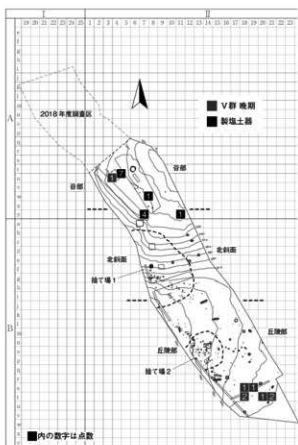


S=1/6

第50図 土器集成図第Ⅶ群



第51図 I・II群土器分布図



第52図 V群・製塩土器分布図

様が施されるもの(a61・a92・a135・a162等)が主体である。以上、文様の特徴から前十腰内I式～十腰内I式古段階～十腰内I式新段階までを内包する縄文時代後期初頭から前葉に属する土器群と考えられる。

第V群土器 縄文時代晩期の土器(第49図 a7～a163)

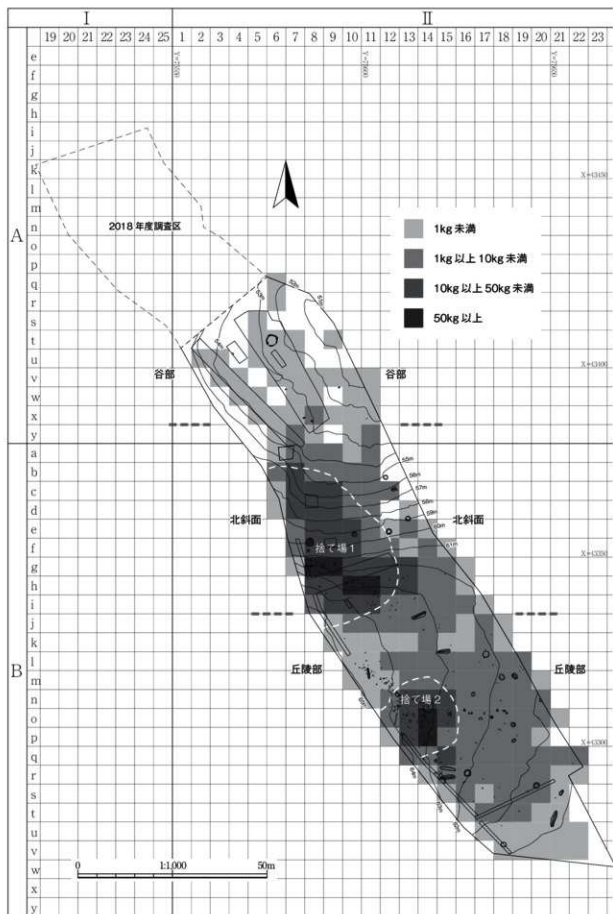
調査区北側谷部 T11から1点、南側丘陵部から8点の計9点出土した。調査区の南端部と北端部に遍って分布し、出土量も全体数からみるとごく少量に留まる。出土層位は1～6層の擾乱帯から出土するものが最も多い。器種には浅鉢・鉢・深鉢がある。胎土はいずれも緻密で、内面は丁寧ミガキ調整されている。口縁形状は平縁で、1点のみ波状を呈する(a147)。口唇断面は丸みを持ち、口唇上面に沈線が巡るものも存在する(a131)。文様は沈線による平行文・工字文を基調としている。a7は2号土坑堆積土から出土した浅鉢の口縁部片である。口縁部には2個1対の小突起を伴う平行沈線が巡る。a131は浅鉢の口縁～底部片で、口縁部に2個1対の突起を持つ。a132は鉢の口縁～胴部片で、口縁部に平行沈線・工字文を持つ。a131・a132ともに胴部には地紋としてLRが施される。これらの土器は、文様の特徴等から判断して晩期末葉の大洲A式に比定されるものと考えられる。

第VI群土器 弥生時代の土器(第49図 a98～a161)

調査区南側丘陵部から9点出土した。出土層位は2層が6点と最も多く、次いで1～2層が2点、3～5層擾乱帯から1点となっている。器種には壺・鉢・甕がある。胎土は中間で、緻密なものは少数である。内面はナデ・ミガキ調整される。口縁形状は平縁で、1点のみ波状を呈する(a161)。文様は、平行沈線による曲線文(a106・a139)と、平行沈線間にやや乱れた交互刺突文が施文されるもの(a98・a99・a102・a105・a125・a160・a161)が主体である。これらの土器は、文様の特徴などから判断して前者は弥生時代前期の土器、後者は弥生時代後期の赤穴式併行と考えられる。

第VII群土器 製塩土器(第50図 a166～a178)

調査区北側谷部から口縁部～底部破片が13点まとまって出土した。このうち T11から出土したものが7点にのぼる。出土層位は主に1～2層、3層上部に集中し、2～4層、3～4層にかけて出土するものも1点ずつ認められる。胎土は中間が6点、粗いものが7点で、胎土に砂粒や赤色粒を少量混入するものが多い。器形は全体が判明するものはないが、口縁部は平縁を呈し、口唇部断面は先細に整形されるものが多い。底部形状は確認された7点すべてが平底である。器厚は2～5mmほどの薄手のものが多く、最も厚いものでも7mm程度である。色調はにぶい橙～赤色を呈する。無紋で内外面共にナデ調整されたものが多数を占める(a166～a170、a172～a173、a178)。a171は内外面共に単軸絡条体第1類Lとみられる回転文が施文されるもので、内面にはにぶい赤色を呈した喫水線の痕跡が認められる。a174～a177は同一グリッド3層上部から4層にかけての出土である。外面には何らかの原体による回転文が施文されている。本土器群の帰属時期については、殆どが十和田中根テフラより上層の1層から3層上面から出土していること、製塩土器片がまとまって出土した T11から晩期の土器片が1点共伴していること、県内における製塩土器の出土例や帰属時期等から判断して、縄文時代晩期と考えられる。



第53図 土器重量分布図 (調査区全域)

第6表 出土地点別土器重量集計(1)

番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)
1	遺構内	-	1号竪穴建物	645
2	遺構内	-	2号竪穴建物	53126
3	遺構内	-	1号土坑	294
4	遺構内	-	2号土坑(陥穴)	229
5	遺構内	-	4号土坑	6797
6	遺構内	-	5号土坑	4992
7	遺構内	-	9号土坑	300
8	遺構内	-	10号土坑	1139
9	遺構内	-	11号土坑	1017
10	遺構内	-	12号土坑(陥穴)	421
11	遺構内	-	13号土坑	1288
12	遺構内	-	14号土坑	508
13	遺構内	-	16号土坑	2204
14	遺構内	-	18号土坑	273
15	遺構内	-	19号土坑	87
16	遺構内	-	20号土坑	78
17	遺構内	-	21号土坑	5481
18	遺構内	-	23号土坑(陥穴)	4029
19	遺構内	-	24号土坑	5041
20	遺構内	-	29号土坑	1197
21	遺構内	-	32号土坑(陥穴)	759
22	遺構内	-	40号土坑	1376
23	遺構内	-	1号溝	304
24	遺構内	-	柱穴状土坑 Pit4	120
25	遺構内	-	柱穴状土坑 Pit12	609
26	遺構内	-	柱穴状土坑 Pit17	39
27	遺構内	-	1号集石	1088
28	グリッド	谷部	II A6q	413
29	グリッド	谷部	II A6q-r	14279
30	グリッド	谷部	II A6r	689
31	グリッド	谷部	II A5s	85
32	グリッド	谷部	II A5t	453
33	グリッド	谷部	II A6t	311
34	グリッド	谷部	II A7t	617
35	グリッド	谷部	II A9t	164
36	グリッド	谷部	II A2u	758
37	グリッド	谷部	II A3u	781
38	グリッド	谷部	II A5u	238
39	グリッド	谷部	II A6u	1937
40	グリッド	谷部	II A6-7u	833
41	グリッド	谷部	II A7u	1798
42	グリッド	谷部	II A7u-v	491
43	グリッド	谷部	II A3v	608
44	グリッド	谷部	II A4v	6109
45	グリッド	谷部	II A6v	198
46	グリッド	谷部	II A7v	3204
47	グリッド	谷部	II A8v	352
48	グリッド	谷部	II A9-10v	275
49	グリッド	谷部	II A10v	875
50	グリッド	谷部	II A11v	5804
51	グリッド	谷部	II A4w	1432

番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)
52	グリッド	谷部	II A5w	4245
53	グリッド	谷部	II A7w	781
54	グリッド	谷部	II A7-8w	368
55	グリッド	谷部	II A8w	1102
56	グリッド	谷部	II A10w	4504
57	グリッド	谷部	II A11w	8261
58	グリッド	谷部	II A5x	7407
59	グリッド	谷部	II A6x	1491
60	グリッド	谷部	II A7x	303
61	グリッド	谷部	II A8x	9715
62	グリッド	谷部	II A8-9x	14084
63	グリッド	谷部	II A9x	1832
64	グリッド	谷部	II A10x	1999
65	グリッド	谷部	II A11x	2437
66	グリッド	谷部	II A6y	117
67	グリッド	谷部	II A7y	19610
68	グリッド	谷部	II A7-8y	1425
69	グリッド	谷部	II A10y	8635
70	グリッド	谷部	II A11y	42309
71	グリッド	北斜面	II B6a	2440
72	グリッド	北斜面	II B7a	33767
73	グリッド	北斜面	II B8a	32817
74	グリッド	北斜面	II B9a	13949
75	グリッド	北斜面	II B10a	2073
76	グリッド	北斜面	II B10a ~ c	1252
77	グリッド	北斜面	II B11a	26440
78	グリッド	北斜面	II B6b	59388
79	グリッド	北斜面	II B6b ~ d	8981
80	グリッド	北斜面	II B7b	236489
81	グリッド	北斜面	II B8b	94116
82	グリッド	北斜面	II B9b	75895
83	グリッド	北斜面	II B10b	54881
84	グリッド	北斜面	II B11b	35491
85	グリッド	北斜面	II B6c	937
86	グリッド	北斜面	II B6-7c	11230
87	グリッド	北斜面	II B7c	25326.3
88	グリッド	北斜面	II B7c-d	59.3
89	グリッド	北斜面	II B8c	25132.4
90	グリッド	北斜面	II B8-9c	367.4
91	グリッド	北斜面	II B9c	12552.1
92	グリッド	北斜面	II B10c	80328
93	グリッド	北斜面	II B11c	21646
94	グリッド	北斜面	II B12c	2919.7
95	グリッド	北斜面	II B7d	103680
96	グリッド	北斜面	II B7d-e	335.3
97	グリッド	北斜面	II B8d	16530.5
98	グリッド	北斜面	II B8d-e	1624.4
99	グリッド	北斜面	II B9d	15003.2
100	グリッド	北斜面	II B9d-e	330.1
101	グリッド	北斜面	II B10d	3672.4
102	グリッド	北斜面	II B11d	45348

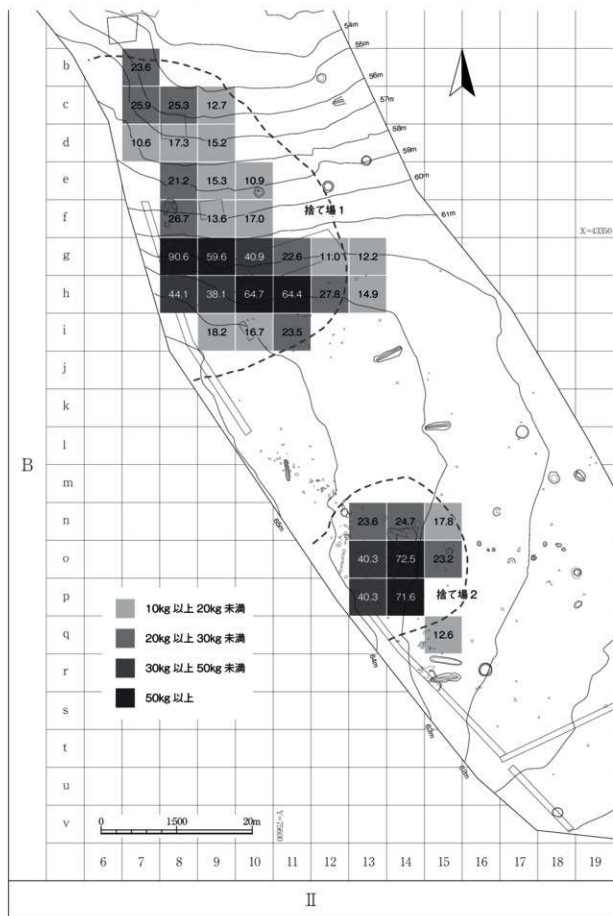
第6表 出土地点別土器重量集計(2)

番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)
103	グリッド	北斜面	II B13d	7497
104	グリッド	北斜面	II B7c	44512
105	グリッド	北斜面	II B7e-f	21707
106	グリッド	北斜面	II B8e	172057
107	グリッド	北斜面	II B8-9e	112
108	グリッド	北斜面	II B8e-f	63560
109	グリッド	北斜面	II B9e	150818
110	グリッド	北斜面	II B9e-f	1583
111	グリッド	北斜面	II B10e	100786
112	グリッド	北斜面	II B10e-f	17149
113	グリッド	北斜面	II B11e	43909
114	グリッド	北斜面	II B12e	7451
115	グリッド	北斜面	II B13e	21641
116	グリッド	北斜面	II B14e	8995
117	グリッド	北斜面	II B7f	48820
118	グリッド	北斜面	II B7-8f	4766
119	グリッド	北斜面	II B8f	230879
120	グリッド	北斜面	II B8-9f	2918
121	グリッド	北斜面	II B9f	133948
122	グリッド	北斜面	II B10f	161907
123	グリッド	北斜面	II B11f	84514
124	グリッド	北斜面	II B12f	28936
125	グリッド	北斜面	II B12-13f	671
126	グリッド	北斜面	II B13f	4409
127	グリッド	北斜面	II B13-14f	381
128	グリッド	北斜面	II B14f	56086
129	グリッド	北斜面	II B15f	7080
130	グリッド	北斜面	II B7g	4270
131	グリッド	北斜面	II B8g	906181
132	グリッド	北斜面	II B8-9g	385
133	グリッド	北斜面	II B9g	361885
134	グリッド	北斜面	II B9-10g	68649
135	グリッド	北斜面	II B10g	357882
136	グリッド	北斜面	II B10-11g	33724
137	グリッド	北斜面	II B11g	208732
138	グリッド	北斜面	II B12g	109257
139	グリッド	北斜面	II B12-13g	1641
140	グリッド	北斜面	II B13g	120733
141	グリッド	北斜面	II B14g	22606
142	グリッド	北斜面	II B15g	40508
143	グリッド	北斜面	II B16g	53
144	グリッド	北斜面	II B8h	440647
145	グリッド	北斜面	II B9h	345647
146	グリッド	北斜面	II B9-10h	70375
147	グリッド	北斜面	II B10h	591723
148	グリッド	北斜面	II B10-11h	41009
149	グリッド	北斜面	II B11h	623233
150	グリッド	北斜面	II B12h	278060
151	グリッド	北斜面	II B13h	149402
152	グリッド	北斜面	II B14h	69286
153	グリッド	北斜面	II B15h	32610

番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)
154	グリッド	北斜面	II B16h	6181
155	グリッド	北斜面	II B8i	60856
156	グリッド	北斜面	II B9i	156672
157	グリッド	北斜面	II B9-10i	51103
158	グリッド	北斜面	II B10i	141878
159	グリッド	北斜面	II B11i	234756
160	グリッド	北斜面	II B12i	71675
161	グリッド	北斜面	II B13i	82338
162	グリッド	北斜面	II B14i	50357
163	グリッド	北斜面	II B15i	13979
164	グリッド	北斜面	II B16i	13503
165	グリッド	北斜面	II B17i	2198
166	グリッド	丘陵部	II B9j	7988
167	グリッド	丘陵部	II B10j	17074
168	グリッド	丘陵部	II B11j	16949
169	グリッド	丘陵部	II B12j	31145
170	グリッド	丘陵部	II B13j	30450
171	グリッド	丘陵部	II B14j	10118
172	グリッド	丘陵部	II B15j	47479
173	グリッド	丘陵部	II B16j	7042
174	グリッド	丘陵部	II B17j	23787
175	グリッド	丘陵部	II B18j	2371
176	グリッド	丘陵部	II B9k	54
177	グリッド	丘陵部	II B10k	1449
178	グリッド	丘陵部	II B11k	2399
179	グリッド	丘陵部	II B12k	7109
180	グリッド	丘陵部	II B13k	4331
181	グリッド	丘陵部	II B14k	16542
182	グリッド	丘陵部	II B15k	7825
183	グリッド	丘陵部	II B16k	9662
184	グリッド	丘陵部	II B17k	14962
185	グリッド	丘陵部	II B18k	2729
186	グリッド	丘陵部	II B10l	2436
187	グリッド	丘陵部	II B11l	8112
188	グリッド	丘陵部	II B12l	23070
189	グリッド	丘陵部	II B13l	10963
190	グリッド	丘陵部	II B14l	33379
191	グリッド	丘陵部	II B15l	15349
192	グリッド	丘陵部	II B16l	25791
193	グリッド	丘陵部	II B17l	24691
194	グリッド	丘陵部	II B18l	24881
195	グリッド	丘陵部	II B19l	29482
196	グリッド	丘陵部	II B10m	279
197	グリッド	丘陵部	II B11m	3989
198	グリッド	丘陵部	II B12m	9100
199	グリッド	丘陵部	II B13m	32863
200	グリッド	丘陵部	II B14m	81892
201	グリッド	丘陵部	II B15m	61350
202	グリッド	丘陵部	II B16m	47102
203	グリッド	丘陵部	II B17m	17383
204	グリッド	丘陵部	II B18m	17614

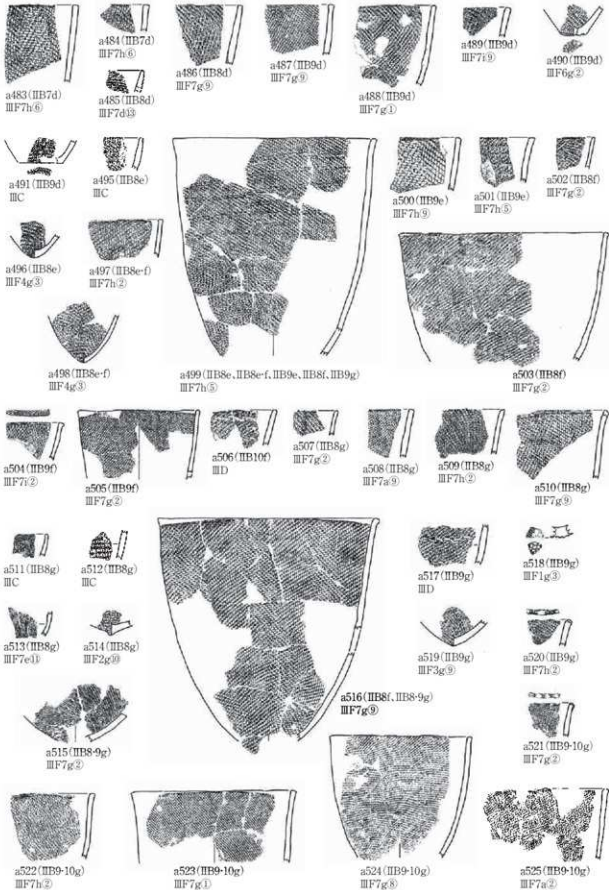
第6表 出土地点別土器重量集計(3)

番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)	番号	区分	区域	遺構名	重量 (g)
205	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19m	38207	256	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15s	845.5
206	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20m	25.4	257	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16s	1782.2
207	グリッド	丘陵部	Ⅱ B11a	52.1	258	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17s	516.5
208	グリッド	丘陵部	Ⅱ B12a	6648.1	259	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18s	1704.1
209	グリッド	丘陵部	Ⅱ B13a	23616.9	260	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19s	2044.4
210	グリッド	丘陵部	Ⅱ B14a	24702.2	261	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20s	2844.6
211	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15a	17804.4	262	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21s	601.7
212	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16a	7637.3	263	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16t	142.4
213	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17a	2191.9	264	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17t	2262.9
214	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18a	5209.1	265	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18t	1518.3
215	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19a	2008.2	266	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19t	1751.4
216	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20a	1767.1	267	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20t	839.6
217	グリッド	丘陵部	Ⅱ B12b	9490.1	268	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21t	963.8
218	グリッド	丘陵部	Ⅱ B13b	47023.5	269	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17u	73.7
219	グリッド	丘陵部	Ⅱ B14b	72473.9	270	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18u	742.6
220	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15b	23203.6	271	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19u	180.6
221	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16b	5767.0	272	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19uv	31.6
222	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17b	2608.2	273	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20u	460.1
223	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18b	1286.3	274	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21u	480.0
224	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19b	3313.0	275	グリッド	丘陵部	Ⅱ B22u	156.0
225	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20b	1061.7	276	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18v	101.9
226	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21b	17.2	277	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19v	86.2
227	グリッド	丘陵部	Ⅱ B12p	127.9	278	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20v	243.4
228	グリッド	丘陵部	Ⅱ B13p	40264.6	279	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21v	156.2
229	グリッド	丘陵部	Ⅱ B14p	71615.3	280	グリッド	丘陵部	Ⅱ B22v	399.4
230	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15p	9371.4	281	遺構外	-	1号配石平場付近	2533.1
231	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16p	3483.1	282	遺構外	-	T01	4990.2
232	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17p	7418.0	283	遺構外	-	T02	21340.4
233	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18p	5903.8	284	遺構外	-	T03	5191.4
234	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19p	3381.8	285	遺構外	-	T04	392.9
235	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20p	14.3	286	遺構外	-	T06	2963.6
236	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21p	171.3	287	遺構外	-	T07	2912.6
237	グリッド	丘陵部	Ⅱ B13q	3772.0	288	遺構外	-	T08	931.6
238	グリッド	丘陵部	Ⅱ B14q	3361.2	289	遺構外	-	T09	80.9
239	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15q	12617.1	290	遺構外	-	T10	23586.1
240	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16q	8506.5	291	遺構外	-	T11	965.3
241	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17q	4933.4	292	遺構外	-	T12	392.1
242	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18q	2997.0	293	遺構外	-	Ⅱ A	885.7
243	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19q	2352.2	294	遺構外	-	北部 (Ⅱ Bf ~ j)	37191.6
244	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20q	2260.8	295	遺構外	-	中央部 (Ⅱ Bj ~ o)	10133.8
245	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21q	2161.7	296	遺構外	-	南部 (Ⅱ Bp ~ v)	3839.4
246	グリッド	丘陵部	Ⅱ B22q	2534.1	297	遺構外	-	Ⅱ B	2316.9
247	グリッド	丘陵部	Ⅱ B14r	667.5	298	遺構外	-	調査区	1545.6
248	グリッド	丘陵部	Ⅱ B15r	2455.5		遺構内			9344.1
249	グリッド	丘陵部	Ⅱ B16r	4190.2		谷部			17332.9
250	グリッド	丘陵部	Ⅱ B17r	1448.1		北斜面			937069.3
251	グリッド	丘陵部	Ⅱ B18r	1288.8		丘陵部			560382.9
252	グリッド	丘陵部	Ⅱ B19r	10247		グリッド (谷部+北斜面+丘陵部)			1514786.1
253	グリッド	丘陵部	Ⅱ B20r	5926.4		遺構外			125770.2
254	グリッド	丘陵部	Ⅱ B21r	208.6		合計			1649899.4
255	グリッド	丘陵部	Ⅱ B22r	1425					

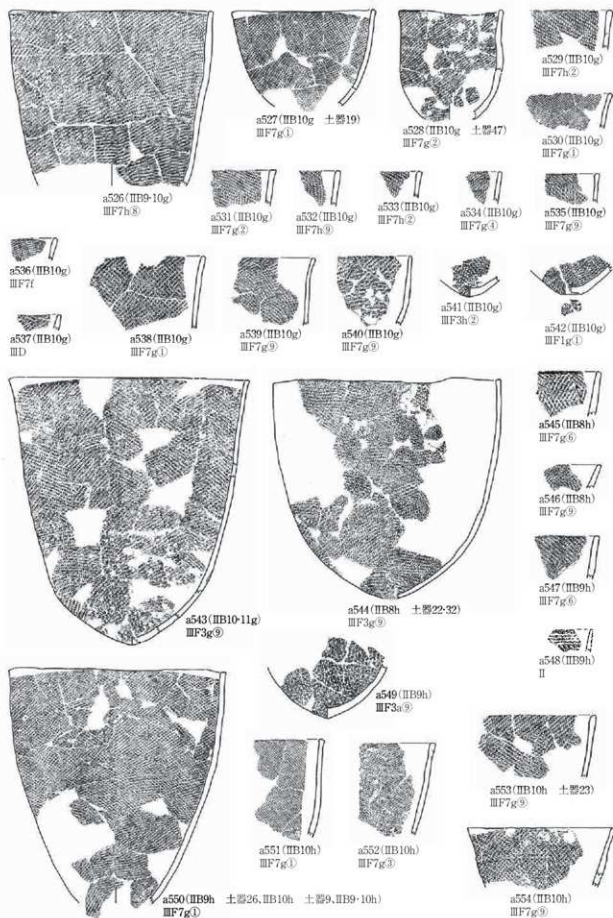


第54図 土器重量分布図 (捨て場1・2)

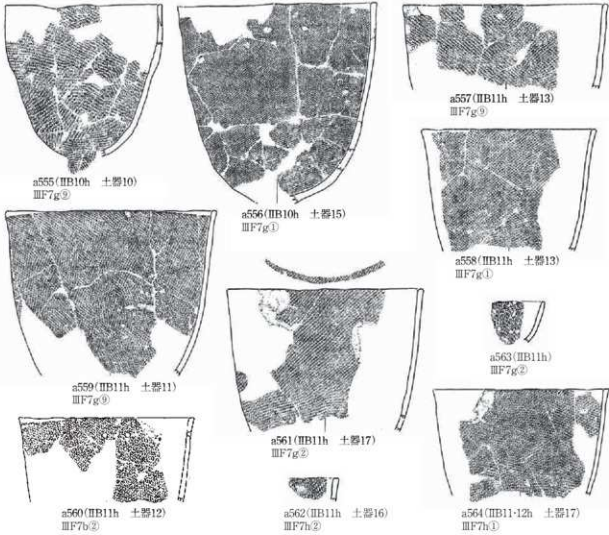
【捨て場1】3層下部



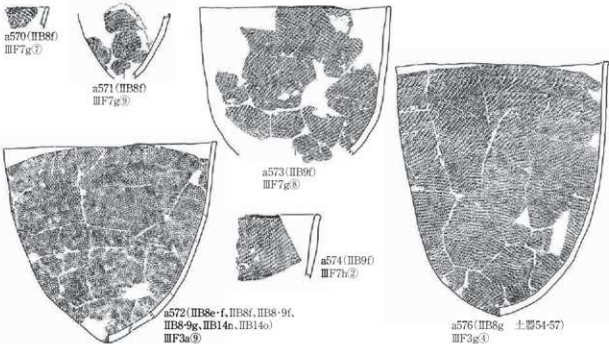
第55図 捨て場1 土器集成図(1)



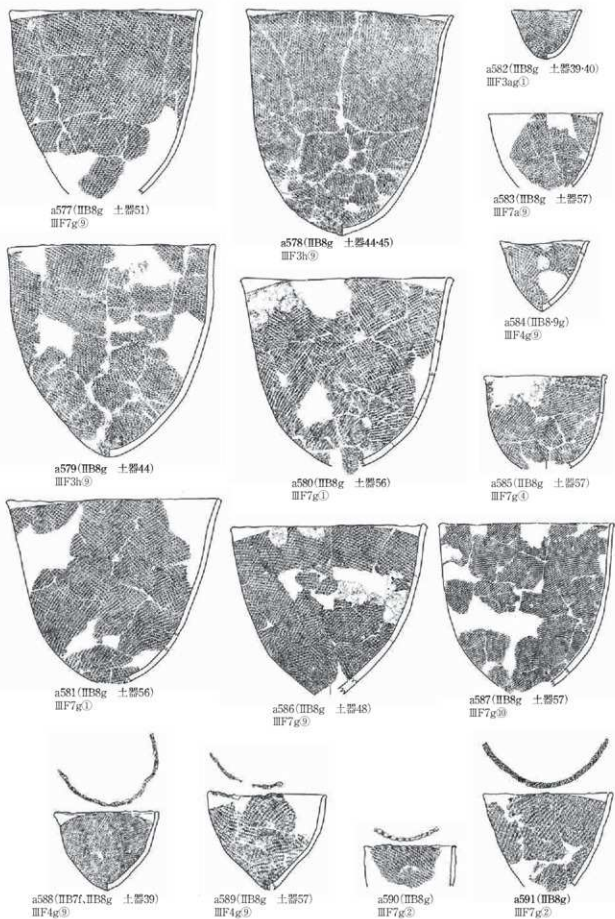
第56図 捨て場1土器集成図(2)



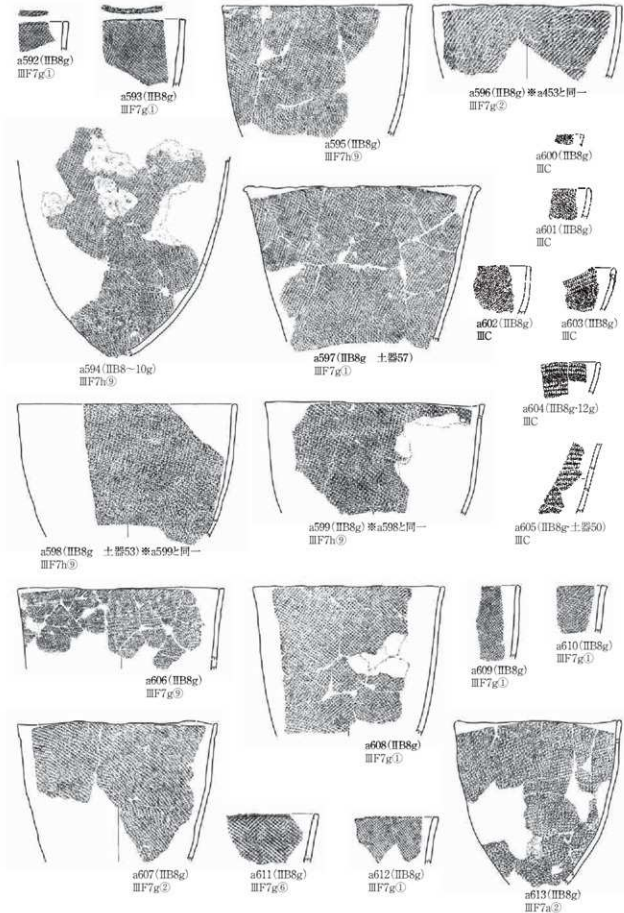
【捨て場1】3/4 客土層



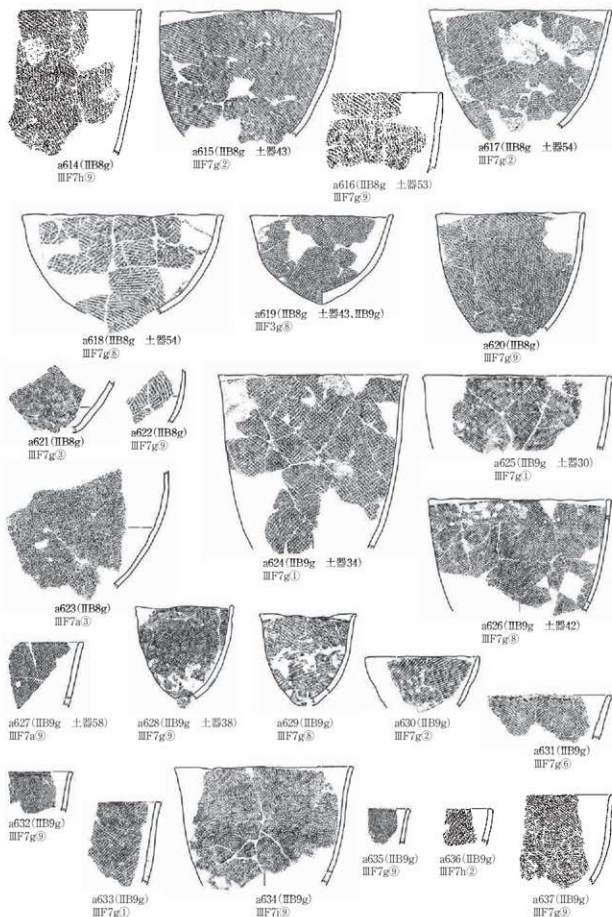
第57図 捨て場1 土器集成図 (3)



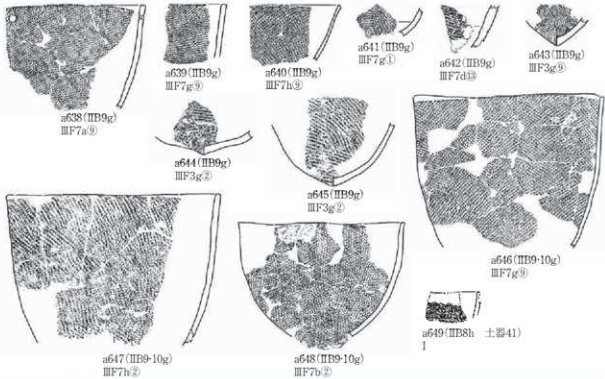
第58図 捨て場1土器集成図(4)



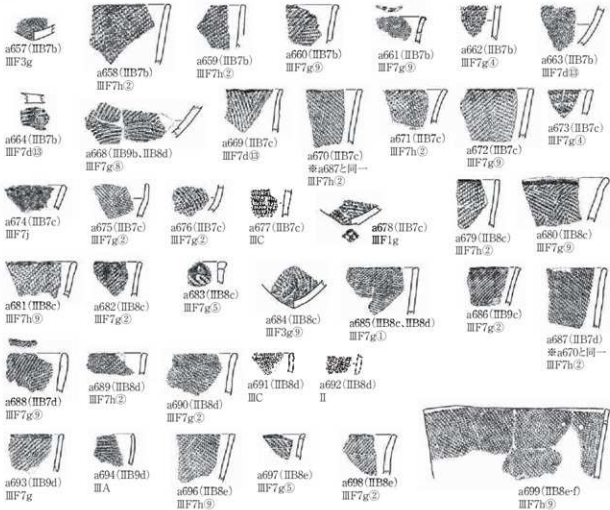
第59図 捨て場1土器集成図(5)



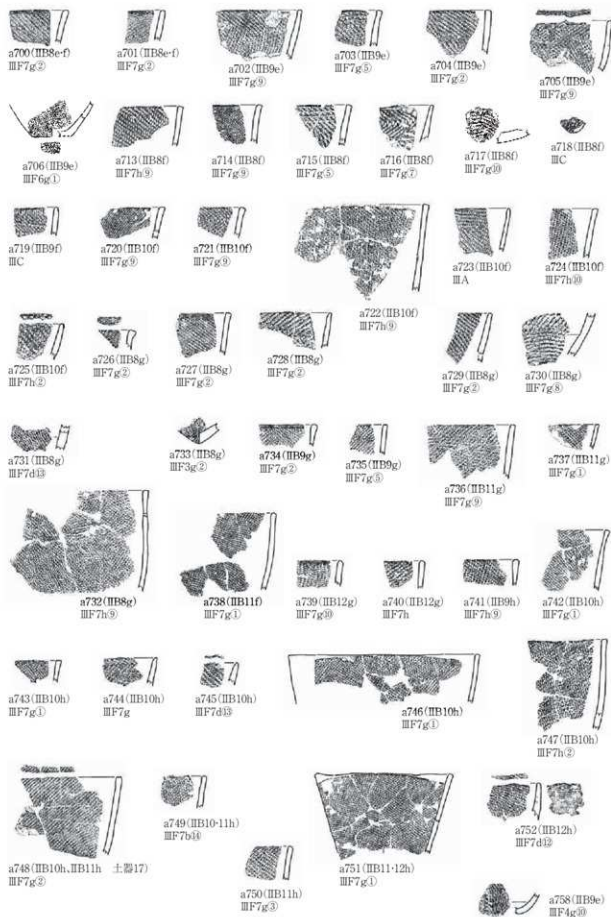
第60図 捨て場1土器集成図(6)



【捨て場1】4層

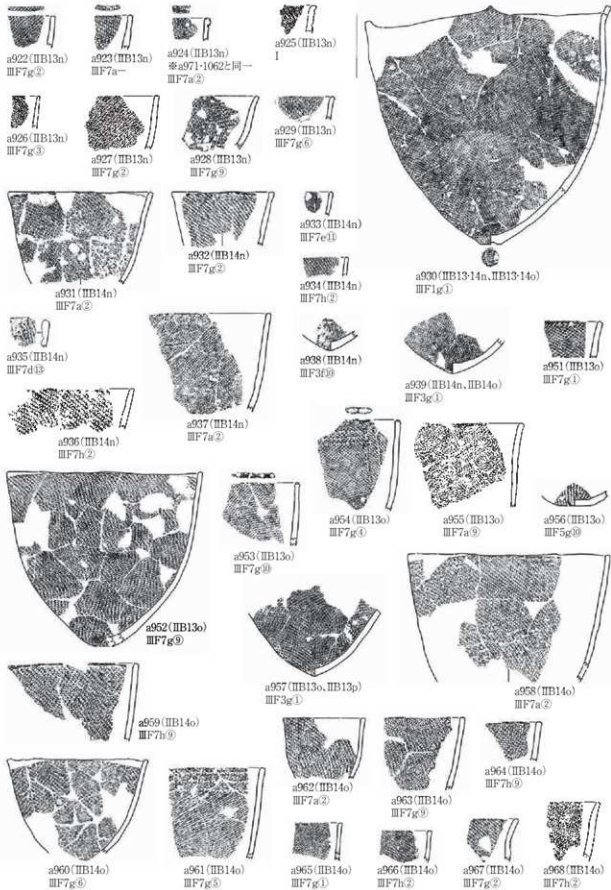


第61図 捨て場1 土器集成図(7)

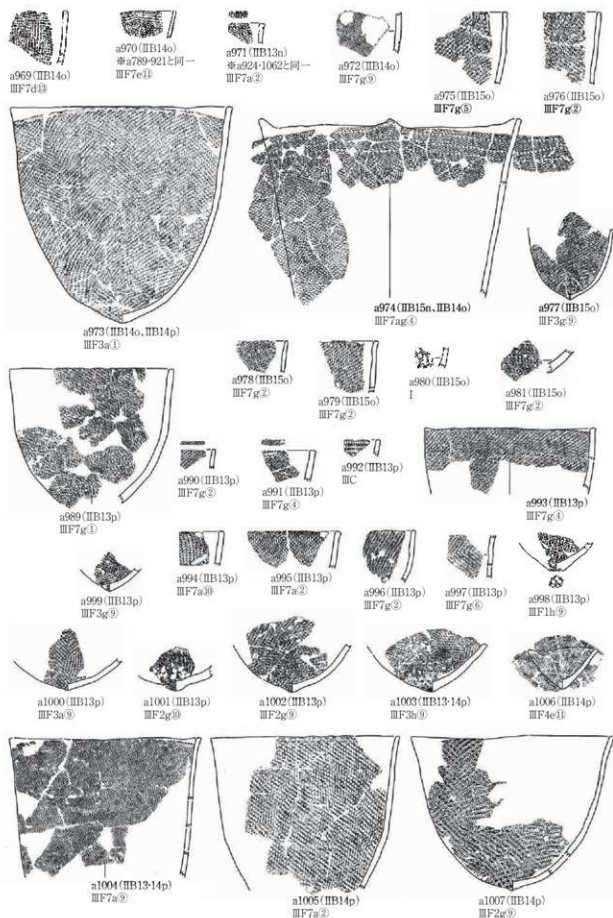


第62図 捨て場1土器集成図(8)

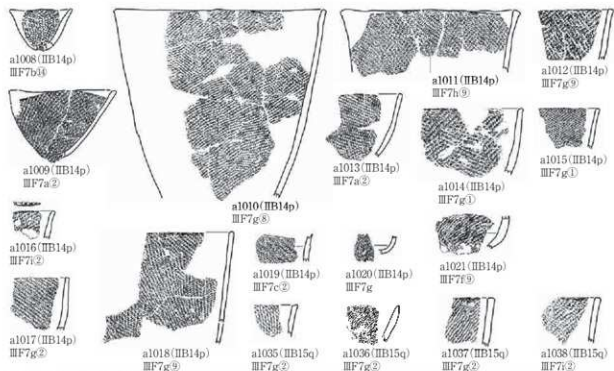
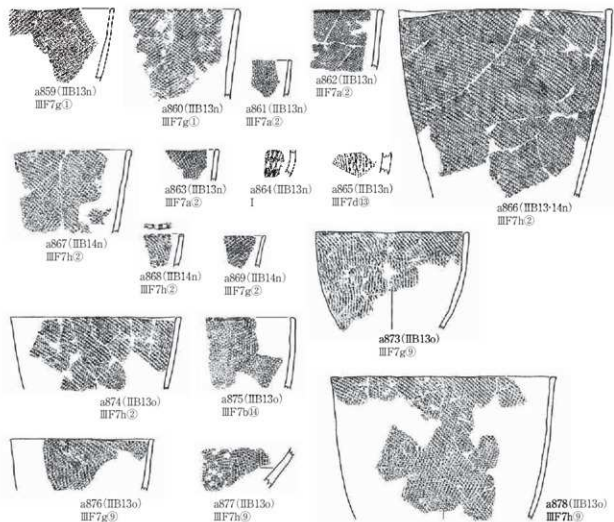
【捨て場2】3層



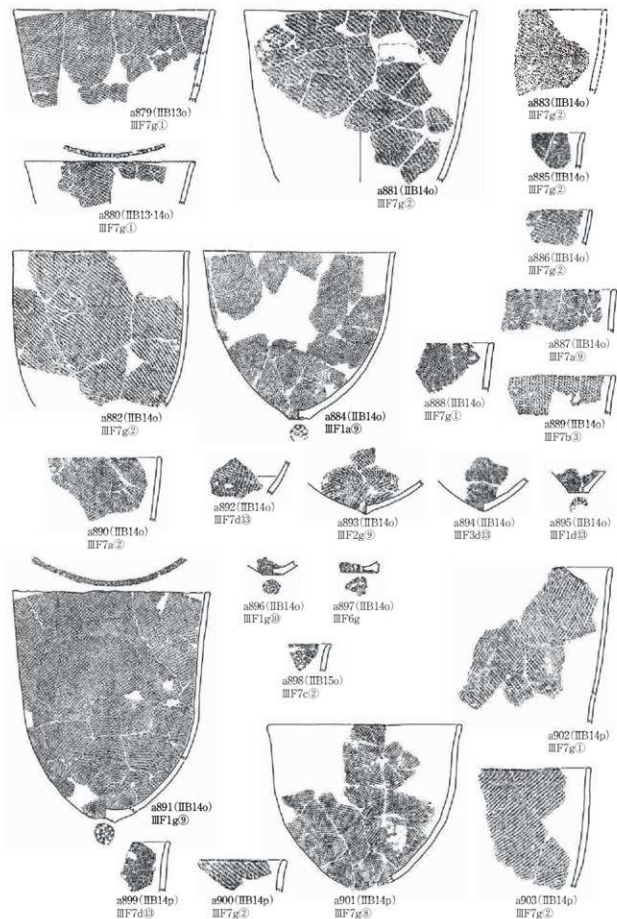
第63図 捨て場2土器集成図(1)



第64図 捨て場2土器集成図(2)


[捨て場2] 3層磁土


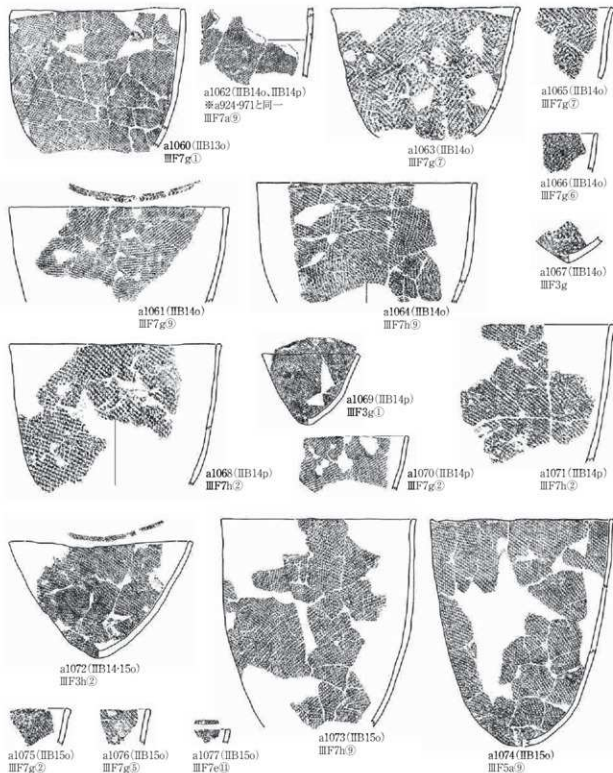
第65図 捨て場2土器集成図(3)



第66図 捨て場2土器集成図(4)



【捨て場2】4層



第67図 捨て場2土器集成図(5)

捨て場土器集成図(第55～67図)

ここでは当該期の遺物が良好な状態で出土した捨て場1・2の遺物を使用して、地点や層位による土器様相に違いがあるかどうかを確認する目的で、遺物集成図を作成した。この作業を行うに当たっては、擾乱層出土の遺物、および複数の層位にまたがる遺物を排除し、プライマリーな層相を示す「3層下部」「3/4客土層」「4層」から出土した遺物のみを用いた。集成図は捨て場1および2に分け、それぞれ出土層位毎にまとめ、各遺物の下に出土グリッドと本節で示した分類・細分を表示した。

(2) 土製品

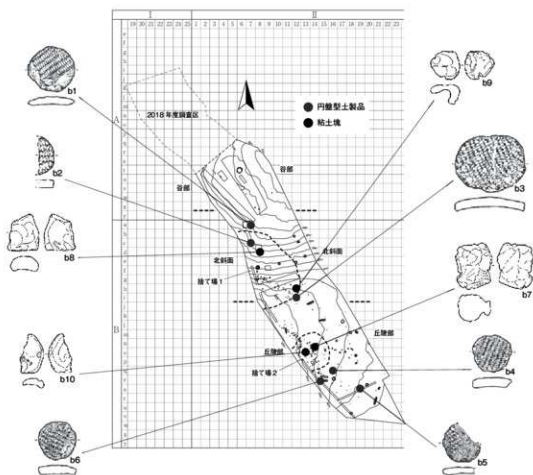
① 円盤形土製品(b1～b6)

北斜面から丘陵部にかけて6点出土している。出土層位は十和田中振テフラを挟んで第2層から第5層擾乱層である。出土した円盤形土製品は全て土器片(胴部破片)を転用したもので、打ち欠きや研磨で円形～楕円形に整形している。胎土にはいずれも繊維を含むことから、縄文時代前期に帰属するものと考えられる。

② 粘土塊(b7～b10)

4点出土している。2号堅穴建物堆積土から1点、捨て場1にあたる北斜面部から2点、捨て場2にあたる丘陵部から1点が出土している。層位は2層から3層下部にかけてであり、間に中振浮石を挟む。b7は工具による整形痕跡を持つものである。b8・b9は表面に指頭や指による整形痕跡が残る。b10は細い棒状工具による刺突痕を持つ。帰属時期は、層位等から判断して縄文時代前期前葉以降と考えられる。

(丸山)



第68図 土製品分布図

(3)石 器

①概要

今回の調査で出土した石器の総重量は、2,536.8kgである。二次加工や微細剥離痕のある石器、及び石核の総点数は7,644点、このうち遺構内は44点、遺構外は7,600点である。なお、剥片については、頁岩等の剥片石器の素材剥片や調整剥離によって生じた石片を「剥片」とし、砂岩等礫石器の調整剥離によって生じた石片を「礫剥片」として分けて計測している。

②器種分類・掲載基準

総点数7,644点中、遺構内を33点、遺構外を539点、計572点を掲載した。掲載率は8%程度である。遺構内出土のものは少数のため、器種ごとに掲載し、各器種中で分類→出土地点の順に並べた。なお、遺構名は掲載番号を横に記載した。器種ごとの登録点数、石質鑑定数、石質鑑定実施率、掲載点数、掲載率は第9表「石器の器種別掲載率一覧」に記した通りである。石質の鑑定について、掲載分は花崗岩研究会に依頼し実施している(全量の50%程度)。ただし、石斧類に関しては未成品が多く出土しており、本遺跡で石斧製作が行われていたことが想定されたことから、どのような石材を選択していたか把握する為、ほぼ全点を鑑定の対象とした。また、黒色を呈する石で、密度が3.0~3.3になるものは、細粒はんれい岩(中生代白亜紀 北上山地 ノソウケ岩体)として掲載した。

本文中の「石材」の項目は、石質鑑定を実施したものについては不掲載分も含む全ての点数を掲載している(石質鑑定実施率は第9表参照)。

③出土状況

各遺構・グリッドの器種別出土量は、第7表「出土地点別石器出土数一覧」とおりである。また、2017年度の石器の出土範囲・及び多寡については、第70図「石器出土数分布図」に示している。これによると、南側の丘陵部から北側の斜面にかけて分布が集中する傾向が認められ、捨て場1・2の範囲とはほぼ重なっている。

④器種別の分類と分析

1)石 鏃(c1~34)

矢の先に取り付けられて鏃として機能したと考えられる形態の尖頭状石器。槍先形尖頭器とは便宜的に長さ4.5cm前後で分離した。合計点数は150点、うち34点を図化掲載した。

分類 平面形態により5分類した。

- I類 凹基無茎鏃 基部に扶入のあるもの
- II類 平基無茎鏃 基部が直線的なもの
- III類 有茎鏃
- IV類 尖基鏃 基部が尖るもの
- V類 円基鏃 基部が丸味を帯びるもの

その他、未成品や欠損して上記の分類に含まれるか不明なものがある。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは1.7~4.7cm、幅は0.8~2.2cm間に収まる。重量は1g台やそれ以下が多い。C11が0.41gと最も軽く、c29が4.5gと最も重い。

石材 鑑定した44点の内訳は、頁岩30点(68%)、珪質頁岩7点(16%)、玉髓3点、赤色頁岩3点(以上7%)、黒曜石1点(2%)となっている。c32は分析の結果、所山系の黒曜石であることが判明している(第Ⅵ章分析鑑定の項参照)。

2) 尖頭器(c35~42)

楡先に装着したと考えられるサイズの尖頭状狩猟具。合計点数は10点、うち8点を図化掲載した。

分類 細分していない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは4.5~8.2cm、幅は1.2~3.3cm間に収まる。重量は3.68~21.05gとばらつきが見られる。

石材 鑑定した8点の内訳は、すべて頁岩(100%)である。

3) 石 錐(e43~53)

二次加工により錐状の端部を作り出したもの。合計点数は13点、うち11点図化掲載した。

分類 平面形状からⅠ・Ⅱの2種に分類した。

Ⅰ 錐部が長く棒状のもの。摘部はないか、もしくは不明瞭。

Ⅱ 錐部が短く、摘部との境は不明瞭。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.1~5.7cm、幅は0.7~1.7cm間に収まる。重量は0.49~3.82gとばらつきがある。

石材 鑑定した11点の内訳は、頁岩9点(82%)、玉髓2点(18%)である。

4) 石 匙(e29・201~203)

摘部を持つスクレイパーである。刃部は搔器や削器の機能をもち、ナイフ的用途が想定される。合計点数は200点、うち42点を図化掲載した。

分類 平面形状からⅠ縦型、Ⅱ斜型、Ⅲ横型の3つに分類した。Ⅰ163点、Ⅱ13点、Ⅲ13点、不明11点とⅠ類が大半を占める。Ⅰ類の多く(163点中115点)は裏面に打面調整剥離痕がみられるいわゆる「松原型石匙」であり、先行研究の分類(秦1991、加藤2017、以下秦・加藤分類)をもとにa~eの5つに細分した。

Ⅰ a a b辺が直線的または外側に張り出しており、b c点 が直線的でc点へ向かってやや下がるもの。(秦・加藤分類 A-2・A-3)

Ⅰ b b点の存在が顕著でないため、a c辺間が大きく外側に張り出した形態をするもの。(秦・加藤分類 A-4)

Ⅰ c b点 が下降しc点と並んだ形態をしているもの。(秦・加藤分類 A-5)

Ⅰ d b点 がc点より下降した形態をしているもの。(秦・加藤分類 A-6)

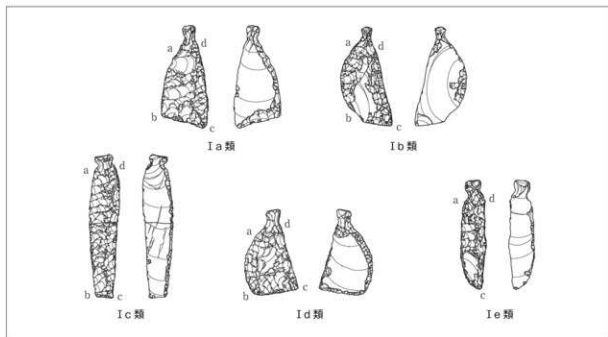
Ⅰ e b点 が顕著でなくバナナ型もしくは両側が外側に張り出す形態をしているもの。(秦・加藤分類 B-1・B-2・B-3)

秦・加藤分類 A-1類は今回の調査で確認できなかったため上記の細分に含めていない。Ⅰ a は4点、Ⅰ b は12点、Ⅰ c は9点、Ⅰ d は3点、Ⅰ e は5点確認されている。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.9~13.4cm、幅は1.3~6.0cm間に収まる。重量は2.48~45.70gとばらつきがある。

石材 鑑定した66点の内訳は、頁岩59点(89%)、珪質頁岩4点(6%)、赤色頁岩2点(3%)、凝



第69図 松原型石匙の形態分類[妻1991]

灰岩1点(2%)である。

参考文献

- 妻 昭繁 1991「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と制作時期について—」『考古学雑誌』第76巻第4号 日本考古学会
 加藤 学 2017「縄文時代前期「松原型石匙」の再検討—消費遺跡における分析から—」『研究紀要』第9号 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

5) スクレイパー(c96~108)

連続した剥離で刃部を作り出したもの。基本的に片面調整で、両面調整している場合も裏面が水平に近い。刃部はなめらかで、角度は60°以上を測る。平面形状が石筥に類するものでも、上記の特徴に当てはまるものは本器種に含めた。合計点数は33点、うち13点を図化掲載した。

分類 刃部の作出個所により3つに分類した。

- a 刃部を端部に作出。(エンドスクレイパー)
- b 刃部を側縁に作出。(サイドスクレイパー)
- c 刃部を周縁に作出。(ラウンドスクレイパー)

aが14点、bが6点、cが7点、欠損のため分類不明のものが6点確認されている。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは4.2~10.3cm、幅は2.2~5.0cm間に収まる。重量は7.91~59.24gとばらつきがある。

石材 鑑定した16点の内訳は、頁岩14点(87%)、珪質頁岩2点(13%)である。

6) 石 筥(c109~120)

平面形状が左右対称で、撥形または長方形のもの。やや不対称のものも含む。上記のような形状のものでも刃部の角度が60°以上のものはスクレイパーへ、裏面が自然面で片面調整のものは石斧類に含めた。合計点数は60点、うち12点を図化掲載した。

分類 二次加工の部位により3つに細分した。

- a 表面の調整剥離が側縁にのみ施されたもの。端部の断面形が片刃になる。(スクレイパーに近い形状)
 - b 表面の調整剥離が側縁と端部に施されたもの。端部の断面形が両刃になる。
 - c 石筥の形状を持つが連続的な剥離調整がないもの。
- a類24点、b類24点、c類2点、欠損のため分類不明のものが10点である。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは3.4~7.4cm、幅は2.6~4.4cm間に収まる。重量は6.39~47.42gとばらつきがある。

その他 c109は表面端部に付着物がある。

石材 鑑定した18点の内訳は、頁岩14点(78%)、珪質頁岩4点(22%)である。

7)不定形石器(c121~151)

1)~6)には含まれないが、連続した剥離調整痕があるもの。定型石器の未成品や、欠損のため器種が特定できないものもこれに含む。合計点数は205点、うち31点図化掲載した。

分類 細分はしていない。c127とc137は切断調整痕がある。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.0~6.5cm、幅は0.9~5.4cmを測る。重量は1.58~3.22gの範囲に収まる。

石材 鑑定した48点の内訳は、頁岩41点(86%)、赤色頁岩3点(6%)、珪質頁岩2点(4%)、砂岩1点、玉随1点(以上2%)である。

8)微細剥離痕のある剥片(U.F.)(c152~155)

使用痕と考えられる縁辺剥離痕の配列を持つ剥片。合計点数は59点、うち4点を図化掲載した。

分類 細分はしていない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.4~6.1cm、幅は1.6~3.9cmを測る。重量は1.57~16.76gの範囲に収まる。

石材 鑑定した5点の内訳は、頁岩4点(80%)、赤色頁岩1点(20%)である。

9)両極石器(c156~166)

両極打撃技術により、製作された剥片。合計点数は73点、うち11点図化掲載した。

分類 剥離の痕跡によって2つに細分した。

- a 対向する1対2片に両極剥離痕をもつもの。
 - b 対向する2対4片に両極剥離痕をもつもの。
- a類48点、b類9点、欠損のため分類不明10点である。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.4~4.8cm、幅は1.8~3.9cmを測る。重量は4.23~25.27gの範囲に収まる。

石材 鑑定した15点中、頁岩9点(60%)、珪質頁岩5点(33%)、細粒はんれい岩1点(7%)である。

10)異形石器(c167~173)

1)~7)のいずれかに器種に属する可能性があるが、確定できないものを一括した。合計点数は7点、すべて図化掲載した。

分類 細分していない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。出土層位は縄文時代前期以前に相当する3層以下である。

計測値 長さは2.8～4.5cm、幅は1.3～3.3cmを測る。重量は2.16～6.72gの範囲に収まる。

石材 鑑定した7点の内訳は、頁岩5点(71%)、黒曜石2点(29%)である。c168・c170は分析の結果、赤石山系の黒曜石であることが判明している(第Ⅵ章分析鑑定の項参照)。

11) 石核(c174～182)

最終剥離面がネガ面で、素材剥片製作を目的として調整された石器。自然面を残す個体が多く、これらの中には礫石器製作時の未成品や使用時の破損品を含む可能性がある。合計点数は85点、うち9点図化掲載した。

分類 細分はしていない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは3.1～9.9cm、幅は3.7～11.3cmを測る。重量は25.59～551.90gの範囲に収まる。

石材 鑑定した18点の内訳は、チャート10点(57%)、碧玉3点(17%)、玉髄2点(11%)、頁岩・赤色頁岩・石英が各1点(以上5%)を占める。上記の通り敲磨器の破損品で敲打痕の痕跡がないものも含まれる可能性があることをお断りしておきたい。

12) 石斧類(c183～306)

撥状の形状をもち、剥離・敲打・研磨等で整形されたもの。いわゆる打製石斧と磨製石斧を一括した。未成品、再加工作品も含む。合計点数は1,378点、うち124点を図化掲載した。

分類 製作途中と考えられる個体が多く、磨製石斧の完成完形品はほとんど出土していない。剥離のみで整形されている個体に関しても、打製石斧の完成品または磨製石斧の未成品の可能性がある。整形の痕跡で以下のように分類した。

I 剥離整形。

II 剥離・敲打整形。

III 剥離・敲打・研磨整形。

IV IIIと同じだが、研磨して刃部を形成している。(完成品)

また、I・II類については、素材礫の状態ですらに細分した。

a 片面に自然面を残した礫片を使用。

b 両面剥離痕のある礫片を使用。(剥片石器の素材と同じ)

c 自然礫を使用。(表裏ともに自然面が残る)

d 不明。

III・IVは敲打・研磨が進み素材礫の痕跡が残っていないため、上記の細分はしていない。また製作途中で廃棄したのもや完成品を再加工作品のものが多いことから、残存部位についても記載した。石斧の完形状態を想定し横に3分割し、刃部側を①、基部側を③、その間を②として、残存部位を「①～③」・「①」・「②③」などと備考欄に記している。部位がはっきりしないもの、縦に割れてしまっているものなどは④とした。

なお、石斧製作を行っていたという特色から本器種のみ、接合を行っている。接合した個体については、備考に「接合あり」と記載した。

分類別の特徴 I類,583点。a411点、b20点、c152点とa類が多い。

I a類について、スクレイパー、石筥の特徴を持つ個体も片側自然面の場合本類に含めている。表面は周縁から調整が加えられ、裏面は調整なし(c183・186・190)、もしくは側縁にのみ調整が加えられる例(c184・191)が多い。横長剥片を素材として使用しているものも多い(c189・190)。I c類の表面に自然面が残っていないものも若干本類に含まれている可能性がある。I c類は片面のみ周縁を加工し整形しているもの(c196・201・203)と、両面加工し整形しているもの(195・197)があり、前者が多い。表面の中心部に自然面を残していることが多く、I a類に比べて器厚がある。剥離が全周に及んでいないものの観察結果から、素材選択の段階である程度石斧に適した形状の礫を選んで加工していると思われる(c195・200)。

II類,687点。a105点、b1点、c310点、d262点。II a類は側縁に敲打が加えられてるものが多い。敲打の痕跡は、他の敲打痕のある分類に比べて不明瞭である。表面や裏面に敲打があるものは少ない。II c類は側縁と表面裏面の周縁に敲打、II d類は全体に敲打が加えられる。II a・II c→II dの工程が想定される。いずれも裏面は自然面を残すことが多く、特に刃部は自然面の屈曲を利用して作りだしている(c227~229・237・243・244)。

III類86点、IV類31点。欠損品が多く、完形品は少ない。使用により剥離痕や再加工作品もある。IV類の分類項目基準が刃部の研磨のため、基部のみの完成品や使用後の刃部再加工作品はIII類に含めた。

出土状況 遺構内から5点、遺構外から119点出土している。

計測値 長さは39~26.2cm、幅は25~11.4cmを測る。重量は21.64~2,150.88gの範囲に収まる。

その他 折れずに全形が残るもの(①~③)はI類が多い。折れた個体が接合したものはII類、特にII c・II d類が多い(接合個体77点中I類7点、II類68点、III類2点)。剥離段階では石斧の形状が作れず製作をやめる、敲打段階では折れによって制作を断念した例が多いのではと想定できる。II c・II d段階では、折れた個体を再調整しているものも多い(c250・257・259)。III~IV類は①~③まで全形を残すものが少なく、ほとんど接合しない(研磨段階では折れることはなく、使用による折損)。

石材 鑑定した1,362点の内訳は、砂岩329点(24%)、デイサイト質凝灰岩261点(19%)、デイサイト131点(10%)、安山岩質凝灰岩122点(9%)、ホルンフェルス112点(8%)、凝灰質砂岩107点(8%)、頁岩65点(5%)、細粒花崗閃緑岩42点(3%)、安山岩37点(3%)、流紋岩27点(2%)、細粒閃緑岩20点、凝灰岩18点、ヒン岩17点、玄武岩15点、デイサイト質破砕岩13点、安山岩質破砕岩11点、石英斑岩11点(以上1%)、花崗閃緑岩5点、閃緑岩3点、アオトラ石4点(推定2点含む)、凝灰質礫岩2点、珪質頁岩2点、細粒はんれい岩2点、アブライト1点、チャート1点、花崗斑岩1点、玉髓1点、細粒玄武岩1点、粗粒玄武岩1点(以上1%未満)となっている(第71図参照)。c267・304については飯塚義之氏(台湾中央研究院地球科学研究所)による肉眼鑑定のお礼を得、北海道日高山脈産のアオトラ石という鑑定結果を得ている。c282・288については飯塚氏による鑑定を経てはいないが、外観の特徴からアオトラ石の可能性があると考えている。

13) 石斧類(小型)(c307~329)

12)の石斧類のうち長さ7cm以下の小形のを一括した。合計点数は50点、うち23点図化掲載した。

分類 12)の石斧類と同じ。I類10点、II類5点、III類4点、III~IV類21点、IV類10点。III~IV類は刃部の研磨が行われており、分類上はIV類であるが刃部以外の個所で剥離面や自然面が顕著に残っていたり、側面の面取りがなかったりと、IV類と比べると視覚上完成形とは考え難いものをまとめた。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.6～6.9cm、幅は1.4～3.6cmを測る。重量は26～39.81gの範囲に収まる。

石材 鑑定した49点の内訳は、頁岩18点(37%)、ホルンフェルス7点(15%)、凝灰岩6点(12%)、砂岩4点(8%)、デイスait質凝灰岩4点(8%)、アオトラ石(推定)2点、凝灰質砂岩2点、細粒花崗閃緑岩2点(以上4%)、デイスait1点、安山岩質破砕岩1点、細粒閃緑岩1点、流紋岩1点(以上2%)となっている(第71図参照)。c312・327は外観の特徴からアオトラ石の可能性がある。

14) 礫器(c330～365)

礫の縁辺に刃部をもち、その形状から石斧刃部や石核調整段階と見なし難いもの。合計点数は2,219点、うち36点を図化掲載した。図化資料は全点からの選別が難しかったため、遺構内、II B f・g・m～pグリッド内から出土したものを中心に抽出している。

分類 素材の違いで2つに細分した。

I 自然礫を素材とするもの。

II 礫剥片を素材とするもの。

I類1,971点、II類248点とI類が大半を占める。I類は自然礫の片側を刃部とするもの(c330～333)がほとんどで、L字状(c335・336)やU字状になるものもある。裏面の調整剥離はなく、刃部の断面形は片刃となる。c346は1個体において刃部の作り出しを複数回行っていったようである。これら以外に両刃のもの(c348)や両端に刃部を持つもの(c349)、剥離が全周するもの(c347)なども若干存在する。II類は片面に自然面を残すものが大半で、両面剥離のものは少ない。刃部の場所、形状はI類と同じであるが、剥離が全周に及ぶ、いわゆる亀甲形をするものが多い(c354・358)。

出土状況 遺構内から10点、遺構外から26点出土している。

計測値 長さは5.2～15.7cm、幅は5.0～13.8cmを測る。重量は59.26～1,637.89gの範囲に収まる。

その他 礫器の形状を持つものでも、敲打や磨りの痕跡を残すものは敲磨器に分類している。備考欄に「礫器からの転用」と記載しているが、敲磨器から礫器への転用も含む。

石材 鑑定した357点の内訳は、砂岩84点(24%)、ホルンフェルス66点(18%)、デイスait41点(11%)、細粒花崗閃緑岩40点(11%)、チャート26点(7%)、頁岩25点(7%)、凝灰質砂岩18点(5%)、細粒閃緑岩17点(5%)、流紋岩6点(2%)、デイスait質凝灰岩5点、安山岩4点、石英斑岩4点、アブライト3点、花崗斑岩3点、細粒はれい岩3点、ヒン岩2点、安山岩質破砕岩2点、凝灰岩2点、赤色チャート2点(以上1%)、凝灰質礫岩1点、玄武岩1点、破砕岩1点、安山岩質凝灰岩1点(以上1%未満)となっている(第72図参照)。

15) 敲磨器(c366～503)

敲打痕、磨面をもつものを一括した。合計点数は2,698点、うち138点を図化掲載した。図化資料は全点からの選別が難しかったため、遺構内、II B e・g・k・o・pグリッド内から出土したものを中心に抽出している。

分類 以下の通り、使用の痕跡と部位で分類しこれらを組み合わせた。

(使用痕跡)

I 磨痕を持つもの。

II 敲打痕を持つもの。(いわゆる凹石も含む)

(部位)

a 表・裏面などの広い面に痕跡をもつもの。

- b 素材端部に痕跡をもつもの。
- c 素材側面に痕跡をもつもの。
- d a～cの複合。いわゆる多面体を含む。

I類は125点、II類2,492点、I・II類複合81点。

I b類とI c類は、I a類の磨面と比べてザラザラとした手触りで、敲打と磨りの両行為による痕跡と考えられる。細粒はんれい岩(c453～473)と、チャート(c474～503)は多面体敲石の石材として使用されている。端部→側面→表・裏面と使用しており、多面体となる過程が伺える。

出土状況 遺構内から16点、遺構外から122点出土している。

計測値 長さは3.6～25.9cm、幅は2.7～13.5cmを測る。重量は20.0～3,256.2gの範囲に収まる。

その他 礫器の形状で磨痕・敲打痕があるもの289点は本類に含めた。

石材 鑑定した1,574点の内訳は、細粒はんれい岩444点(28%)、砂岩365点(23%)、チャート349点(22%)、ホルンフェルス88点(6%)、デイサイト72点(5%)、凝灰質砂岩37点、頁岩32点、細粒花崗閃緑岩30点(以上2%)、花崗斑岩22点、細粒閃緑岩16点、カラーホルンフェルス14点、花崗閃緑岩14点、赤色チャート14点、流紋岩13点、凝灰岩12点、アブライト10点、安山岩8点(以上1%)、石英斑岩6点、ヒン岩5点、礫岩5点、デイサイト質破砕岩3点、安山岩質破砕岩3点、玄武岩3点、花崗岩2点、石英2点、凝灰質礫岩1点、赤色頁岩1点、破砕岩1点、安山岩質凝灰岩1点、デイサイト質凝灰岩1点(以上1%未満)である(第72図参照)。

16) 特殊磨石(c504～516)

細長い礫の辺縁部に磨痕を残すもの。断面形状が三角形、または楕円形・長方形。合計点数は148点、うち13点を図化掲載した。

分類 使用痕跡の2つに分類した。

- I 磨痕のみ
- II 磨痕と敲打痕

I類47点、II類101点。

緑辺部の磨痕は1辺のみがほとんどであるが、2辺以上のものも若干存在する(c154)。敲打痕は緑辺部の磨痕周辺(c507)、端部(c515・516)、広範囲(c506・512)など多様である。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは11.7～17.1cm、幅は6.1～8.8cmを測る。重量は624.7～1,160.9gの範囲に収まる。

石材 鑑定した74点の内訳は、砂岩37点(51%)、花崗閃緑岩12点(17%)、デイサイト8点(11%)、石英斑岩4点(6%)、細粒はんれい岩2点、閃緑岩2点(以上3%)、アブライト1点、デイサイト質破砕岩1点、ホルンフェルス1点、安山岩1点、凝灰岩1点、凝灰質砂岩1点、細粒花崗閃緑岩1点、細粒閃緑岩1点、片岩1点(以上1%)である。

17) 台石(c517～530)

磨痕・敲打痕がある石器で、形状及び重量から台として使用されたと考えられるもの。重量はおおよそ1,600g以上を台石としたが、これより重い個体でも、端部に敲打痕があるなど手持ちでの使用が想定される場合は敲磨器に分類した。合計点数は94点、うち14点を図化掲載した。

分類 敲磨器と同様に使用痕跡と部位で分類した(各分類点数については第8表参照)。

出土状況 遺構内から1点、遺構外から13点出土している。

計測値 長さは13.8～34.1cm、幅は13.2～27.5cmを測る。重量は1,303.2～10,730.5gの範囲に収まる。

石材 鑑定した26点の内訳は、砂岩8点(31%)、デイサイト4点(15%)、花崗閃緑岩4点(15%)、凝灰岩3点(11%)、花崗斑岩2点(8%)、アブライト、花崗岩、凝灰質礫岩、閃緑岩、流紋岩が各1点(各4%)である。

18) 石 皿(c531～533)

磨痕・敲打痕がある石器で台として使用したと考えられ、特に扁平な素材面を持つもの。合計点数は12点、うち3点を図化掲載した。

分類 敲磨器と同様に使用痕跡と部位で分類した(各分類点数については第8図参照)。

出土状況 遺構内から1点、遺構外から2点出土している。

計測値 長さは11.9～19.1cm、幅は10.6～16.5cmを測る。重量は302.52～1,072.46gの範囲に収まる。

石材 鑑定した4点の内訳は、凝灰質砂岩が3点(75%)、花崗閃緑岩1点(75%)である。

19) 付着物のある礫(c534～536)

磨痕・敲打痕は肉眼で観察できなかったが、付着物がある素材礫で、なにかしら使用した可能性があるものを一括した。合計点数は36点、うち3点を図化掲載した。

分類 細分していない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは9.0～10.2cm、幅は6.0～8.4cmを測る。重量は3.5～4.3gの範囲に収まる。

その他 付着物の種類については不明である。c531は被熱の痕跡がある。

石材 鑑定した4点の内訳は、デイサイト・砂岩が各2点(各50%)である。

20) 石 錘(c537～542)

素材周縁の端部に、対になる窪みを有する石器。合計点数は30点、うち6点を図化掲載した。

分類 対になる窪み部の位置で3つに分類した。

I 長軸の端部

II 短軸の端部

III 長軸・短軸の両端部

I類5点、II類24点、III類1点で、II類が多い。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは3.3～8.8cm、幅は1.9～11.6cmを測る。重量は7.33～624.08gの範囲に収まる。II類は重量30g以下、120～400g、599g以上に分かれる。

石材 鑑定した8点の内訳は、砂岩3点(37%)、デイサイト2点(24%)、アブライト1点、細粒花崗閃緑岩1点、細粒閃緑岩1点(各17%)である。

21) その他の礫石器

上記の礫石器のいずれかに該当すると考えられるが、欠損等で識別ができないものを一括した。合計点数は41点、図化掲載はしていない。

22) 円板状石器(c543~553)

周縁を打撃によって加工し、円形に成形したもの。合計点数は22点、うち11点図化掲載した。

分類 以下の2つに細分した。

I 小礫を使用し、周辺を剥離・敲打して円形に成形しているもの。

II 片面または両面に剥離面を持ち、周辺を剥離・敲打して円形に成形しているもの。

I類10点、II類12点。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.8~5.9cm、幅は2.9~6.1cmを測る。重量は12.30~100.22gの範囲に収まる。

石材 鑑定した11点の内訳は、ホルンフェルス・砂岩が各5点(各46%)、頁岩が1点(8%)である。

23) 棒状石製品(c554~563)

剥離・敲打・研磨調整によって棒状に成形されたもの。合計点数は12点、うち10点図化掲載した。

分類 細分はしていないが、剣状に研磨されたもの(c554~559)と棒状のもの(c560~563)に分かれる。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは3.2~11.1cm、幅は1.4~4.6cmを測る。重量は2.04~241.81gの範囲に収まる。

石材 鑑定した10点の内訳は、珪化木6点(60%)、砂岩2点(20%)、ホルンフェルス・粘板岩各1点(各10%)である。剣状のもの石材は、いずれも珪化木である。

24) 球状耳飾(c564~566)

合計点数は3点、全点図化掲載した。

分類 細分はしていない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは4.0~4.7cm、幅は2.5~5.7cmを測る。重量は13.21~34.05gの範囲に収まる。

石材 鑑定した3点の内訳は、滑石が2点(67%)、花崗斑岩が1点(33%)である。

25) 有孔石製品(c567~570)

貫通孔を有するもの。合計点数は4点、すべて図化掲載した。

分類 細分はしていない。c567は欠損部にも擦痕があり、玉類の再加工品の可能性がある。c568・569は人工的な穿孔、c570は非人為の孔であるが裏面に磨痕が観察できる。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは2.5~9.0cm、幅は2.3~7.0cmを測る。重量は8.64~239.41gの範囲に収まる。

石材 鑑定した4点の内訳は、デイサイト・砂岩・滑石・凝灰岩が各1点(25%)である。

26) その他石製品(c571・572)

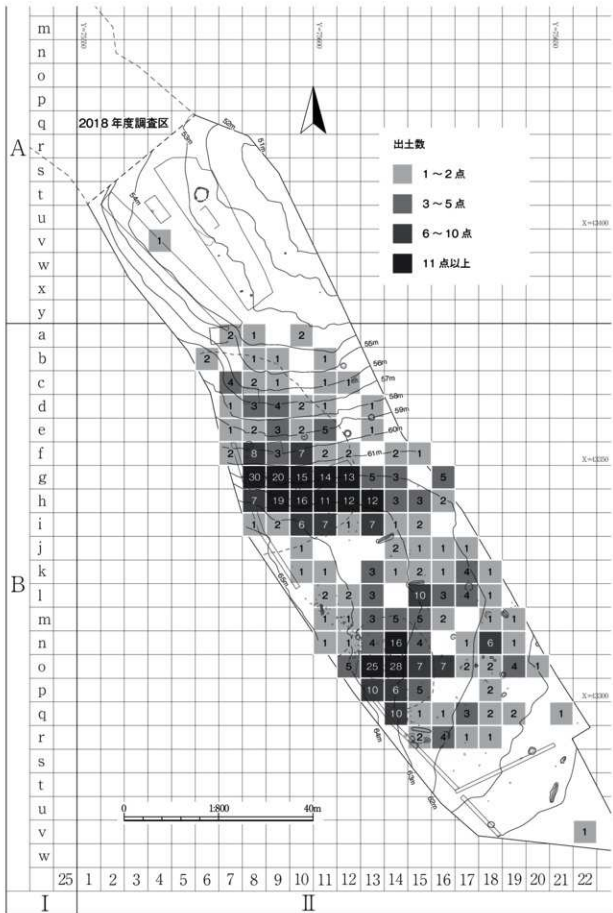
23)~25)に含まれない石製品を一括した。合計点数は2点、全点図化掲載した。

分類 細分はしていない。

出土状況 すべて遺構外の出土である。

計測値 長さは4.1~5.1cm、幅は3.2~4.2cmを測る。重量は11.58~21.80gの範囲に収まる。

石材 鑑定した2点の内訳は、凝灰岩・珪化木が各1点(50%)である。(村上・丸山)



第70図 石器出土数分布図

第7表 出土地点別石器出土数一覧(1)

器種	2号壙穴建物	2号土坑	5号土坑	10号土坑	16号土坑	21号土坑	23号土坑	26号土坑	32号土坑	40号土坑	1号集石
石鏃											
矢頭器											
石鏃											
石匙											
スクレイパー											
石鏃											
不定形石器											
U.F.											
両極刮片・楔形石器											
翼形石器											
石核											
石斧頭			1				2	1		1	
石斧頭(小形)											
鏃器	3		1	1			4				1
鏃器類	3	1	1	1	2	4	2		1		1
特殊磨石											
白石			1								
石皿	1										
付着礫											
石鏟											
円板状石器											
棒状石製品											
球状耳飾り											
玉・有孔礫											
その他石製品											
合計	7	1	4	2	2	4	6	1	1	1	2

単位:個

第7表 出土地点別石器出土数一覧(2)

単位:個

器種	II Atv	II B10a	II B10d	II B10e	II B10f	II B10g	II B10h	II B10i	II B10j	II B10k	II B11b	II B11c	II B11d	II B11e	II B11f	II B11g	II B11h
石鏃					1		2						1				3
先端器																	1
石鏃			1	1		1											
石匙			1		2												1
スクレイパー							1										
石鏃					1		1										1
不定形石器							3	1									
UF																	
両端削片・楔形石器							2										
角形石器						1											
石核			1		1												1
石斧頭	1					4	3	1						3	2	2	
石斧頭(小形)						1		1									
鏃器						1										2	
鍬形器類				1	1	6	3	2	1					1	7	2	
特殊磨石														1	1		
白石																1	1
石重																	
付着礫																	
石鏃																	
円板状石器						1	1				1						
棒状石器類										1		1				1	1
球状耳飾り					1												
玉・有孔礫			1														
その他石製品																	
合計	1	2	2	2	7	15	16	6	1	1	1	1	1	5	2	14	11

第7表 出土地点別石器出土数一覧(3)

器種	単位:個																
	Ⅱ B11i	Ⅱ B11k	Ⅱ B11l	Ⅱ B11n	Ⅱ B12c	Ⅱ B12f	Ⅱ B12g	Ⅱ B12h	Ⅱ B12i	Ⅱ B12j	Ⅱ B12m	Ⅱ B12n	Ⅱ B12o	Ⅱ B13d	Ⅱ B13e	Ⅱ B13g	Ⅱ B13h
石鏃				2					1								3
先端器																	
石鏃					1												
石匙	1					1	1	1			1					1	2
スクレイパー															1		
石鏃							1						1				
不定形石器	1						2		1								
UF																	1
両端削片・楔形石器																	
角形石器																	
石核																	
石斧頭	5			1		1	5		1		1		1	1			2
石斧柄(小形)						1	2										2
鏃器						2										2	
鍬形器類						1	4						2				1
特殊磨石																	
白石							2	1			1						
石皿																	
付着礫							1										
石鏃																2	
円板状石器																	
棒状石器製品							1										1
球状耳飾り																	
玉・有孔礫																	
その他石製品																	
合計	7	1	2	1	1	2	13	12	1	2	1	1	5	1	1	5	12

第7表 出土地点別石器出土数一覧(4)

単位:個

器種	Ⅱ B13i	Ⅱ B13k	Ⅱ B13l	Ⅱ B13m	Ⅱ B13n	Ⅱ B13o	Ⅱ B13p	Ⅱ B14f	Ⅱ B14g	Ⅱ B14h	Ⅱ B14i	Ⅱ B14j	Ⅱ B14k	Ⅱ B14m	Ⅱ B14n	Ⅱ B14o	Ⅱ B14p
石鏃					1	2	3										3
先端器						1			1								
石鏃																1	1
石匙				1		2				1			1	1	2	2	
スクレイパー						2			1								
石鏃		1												1	1		
不定形石器	1			1	2	2										2	
UF	1															1	
両端削片・楔形石器			1				1										1
角形石器						1											
石核						1											
石斧頭	1	1	2	1	2	2				2				1	2	1	
石斧頭(小形)							1								1	2	2
鏃																	
鍬形器類	2	1		1		10	1		1			1			1	12	
特殊磨石								1				1					
白石						1										1	1
石重																	1
付着鏃																	
石鏃	1					1											
円板状石器							2										
棒状石器類	1																1
球状耳飾り																	
玉・有孔鏃																	
その他石製品																	
合計	7	3	3	3	4	25	10	2	3	3	3	1	1	5	9	26	6

第7表 出土地点別石器出土数一覧(5)

単位:個

器種	II B14q	II B15f	II B15h	II B15i	II B15j	II B15k	II B15l	II B15m	II B15n	II B15o	II B15p	II B15q	II B15r	II B16g	II B16h	II B16j	II B16k
石鏃			1														
矢頭器	1													1			
石鏃								1							1		
石匙									1								
スクレイパー										1							
石鏃																	
不定形石器	1								2								
UF													1				
両端削片・楔形石器																	
角形石器																	
石核	1																
石斧頭	2	1	1	1	1		2	1		1	1	1		1		1	
石斧頭(小形)						1					1				1		
鏃器	1							1		3	1						
鋭形器類	2		1	1		1	2	1	1	1			1	2			
特殊磨石														1			
白石																	
石重																	
付着鏃																	
石鏃																	1
円板状石器										1							
棒状石器類																	
球状耳飾り																	
玉・有孔鏃																	
その他石製品																	
合計	8	1	3	2	1	2	2	5	4	7	5	1	2	5	2	1	1

第7表 出土地点別石器出土数一覧(6)

単位:個

器種	II B16m	II B16o	II B16q	II B17j	II B17k	II B17n	II B17q	II B17r	II B18k	II B18l	II B18m	II B18n	II B18o	II B18p	II B18q	II B18r
石鏃																
矢頭器																
石鏃																
石匙			1					1			1					
スクレイパー					1											
石鏃																
不定形石器		1														
UF																
両縁細片・楔形石器	1															
磨形石器																
石核													1	1		
石斧類	2	3			1	1						3	1	1		1
石斧類(小形)															1	
鏃																
鋳器類	1	1	2	1	1		3		1	1			1		1	
特殊磨石					1											
白石																
石重																
付着礫																
石鏃													1			
円板状石器																
棒状石製品													1			
珠状耳飾り																
玉・有孔礫			1											1		
その他石製品																
合計	3	2	7	1	4	1	3	1	1	1	1	6	2	2	2	1

第7表 出土地点別石器出土数一覧(7)

単位:個

器種	II B19m	II B19n	II B19o	II B19q	II E20o	II B21a	II B22v	II B6b	II B7a	II B7c	II B7d	II B7e	II B7f	II B8a	II B8b	II B8c	II B8d
石鏃						1			1								
先端器																	
石鏃									1								
石匙	1				1												1
スクレイパー						1											
石鏃																1	
不定形石器				1										1			
UF																	
両縁潤片・楔形石器		1								1							
角形石器							1			1							
石核										1							
石斧頭										1	1						
石斧頭(小形)			1	1													
鏃器																	
鍬形器類				1								1	1				1
特殊磨石																	
白石																	
石重																	
付着鏃																	
石鏃																	
円板状石器								1							1		1
棒状石器品																	
球状耳飾り																	
玉・有孔鏃																	
その他石製品																	
合計	1	1	2	2	1	1	1	2	2	4	1	1	2	1	1	2	3

第7表 出土地点別石器出土数一覧(8)

単位:個

器種	II E8e	II E8f	II E8g	II E8h	II E8i	II E9a	II E9b	II E9c	II E9d	II E9e	II E9f	II E9g	II E9h	II E9i	II Bグリップ	その他
石鏃		1		1					1		1	2	2			
先端器		1											1			1
石鏃		1	1													
石匙			4	1				1				1			5	1
スクレイパー												1			2	
石鏃			1												2	
不定形石器												1	3	1		2
UF																
両端削片・楔形石器			1				1						1			
貫形石器													1		2	
石核																1
石斧頭	1	2	4	2				1	2			4	5		20	1
石斧頭(小形)				1								1	2			
鏃		2	3									2				2
鍬形器類	1	13	1	1	1				2		1	7	3	1		2
特殊磨石		1									1	1			3	
白石		1	1												1	
石重																
付着鏃															1	1
石鏃																
円板状石器									1		1					
棒状石器類			1										1			
球状耳飾り																
玉・有孔鏃																1
その他石製品																
合計	1	8	30	7	1	1	1	1	4	3	3	20	19	2	43	7

第8表 石器の分類

①石鎌

分類	I	II	III	IV	V	失敗品	その他	合計
点数	14	6	2	2	3	4	3	34

②石鎌

分類	I	II	合計
点数	9	2	11

③石匙

分類	I	I a	I b	I c	I d	I e	II	III	合計
点数	2	4	12	9	3	5	3	4	42

④スクレイパー

分類	a	b	c	合計
点数	6	3	4	13

⑤石匙

分類	a	b	c	合計
点数	5	6	1	12

⑥両極削片・楔形石器

分類	a	b	合計
点数	8	3	11

⑦石斧類

分類	I a	I c	II a	II b	II c	II d	III	IV	合計
点数	11	11	10	1	25	19	29	18	124

⑧石斧類(小形)

分類	I a	I c	III	III-IV	IV	合計
点数	2	3	1	11	6	23

⑨礮器

分類	I	II	合計
点数	21	15	36

⑩磨石類

分類	I a	I a II a	I c	I c II d	I d	I d II d	II a	II a 欠損	II b	II b 欠損	II c	II d	II d 欠損	合計
点数	9	6	2	1	1	2	14	3	25	1	6	67	1	138

⑪特殊磨石

分類	I	II	合計
点数	1	12	13

⑫台石

分類	I a	I a II a	I a II a 欠損	I a II d	I a 欠損	II a	II a 欠損	II d	合計
点数	2	3	1	2	1	2	1	2	14

⑬石皿

分類	I a	II a	合計
点数	2	1	3

⑭石鎌

分類	I	II	III	合計
点数	1	4	1	6

⑮円板状石器

分類	I	II	合計
点数	4	7	11

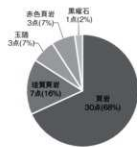
第9表 石器の器種別掲載率一覧

番号	器種	登録点数	石質鑑定数	石質鑑定実施率	掲載数	掲載率
1	石鎌	150	44	29.3%	34	22.7%
2	尖頭器	10	8	80.0%	8	80.0%
3	石鎌	13	11	84.6%	11	84.6%
4	石匙	300	66	33.0%	42	21.0%
5	スクレイパー	33	16	48.5%	13	39.4%
6	石匙	60	18	30.0%	12	20.0%
7	不定形石器	205	48	23.4%	31	15.1%
8	UF	59	5	8.5%	4	6.8%
9	両極削片・楔形石器	73	15	20.5%	11	15.1%
10	異形石器	7	7	100.0%	7	100.0%
11	石核	85	18	21.2%	9	10.6%
12	石斧類	1378	1362	98.8%	124	9.0%
13	石斧類(小形)	50	49	98.0%	23	46.0%
14	礮器	2219	357	16.1%	36	1.6%
15	磨石類	2098	1574	58.3%	138	5.1%
16	特殊磨石	148	74	50.0%	13	8.8%
17	台石	94	26	27.7%	14	14.9%
18	石皿	12	4	33.3%	3	25.0%
19	付着礮	36	4	11.1%	3	8.3%
20	石鎌	30	8	26.7%	6	20.0%
21	円板状石器	22	11	50.0%	11	50.0%
22	棒状石製品	12	10	83.3%	10	83.3%
23	球状耳飾り	3	3	100.0%	3	100.0%
24	玉・有孔礮	4	4	100.0%	4	100.0%
25	その他石製品	2	2	100.0%	2	100.0%
	合計	7644	3744	49.0%	572	7.5%

第10表 石器の石質

【石目番号】 ACa：安山岩質燧石片、Ab：安山岩、Ap：アプライト、At：安山岩質燧石片、Ba：玄武岩、Cb：チャート、Da：ディライト、Dca：ディライト質燧石片、Dcb：粗粒玄武岩、Dd：粗粒玄武岩、DTT：ディライトチャート、FDS：燧石燧石片、FDB：燧石燧石片、FGd：燧石燧石片、Gd：燧石燧石片、Gp：燧石燧石片、Hb：ホルンフェルス、Ob：黒曜石、Pb：黒曜石、Pb：黒曜石、Qp：石英燧石、Rb：流紋岩、Rc：流紋岩、Rcs：準玄武岩、Sb：砂岩、Ss：燧石、Ssb：燧石燧石片、Tc：燧石燧石片、Tcs：燧石燧石片

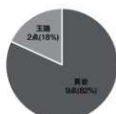
	ACa	Ab	Ap	At	Ba	Cb	Da	Dca	Dcb	Dd	Dca	Dcb	Dcd	FDS	FDB	FGd	Gd	Gp	Hb	Ob	Pb	Qp	RcS	Rb	Rcs	Sb	Ss	Tc	Tcs	合計	
石核																															24
尖頭部																															8
石鏃																															11
石鏃																															42
スクリュー																															13
石鏃																															12
不定形石片																															20
UF																															4
燧石燧石片 燧石燧石片																															11
燧石燧石片																															7
石核																															9
石鏃																															124
石鏃(小形)																															2
燧石																															23
燧石																															26
燧石燧石片																															126
特殊燧石																															13
燧石																															14
燧石																															3
燧石燧石片																															3
燧石燧石片																															6
燧石燧石片																															10
燧石燧石片																															3
燧石燧石片																															1
燧石燧石片																															2



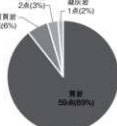
①石鏃



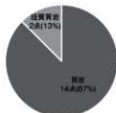
②尖頭器



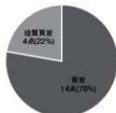
③石錐



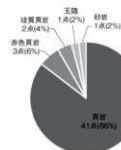
④石匙



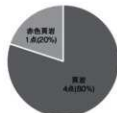
⑤スクレイパー



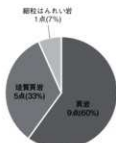
⑥石笄



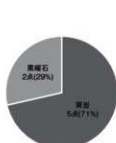
⑦不定形石器



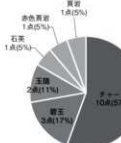
⑧U.F.



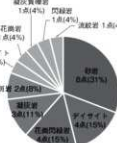
⑨両極刃片・楔形石器



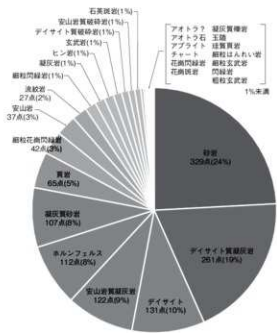
⑩異形石器



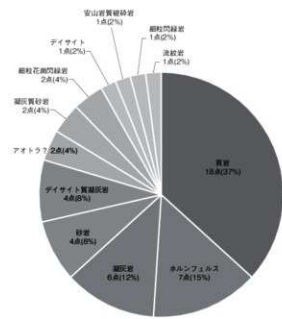
⑪石核



⑫台石

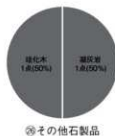
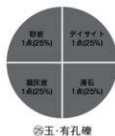
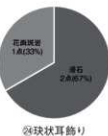
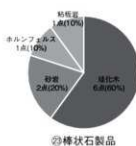
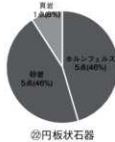
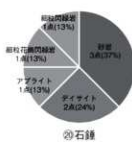
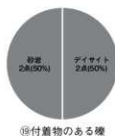
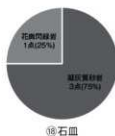
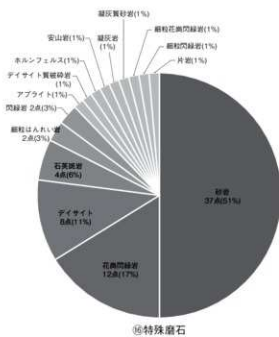
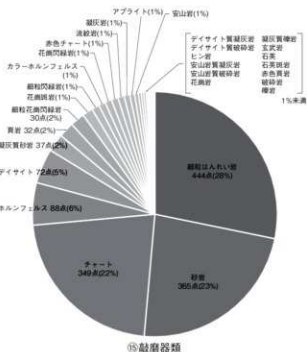
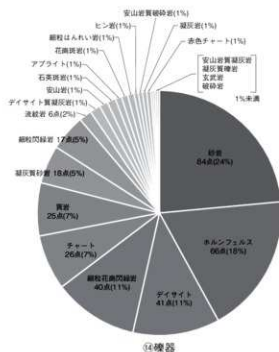


⑬石斧類



⑭石斧類(小形)

第71図 石器の石質(1)



第72図 石器の石質（2）

V 平成30年度調査区の遺構と遺物

1 概要・基本土層

平成30年度の調査区は平成29年度調査区の北に隣接し、南西から北東方向に伸びる尾根を中心とした一帯である。調査区中央に標高60m余りの尾根頂部が位置し、北、東、南の3方に向かって緩斜面が広がる。南側斜面は平成29年度調査区の北端に位置する東西方向の谷部に連続しており、尾根頂部との標高差は最大7mほどである。また、調査区北東部は前年度に工事用走路として先行して調査を行った幅5m余りの調査区に接する。

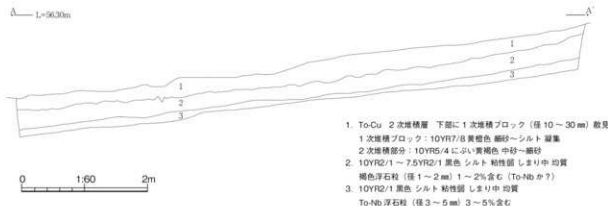
斜面下部では平成29年度調査において谷部中央の精査時に把握した基本層序に対応する、下記の各土層が確認できる。

- 1層 黒色土層 表土
- 2層 黒色土層 縄文後期遺物包含層
- 3層 黒褐色土層 To-Cu浮石含む 谷部ではTo-Cu一次・二次堆積層を確認
- 4層 黒色土層 To-Nb浮石粒少量含む
- 5層 黒色土層 To-Nb浮石粒含む 谷部ではTo-Nb一次堆積層を確認
- 6層 暗褐色土層 To-H浮石粒含む
- 7層 黄褐色～浅黄橙色粘土層 To-Hテフラ層

なお、基本層序の模式的な残存は斜面下部に限られ、斜面上部から尾根上にかけての一帯では2～6層が欠落し、1層直下に7層が広がる部分が多い。遺構検出面は尾根部では7層上面、谷部では5層上面が概ね該当する。

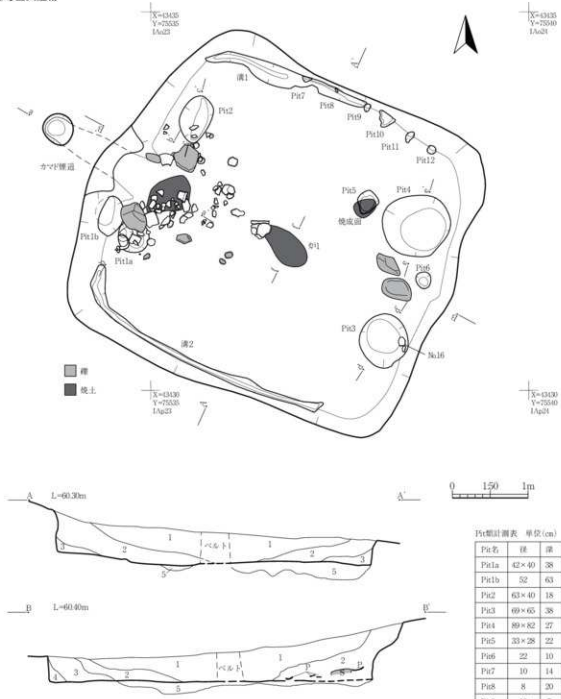
検出遺構は尾根頂部に奈良時代の竪穴建物2棟があるほか、近現代の炭竈1基、南東部の斜面部に縄文時代前期を中心とした時期の円筒形陥し穴3基、縄文時代のフラスコ状土坑10基、他に時代不明の土坑6基を検出した。土坑類の分布は南東側斜面に多く、北半斜面では少なくなる。

遺物は縄文時代のものとして土器類0.5箱(1点掲載)、石器類1箱(7点掲載)がある。また奈良時代の遺物では土師器3箱(26点掲載)、石器類2箱(8点掲載)、土製品11点(11点掲載)、鉄製品3点(掲載なし)が出土している。遺物の大半は2棟の竪穴建物から出土したもので、遺構外出土遺物は少量である



第73図 平成30年度調査区南端谷部土層断面

3号竪穴建物



3号竪穴建物

- 10Y22-1 黒色シルト 粘性弱 しまり弱
To-Nb 浮石粒1~3%含む 均質
- 10Y33-2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中~弱
褐色土大アロク5~10%、To-Nb 浮石粒3~5%、炭化物若干含む
- 10Y32-2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり弱
To-Nb 浮石粒1~3% 焼土散在含む
- 10Y34-4 褐色シルト 粘性中 しまり中
腐葉層アロク
- 10Y34-6 褐色シルト 粘性中 しまり強
腐り方土

第74図 3号竪穴建物(1)

2 遺 構

(1) 堅 穴 建 物

3号堅穴建物(第74・75図、写真図版35～37)

[位置・検出状況・重複関係]平成30年度調査区中央の尾根頂部、I A23oグリッド付近に位置する。表土～2層を除去して露出した6層下部中で、黒色土の方形プランとして検出した。地表面には窪地は形成されていない。なお、重複遺構はない。

[平面形・規模]堅穴は主軸方位をN-65°-Wに持つ方形で、四隅はやや丸みを持ち、カマドが設置される北西壁は中央が若干外側に張り出す。規模は北西-南東4.9m、北東-南西4.8m。床面積は約15.8㎡。深さは北西壁側で最大100cmに達する。

[堆積土]4層に分層される。壁際の4層は第一段階で周囲から流入した暗褐色土層、次いで地山ローム層に由来する褐色土ブロックを含む3層暗褐色土層が全体を覆い、最終的に中央の窪地に1・2層の黒褐色土層が堆積した状態である。層界を見ると壁際下部から順に埋没した自然堆積の状況を示している。

[壁・床面]壁面は概ね急傾斜で立ち上がり、上部が広がる。床面は斜面下方の東側に向かって緩く下がる傾斜を持ち、やや中央が硬化するが、範囲を明示するには至らない。

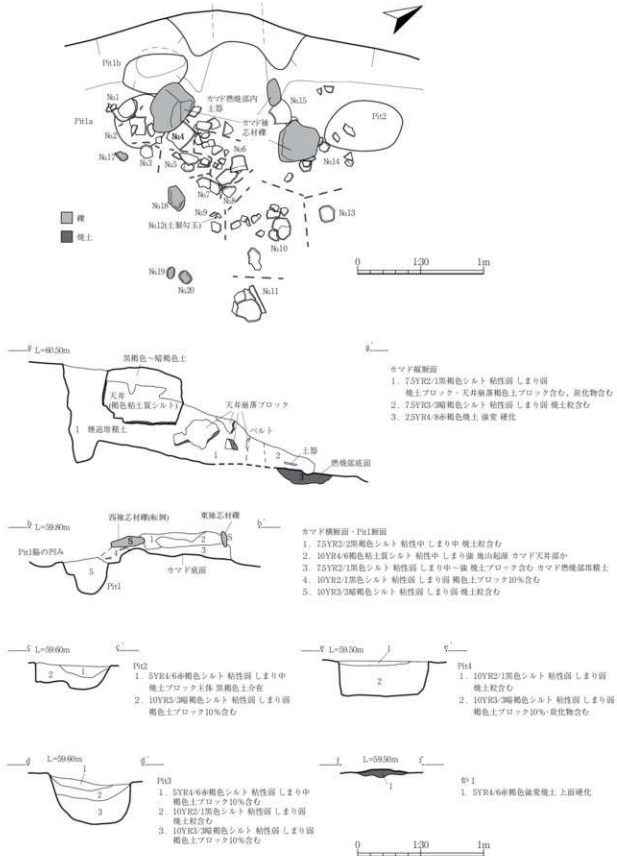
[カマド]北西壁中央部に、削り抜き式の長煙道を持つカマド1基が設置される。燃烧部の残存状況は比較的良好である。左右の袖に芯材として設置された可能性の高い砂岩製の板状礫が、いずれも外側に横転した状態で出土した。袖基部は、地山の7層八戸火山灰層起源ローム層を一部掘り残した状態で確認したが、残存する高さは5cm内外であり、両袖ともに芯材以外の袖構築土は散乱しているとみられる。燃烧部上部では、天井部構築土の可能性のある褐色シルトの大小ブロックが観察された。ただし、これも断片的な状態のため本来の形状を復元することはできない。

燃烧部手前側には楕円形の強い熱変色を受けた焼成面が65×45cmの範囲で残る。焼土厚は最大12cmで、最上部は若干還元色を帯びる。煙道は天井の崩落が少なく当初の形状を留めており、横断面は円形に近い。堅穴軸方位から僅かにずれるN-60°-W方位に伸び、全長は約1.5m、底面の傾斜はほぼ水平である。煙出し部は開口部径40cmで、底面は横穴部より一段深く掘り込まれ、検出面からの深さは80cmに達する。煙出し坑上半の側壁には被熱痕が顕著に残り、壁面の硬化が進んでいる状態が観察される。

[炉]堅穴中央床面に強い熱変色の焼成面を持つ炉1、東寄りのPit5上面に弱い焼成面を持つ炉2を検出した。炉1は75×40cmの楕円形の焼土範囲で、焼土厚は6cm、上面は硬化する。炉2は30×25cmのやや小規模な焼土範囲で焼土厚はごく薄い。これらの炉については鍛冶炉の可能性を考慮し、周囲の床面土壌を採取したが、鍛冶剥片等は検出されておらず、炉の性格は不明である。

[柱穴・土坑]カマド両側壁際にPit1・2、対向する南東壁にPit3・4の土坑を検出。これ以外に、南東部のPit4周囲に小規模な土坑のPit5・6、北東壁際の立ち上がり部分と周溝内からPit7～12を検出した。Pit1はカマドの西側に隣接する楕円形の土坑Pit1aと、この奥側で壁面下部を挟み込むように掘られたPit1bが接する状態である。Pit1aは炭化物や焼土粒を含む黒色土で埋没しており、上面に土師器大破片とカマド袖芯材の板状礫が乗る。Pit1bは天井部の崩落によるとみられる地山と同相の褐色シルト層が堆積しており、この下位から土師器大破片が出土した。Pit2はカマド東側にある楕円形の浅い土坑。堆積土上部には焼土粒が多量に含まれる。Pit3は南東壁寄りに位

3号竪穴建物 カマド周辺遺物出土状況



第75図 3号竪穴建物(2)

置き、半円形に掘り込まれる。堆積土上部では焼土ブロックが多量に混入する。土坑内部からは段丘礫層に含まれる小円礫が集中的に出土した。現場で識別し取り上げたもので合計178個、1.180gの総量がある。このうち最大の礫で径60mm、平均は15~20mm程度である。他ではこのように小円礫が集中して出土した地点はなく、用途は不明なもの、意図的に土坑内に廃棄、または貯蔵した可能性が高いと考えられる。Pit4は径に比して浅めの土坑で、暗褐色土の堆積土中から土製紡錘車が2点出土した。

北東壁際のPit7~12は凡そ30~40cmの間隔で杭列状に配置された小穴である。開口部は10~20cm程、下部がやや外側に傾斜する方向に掘り込まれ、10cm前後の深さを確認している。他3辺の壁際では同様の小穴列は検出していない。

[周溝]北東壁の溝1、南西壁際の溝2がある。幅は10~20cm程、深さは3~10cm程で、堅穴堆積土下部と同相の黒褐色土で埋没する。北東壁際の溝1底面では上述の小穴列が検出された。両者の関係は不明な点が多いが、杭状の柱と板状の部材を組み合わせて、壁面の土留め等を目的とした設備の設置痕ではないかと考えられる。

[遺物出土状況]土坑内等の特殊な遺物出土状態については上述した。床面ではカマド周囲に大小の土器片、礫石器が集中的に出土している。平面位置を記録して通し番号を付して取り上げたものについて、第75図に示した。これらの他に、南東壁寄りのPit3・4中間付近床面から風化が進んだ砂岩の扁平礫が2個出土している。使用、加工の痕跡は確認できない。出入り口施設等の、堅穴内の何らかの施設を構築した部材の可能性を想定している。

[遺物](遺物図版176・177・179・180、写真図版179~183)

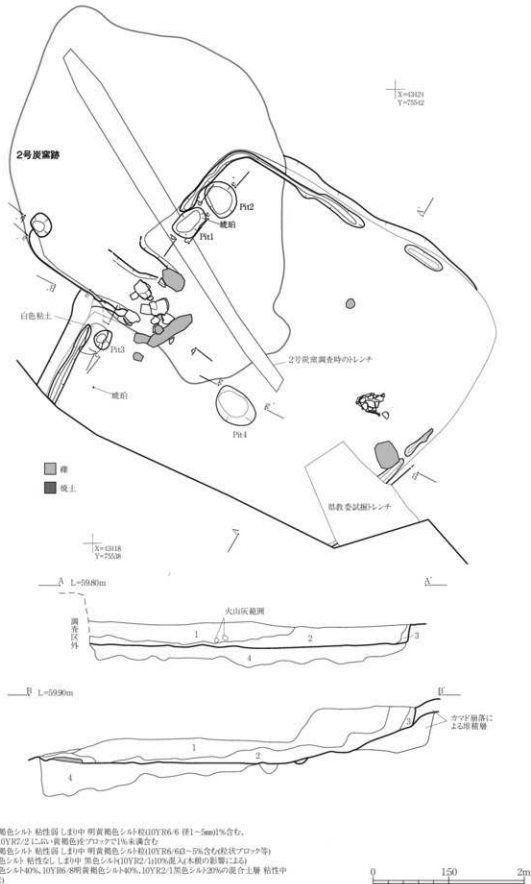
遺構内から土器21,334g、土製品145.8g、焼成粘土塊22.3g、石器8,578.6gが出土し、このうち土器20点、土製品10点、石器6点を図化・掲載した。

土器は全て土師器で成形にロクロは使用されていない。器種はa2001~2006が坏、a2007~2015は甕、a2016・2017は甕でa2018~2020はミニチュアである。坏はいずれも底部が丸く、器面調整は外面の大半にミガキが施され、体部下~底部にケズリが残る。内面はミガキでa2003~2006は黒色処理が施されている。甕は最大径が口縁部にある長胴形と胴部にある球胴形があり、底部は厚く突き出た形状を呈する傾向にある。器面調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部が縦位方向にハケメ、ナデを施したものの(a2008・2009)とその後にヘラミガキ加えられているものがある(a2007・2010~2015)。内面の調整も口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、ナデを斜・横位方向に施し、その後にミガキを加えているもの(a2011・2012)もあるが、外面に比べると少ない傾向にある。甕はいずれも破片であるが、逆台形状の形状を呈すると推定され、底部は無底で、胴部下に孔が1箇所ある。器面調整は外面がハケメ、ナデの地下にミガキを加えている。内面は口縁部ヨコナデ、胴部は下端にケズリが残るが他はヘラナデ後にミガキを加えている。

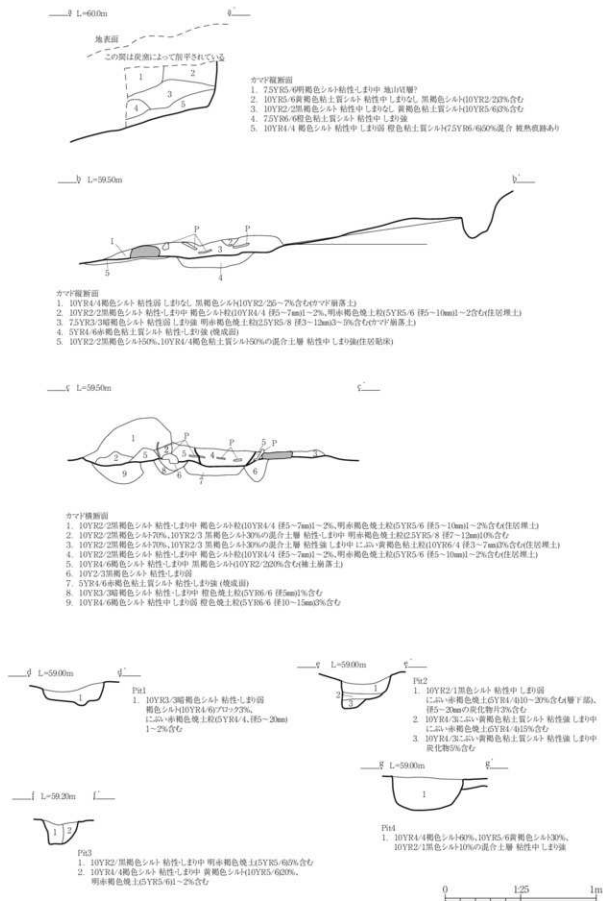
土製品は勾玉6点、土玉1点、紡錘車3点が出土した。

石器は6点を図化・掲載した。器種は磨石類5点、台石1点である。c2006は片面に磨面と数条の溝跡が残っていることから石皿や砥石として使用されたものと考えられる。また、出土地点や被熱の痕跡があることからカマド袖の芯材として使用されていたと考えられる。a2001~2005は磨石類でc2001・2002・2004・2005は研磨痕以外の調整はない。c2003は上面に大きな凹みの痕跡があり、側面には磨痕が認められる。石材は軽石を使用し、形状は四角柱に近いが、底面以外は丸みを帯びている。[小結]床面出土土器の年代観から7世紀後半~8世紀前半代の堅穴住居跡と判断する。床面中央の炉、片方の壁際にある杭列、カマド対面にある土坑と扁平礫等の特徴がある。

4号竪穴建物

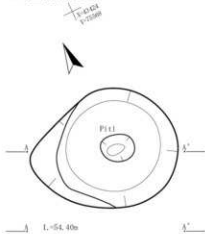


第76図 4号竪穴建物(1)



第77図 4号壁穴建物(2)

41号土坑 (陥し穴)



L=54.40m



41号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり中 径1~5cmTo Ni浮石1%含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 しまり弱 径1~5cmTo Ni浮石2%含む
3. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 しまり中 径1~5cmTo Ni浮石5%含む 堆山崩落土

42号土坑



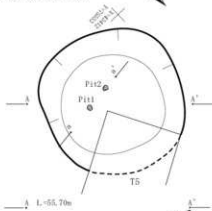
L=96.00m



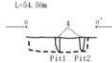
42号土坑

1. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱~中 10YR4/3に多い黄褐色シルト5%、径1~5cmTo Ni浮石1%含む
2. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中 10YR4/3に多い黄褐色シルトブロック30%、径1~5cmTo Ni浮石1%含む

43号土坑 (陥し穴)



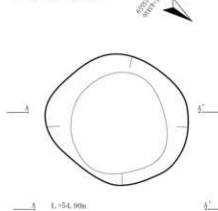
L=55.70m



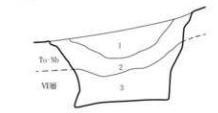
43号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまりなし 径1~5cmTo Ni浮石20%含む 二次堆積
2. 10YR2/1黒色シルト 粘性中 しまり弱 径1~5cmTo Ni浮石1%含む
3. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 しまり弱 径1~5cmTo Ni浮石2%含む
4. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 しまり弱 径1~10cmTo Ni浮石3%含む

44号土坑 (陥し穴)

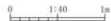


L=54.90m



44号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり弱 径1~5cmTo Ni浮石1%含む
2. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり中 径1~5cmTo Ni浮石2%含む
3. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 しまり弱 径1~5cmTo Ni浮石2%含む



第78図 41~44号土坑

4号竪穴建物(第76・77図、写真図版38~41)

[位置・検出状況・重複関係]調査区北側に位置し、I A 23q など複数グリッドに跨がって検出した。カマドを中心とする遺構の北側が本遺構よりも新しい2号炭窯により削平されている。また、遺構の西側は調査区外へと延びているため未検出、南側の壁面は一部のみしか確認できず、貼床のみの検出である。

[平面形・規模]平面形は方形と推測され、規模は北西-南東壁間の床面で4.64m、検出面から床面までの深さは57cmを測る。

[堆積土]埋土は自然堆積を呈し、全体に黒褐色シルトを主体とする。壁面付近は黒色シルト混じりの褐色シルトが堆積している。

[壁・床面]壁は垂直に近い角度で立ち上がる。床面はやや緩い凹凸があるがおおよそ平坦に近い。斜面下方側の中心に褐色シルト、明黄褐色シルト、黒色シルトによる混合土により貼床が施されている。また、カマドを除く壁際に沿って幅6~15cmの溝が巡らされている。附属施設として土坑4基を検出した。

[カマド]カマドは東壁の中央と推定される位置に構築されている。煙道の大半が2号炭窯との重複により削平を受けており、残存するのは北西側の一部と煙出口下部のみである。煙道部の構造は列り抜き式で軸方向はN-53°-Wを向く。煙道入口側から8°の傾斜で上がり、90cmのところで煙出部と接続する。幅は削平により不明である。煙出部の規模は開口部径29×23cm、底部径16×12cmを測る。カマド本体も煙道部同様、重複による削平を受けており、残存状況は悪い。壁際の袖土は住居を構築する際に地山を残して使用したもので、袖先端には土器片および扁平な礫を芯材としている。この上に明赤褐色焼土混じりの褐色~暗褐色シルトが崩落した状態で堆積している。焼成面は煙道部の延長線上の袖部間に位置し、径53cmの範囲に広がっている。焼土の層厚は最大で6cmを測る。

[土坑類]4基検出し、このうち3基が北西壁際に位置する。形状は楕円形で規模は開口部径27~59cmを測る。P1の東壁付近から琥珀片が出土した。

[遺物](遺物図版178・180、写真図版181~183)

遺構内から土器8.0374g、土製品21.4g、石器1.9906gが出土した。このうち土器6点、土製品1点、石器3点を図化・掲載した。土器はa2021・2022が坏でa2021はP1、a2022が貼床から出土した。器面調整はいずれも内外面ミガキでa2021の内面には黒色処理が施されている。a2023・2024は長胴甕で器面調整はa2023が口縁部ヨコナデ、胴部は内外面ナデやハケメを施した後にミガキが施されている。a2024の胴部外面は縦位方向のケズリ調整後にナデやハケメを施しているがケズリによって移動した砂粒の筋状痕跡が消えずに各所に残る。またa2024の胴部内面の中段~下位に被熱の痕跡が認められ、煤が付着している。石器はc2008が床面から出土した磨石で表裏両面に磨痕が認められる。c2009は砥石で石材には軽石が使用され、研磨による痕跡により多面体の形状を呈する。c2007は磨製石斧の刃部破片でPit1内から出土した。他に琥珀の破片が床面北西側および、Pit1の底面付近から出土した。

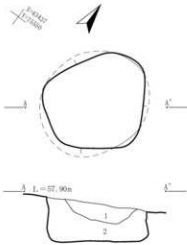
[小結]出土遺物の編年観から7世紀後半~8世紀前半代と推定される。

(2)土 坑

41号土坑(陥し穴)(第78図、写真図版42)

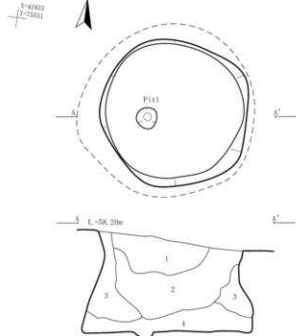
[検出状況]II A 4 q グリッドの南斜面下部に位置する。To-Cu降下以前の軽石を含む5層上部上面で検出した。

45号土坑



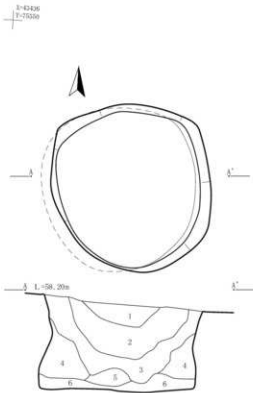
- 45号土坑
 1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱
 しまり弱 To-Nb浮石1~3%含む
 2. 10YR2/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱
 褐色土ブロック10%、To-Nb浮石0~5%含む

46号土坑



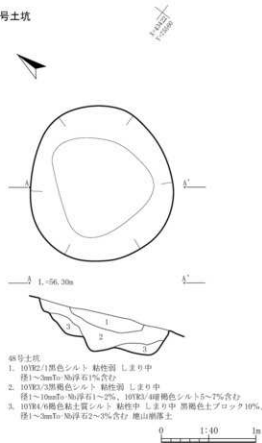
- 46号土坑
 1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり弱
 To-Nb浮石1~3%含む
 2. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中
 To-Nb浮石3~5%含む
 3. 10YR4/6褐色シルト 粘性弱 しまり中
 顕著ブロック
 4. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱
 均質

47号土坑



- 47号土坑
 1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb浮石1~3%含む
 2. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb浮石0~5%、
 褐色土大ブロック含む
 3. 10YR2/2暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb浮石3~5%含む
 4. 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中~強 しまり中 顕著ブロック
 5. 10YR3/2暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱
 6. 10YR2/2暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb浮石5~10%含む

48号土坑



- 48号土坑
 1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり中
 径1~3mmTo-Nb浮石1%含む
 2. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中
 径1~10mmTo-Nb浮石1~2%、10YR3/4暗褐色シルト5~7%含む
 3. 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中 顕著土ブロック10%、
 径1~3mmTo-Nb浮石2~3%含む 地山顔状土

第79図 45~48号土坑

[形状・規模]平面形は楕円形で、規模は開口部径157×125cm、底部径100×96cm、深さ69cmである。
[堆積状況]埋土は自然堆積で全体に To-Nb浮石を含む黒色、黒褐色シルトを主体とする。中～下位の壁際に壁崩落土の黒褐色シルトが堆積する。

[壁・底面]壁は床面からほぼ直立して立ち上がり、西側は中段から開口部にかけて外傾する。底面は円形で、径36×30cm、深さ10cmの副穴P1を伴う。

[遺物](遺物図版178、写真図版182)

縄文土器片1点が出土した。胎土に繊維を含む深鉢の胴部破片で、同一原体を用いて縦位、横位回転を重複させた施文が行われる。胎土、文様の特徴から縄文前期前葉に比定される。

[小結]形状、底面の副穴から円筒形の陥し穴とみられる。年代は検出層位、出土遺物から縄文時代前期と推定される。

42号土坑(第78図、写真図版42)

[検出状況]II A 2 q グリッドの南斜面中程に位置する。6層下部上面で検出した。

[形状・規模]平面形は不整形で、規模は開口部径240×200cm、底部径215×172cm、深さ33cmである。

[堆積状況]埋土は自然堆積で上層が暗褐色シルト、下層は黄褐色粘土質シルト主体である。

[壁・底面]壁は床面からほぼ直立して立ち上がり、底面には凹凸がみられる。

[遺物]縄文土器片1点(8.3g)が出土したが、小片のために図化・掲載は見送っている。

[小結]形状からフラスコ状土坑の下部が残存したものとみられる。年代は検出層位、出土遺物から縄文時代と推定されるが詳細は不明である。

43号土坑(陥し穴)(第78図、写真図版42)

[検出状況]II A 1 s グリッドの南斜面下部に位置する。平成30年度調査で設けた試掘トレンチT5の底面にあたる4層上面で遺構を確認した。トレンチ掘削の際に北東部上端の一部を掘削している。

[形状・規模]平面形は円形で、規模は開口部径159×157cm、底部径110cm、深さ90cmである。

[堆積状況]埋土は自然堆積の様相を呈し、全体に黒褐色シルトを主体とする。全体に To-Nb浮石を含み、最上部の1層には二次堆積の To-Nb浮石が集中する。

[壁・底面]壁は床面から直立して立ち上がり、中段から開口部にかけて外傾する。底面には径5cm、深さ15cm程の Pit 1 と Pit 2 がある。形状から遊茂木痕と推定される。

[遺物]なし。

[小結]形状、底面の遊茂木痕の存在から円筒形の陥し穴と考えられる。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

44号土坑(陥し穴)(第78図、写真図版43)

[検出状況]II A 2 r ~ 3 r グリッドの南斜面下部に位置し、5層下部上面で検出した。

[形状・規模]平面形は円形で、規模は開口部径153×137cm、底部径107×100cm、深さは82cmである。

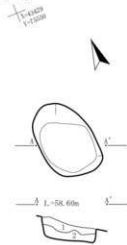
[堆積状況]埋土は自然堆積で、黒色シルトを主体とする。

[壁・底面]壁は底面から直立して立ち上がり、中段から開口部にかけて外傾する。底面は円形で平坦である。

[遺物]なし。

[小結]形状から円筒形の陥し穴と考えられる。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は

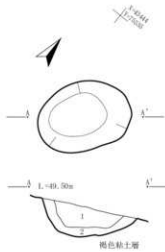
49号土坑



49号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中
10YR3/3暗褐色シルト20%、
径1~5mmのMh浮石1%含む
2. 10YR2/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中
10YR2/2黒褐色シルト30%・礫層ブロック10%、
径1~7mmのMh浮石1~2%含む

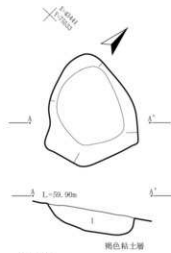
50号土坑



50号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり弱
褐色土ブロック3~5%含む
2. 10YR4/4褐色シルト 粘性中 しまり中
大ブロックの集積

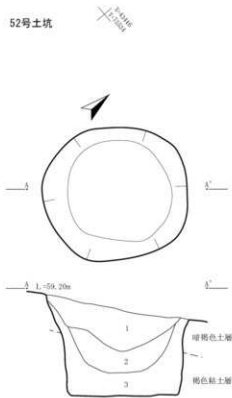
51号土坑



51号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり弱
暗褐色土ブロック5~10%含む

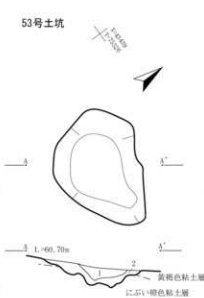
52号土坑



52号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり弱 均質
To・Mh浮石1~3%含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中
褐色土ブロック5~10%、To・Mh浮石3~5%含む
3. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中
To・Mh浮石2.5~10%含む

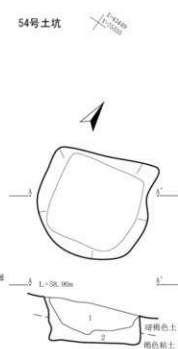
53号土坑



53号土坑

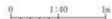
1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり弱
To・Mh浮石2.3~5%含む
2. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱
黄褐色粘土ブロック10~20%含む

54号土坑



54号土坑

1. 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり中
均質 To・Mh浮石2.1~3%含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中
To・Mh浮石2.3~5%・褐色土ブロック10%含む



第80図 49~54号土坑

不明である。

45号土坑(第79図、写真図版43)

〔検出状況〕ⅡA1nグリッドの東斜面下部に位置し、7a層上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は不整形で、規模は開口部径116×101cm、底部径122×104cm、深さ45cmである。

〔堆積状況〕埋土は2層に分かれた自然堆積で、上位に黒色シルト、下位に黒褐色シルトが堆積し、下部2層の中央には崩落による褐色土ブロックが含まれる。

〔壁・底面〕壁は北側、東側の一部を除いて僅かにオーバーハングして立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

〔遺物〕なし。

〔小結〕形状からフラスコ状土坑の下半部と考えられる。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

46号土坑(第79図、写真図版43)

〔検出状況〕ⅡA1oグリッドの東斜面下部に位置し、7a層上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形で、規模は開口部径158×157cm、底部径186×181cm、深さは106cmである。

〔堆積状況〕埋土は4層に分かれ、下位の黒褐色シルトが堆積した後、中位に褐色粘土質シルトからなる崩落土が入り、上部が黒色～黒褐色シルト層で埋没する。

〔壁・底面〕壁は直立もしくは内傾気味に立ち上がり、壁面下部は全周にわたりオーバーハングする。底面は平坦で中央よりやや西側に径22cm、深さ7cmの副穴 Pit 1 を伴う。

〔遺物〕なし。

〔小結〕形状からフラスコ状土坑と判断される。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

47号土坑(第79図、写真図版43)

〔検出状況〕ⅡA1oグリッドの東斜面下部に位置し、45号・46号土坑の中間にある。7a層上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形で、規模は開口部径177×168cm、底部径170×163cm、深さは97cmである。

〔堆積状況〕埋土は6層に分かれる。下位に黒褐色シルトが堆積した後、壁崩落土とみられる褐色粘土質シルトが入り、上～中位が黒色～黒褐色シルトで埋没する。

〔壁・底面〕壁は直立して立ち上がり、西側は急角度で、その他は僅かにオーバーハングする。底面はおおむね平坦である。

〔遺物〕縄文土器片1点(2.8g)が出土したが、小片のため図化・掲載には至らなかった。

〔小結〕形状からフラスコ状土坑と判断される。年代は検出層位や出土遺物から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

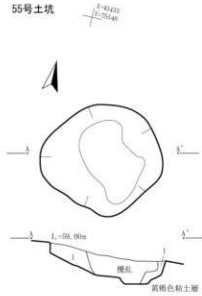
48号土坑(第79図、写真図版44)

〔検出状況〕ⅡA2qグリッドの南斜面下部に位置し、5層上部上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形で規模は開口部径165×152cm、底部径107×98cm、深さ41cmである。

〔堆積状況〕埋土は3層に分かれ、下位に崩落土の褐色粘土質シルト、上位に黒色～黒褐色シルトが堆

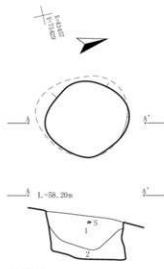
55号土坑



55号土坑

1. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中

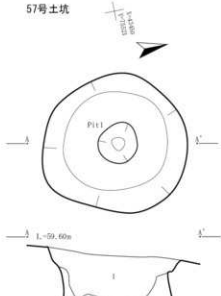
56号土坑



56号土坑

1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中
10YR4/6褐色シルトブロック下部に5%、
To-Mh浮石1%含む
2. 10YR2/3黒褐色シルト 粘性弱 しまり弱～中
10YR4/6褐色シルトブロック30%含む
地山崩落土

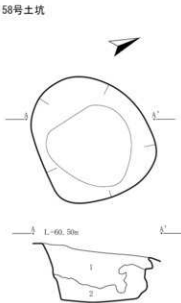
57号土坑



57号土坑

1. 10YR3/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中～強
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック15%、
径1～3mmTo-Mh浮石1～2%含む
2. 10YR5/8黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中
10YR5/9黄褐色粘土質シルトブロック5%含む
地山崩落土

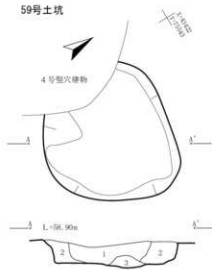
58号土坑



58号土坑

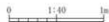
1. 10YR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり弱～中
10YR4/3こぶい黄褐色シルト8%、
径1～5mmTo-Mh浮石1%含む
2. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中
10YR4/3こぶい黄褐色シルトブロック30%、
径1～5mmTo-Mh浮石1%含む

59号土坑



59号土坑

1. 10YR2/3黒褐色シルト 粘性弱
しまり中 10YR4/6褐色シルト2%、
径1～5mmTo-Mh1%含む
2. 10YR4/6褐色シルト 粘性中 しまり中
10YR4/3暗褐色シルト30%
径1～10mmTo-Mh1～2%含む 地山崩落土
3. 10YR5/9黄褐色粘土質シルト 粘性中
しまり中 To-Mh2～3%含む



第81図 55～59号土坑

積する。

[壁・底面]壁は北側が緩やか、南側は急角度でそれぞれ外傾して立ち上がり、底面は中央部が窪む。

[遺物]なし。

[小結]浅い土坑で性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

49号土坑(第80図、写真図版44)

[検出状況] I A 25 p ~ II A 1 p グリッドの東斜面上部に位置し、7 a 層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は楕円形で、規模は開口部径84×58cm、底面径65×51cm、深さは21cmである。

[堆積状況]埋土は自然堆積で2層に分かれ、上位は黒褐色シルト、下位は暗褐色シルトで地山崩落ブロックを含む。

[壁・底面]壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は不整形形で南東側が低くなっている。

[遺物]なし。

[小結]小規模な土坑で性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

50号土坑(第80図、写真図版44)

[検出状況] I A 23m グリッドの北東側斜面上部に位置し、7 a 層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は楕円形で、規模は開口部径99×71cm、底部径61×44cm、深さ34cmである。

[堆積状況]埋土は自然堆積で2層に分かれ、上位は黒色シルト主体、下位は褐色シルトブロックである。

[壁・底面]壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は楕円形で凹凸がみられる。

[遺物]なし。

[小結]浅く小規模な土坑で性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

51号土坑(第80図、写真図版44)

[検出状況] I A 22m グリッドの北東側斜面上部に位置し、7 a 層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は不整形形で、規模は開口部径118×90cm、底部径83×71cm、深さ22cmである。

[堆積状況]埋土は自然堆積の単層で、黒褐色シルトを主体とする。

[壁・底面]壁は北側が緩やかに立ち上がり、南側は底面から直立気味に立ち上がる。底面は楕円形で北側に凹凸がみられる。

[遺物]なし。

[小結]不整形の落ち込み状で性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

52号土坑(第80図、写真図版45)

[検出状況] I A 23 l ~ 23m グリッドの北東側斜面上部に位置し、7 a 層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は円形で、規模は開口部径156×142cm、底部径112×106cm、深さ101cmである。

[堆積状況]埋土は3層に分かれる自然堆積で、上位が黒色シルト主体、下位は暗褐色シルトが堆積し、

中位の黒褐色シルトには褐色シルトブロックが混じる。

〔壁・底面〕壁は西側が底面から中段まで、東側は上部まではほぼ直立し、そこから開口部に向かって外傾する。底面はおおむね平坦である。

〔遺物〕なし。

〔小結〕円筒形の貯蔵穴と考えられる。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

53号土坑(第80図、写真図版45)

〔検出状況〕I A21 n グリッドの尾根頂部に位置し、6層下部下面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は不整形で、規模は開口部径127×83cm、底部径88×64cm、深さ20cmである。

〔堆積状況〕埋土は2層に分かれる自然堆積で、上位は黒褐色シルト、下位は暗褐色シルトをそれぞれ主体とする。

〔壁・底面〕壁は底面から緩やかに立ち上がるが全体に凹凸がみられる。

〔遺物〕なし。

〔小結〕小規模な不整形の落ち込みで性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

54号土坑(第80図、写真図版45)

〔検出状況〕I A23 l グリッドの北東斜面中程に位置し、7 a 層上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は方形で、規模は開口部径118×111cm、底部径90×87cm、深さ45cmである。

〔堆積状況〕埋土は2層に分かれ、上位は黒色シルト主体、下位は黒褐色シルトに褐色シルトブロックが混じる。

〔壁・底面〕壁は僅かに外傾、またはほぼ直立して立ち上がり、底面はおおよそ平坦である。

〔遺物〕なし。

〔小結〕浅い土坑で性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

55号土坑(第81図、写真図版45)

〔検出状況〕I A25 o グリッドの尾根頂部に位置し、7 a 層上面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は不整形で、規模は開口部径132×117cm、底部径84×48cm、深さ25cmである。

〔堆積状況〕土坑中央部の埋土は木根による攪乱であり、周囲に残る暗褐色シルト主体の層が本来の土坑の埋土とみられる。

〔壁・底面〕壁は東側がほぼ直立して立ち上がる。西側は緩やかに立ち上がるが、開口部近くで直立する。底面は凹凸がみられる。

〔遺物〕なし。

〔小結〕不整形の浅い落ち込みで性格は特定できない。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

56号土坑(第81図、写真図版46)

〔検出状況〕I A21 j ~22 j グリッドの北斜面下部に位置し、7 a 層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は円形で、規模は開口部径90×80cm、底部径96×86cm、深さ45cmである。

[堆積状況]埋土は2層に分かれる自然堆積とみられ、上位は黒褐色シルト主体、下位は黒褐色シルトに崩落した壁面の褐色シルトブロックを含む。

[壁・底面]壁は北～西側にかけて僅かに内傾、その他は直立して立ち上がる。底面は中央部が少し窪む。

[遺物]なし。

[小結]小型のフラスコ状土坑下部の可能性ある。年代は検出層位から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

57号土坑(第81図、写真図版46)

[検出状況]I A20k～20lグリッドの北斜面中程に位置し、6層下部上面で検出した。

[形状・規模]平面形は不整形円で、規模は開口部径150×146cm、底部径109×105cm、深さ60cmである。

[堆積状況]埋土は2層に分かれる自然堆積の様相を呈し、上位は黒褐色シルト主体、下位は黄褐色粘土質シルトで壁面の崩落土とみられる。

[壁・底面]壁はほぼ直立し、北側の一部はオーバーハンクしている。底面には円形の副穴 Pit 1 を伴い、規模は径44×41cm、深さ7cmである。

[遺物]埋土中から磨石1点が出土した。石材には細粒閃緑岩が使用されている(図・写真掲載なし)。

[小結]形状からフラスコ状土坑の下部と考えられる。年代は検出層位と出土遺物から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

58号土坑(第81図、写真図版46)

[検出状況]I A20mグリッドの尾根頂部に位置し、7a層上面で検出した。

[形状・規模]平面形は円形で、規模は開口部径134×118cm、底部径90×82cm、深さ56cmである。底面は不整形円形である。

[堆積状況]埋土は2層に分かれ、いずれの層も主に北側の埋土の一部に木根の攪乱を受けている。暗褐色シルト主体の上位が自然堆積、黄褐色粘土質シルト主体の下位は壁崩落土とみられる。

[壁・底面]壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

[遺物]埋土中より土器片1点(1.3g)が出土しているが、小片のため図化・掲載には至らなかった。

[小結]形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。年代は検出層位と出土遺物から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

59号土坑(第81図、写真図版46)

[検出状況]I A24qグリッドの尾根頂部に位置し、6層下部上面で検出した。西側は4号堅穴建物に切られる。

[形状・規模]平面形は不整形円形で、規模は開口部径147×140cm、底部径127×107cm、深さ25cmである。

[堆積状況]埋土は3層に分かれた自然堆積で、上位は黒褐色シルト主体、中位は褐色シルトが主の地山崩落土で、下位は黄褐色粘土質シルトである。

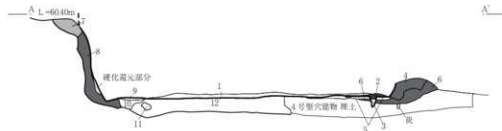
[遺物]埋土中から縄文土器片1点(19.8g)が出土しているが、小片のために図化・掲載には至らなかった。

[小結]浅い土坑で性格は特定できない。年代は検出層位と出土遺物から縄文時代と推定されるが、詳細は不明である。

2号炭窯跡



- 焼熱範囲 (明褐色)
- 焼熱範囲 (赤色)
- 焼熱範囲 (灰色)



2号炭窯跡

1. 10YR17/7黒色シルト 粘性中しまり面 厚1~10mmの炭化物が底面上に堆積した炭化物層
2. 5Y8/1灰色砂 粘性なししまり面 炭化物成層の底土に堆積した灰層
3. 7.5Y3/3灰褐色シルト 粘性弱しまり面 柱上との間に堆積した焼土
4. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘性弱しまり面 厚1mm以下の種炭を含む炭素質素材の粘土
(付帯は焼成で2.5Y5/6暗褐色に着色)
5. 10YR4/2赤い赤褐色シルト 粘性強しまり面 焼成部焼土の還元部分
6. 5YR4/6褐色シルト 粘性中しまり面 同上 還元色部分
7. 7.5Y5/5暗褐色シルト 粘性なししまり面 炭質の粘土 (炭質構築材) かなり固くたたき締めている。
炭質構築材が還元色を呈す
8. 5YR2/4暗赤褐色シルト 粘性弱しまり面 炭質の粘土 (炭質構築材) 壁面還元色
9. 10Y3/6灰黄褐色シルト 粘性なししまり面 炭質成層の粘土 上部還元還元
10. 5YR4/3赤い赤褐色シルト 粘性弱しまり面 厚2~3mm種炭を含む還元色部分
11. 5YR3/6暗赤褐色シルト 粘性弱しまり面 埋め戻された8層に含まれた焼土ブロック
12. 10Y3/2暗褐色シルト 粘性中しまり面 厚1~10mm炭化物約10%、7.5Y3/4褐色シルトブロック、
5Y3/6/1暗灰色シルトブロック1%含む。本体底面の厚り方と同じ土 (炭質目的か)

第82図 2号炭窯跡

(3)炭 窯

2号炭窯跡(第82図、写真図版41)

[位置・検出状況] I A23~24qグリッドの尾根頂部西端、南斜面の落ち際に位置する。雑物撤去後に地表面の窪みと変色した表土層が確認でき、トレンチを設定して掘削した結果、炭窯と判明したため、SX02と登録した。覆土除去の後、地下構造を確認する為にトレンチを掘り下げ、堆積状況を確認した上で断面図を作成した。南東部は4号竪穴住居北東側の角を切っている。

[形状・規模]形状は楕円形を呈し、長軸が北西-南東方向に延び、斜面方向に平行する。規模は長軸方向が約4m、短軸方向は約2.8mで、遺構の深さは北西側の残存部で最大約1mである。

[焚口・煙道・排煙口]焚口は斜面下部南東側、煙道は斜面上部北西側に設けられている。焚口付近の底面から壁面内周の約半分程にかけて灰色に還元、変色する。煙道は検出時のトレンチで一部を破壊したため正確な形状は不明だが、1辺30cm以上の方形と推定される。排煙口は斜面上部北西側に設けられているとみられるが、崩落しており確認できなかった。

[壁・底面]壁はほぼ垂直に立ち上がって固くしまり、壁面及び炭窯上端から外側の約20cm~1m前後の範囲が被熱により赤色~明褐色に変色する。赤色に変化した範囲は焚口部分が最も広く、炭窯上端を一周する。明褐色に変化した範囲は煙道周辺のみである。壁及び床面は地山を掘り込んだ上で約15~40cmの厚さの粘土を用いて造成されており、底面は平坦で、北西側は炭化物や焼土ブロックを含むしまりの弱い埋戻し土上面が底面となり、南東側は重複する4号竪穴住居の埋土中に底面が設けられている。

[堆積状況]1層には炭化物小片が多く含まれ、焚口付近では1層の下位に灰層、焼土層が続く。また、覆土には全体に壁面及び天井の崩落土に起因する焼土ブロックが多数含まれる。

[時期]全体の規模や、窯底が卵型の形状を呈する点は、岩手県内で大正末期~昭和前期に広まった小野寺窯、昭和中期以降に広まった岩手窯に相似しており(註1)、本遺構も近~現代(大正~昭和期)のものと推定される。

(溜)

註1

畠山剛 2003『炭焼きの二十世紀 - 書置きとしての歴史から未来へ -』彩流社
岩手県木炭協会 1991『岩手窯の栞』

VI 自然科学分析

1 放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

鹿糠浜 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市15地割 (北緯40° 23' 13"、東経141° 43' 26") に所在し、丘陵上に立地する。測定対象試料は、配石遺構等から出土した木炭3点である (表1)。

(2) 測定の意義

遺構に伴う遺物が少ないため、木炭の年代測定により時期を判断する手がかりを得る。

(3) 化学処理工程

ア メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

イ 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

ウ 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

エ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

オ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

カ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

ア $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

イ ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤

差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ウ pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。
- エ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、3、図1、2に示した。なお、暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を表2、図1に、後者を表3、図2に示した。

(6) 測定結果

測定結果を表1~3、図1.2に示す。較正年代は、全試料(1~3)を cal BC/AD の値(表3、図2)で算出し、さらに縄文時代の年代値となった試料2,3については cal BP の値(表2、図1)でも算出した。以下の説明では、試料1を cal BC/AD、試料2,3を cal BP の値で記載している。

試料の ^{14}C 年代は、試料1が $1510 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料2が $6000 \pm 30\text{yrBP}$ 、試料3が $5870 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、試料1が $541 \sim 591\text{cal AD}$ の範囲、試料2が $6881 \sim 6793\text{cal BP}$ の間に2つの範囲、試料3が $6728 \sim 6661\text{cal BP}$ の範囲で示される。試料1は古墳時代後期頃、試料2は縄文時代早期末葉から前期初頭頃、試料3は縄文時代前期初頭から前葉頃に相当する(小林編2008、佐原2005)。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172579	1	1号段石遺構近く1層	木炭	AAA	-29.16 ± 0.22	$1,510 \pm 20$	82.83 ± 0.23
IAAA-172580	2	B8b地区 3層下~4層上	木炭	AAA	-27.52 ± 0.25	$6,000 \pm 30$	47.40 ± 0.16
IAAA-172581	3	B7g地区 34号土層	木炭	AAA	-29.74 ± 0.21	$5,870 \pm 30$	48.16 ± 0.18

IAAA登録番号: 489731

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BP)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172580	$6,040 \pm 30$	47.16 ± 0.16	$5,996 \pm 27$	6881calBP - 6870calBP (8.2%) 6861calBP - 6793calBP (60.0%)	6906calBP - 6747calBP (95.4%)
IAAA-172581	$5,950 \pm 30$	47.69 ± 0.18	$5,868 \pm 30$	6728calBP - 6661calBP (68.2%)	6775calBP - 6765calBP (1.3%) 6752calBP - 6635calBP (94.1%)

[参考値]

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代 cal BC/AD)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172579	1,580 \pm 20	82.13 \pm 0.23	1,512 \pm 22	54 calAD - 591 calAD (68.2%) 43 calAD - 461 calAD (6.0%) 466 calAD - 489 calAD (6.1%) 532 calAD - 610 calAD (83.3%)	43 calAD - 461 calAD (6.0%) 466 calAD - 489 calAD (6.1%) 532 calAD - 610 calAD (83.3%)
IAAA-172580	6,040 \pm 30	47.16 \pm 0.16	5,996 \pm 27	4932 calBC - 4921 calBC (8.2%) 4912 calBC - 4844 calBC (60.0%)	4957 calBC - 4798 calBC (95.4%)
IAAA-172581	5,950 \pm 30	47.69 \pm 0.18	5,868 \pm 30	4779 calBC - 4712 calBC (68.2%)	482 calBC - 4816 calBC (1.3%) 480 calBC - 4686 calBC (94.1%)

[参考値]

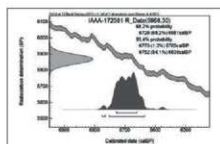
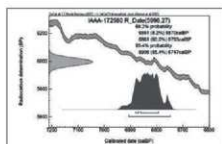


図1 暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)

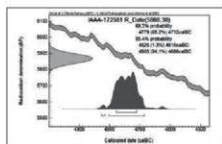
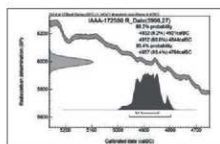
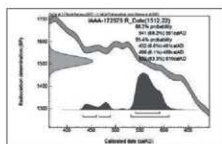


図2 暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)

引用文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上, ドイツ展記念版説, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

2 土器附着炭化物による放射性炭素年代 (AMS測定)

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県鹿糠浜 I 遺跡(岩手県九戸郡野町種市所在)から出土した、縄文時代の土器に附着した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し、遺物の年代に係る資料を得る。

(1) 試料

試料は、a639 II B9g グリッド3/4客土層(No.1)と a578 II B8g グリッド3層下部・3/4客土層(No.2)の土器附着炭化物2点である。No.1は土器ごと、No.2は附着炭化物のみ削られた状態で送付されている。いずれも、縄文時代に帰属するとされる。

(2) 分析方法

No.1は双眼実体顕微鏡で観察しながら、炭化物を必要量(40mg)削り取る。No.2は双眼実体顕微鏡で観察し、炭化物以外の物質をできるだけ取り除く。塩酸(HCl)や水酸化ナトリウム(NaOH)を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸(AAA)処理)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、今回の試料は化学的に脆弱なため、アルカリ処理を0.0001M~1Mまで徐々に濃度を上げ、試料の状況をみながら処理を進めた。いずれも炭化物の損耗が激しいため、アルカリを定法の濃度(1M)まで上げることができず、途中で処理を停止した(AaAと記載)。

上記した処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社の vario ISOTOPE cube と Ionplus社の Age3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma,68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach,1977)。また、暦年校正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年校正は、OxCal4.3(Bronk,2009)を使用し、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する校正曲線(Intcal13: Reimer et al, 2013)を用いる。暦年校正結果は $1\sigma \cdot 2\sigma$ (1σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。

(3) 結果

結果を表1、図1に示す。土器附着炭化物はいずれも化学的に脆弱であったため、アルカリの濃度を薄めた処理を行う(AaA)。各試料の処理濃度については結果表に記す。同位体補正を行った結果は、No.1が $5870 \pm 30\text{BP}$ 、No.2は $6370 \pm 25\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、No.1が6,772～6,637calBP、No.2が7,415～7,253calBPである。いずれも縄文時代前期の範囲内に収まっているが、今後出土遺構や層位、土器形式等も含めて、検討していく必要がある。

表1 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名など	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ ¹³ C (‰)	暦年較正年代						Code No.					
					年代値							確率%				
					σ	cal	BC	4778	- cal	BC			4717	6727	- 6666	calBP
1	a639 土器付着 炭化物	AaA (0.01M)	5870±30 (5872±28)	-23.72 ±0.41	2σ	cal	BC	4823	- cal	BC	4819	6722	- 6768	calBP	0.6	YU- 11701 pal- 12764
						cal	BC	4801	- cal	BC	4688	6750	- 6637	calBP	94.8	
						cal	BC	5369	- cal	BC	5316	7318	- 7265	calBP	68.2	
						cal	BC	5466	- cal	BC	5435	7415	- 7384	calBP	8.8	
2	a578 土器付着 炭化物	AaA (0.01M)	6370±25 (6369±26)	-24.69 ±0.34	2σ	cal	BC	5429	- cal	BC	5405	7378	- 7354	calBP	5.5	YU- 11702 pal- 12765
						cal	BC	5385	- cal	BC	5304	7334	- 7253	calBP	81.2	
						cal	BC	5466	- cal	BC	5435	7415	- 7384	calBP	8.8	
						cal	BC	5429	- cal	BC	5405	7378	- 7354	calBP	5.5	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3を使用。

6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 較正データベースは、IntCal13を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。

OnCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al. 2013)

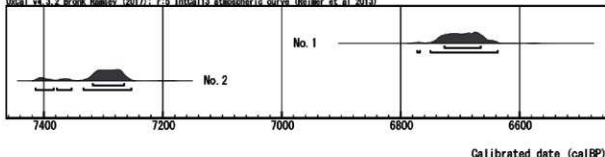


図1 暦年較正結果

引用文献

- Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Reimer PJ, Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafldadson H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J. 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977. Discussion Reporting of ¹⁴C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

3 黒曜石分析

株式会社 第四紀 地質研究所

(1) 実験条件

蛍光X線分析 (XRF)

鹿糠浜 I 遺跡出土黒曜石遺物の分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置 (日本電子製 J S X-3200) で行なった。直接試料台に設置し、非破壊で分析した。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法 (F P 法) による自動定量計算システムが採用されており、6 C ~ 9 U までの元素分析ができ、ハイパワー X 線源 (最大 30 k V, 4 mA) の採用で微量試料 ~ 最大 290 mm φ × 80 mm H までの大型試料の測定が可能である。小形試料では 1 6 試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルク F P 法でおこなった。F P 法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X 線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルク F P 法 (スタンダードレス方式)、分析雰囲気 = 真空、X 線管ターゲット素材 = Rh、加速電圧 = 30 k V、管電流 = 自動制御、分析時間 = 200 秒 (有効分析時間) である。

分析対象元素は Si, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zr の 14 元素、分析値は黒曜石の含水量 = 0 と仮定し、酸化物の重量 % を 100% にノーマライズし、表示した。地質学的には分析値の重量 % は小数点以下 2 桁で表示することになっているが、微量元素の Rb, Sr, Y, Zr は重量 % では小数点以下 3 ~ 4 桁の微量となり、小数点以下 2 桁では 0 と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下 4 桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度 (重量 %) で SiO_2 - Al_2O_3 - Fe_2O_3 - TiO_2 - K_2O - CaO の各相関図、Rb-Sr は積分強度の相関図の 4 組の組み合わせで図を作成した。

(2) 分析結果

第 1 表化学分析表には分析結果、第 2 表原産地対比表には分析結果に基づいて原産地を記載してある。

鹿糠浜 I 遺跡の遺物写真を見るとよくわかるが、遺物写真はほとんどが新鮮なもので被熱などの影響は少ないと推察される。

ア 第 2 表組成分類表にみられるように、赤石山系が 4 個、所山系が 2 個検出された。

特に鹿糠浜 I - 2 は茶褐色を呈する材質の良好なもので、このようなものは北海道の赤石山頂部に産する特徴的な石質のものである。鹿糠浜 I - 3, 4, 5 の 3 個は鹿糠浜 I - 2 と近い組成を示しており、赤石山系の黒色のものと判別した。

イ 鹿糠浜 I - 1 と 6 は幾分分散傾向であるが所山系と組成が類似し、所山系と判別した。所山の良質な傷のない透明感のある材質とよく照合される。

引用文献

- 井上 巖(2000)東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析(XRF)北越考古学, 第11号, 23-38/
 井上 巖(2001)テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言, 軽石学雑誌, 第7号 23-51.
 井上 巖(2008)東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
 井上 巖(2008)東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
 井上 巖(2008)東北日本の原産地黒曜石 北海道編
 井上 巖(2008)東北日本の原産地黒曜石写真集

第1表 化学分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	B ₂ O ₃	SiO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Total	Find	Set0
鹿糠浜 I - 1	3.6261	0.0000	12.1806	76.8814	0.9192	3.8870	1.3361	0.1421	0.0675	0.9448	0.0068	0.0053	0.0023	0.0155	100.0047	639	480
鹿糠浜 I - 2	3.5522	0.1474	12.8737	75.9833	0.9227	4.6614	0.8437	0.0596	0.0527	0.8678	0.0162	0.0025	0.0040	0.0129	100.0000	1529	230
鹿糠浜 I - 3	2.7772	0.0000	13.3840	76.3670	0.9117	4.7254	0.8387	0.0739	0.0426	0.8194	0.0133	0.0050	0.0015	0.0103	100.0000	1250	461
鹿糠浜 I - 4	2.9695	0.0000	13.8823	75.0329	1.0089	5.1198	0.9741	0.1047	0.0617	0.8181	0.0101	0.0076	0.0067	0.0095	99.9999	922	672
鹿糠浜 I - 5	2.7438	0.0000	13.1692	76.4954	0.8951	4.9968	0.6392	0.0710	0.0445	0.9156	0.0170	0.0016	0.0042	0.0076	100.0000	1637	154
鹿糠浜 I - 6	3.6953	0.2454	12.3074	76.2181	0.9085	4.0548	1.3131	0.1631	0.0645	0.9926	0.0091	0.0106	0.0032	0.0142	99.9999	871	998

第2表 組成分類表

試料名	原産地	器種	報告書掲載 No.
鹿糠浜 I - 1	所山	石鏃	c32
鹿糠浜 I - 2	赤石山	翼形石器	c168
鹿糠浜 I - 3	赤石山	翼形石器	c170
鹿糠浜 I - 4	赤石山	鏃片	分析のみ
鹿糠浜 I - 5	赤石山	鏃片	
鹿糠浜 I - 6	所山	鏃片	

遺物写真



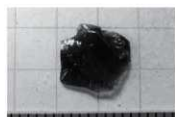
鹿糠浜 I - 1



鹿糠浜 I - 2



鹿糠浜 I - 3



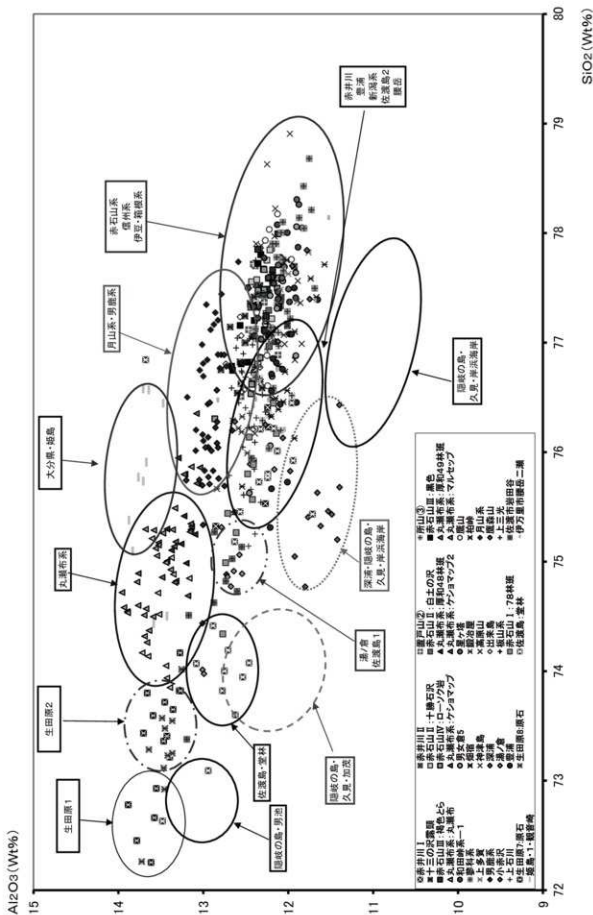
鹿糠浜 I - 4

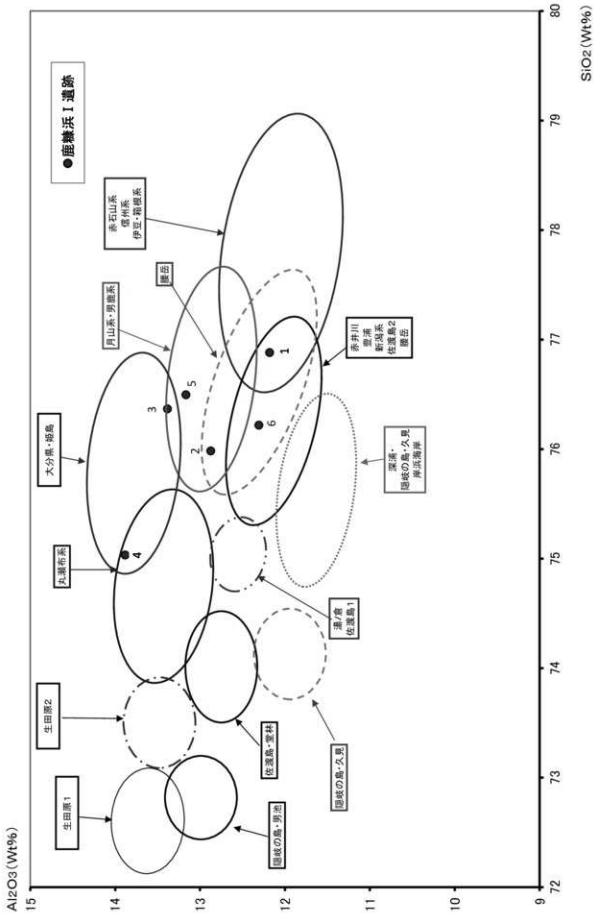


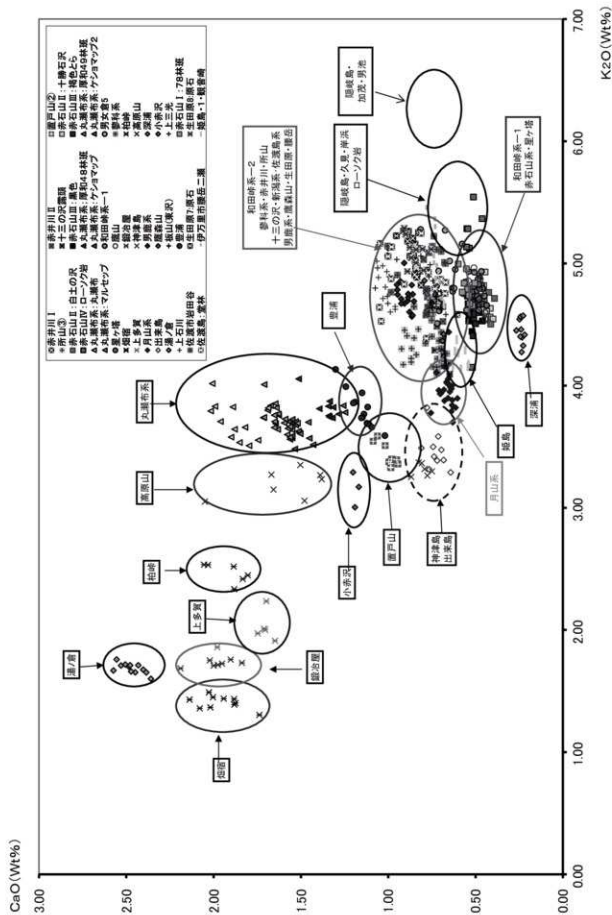
鹿糠浜 I - 5

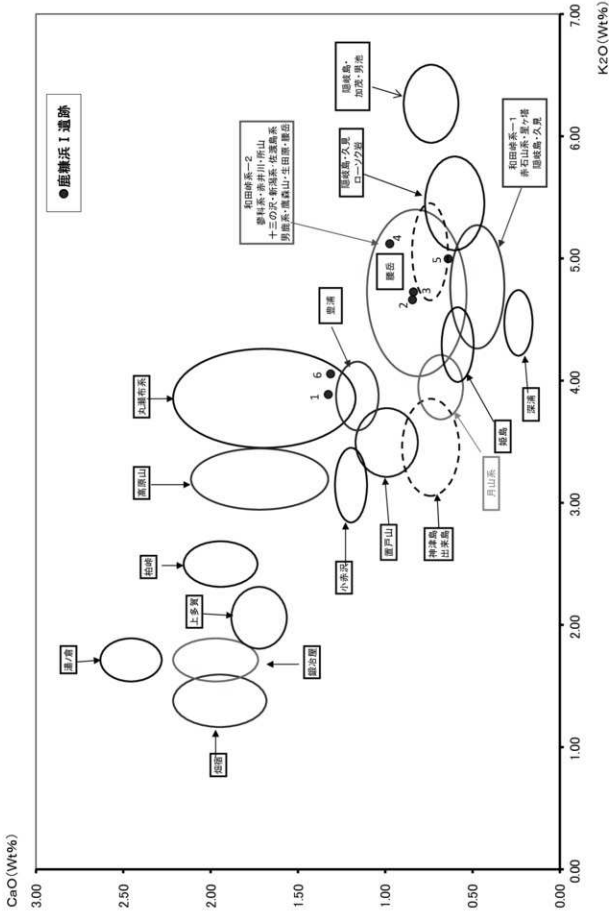


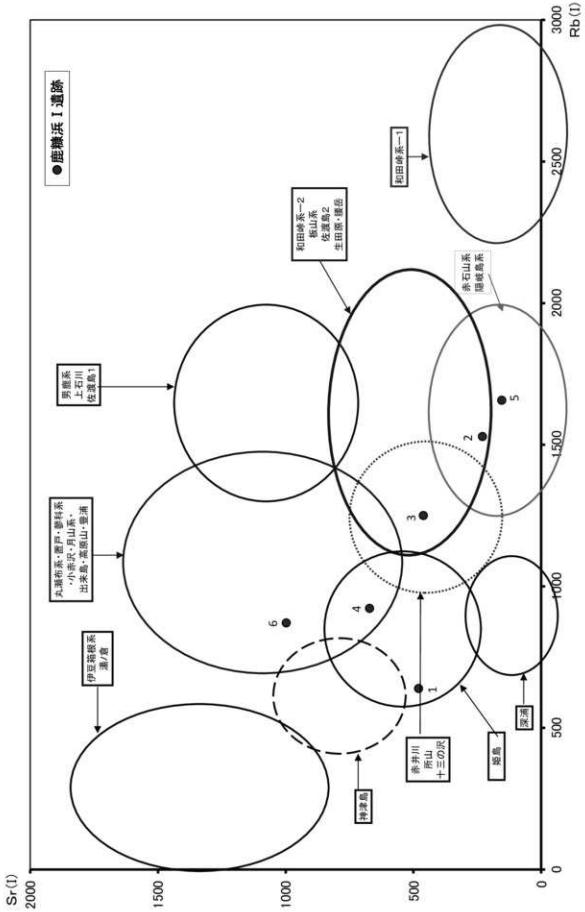
鹿糠浜 I - 6



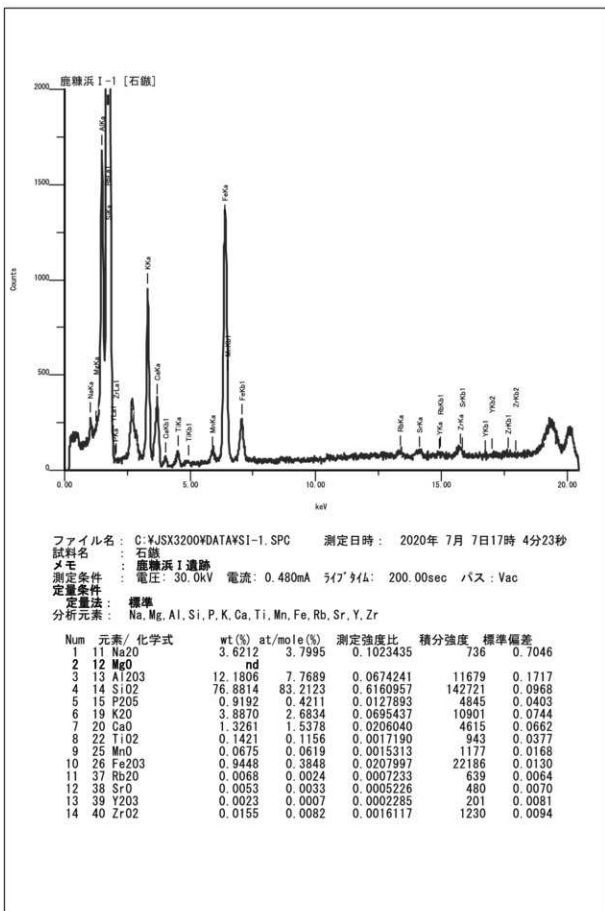
第2図 日本の黒曜石SiO₂-Al₂O₃図 (鹿糠浜 I 遺跡)



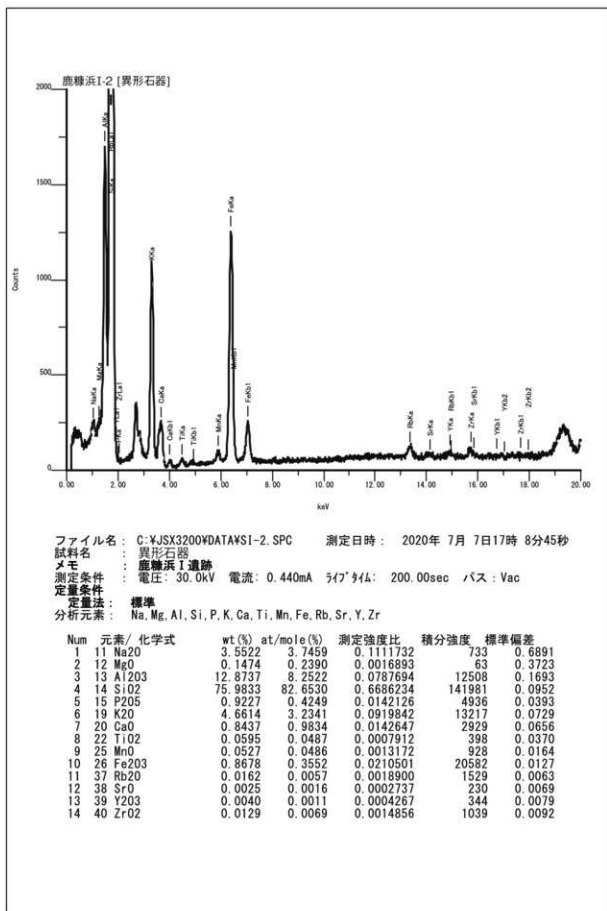
第6図 日本の黒曜石K₂O-CaO図 (鹿糠浜 I 遺跡)



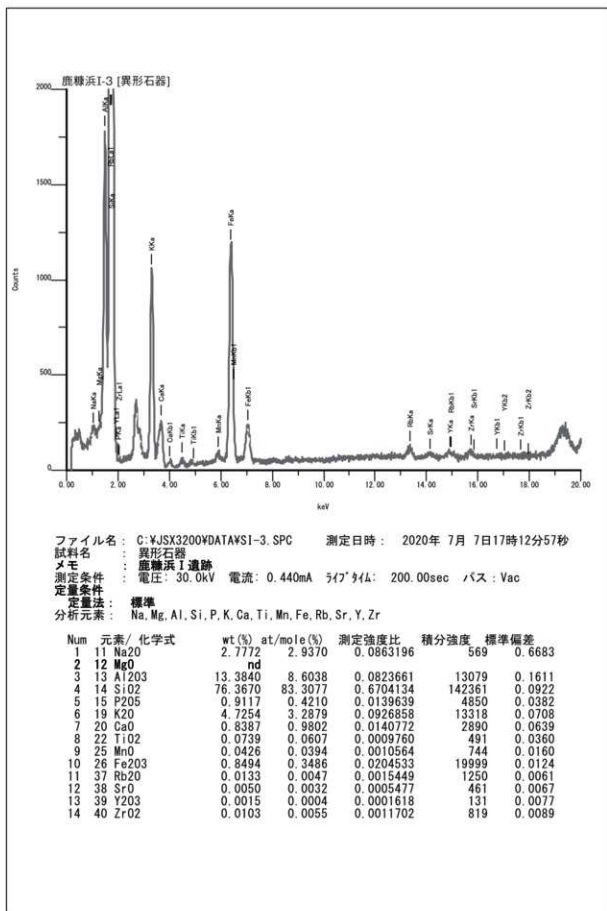
第8図 日本の黒曜石Rb-Sr図 (鹿糠浜 I 遺跡)



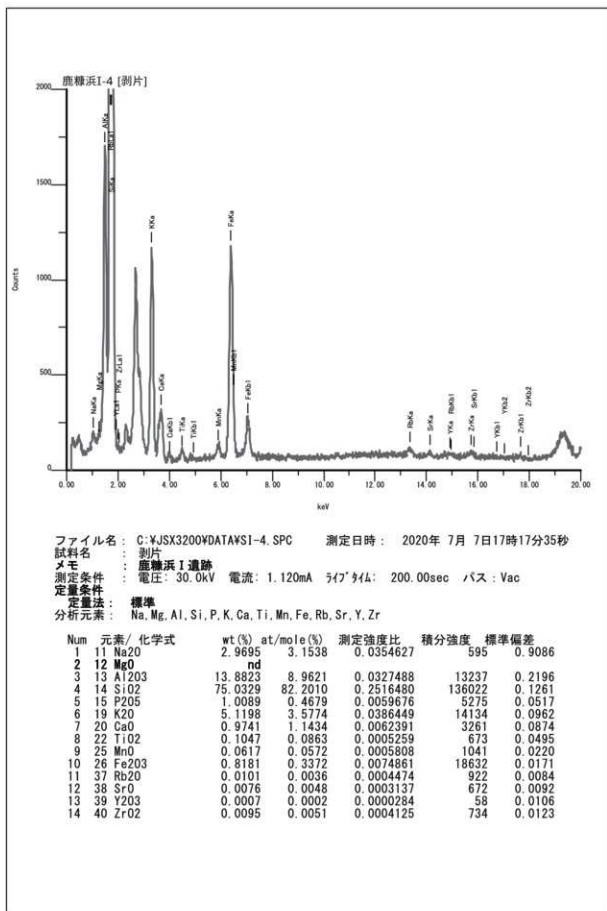
第3表 化学分析表(1)



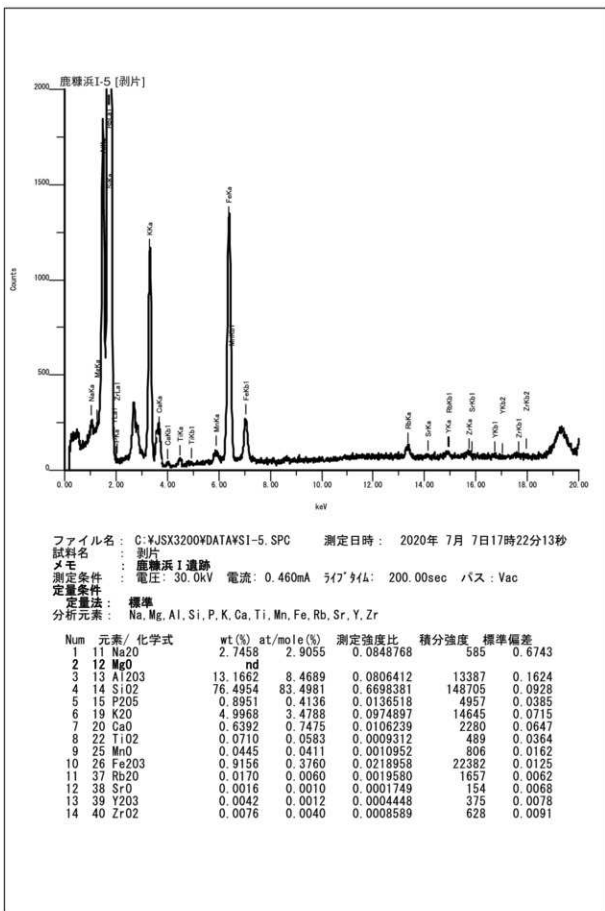
第4表 化学分析表(2)



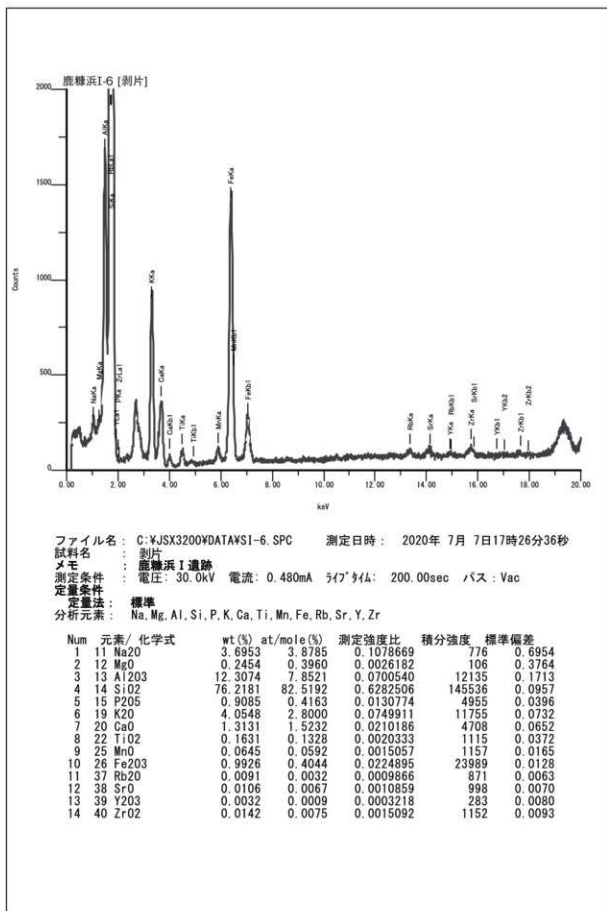
第5表 化学分析表(3)



第6表 化学分析表(4)



第7表 化学分析表(5)



第8表 化学分析表(6)

Ⅶ 総 括

1 調査成果

鹿糠浜Ⅰ遺跡は九戸郡洋野町種市第15地割ほかに所在する。和座川の北岸にある標高約60mの丘陵部を中心に、遺跡の範囲は東西160m、南北130mあり、海岸部からは直線距離で450mを測る。第5図の調査範囲図にあるように遺跡は南側丘陵頂部の平坦面と北側の斜面及び谷部、北端の小規模な丘陵頂部からなり、調査区は遺跡のほぼ中央を南北に縦断している。

平成29・30年度の2箇年に亘る調査で検出された遺構は、縄文時代の配石遺構1箇所、堅穴建物2棟、土坑41基(内、フラスコ状土坑10)、陥し穴9(溝形6・円形3)、捨て場2箇所、焼土・炉跡3基、溝1条、住居状遺構1基、集石1箇所、柱穴状土坑12個、7C後半～8C前半代の堅穴建物2棟、近現代の炭窯1基、時期不明の土坑6基である。出土遺物は縄文時代の土器133箱・石器類の約300箱が中心で、このほか弥生土器1箱、古代の土器3箱、土製品・石製品等が少量出土している。また、縄文時代にこの地で活動した人々が持ち込んだ大小の自然礫が中コンテナで75箱分出土した。

ここでは、特に遺構遺物の多かった縄文時代前期と後期における本遺跡の様相を年代測定の結果も踏まえて整理し、まとめて代えたい。

縄文時代前期

本遺跡では最も多くの遺物が出土した時期にあたる。疎密はあるものの調査区北端部以外から出土しており、特に2箇所の「捨て場」から大量に出土した。

捨て場Ⅰは北斜面部に遺物を焼棄したことにより形成されたことが明らかになった。調査区内での規模は725㎡で西側の調査区外へと続いている。層序の概略は1層(表土)、2層(黒ボク、縄文時代後期中心)、3層(中振火山灰)、3/4層(捨て場Ⅰの主体となり、大量の遺物を含む)、4層(中振火山灰降下前の黒ボク)、5層(南部浮石層)、6層(5～7層への漸移層)、7層(八戸火山灰)となる。遺物はこの層序と5×5mグリッドで取り上げている。

大きな成果として、捨て場Ⅰの主体となる3/4層が中振火山灰よりも古いことが層位的に確認できたことと、年代測定の結果、暦年較正年代では約6800年前に形成されたことが明らかになったことがあげられる。この他にも、捨て場として良好な状態・条件を多く有していた。第一に3/4層は前期初頭頃に限定されるということである。調査の結果、ここでは円筒下層式並びに早期末葉の土器は見られないことが判明したのである。このことから3/4層出土の土器群は円筒下層a式よりも古い特徴を、そして5層(南部浮石)よりも上層に形成されていることから早期末葉よりも新しい段階に位置づけられる土器群ということになる。特に円筒下層a式成立の前段階を考えると好例となろう。

但し気になる点もある。3/4層及び3層下部～4層上部の年代測定結果と中振火山灰降下年代との関係である。どちらの試料も中振火山灰層の直下で降下年代と時期差のないものであるとの予想をしていた。ところが測定値は確かに中振火山灰の降下年代よりも古い値を示してはいるが500年くらいの差があった。捨て場Ⅰは基本的に中振火山灰に覆われているが、その形成には思っていた以上に長い期間を要していた可能性があり、これは検討課題として残った。

第二に捨て場そのものが後世の擾乱を殆ど受けておらず、保存状態が良かったということである。土坑が数基見られる程度で、斜面地形に沿って形成されていく状況をととても良く残っていた。土器や石器類の他に遺跡の外から持ち込まれた自然礫が大量に出土しているが、これら数種の遺物は混在し

ており、種類ごとにまとまりを持つといったことはなかった。それから木製品も出土しなかった。

今回の調査では、捨て場を利用した人々が暮らしたであろう住居を見つけることが出来なかった。層位的に見れば、中掘火山灰よりも古いので4層面で生活が営まれ、その中で生み出されたのが3/4層(捨て場)と言えるであろう。丘陵頂部の平坦面、特に捨て場1と捨て場2との間を注意して探したが、焼土・灰跡3基を検出しただけで堅穴建物は見つからなかった。この辺りは明瞭な4層が殆ど見られない。丘陵頂部にある平坦面は西側の調査区外へと続いているため、居住域が西側に広がっている可能性を指摘したい。同様に捨て場1も西側調査区外に続く。

捨て場2は丘陵頂部の平坦面にあり、規模は約275㎡と捨て場1より小さい。層序は1層(表土)、2層(黒ボク、後期主体)、3/4層(捨て場2の主体となり、多量の遺物を含む)、4～6層(前述した4・5・6層が不明瞭であるため一括して扱っている)、7層(八戸火山灰)となる。出土する土器の形態的特徴から、基本的に捨て場1と同じ時期に形成されたと考えている。土器・石器類の他に遺跡の外から持ち込まれた大小の自然礫を多量に含む状況も、捨て場1と共通していた。土器は破片となって散在するものが多い中で、その場で潰れたような状態で出土する個体も複数見られた。3/4層の厚さは3cm前後と捨て場1よりもやや薄い。重複する遺構は堅穴建物1棟と土坑1基のみで、焼土・灰は層位的に捨て場2と同じかやや古いようである。よって捨て場2も残存状態は良い。

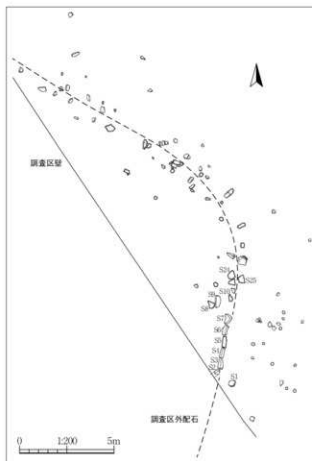
第7図調査区全体図にあるように捨て場1と捨て場2との間にこの時期の居住域があったと想定して精査したが堅穴建物は見つからなかった。よって西側の調査区外に居住域が展開している可能性がある。捨て場2も同様に西側へと続いている。

縄文時代後期

配石遺構は、洋野町内で2件目の調査例となった(第20～24図)。丘陵頂部の平坦面に位置し、2層面(黒ボク)で検出した。調査区内での規模は東西15m、南北16mで、検出された範囲の中で最も南側の部分(ⅡB3p杭付近)からほぼ北方向(N-8°-E)へ5m程直線的に並び、更に北西へと向きを変え、15m程緩やかに弧を描くように延びており調査区外へと続く。

配石10の直ぐ北にある配石24(内側)、配石25(外側)から2列に分かれるように配置されているように見えるので第83図に境界を示した。直線的に並ぶ配石2～配石10も内側の列に対応していると推測される。2列に分かれるのであれば、内側と外側で新旧関係があるとの解釈も生じるが、配石と配石が重なった状態のものは存在しないため確かめることはできない。もちろん、2列に分かれるように見えるからと言って、同時に存在しているという考え方も可能である。

もう一つの特徴として、北西方向へ緩やか



第83図 1号配石平面図

な弧状を描くように続く部分では、複数個体がまとまるものと、単独で配されるものがあるように見え、その配石と配石の間隔も50~160cmと、やや不規則なものとなっている(第21・22図)。

配石18や29は何れも長円形の礫で南から北へ直線的に並べられていた石列が、北西へと向きを変え、その配石と配石の間隔も50~160cmと、やや不規則なものとなっている(第21・22図)。

配石18や29は何れも長円形の礫で南から北へ直線的に並べられていた石列が、北西へと向きを変え、その配石と配石の間隔も50~160cmと、やや不規則なものとなっている(第21・22図)。

個々の配石が元位置を留めているかを土層断面の観察で確認したところ、配石3や配石7ではやや傾いていることが分かった。今は礫の縁辺部(角張った部分)が上を向いているが、本来は平坦な面を上へ揃えて配置されていたようである。何れの配石も直接地面に据えられており、根固め石を使ったものは無く簡素な造りであった。

配石遺構の下部及びその周辺から、墓壇や掘立柱建物は見つからなかった。洋野町西平内I遺跡の配石遺構は内帯と外帯から成り、この内帯と外帯の間の空間に墓壇や掘立柱建物が複数確認されている。仮に本遺跡の配石遺構も同様の構造であるならば、見つまっている石列は外帯に相当すると解釈したい。西平内I遺跡とは直線距離にして約6kmしか離れておらず、複数の集落が共同で祭祀(あくまで一つの説である)の場を造るといった行為がこの地域でも定着していたことが推測される。

しかしその一方、この地域における後期前葉の集落規模は、小さいものが目立つように思われ、配石遺構とそれを造ったのであろう人々が暮らした集落との関係については必ずしも詳らかではないと感じている。(杉沢)

2 捨て場出土土器について

(1) 層位ごとの傾向

【捨て場1・2】捨て場1については3層下部・3/4客土層・4層、捨て場2については3層・3層盛土・4層から出土した土器の底部形状、地紋の原体、文様の内訳を、第四章3節で示した分類・細分番号とともに一覧表に示した(表A-1~5、B-1~5)。表A-1~2・B-1~2に関しては、底部形状の判明する個体に限定し作成した。A-1によると、捨て場1の4層から極小平底・鈍角尖底・平底(底面に原体末端圧痕を伴う：以下、原端)が認められ、鈍角尖底・尖底については3/4客土層から増加すること、乳房状尖底が3層下部からの出土に限定されること等が看取できる。B-1によると、捨て場2では鈍角尖底土器が4層から確認されており、極小平底と乳房状尖底・平底(原端)は3層盛土層(前期前半)から確認され始める。表A-1・B-1の結果を考慮すると、極小平底・鈍角尖底・平底(原端)は、少なくとも前期初頭には見られる底部形態であり、乳房状尖底・尖底・丸底の底部形態は、本遺跡においては前期前半以降から現れるやや新しい要素と捉えることができる。

A-1 【捨て場1：底部形状】 ※形状不明を除く

底部形状	3層下部 (To-Cu 直後)	3/4客 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
1 極小平底	2	0	1	2
2 乳房状尖底	1	0	0	1
3 鈍角尖底	5	9	3	16
4 尖底	2	3	0	6
5 丸底	0	0	0	0
6 平底(原端)	1	0	1	2
合計	11	12	5	28

B-1 【捨て場2：底部形状】 ※形状不明を除く

底部形状	3層 (To-Cu 直後)	3層盛土 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
1 極小平底	2	4	0	6
2 乳房状尖底	3	1	0	4
3 鈍角尖底	8	3	2	13
4 尖底	1	0	0	1
5 丸底	1	0	0	1
6 平底(原端)	0	1	0	1
合計	15	9	2	26

A-2 [捨て場1：分類] III F類に限る

分類番号	3層下部 (To-Cu直前層)	3/4客 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
■ F1g①	1			1
■ F1g②	1			1
■ F1g			1	1
■ F2g①	1			1
■ F3a①	1	1		2
■ F3ag①		1	1	1
■ F3g②		2	1	3
■ F3g④		1		1
■ F3g⑥		1		1
■ F3g⑧	3	1	1	5
■ F3g			1	1
■ F3h②	1			1
■ F3h④		2		2
■ F4g②	2			2
■ F4g③		3		3
■ F6g①			1	1
■ F6g②	1			1
合計	11	12	5	28

※底部形状不明なものは除外

B-2 [捨て場2：分類] III F類に限る

分類番号	3層 (To-Cu 前後)	3層盛 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
■ F1a②		1		1
■ F1d①		1		1
■ F1g①	1			1
■ F1g②		1		1
■ F1g③		1		1
■ F1h②	1			1
■ F2g②	2	1		3
■ F2g③	1			1
■ F3a①	1			1
■ F3a②	1			1
■ F3d①		1		1
■ F3d②	1			1
■ F3g①	2		1	3
■ F3g②	2	2		4
■ F3g			1	1
■ F3h②	1			1
■ F4a①	1			1
■ F5g②	1			1
■ F6g		1		1
合計	13	9	2	26

※底部形状不明なものは除外

■原体の比較：A-3によると、捨て場1では、4層(前期初頭)以降に単節縄文(150：内0段多条42)、複節縄文(45：内0段多条8)、単軸絡条体(8)、組紐(3)が確認されている。※カッコ内の数字は点数。以下、同。組紐縄文(9：内、複節8)・特殊原体(3：内0段多条1)は3/4客土層(前期前葉)から3層下部(To-Cu直前)にかけて確認されている。B-3によると、捨て場2においても単節縄文が最多(78：内0段多条22)で、それに次ぐ複節縄文(20：内0段多条3)、組紐縄文(26：内、複節14)、棒状施文(4)と共に、4層(前期初頭)から出土している。組紐(3)、付加条(2)、単軸絡条体(7)、無節縄文(3)については3層盛土(前期前半)から3層(To-Cu前後)にかけて確認されている。捨て場2では、3層盛土から3層にかけての組紐縄文の確認点数が複節縄文よりも多く、捨て場1の組紐数と比較しても多いことが特徴である。捨て場毎に確認された原体、及び点数については表A-3・B-3にまとめた。

■文様の比較：A-4によると、捨て場1では殆どの文様が4層(前期初頭)から同時出現的に表れる。表裏縄文は4層で1点認められる他、これ以降は未検出となり存続期間が短い。羽状縄文は、4層(前

A-3 [捨て場1：原体] III F類に限る

地紋の原体	3層下部 (To-Cu直前層)	3/4客 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
a 縦縄	3(3)	6(9)		9
ag 組紐・単節縄文		1(1)		1
b 縦縄	1	1	1	3
d 単軸絡条体	1	1	6	8
e 棒状施文	1			1
f 無節	1			1
g 単節縄文	46(12)	5(13)	53(17)	100
h 複節縄文	16(1)	11(9)	18(9)	45
i 特殊原体	2	1(1)		3
j 無紋			1	1
合計	71	72	79	222

※aの項目は、この内複節を示す

※ag・g・h・iの項目は、この内0段多条を示す

B-3 [捨て場2：原体] III F類に限る

地紋の原体	3層 (To-Cu 前後)	3層盛 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
a 縦縄	17(9)	7(4)	2(1)	26
ag 組紐・単節縄文	1			1
b 縦縄	1	2		3
c 付加条	1	1		2
d 単軸絡条体	2	5		7
e 棒状施文	3		1	4
f 無節縄文	2	1		3
g 単節縄文	45(13)	23(9)	10(1)	78
h 複節縄文	9(2)	6	5(1)	20
i 特殊原体	2			2
合計	83	45	18	146

※aの項目は、この内複節を示す

※g・hの項目は、この内0段多条を示す

2 捨て場出土土器について

A-4 [捨て場1：文様]ⅢF類に限る

文様	3層下部 (To-Cu直前期)	3/4客 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
①重複縄文	11	14	8	33
②斜行縄文(横位)	22	14	25	61
③斜行縄文(縦位)	4	2	1	7
④多段施文+ループ	1	2	2	5
⑤多段施文+原体圧痕	2		5	7
⑥非結束羽状	4	2		6
⑦結束羽状縄文		1	1	2
⑧複数組み合わせ	2	5	2	9
⑨異方向・不整	21	30	19	70
⑩斜位(条の横走・縦走)	1	1	3	5
⑪浅沈線	1			1
⑫表裏縄文			1	1
⑬表裏糸文	1	1	5	7
⑭原体回転方向不明			1	1
合計	70	72	73	215

B-4 [捨て場2：文様]ⅢF類に限る

文様	3層 (To-Cu前後)	3層途 中(前期前半)	4層 (前期初頭)	計
①重複縄文	9	6	2	17
②斜行縄文(横位)	31	17	5	53
③斜行縄文(縦位)	1	1		2
④多段施文+ループ	4			4
⑤多段施文+原体圧痕	2		1	3
⑥非結束羽状	3		1	4
⑦結束羽状縄文			2	2
⑧複数組み合わせ	1	1		2
⑨異方向・不整	19	12	5	36
⑩斜位(条の横走・縦走)	5	1		6
⑪浅沈線	3		1	4
⑫表裏糸文	2	5		7
⑬原体回転方向不明	1	1		2
合計	81	44	17	142

期初頭)から3/4客土層(前期前半)にかけては結束羽状縄文(2)が、3/4客土層(前期前半)から3層下部(To-Cu直前期)にかけては非結束羽状縄文(6)が認められる結果となり、結束→非結束と変遷する。B-4によると、捨て場2においては横位斜行縄文(53)、異方向・不整縄文(36)、重複縄文(17)、羽状縄文(6)、段上端に原体末端圧痕を伴う横位多段施文(3)、浅沈線文(4)が4層(前期初頭)から認められる。羽状縄文については4層から結束(2)、非結束(1)が両方見られるが、その後結束羽状縄文が消え、非結束(3)のみ3層(To-Cu前後)まで残る結果となり、ここでも結束→非結束への変遷がたどれる。捨て場毎に確認された土器文様、及び点数については表A-4・B-4にまとめた。

■他型式との共伴関係：A-5によると、捨て場1においては、4層(前期初頭)にⅢA、ⅢC類の共伴が認められる。その後、ⅢC類は3/4客土層、3層下部においても継続的に共伴する。やがて3層下部においてⅢD類が伴うようになる。B-5によると、捨て場2においては、3層のみにⅢC類の共伴を認めるが、殆どⅢF類土器のみで構成される。なお、ⅢB(上川名Ⅱ)類については、3～4層にかけて1点、2～3層から3点出土しているが、単独の層位が特定できない為、表からは除外している。ⅢE(北海道前期押型文)類については、捨て場1から2点出土しているが、いずれも2層(後期)からの出土であり、表中に現れていない。

A-5 [捨て場1]他型式との共伴

分類番号	3層下部 (To-Cu直前期)	3/4客 (前期前半)	4層 (前期初頭)	計
ⅢA(長七谷地帯Ⅲ群)	0	0	2	2
ⅢC(表館式・早稲田6類a～b)	4	6	4	14
ⅢD(大木2a式)	3	0	0	3
合計	7	6	6	19

B-5 [捨て場2]他型式との共伴

分類番号	3層 (To-Cu前後)	3層途 中(前期前半)	4層 (前期初頭)	計
ⅢA(長七谷地帯Ⅲ群)	0	0	0	0
ⅢC(表館式・早稲田6類a～b)	1	0	0	1
ⅢD(大木2a式)	0	0	0	0
合計	1	0	0	1

(2)第Ⅲ群F類土器について

本遺跡からは縄文時代前期初頭から前葉にあたる第Ⅲ群土器としたものが調査区全域から921点出土している。そのうち、明確なメルクマール(巖状熱糸圧痕文や竹管椀施文による連続刺突文など)によって既存の型式に帰属が可能なものについてはA～E類に分類した。点数はA類(長七谷地帯Ⅲ群)7点、B類(上川名Ⅱ式)4点、C類(表館式・早稲田6類a～b)40点、D類(大木2式)5点、E類(北海道前期押型文)2点である。このほかに上記にあてはまらない特徴を持つ第Ⅲ群F類が全部で863点確

認されている。以下、簡略に特徴をまとめる。

■**底部形状**(表C-1)：形状が判明するものでは鈍角尖底が57点と最も多く、尖底(17)、極小平底(16)、乳房状尖底(12)がこれに続く。丸底(5)、原体末端圧痕を伴う平底(5)も少量認められる。このほか底部を欠くため「形状不明」としたものが751点(約87%)あり、底部形状の項目中最多にのぼっている。しかし不明とはしたものの、底部末端を欠くだけのものも多数あり、残存部からある程度器形を推定できるものも多い。胴下部からの立ち上がりで判断したところでは、底部無紋ナデの典型的な平底を呈するものは現時点の資料の中には1点も見当たらず(※本類の底部形態6「平底」は、全て底面に原体末端圧痕を伴う)、これが本類の特徴ともいえる(第46図)。

■**口唇部の状態**：口唇部が確認できる695点中、口唇部が丸みを持つもの236点(34%)、先細17点(2%)、平坦375点(54%)、内削4点(0.5%)、外削61点(0.9%)、両削2点(0.2%)という構成比である。口唇部上面に施文されるものがこの内65点(9.3%)存在する。内訳は、縄文を施文するもの26点(LR0多:12点、LR:8点、RL:3点、LRR:1点、RLR1点、組縄1点)、撚糸文5点、原体末端押圧3点、棒状工具による押圧15点、指頭押圧3点、円形刺突文4点、刻目文を加えるもの5点、すこの状圧痕文4点である。すこの状圧痕文については、成形後の乾燥過程で、すこの状の敷物に口縁部を下にして並べ置いた際に付いた可能性がある(a588・a589・a661・a852)。

■**胎土**：植物繊維を多量に混入するものが709点(82.4%)、中量73点(8.4%)、少量53点(6.2%)、微量21点(2.4%)で、多量に繊維を混入するものが一般的である。このほか繊維無し2点(0.2%)、砂粒を混入するものが2点(0.2%)あるが、異時期のもの混入の可能性が否めない。

■**地紋の原体**(表C-2)：単節縄文(546：内、0段多糸197)、複節縄文(162：内、0段多糸19)、組縄縄文(57：内、単節21・複節35・単複1)、単軸絡条体(32)、無節縄文(13)、付加条(15)、棒状施文具(16)等が確認されている。組縄縄文については全域から57点が確認されているが、内訳は単節の組縄Aが21点(38%)、複節の組縄Aが35点(61%)、単・複節1点(1%)の構成比率となっており、単節より複節のほうが出現率の高い結果となっている。

■**文様**(表C-3)：横位斜行縄文(276)、地紋の施文方向を複雑に変える異方向および不整な縄文(230)、回転方向の異なる同一原体を重複施文し、細かな網目状の文様

C-1 [調査区全域：底部形状] ※863個体中

底部形状	確認数	比率(%)
1 極小平底	16	1.85
2 乳房状尖底	12	1.4
3 鈍角尖底	57	6.6
4 尖底	17	1.97
5 丸底	5	0.58
6 平底(原掘)	5	0.58
7 不明(欠損)	751	87.02
合計	863	100

C-3 [調査区全域：文様比率] ※863個体中

文様の種類	確認数	比率(%)
①重複縄文	94	10.89
②斜行縄文(傾位)	276	31.98
③斜行縄文(傾位)	23	2.66
④斜縄文多段+ループ文	28	3.24
⑤斜縄文多段+原体圧痕文	28	3.24
⑥非結束羽状(横・菱・縦形)	35	4.06
⑦結束羽状(横・菱・縦形)	16	1.85
⑧複数原体・文様の組合せ	24	2.78
⑨異方向・不整	230	26.65
⑩斜位回転(条の縦・横走)	24	2.78
⑪浅沈堀	16	1.85
⑫表裏縄文(口縁部内面)	7	1未満
⑬撚糸文(単巻1・4・5巻)	25	2.9
⑭原体回転方向不明ほか	37	4.29
合計	863	100

C-2 [調査区全域：原体比率] ※871点：複数使用8点含む

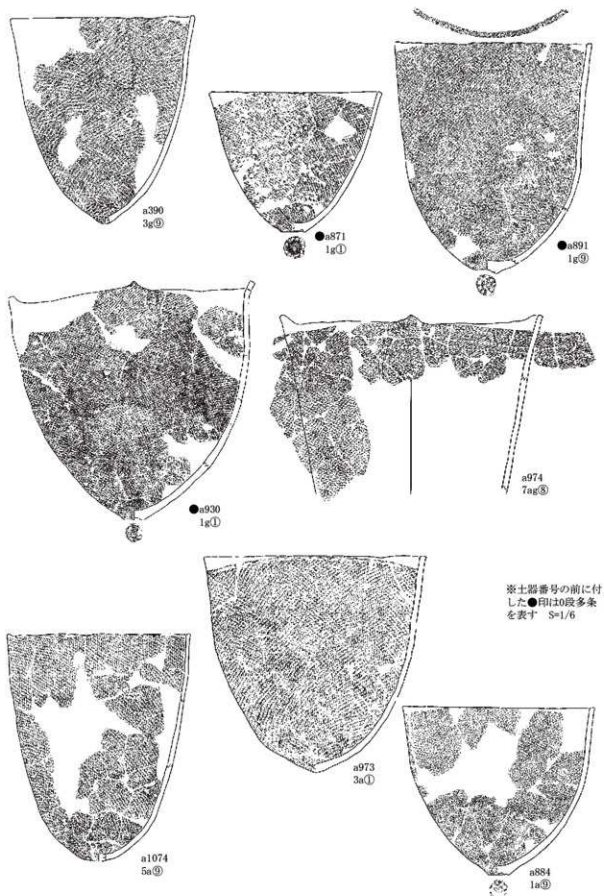
原体の種類	確認数	比率(%)
a 組縄	57(単節21、複節35、単複1)	6.54
b 組縄	12	1.38
c 付加条	15	1.72
d 単軸絡条体	32(1巻26、4巻2、5巻3、1+5巻1)	3.67
e 棒状施文具	16	1.84
f 無節縄文	13	1.49
g 単節縄文	546(内、0段多糸197)	62.69
h 複節縄文	162(内、0段多糸19)	18.60
i 特殊原体	12(内、0段多糸1)	1.38
j 無紋	3	1未満
k 不明	3	1未満
合計	871(複数使用8点含む)	100

を作り出す重複縄文(94)、段上端にループ文や原体末端圧痕を伴う横位多段施文(57:ループ29・原体圧痕28)、羽状縄文(51:結束16・非結束35)などによって文様のな効果を表現したものが多く、羽状縄文は、横位のほか、縦位の回転により綾杉状を表出するもの、菱形状を指向するものが見られる。このほか捻糸文(25)、原体の斜位回転による条の横走(縦走)施文(24)、縦位斜行縄文(23)、複数原体・文様の組み合わせによるもの(23)などが見られる。浅沈線により、鋸歯状などの幾何学文・曲線文を構成するものも13点存在する(a212・a217・a284・a789・a970・a1006ほか)。

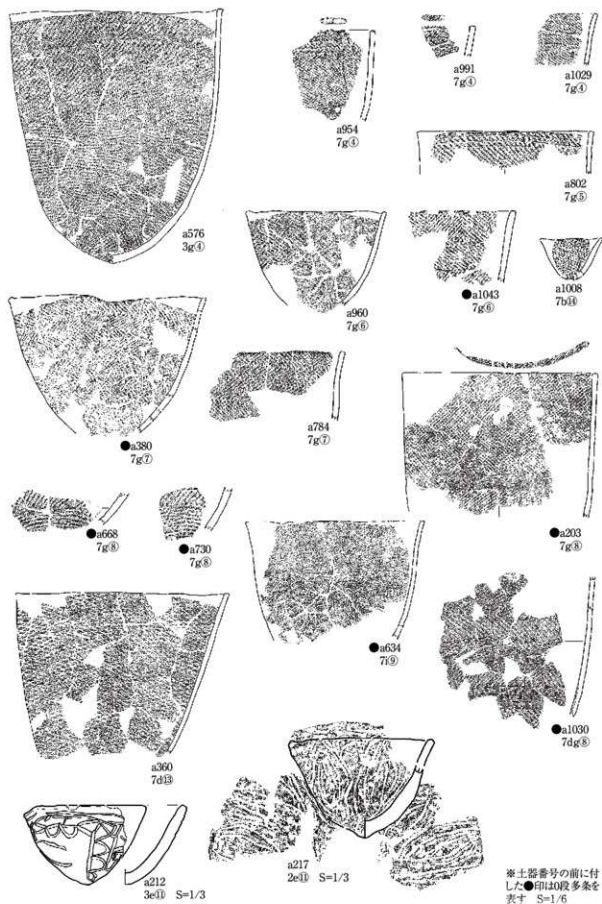
■組縄縄文土器について:平成4年に「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」を著した高橋重貴子氏は、その中で組縄縄文を多く用いる土器を組縄縄文土器と呼び、仏沢Ⅲ遺跡の組縄縄文土器の比定型式は早稲田6類cにもっとも近いものと述べている。その土器の特徴は、「口唇上面に施文を持ち、捻糸文が非常に少なく組縄縄文が多いものの、他の要素が早稲田6類cにほぼ近い」とした上で、早稲田6類cにおける組縄縄文についても、「未発表資料のなかにかかなりの率で存在し、おそらく3〜4割に達するのではないかと」言及されている。口唇上面の施文はⅢ群F類中にも65点確認されており、組縄縄文が多いことも仏沢Ⅲ遺跡と類似している。一方、早稲田貝塚の調査概報を見ると、昭和31年に調査が行われた早稲田貝塚第一次調査概報によると、早稲田6類cの資料は、「平縁の単純な深鉢形で、底部は丸底か尖底に近いものらしい。(中略)。器面全体に縄紋あるいは捻糸紋が施され、それ以外に紋様はないが、縄紋原体末端の圧痕あるいは羽状縄紋が紋様の効果を表わしている」と表現されている。改めて図版を確認すると、羽状縄文(横位・綾杉)、異方向施文、重複施文、原体の末端圧痕など、ⅢF類と強い類似性を持つ要素が看取できる。第84図a974は、捨て場2の3層から出土した土器であるが、波状口縁を呈し、口縁部文様帯に環状末端ループ文を横位に3段施文し、更に鋸歯状に環状末端ループ文が施文されている。胴部の地紋は複節の組縄Aである。本資料は口縁部形状に早稲田6類bの要素、文様の幾何学構成の点では6類aの要素を感じさせる資料である。一方、地紋の原体に組縄Aを用いる点においては早稲田6類cの要素を持つものといえ、早稲田6類a・b・cの特徴を併せ持つ個体と考えられることからここに挙げておく。よく似た器形のものに、全形が判明するa930(第84図)がある。こちらは底部形状が極小平底を持つもので、a974とは同時期のものと見られ、これまで器形がはっきりしなかった6類cの一端を明らかにするような資料である。これらのことから、現段階においてⅢF類が最も近い既存土器型式は、早稲田6類c(県南においては主に大木Ⅰ式併行か)と捉えておきたい。但し、本類については、表裏縄文・浅沈線文など、ほかにも文様のバリエーションが広いことから、ある程度の時期幅を内包するものと考えられ、この点については更に再考の余地がある。今回は主に捨て場出土資料に限定した分析とならざるを得なかったが、今後は遺跡全域のⅢ群F類土器を対象を広げた分析を実施していくことで、さらに新しい知見が見いだされていく可能性がある。今回の調査で鹿鞭浜Ⅰ遺跡の捨て場1・2から前期初頭〜前葉にかけてのまとまった資料が得られたことは、これまで不明な点が多かった同時期の土器編年の間隙を埋める可能性のある資料の発見という点で貴重な成果であったといえる。(丸山)

引用・参考文献

- 見玉作左衛門・大場利夫 1954「南館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告第9輯』北海道大学北方文化研究室
二本柳正一・角鹿福三・佐藤達夫 1957「青森県上北部早稲田貝塚」『考古学雑誌第43巻2』
佐藤達夫 1983「青森県上北部早稲田貝塚」『東アジアの先史文化と日本』
滝沢村教育委員会 1987「仏沢Ⅲ遺跡」『岩手県滝沢村文化財調査報告書第5集』
高橋重貴子1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤藤先生還暦記念



第84図 第Ⅲ群F類土器(抜粋)1



第85図 第Ⅲ群F類土器(抜粋)2

3 遺跡に搬入された自然礫について

鹿糠浜 I 遺跡-17では、鋭利な刃部や細部調整、研磨などの痕跡をもつ製作目的が明らかな石器遺物や、剥片を打ち欠いただけの礫器、および人為性を認めたい自然礫とみられるものが多数出土した。

これらは、砂岩や頁岩、凝灰岩、凝灰質砂岩、チャート、安山岩、玢岩、花崗岩や花崗閃緑岩などの花崗岩類、およびホルンフェルスなどであり、遺跡周辺の丘陵や海岸段丘を構成している。

遺跡から出土した大礫～中礫の多くは、海浜礫の特徴の有効な証拠となり得る超円礫や円礫である。これらは本来、鹿糠浜 I 遺跡のような陸上の黒ボク土層分布地には堆積しないものであり、遺跡に搬入されたものと考えられる。

おそらく、遺跡に近い鹿糠海岸の礫が採集されて搬入されたものと思われる。

しかし、遺跡の礫は鹿糠海岸のそれに比べて、円盤状や小判状のものが多く感じられた。このことを確かめるために、遺跡の搬入礫と海岸の自然礫を比較することは、石器製作を行った縄文人の石材選択の傾向を把握するとともに、石材採集地を推定するうえで有意義であると考えられた。そこで、加工が認められない自然礫の中から、統計的に処理可能な適度の量が出土した採集区を選び、礫の形状、円磨の程度を記録した。また、比較試料として、鹿糠海岸の礫と、明確な人工物が出土していない鹿糠 6 層出土の礫を同様に計測した。

○方法と試料

黒ボク土層出土の礫を計測した地区は、丘陵頂部から北斜面へ移行し始める II B10h・11h の 2 グリッドと、丘陵頂部の南側で緩く傾斜する II B18o-p・19o-p の 4 グリッドである（以下、10h11h グリッド、1819o p グリッドと略記する）。

10h11h グリッドは鹿糠3/4客土層の上位にある 2 層出土の礫、1819o p グリッドは鹿糠 3-5 層擾乱層の上位にある鹿糠 2 層出土の礫を用いて、縄文時代後期・晩期に採集された礫の特徴をみようと試みたが、いずれもの 2 層からも縄文時代前期の土器が少なからず出土しているため、礫も縄文時代前期と後・晩期に採集された礫が混在するものと推測される。

鹿糠海岸の自然礫は、礫浜で 1 m 四方の範囲を 4 箇所設け、その表面に分布する礫を大きい方から 2 グリッド分と、小さい方から 2 グリッド分を、それぞれ 100 個以上を目的に計測したものである。

明確な人工物が出土していない鹿糠 6 層の礫は、II A11y グリッドの深掘りトレンチ約 2 m から出土したものを無作為に採取して現場で計測した。この採集区は丘陵頂部の東側にある谷の底付近にあっている。

鹿糠 6 層は縄文時代前期前葉以前の年代が与えられるが、南部浮石降下直前の年代を含む 6 層上部の礫と草創期にまでさかのぼる可能性のある下部の礫は区別できていない。

礫の形状は長径・中央径・短径（第87図）を計測し、円磨の程度（第86図）を比較して記録し、球形体は Krumbein（1981）の式： $3\sqrt{(\text{短径} \times \text{中間径} \times \text{短径}) / (\text{長径})}$ を用いて計算した（第88図）。

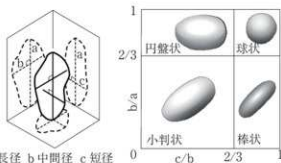
花崗岩類を除く計測数は以下の通りである。

10h11h グリッド：381個、1819o p グリッド：217個、II A11y グリッド400個、鹿糠海岸：429個
礫の記録をもとに、次の 5 散布図を作成した。



第86図 礫の円磨の程度のクラス分け

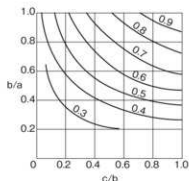
Power (1953) を引用したフリッツ・ムーア (1999) に加筆して作成。



a 長径 b 中間径 c 短径

第87図 礫の3軸測定法と形状分類

角 (1966) と Zingg (1935) を引用した公文ほか (1998) をもとに作成。



第88図 球形度曲線

Krumbein (1941) を引用した公文ほか (1998) をもとに作成。

4. 採集区の礫の散布状況は、球形度の分帯に平行するように、負の相関をもってまとまりをもつ。その中で、鹿糠海岸と10h 11h グリッド、II A11y グリッドの礫は、球状・円盤状・棒状・小判状の礫が3径の b/a 比0.4以上や c/b 比0.45以上に集中する傾向がある。これに対して、1819o p グリッドの礫は他の3採集区に比べて分散している。

礫の3径の比率 $[b/a \cdot c/b]$ の平均値でもこの傾向は明瞭であり、鹿糠海岸 $[0.74 \cdot 0.64]$ 、10h 11h グリッド $[0.74 \cdot 0.64]$ 、II A11y グリッド $[0.76 \cdot 0.65]$ となり、球状に近い円盤状に位置するが、1819o p グリッドでは $[0.73 \cdot 0.55]$ となり、他の3区より少し扁平側に寄る。

球形度は、0.6以上0.8未満が多く、著しく棒状に長いものや小判状にごく薄いものはほとんどない

全礫の形状と球形度 (第89図)、グリッドごとの球形度 (第90図)、円磨の程度ごとの礫の形状 (第91図)、粒度ごとの礫の形状と円磨の程度 (第92図)、花崗岩類の形状と円磨の程度 (第93図)

なお、円磨の程度に係る第91図では、特に優位な区分ではない超角礫と角礫は一括して扱った。また、第92図を描くに当たっては、超角礫と角礫は人為の加工の可能性を取り除くために除外した。

長軸256mm以上の巨礫はII B10h・11h グリッドとII A11y グリッドの各1点であったので、散布図を作成しなかった。

以上の操作により、第92図にプロットした個数は、10h 11h グリッド: 372個、1819o p グリッド: 216個、A11y グリッド319個、鹿糠海岸: 424個である。

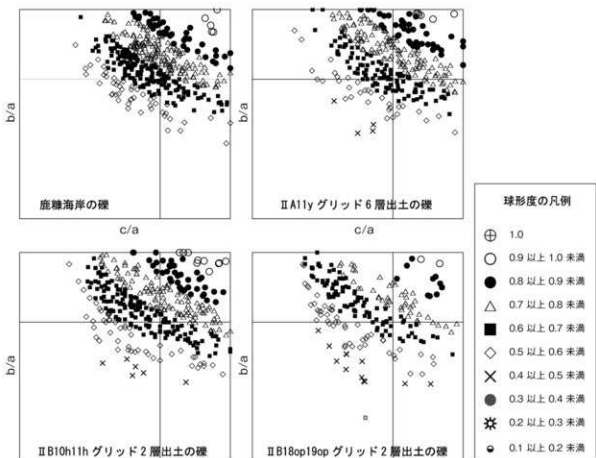
花崗岩類として別途記録した礫は、調査区の丘陵頂部から無作為に採集した (作業の進行上、比較的早い時期に記録されて取り上げられた) もので、鹿糠1層 (表土) ~ 3層から出土したものである。計測数は116個で、礫形状と円磨の程度を第93図に示した。

ただし、花崗岩類でも、大礫以下で円礫・超円礫などの海浜の礫の特徴と認められたものは、花崗岩類として別扱いにせず、他の材質の礫と同様に第89~92図の統計に加えた。

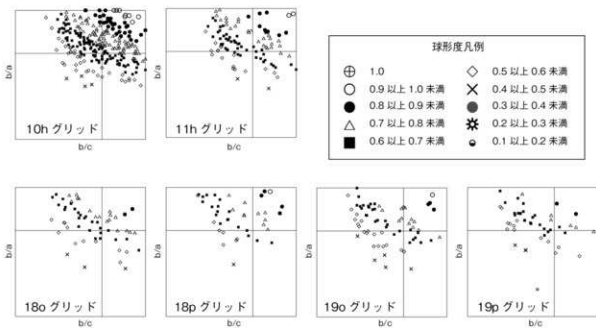
○分析結果

▽礫の形状と球形度 (第89・90図)

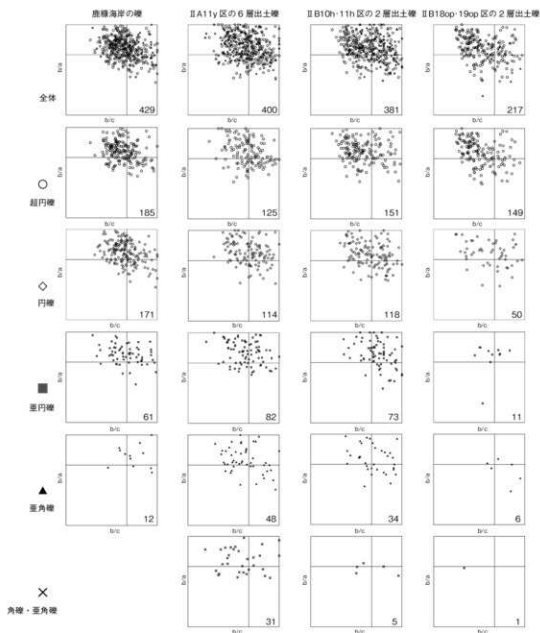
球形度は礫が均等に摩耗した結果、伸びや扁平さがなくなり、球に近づいた目安を示す。



第89図 礫の形状と球形度



第90図 グリッドごとの球形度



第91図 礫の形状分類および円磨の程度

が、球に近い0.9以上のものも少ない。

10h 11h グリッドと II A11y グリッドのものは、0.5未満のものを少量含むつつ、ある程度の集中性があり、散布状況が類似する。

鹿糠海岸の礫には、球形度0.5未満のものが含まれず、集中性が他区より一段と高い。海岸で恒常的に波に掃さられて礫どうしの衝撃で表面が摩耗し続けている状況が表れているものと読み取れる。

一方、1819op グリッドのものは、球形度0.5未満のものが多く。

球形度のモードも10h 11h グリッドが0.69、II A11y グリッドが0.66、鹿糠海岸が0.68で近似しているのに対して、1819op グリッドは0.62と若干低く、散布状況を反映している。

第89図に示したように、10h 11h グリッドの礫の大半(274個72%)は10h グリッドのもので、かつ、グリッドの一部トレンチで欠けているため、20m程度の範囲から集中して出土していることにな

る。明確な遺構は見つかっていないが、両グリッドにおける人間活動の差異を反映しているのであろう。

一方、1819 o p グリッドの礫はグリッドごとの出土数 (18 o : 58個27%、18 p : 42個20%、19 o : 69個32%、19 p : 48個22%) に大きな差はない。また、どのグリッドの散漫な散布状況も類似している (第90図)。これは3~5 擾乱層の著しい生物擾乱が影響しているのであろう。

▽礫の円磨の程度と形状 (第11表・第91図)

全般に円磨度の高い礫が高率を占める。最も高率のものは1819 o p グリッドの礫であり、超円礫と円礫の合計が92% (69+23%) である。次いで鹿糠海岸の礫が83% (43+40%) と高率である。10 h 11 h グリッドのものは71% (33+31%)、II A11 y グリッドのものは60% (31+29%) でやや低いが、いずれも過半数を超えている。

円磨度の低い (角ばっている) 礫は少ないが、II A11 y グリッドのものはやや目立つ。亜角礫は12%、角礫+超角礫は8%である。

円磨の程度別に形状をみると、多くの円磨程度で円盤状が卓越しており、鹿糠海岸、10 h 11 h グリッド、1819 o p グリッドでは、超円礫の過半数を占める。また、球状が次に多い。

例外的に、1819 o p グリッドの超円礫では円盤状に次いで小判状が比較的多く2割近くを占める。

10 h 11 h の亜円礫では球状が卓越する。球状の亜円礫は36点あり、極粗粒中礫上部1個 (3%)、極粗粒中礫下部1個 (3%)、粗粒中礫上部15個 (42%)、粗粒中礫下部19個 (53%) であり、大半が粗粒中礫である。粗粒中礫の増大と呼応して、超円礫+円礫が小型大礫の93%から漸減している。II A11 y の角礫・超角礫では皿状※ (円盤状) が多く、刃状※ (小判状) がこれに次ぐ。

※箱型・皿状・角柱状・刃状は、球状・円盤状・棒状・小判状に対応する超角礫・角礫の用語として用いる。フリッツ・ムーア (1999) の用語による。

▽粒度別の礫の形状と円磨の程度 (第12表・第92図)

ここではWentworth (1922) の粒度スケールに基づき、大型大礫~粗粒中礫 ($-8 \sim -4 \phi$: 265~16 mm) を0.5 ϕ 刻みで8区分して検討する。上述したように、巨礫 ($-8 \phi \leq$) と中粒中礫 ($-4 \sim -3 \phi$) 以下は除外する。

第12表には、各粒度区分帯に属する礫の個数と、それに含まれる超円礫と円礫の個数、およびその割合を示す。

第91図中のプロットがまとまる範囲は、グレーの太線で示す。

鹿糠海岸の礫は、大型大礫の下部~粗粒中礫の上部 ($-7.5 \sim -4.5 \phi$) が多く、これらの区分帯では、どの散布図も円盤状を中心に楕円状にまとまりがある。ただし、小型大礫の下部 ($-0.65 \sim -0.6 \phi$) が少ない。

II A11 y グリッドの礫は、小型大礫下部~極粗粒中礫下部 ($-6.5 \sim -5 \phi$) が多く、極粗粒中礫 ($-6 \sim -5 \phi$) が過半数を占める。小型大礫以下 ($-7 \phi \leq$) は円盤状~球状を中心に楕円状にまとまりがあり、礫の分散状況は鹿糠海岸に近似する。

一方、10 h 11 h グリッドの礫は、極粗粒中礫の下部~粗粒中礫下部 ($-5.5 \sim -4 \phi$) が多く、粗粒中礫上部 ($-5 \sim -4.5 \phi$) が最多数を占める。極粗粒中礫以下 ($-6 \phi \leq$) はII A11 y グリッドの分散状況と同様に、鹿糠海岸のそれと近似する。しかし、小型大礫の上部・下部の区分帯 ($-7 \sim -6 \phi$) は、円盤状や小判状に偏る傾向が認められる。

第11表 各地区における円磨の程度別の形状比較

		鹿糠海岸		II A11y		II B10h1h		II B1819p	
		個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
超円礫	総個数	429		400		381		217	
	個数	185	43	125	31	151	40	149	69
	球状	34	18	31	25	32	21	16	11
	円盤状	98	53	40	39	86	57	89	60
	棒状	29	16	25	20	13	9	16	11
	小判状	24	13	20	16	20	13	28	19
円礫	個数	171	40	114	29	118	31	50	23
	球状	42	25	42	37	36	31	15	30
	円盤状	82	48	48	42	47	40	21	42
	棒状	28	16	18	16	24	20	9	18
	小判状	19	11	6	5	11	9	5	10
	歪円礫	個数	61	14	82	21	73	19	11
歪角礫	球状	23	38	25	30	38	52	4	
	円盤状	26	43	39	48	19	26	6	
	棒状	7	11	10	12	15	21	0	
	小判状	5	8	8	10	1	1	1	
	個数	12	3	48	12	34	9	6	3
	角礫・超角礫	個数/%	0/0	0/0	31/8	8/5	5/1	1/1	1/1
角礫・超角礫	箱型	0		6	19	1		0	
	皿状	0		14	45	1		0	
	角柱状	0		4	13	1		0	
	刃状	0		7	23	2		1	
	箱型	0		6	19	1		0	
	皿状	0		14	45	1		0	
角柱状	0		4	13	1		0		
刃状	0		7	23	2		1		

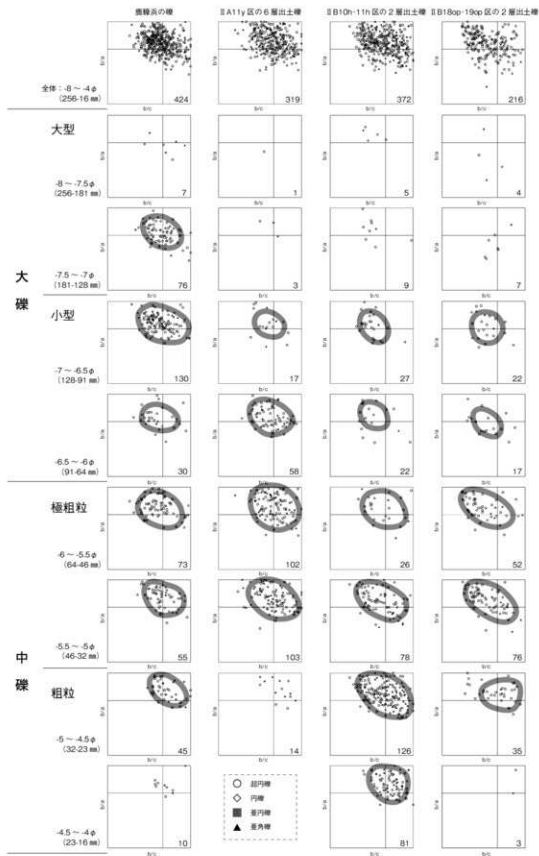
第12表 粒度別の礫個数と超円礫・円礫の個数およびその割合

粒度区分	鹿糠海岸			II A11y.6層			II B10h1h.2層			II B1819p.2層							
	個数	粒度区分 個数/%	超円礫・ 円礫個数 円礫%	個数	粒度区分 個数/%	超円礫・ 円礫個数 円礫%	個数	粒度区分 個数/%	超円礫・ 円礫個数 円礫%	個数	粒度区分 個数/%	超円礫・ 円礫個数 円礫%					
全体	424		354	319		220	69	372		262	70	216	198	92			
大礫	-8~7.5φ	7	2	3	-	1	0	1	-	5	1	5	-	4	2	3	-
	-7.5~7φ	76	18	67	88	3	1	2	-	9	2	8	-	7	3	5	-
	-7~6.5φ	130	31	101	78	17	5	13	76	27	7	25	93	22	10	20	91
小礫	-6.5~6φ	30	7	27	90	58	18	54	93	22	6	19	86	17	8	17	100
	-6~5.5φ	73	17	69	95	102	32	79	77	26	7	21	81	52	24	48	92
中礫	-5.5~5φ	55	13	49	89	103	32	61	59	78	21	60	77	76	35	72	95
	-5~4.5φ	45	11	31	69	14	4	10	-	126	34	84	67	35	16	32	91
粗粒	-4.5~4φ	10	2	7	-	0	0	0	-	81	22	42	52	3	1	1	-
中粒	-4~3φ																

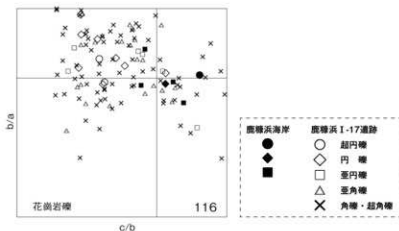
1819p グリッドの礫は、小型大礫上部～粗粒中礫上部 (-7~4.5φ) が多く、極粗粒中礫下部 (-5.5~5φ) が多数を占める。極粗粒中礫以下 (-6φ≦) は円盤状・球状 (小判状) ・棒状を囲むやや細みの楕円状にまとまりがあり、鹿糠海岸の分散の様子と類似する。しかし、小型大礫の上部下部の区分帯 (-7~6φ) では、円盤状や小判状に偏る傾向が認められる。

▽粒度区分帯ごとの礫数に占める超円礫と円礫の割合 (第12表)

超円礫と円礫に注目すると、鹿糠海岸では大型大礫下部～極粗粒中礫下部 (-8~4.5φ) が高率で、小型大礫～極粗粒中礫 (-7~5φ) 中の超円礫と円礫の合計が9割前後を占める。その下位は漸減する。



第92図 粒度別の礫の形状分類と円磨の程度



第93図 花崗岩類の形状分類と円磨の程度

II A11y グリッドでは小型大礫上部～極粗粒中礫上部 (-7～-5.5φ) が高率で、小型大礫下部 (-7中の超円礫と円礫の合計が9割以上を占める。その下位は漸減する。

10h11h グリッドでは小型大礫上部～極粗粒中礫下部 (-7～-5φ) が高率で、小型大礫上部 (-7～-6.5φ) 中の超円礫と円礫の合計が9割以上を占める。粒度別個数が高い粗粒中礫上部 (-5～-4.5φ) は、超円礫・円礫の比率はさほど大きくなく、最高率の小型大礫上部から漸減する。

1819op グリッドでは粒度別個数の割合が高かった粗粒中礫 (-5～-4φ) を含め、小型大礫上部～粗粒中礫上部 (-7～-4.5φ) が極めて高率で、いずれも超円礫と円礫の合計が9割以上を占める。

▽花崗岩類の形状と円磨の程度 (第93図)

記録した116個のうち、皿状(円盤状)が多く62個(53%)、次いで刃状(小判状)27個(23%)、角柱状(棒状)17個(15%)で、箱型(球状)9個(8%)がもっとも少ない。

円磨の程度は超円礫3個(3%)、円礫9個(8%)、亜円礫10個(9%)、亜角礫22個(19%)、角礫+超角礫42+30=72個(36+26=62%)である。

角礫や超角礫は割り石であり、擦り石の可能性があったり、受熟したものもある。

花崗岩類は当該地の基盤岩であり、和座川河床や両崖、その河口付近の鹿糠海岸のほか、遺跡西方の丘陵上200～300mの表土直下に分布していて、いつでも採集が可能である。最大のは長径57.5cm・中央径33.9cm・短径20.7cmの亜円礫で、重さは54.8kgであった。同様の巨礫は、和座川河口から鹿糠海岸に多数散在しており、遺跡出土のものに類似した6個(黒色)を計測して散布図に示した。

○検討

以上を踏まえて、4採集区の礫の組成を比較検討する。

人為加工が認められないII A11y グリッド6層出土の礫は、鹿糠海岸の礫とともに自然礫として扱う。

鹿糠海岸の礫は8割以上が円磨度の高い超円礫や円礫である(第11表)。小型大礫の下部(-0.65～-0.6φ)が少ないのは(第12表)、双方性の粒度分布を反映している可能性があるが、大きい方が

らと小さい方から採取した際の扶間の粒度に当たったための方法上の問題とも思われる。しかし、この点を除いても、鹿嶋海岸の広さから、礫は大きいサイズから小さいサイズまで採集が可能である。

Ⅱ A11y グリッド 6 層の礫には、亜角礫・角礫・超角礫などの角張った礫が少なからず認められる（総礫数の 20%；第 11 表）。そのほとんどは、丸みのある自然面を残すもので、本来は円礫や超円礫であったことがわかる。

この採集区は谷底付近にあたっており、そこでの 6 層は、層序の項で述べたように、腐植質ロームを主体としつつ少なからず礫を含んでいた。この岩相は一般的な風成のそれではなく、腐植質ロームが礫とともに再堆積したものと考えられる。しかし、水成のラミナ構造は認められない。したがって、この再堆積層は土石流のような斜面流下物か、凍結融解を要因とする礫と堆積物の緩慢な移動であるクリープの一種ではないかと考えられる。

礫の割れ面は単発的で連続剥離や交互剥離などの加工技術は認められず、また、割れ面のエッジは縄文時代前期の石器類とほぼシャープではなく、少し摩耗の跡が認められた。

そのため、八戸火山灰層堆積後、南部浮石堆積前の縄文時代草創期～前期中頃までの期間に、土石流で礫どおしが衝突して破砕したり、凍結により破砕したりしたものと推測される。

当該地の基盤岩である前期白亜紀の花崗岩類は、調査地南側の和座川両崖に露出しているほか、遺跡西部の表土直下にも分布する。

和座川の北崖海拔 50m 付近には、円礫層の露頭がある。上述したように、これは最終間氷期（およそ 12 万年前の酸素同位体ステージ MIS5 の時期）の海成礫層と推定される。

Ⅱ A11y グリッドの 6 層礫採集地は海拔 51.5m 前後にあり、八戸火山灰層で覆われた谷底には、この円礫層が分布しているものと推測される。その円礫層中の礫が、斜面崩壊や凍結融解作用により再堆積したものと考えられる。

一方、10h11h グリッドと 1819op グリッドは、上述したように、出土した礫のほぼすべてが人間が搬入したものと考えられる。

10h11h グリッドの礫はⅡ A11y グリッドのそれと、散布図における球形度・形状の散布状況（第 89 図）、円磨の程度の割合（第 11 表・第 91 図）などでよく似ている。しかし、礫が搬入された 10h11h グリッドには亜円礫に球状が多く、かつ、球状亜円礫も含めて長径 32mm 以下の粗粒中礫が多い。これに対して、自然礫からなるⅡ A11y グリッドには上述のごとく自然破砕による角礫・超角礫が目立ち、かつ小型大礫～極粗粒中礫が多いなど（第 12 表・第 92 図）、異なる点も明瞭である。

1819op グリッドでは、超円礫が突出して多く、かつ、円盤状に次いで小判状が多いのが特徴である。円い扁平さが好んで搬入されたようである。しかも、極粗粒中礫が過半数（59%）を占め、ここでも小振りの礫が意識的に持ち込まれているといえよう。

こうしてみると、小振りの礫の形状は球状の亜円礫もあれば円盤状～小判状の超円礫もあり、選択性に欠けている。小振りの礫は形状や円磨度より中礫程度のサイズであることが重要であったのだろう。

粗粒中礫のような小振りの礫は、西平内 I 遺跡で注目されている。縄文時代後期初頭～前期の中のごくかに属する 15 号土坑から、7～0.4cm（小型大礫の下部～中礫）の小さな礫が総数 1,058 個も見つかっている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、2017）。この土坑は配石遺構の内帯と外帯の間にあり、祭祀に関連する遺構とみられている。小礫は土坑の中に限らず、内帯～外帯まで広く分布している。本遺跡の小振りの礫も、祭祀に関連があるかもしれない。

また、1819 o p グリッドでは、小型大礫上部・下部が円盤状～小判状側に偏る傾向がある。この傾向は10h11hグリッドでも認められ、小型大礫上部・下部が円盤状～小判状側に偏っている。このことから、掘り拳1個～2個分程度の大きさの円い礫が意識的に搬入された可能性を指摘できる。

○まとめ

以上をまとめると、10h11hグリッドと1819 o p グリッドの鹿糠2層出土礫は、一般に、鹿糠海岸や谷底の鹿糠6層の礫と類似した組成をもち、海岸や段丘礫で採集され、遺跡に搬入されたものと考えられる。しかし、掘り拳1～2個分程度の大きさの小型大礫は、比較的扁平な円盤状～小判状のものが選択的に採集された可能性がある。石器遺物の大きさとの比較から、目的物を推定することができよう。

また、比較的小振りの中礫が、多量に持ち込まれている。西平内I遺跡の祭祀関連遺構の事例も参考にして、その利用目的を検討する必要がある。(趙)

引用文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2017) 西平内 I 遺跡発掘調査報告書—三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査—。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 673 集、295p。
- 公文富士夫・立石雅昭 (1998) 新版砕屑物の研究法。地学及書 29、地学団体研究会、399p。
- 角 靖夫 (1066) 礫の調べ方。地質ニュース、no.145、36-43。
- フリッツ W.J.・ムーア J.N. (1999) 層序学と堆積学の基礎。愛知出版、386p。
- Krumbein, W.C. (1941) Measurement and geologic significance of shape and roundness of sedimentary particles. *J. Sed. Petrol.*, 11, 64-72。
- Powers, M.C. (1953) A new roundness scal for sedimentary particles. *J. Sed. Petrol.* 23, 117-119。
- Zingg, Th. (1935) Beiträge zur Schotteranalyse. *Min. Petrog. Mitt. Schweiz.* 15, 39-140。

写 真 图 版





遺跡全景(南から)



遺跡遠景(南から)

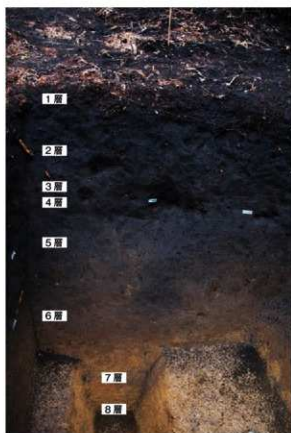


遺跡遠景(西から)、遺跡の南側を和座川が流れる

カラー写真図版2 遺跡遠景



1号配石遺構全景(上が西)



基本層序(T3南壁)



T3東壁 4~6層



T3東壁 6~8層



捨て場1 遺物出土状況



捨て場1 作業風景



捨て場1 土器 左(a579)右(a578)



捨て場1 土器(a576)



捨て場1 土器 左(a930)右(a974)

カラー写真図版4 平成29年度調査区 捨て場1 遺物出土状況



カラー写真図版5 平成29年度調査区 出土土器①



カラー写真図版6 平成29年度調査区 出土土器②



カラー写真図版7 平成29年度調査区 出土土器③・出土石器(石斧)



製塩土器(外面)



製塩土器(内面)



遺跡の北東側(南から)、写真の右奥に洋野町種市の市街地



遺跡近景(北から)、写真奥は北玉川遺跡



調査区南側 現況(東から)



調査区北側 現況(南から)



調査区北側 現況(北から)



表土除去作業(南から)



調査区東端 丘陵頂部(南東から)



調査区東端 北側斜面部(北から)



調査区東端 北側谷底部(北から)



谷底部全景(南西から)



トレンチ8全景(南東から)



トレンチ11全景(北から)



トレンチ13全景(北から)



トレンチ14全景(南から)



調査区西壁断面 南側(南東から)



調査区西壁断面 中央(北東から)



調査区西壁断面 中央～北側(北東から)



調査区西壁断面 北側(捨て場1含む・北から)

写真図版 4 調査区西壁(1)



調査区西壁断面 北側(捨て場1含む・北東から)



調査区西壁断面 北側(北東から)中禊火山堆積状況



調査区西壁 断面(北東から)切り株右が中禊火山灰、左が捨て場1の3/4層



全景(上が西)



全景(南から)

写真図版6 1号配石遺構(1)



2層面段階(南東から)



2層面段階(北から)



周囲を3層まで掘り下げた段階(南から)



周囲を3層まで掘り下げた段階(北から)

写真図版8 1号配石遺構(3)



表土直下 検出(北から)



表土直下 検出(北東から)



表土直下 検出(北西から)



2層面段階 II B12n付近(北東から)



2層面段階 II B12n付近(西から)



2層面段階 II B12m付近(南西から)



2層面段階 II B11m付近(西から)



3層面段階 II B12n・o付近(南から)



3層面段階 II B12n・o付近(北西から)



3層面段階 II B12n・o付近(北東から)



3層面段階 II B12・13n付近(南東から)



3層面段階 II B12m付近(南東から)



3層面段階 II B12m付近(北東から)



3層面段階 II B11・12m付近(北西から)



配石1断面(南から)



配石2・3断面(北東から)



配石24・25断面(北から)



配石26・27断面(南から)



配石29断面(南から)



配石42・43断面(南から)



配石44断面(南から)



配石55断面(南から)



全景(東から)



断面(北東から)



炉全景(北東から)



炉断面(北東から)



全景(南から)



断面・土器B出土状況(南から)



炉全景(南から)



土器C出土状況(南西から)



1号土坑断面(南西から)



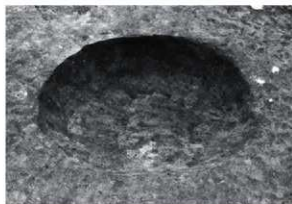
4号土坑平面(南から)



4号土坑断面(南から)



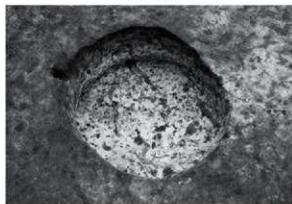
4号土坑底面(南から)



5号土坑全景(南から)



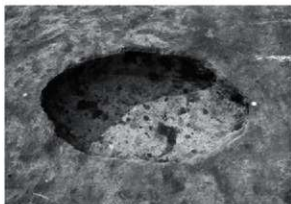
5号土坑断面(南から)



6号土坑全景(南から)



6号土坑断面(南から)



8号土坑全景(南東から)



8号土坑断面(南東から)



9号土坑全景(南西から)



9号土坑断面(南西から)



10号土坑全景(東から)



10号土坑断面(東から)



11号土坑平面(南西から)



11号土坑断面(南西から)



13号土坑全景(北東から)



13号土坑断面(西から)



14号土坑全景(西から)



14号土坑断面(西から)



15号土坑全景(南西から)



15号土坑断面(南西から)



16号土坑全景(北東から)



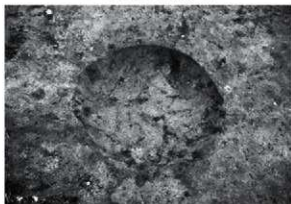
16号土坑断面(南東から)



17・18号土坑全景(南東から)



17・18号土坑断面(北西から)



19号土坑全景(南から)



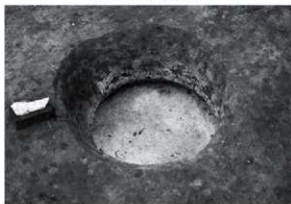
19号土坑断面(南東から)



20号土坑全景(南から)



20号土坑断面(南東から)



21号土坑全景(南東から)



21号土坑断面(南から)



24号土坑全景(北東から)



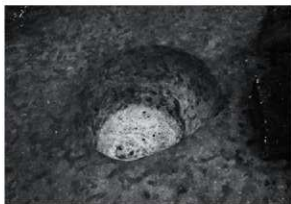
24号土坑断面(東から)



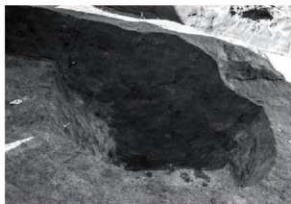
25号土坑全景(東から)



25号土坑断面(東から)



28号土坑全景(西から)



28号土坑断面(東から)



29号土坑全景(東から)



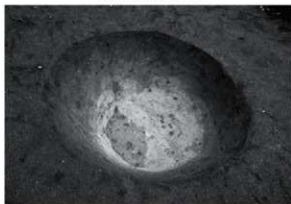
29号土坑断面(東から)



30号土坑全景(西から)



30号土坑断面(西から)



31号土坑全景(南東から)



31号土坑断面(南東から)



33号土坑全景(北東から)



33号土坑断面(東から)



34号土坑全景(南東から)



34号土坑断面(東から)



35号土坑全景(北から)



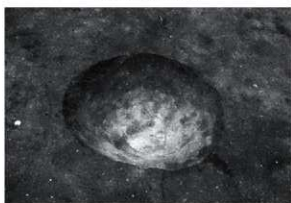
35号土坑断面(北から)



36号土坑全景(西から)



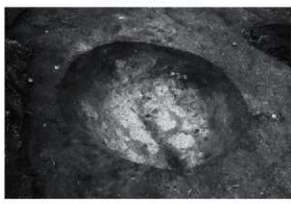
36号土坑断面(西から)



37号土坑全景(東から)



37号土坑断面(東から)



38号土坑全景(東から)



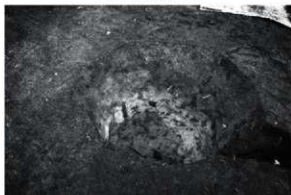
38号土坑断面(東から)



39号土坑全景(東から)



39号土坑断面(東から)



40号土坑全景(北東から)



40号土坑断面(東から)



2号土坑全景(北から)



2号土坑断面(北から)



3号土坑全景(東から)



3号土坑断面(東から)



12号土坑全景(西から)



12号土坑断面(西から)



23号土坑全景(東から)



23号土坑断面(東から)



26号土坑全景(北東から)



26号土坑断面(南西から)



32号土坑全景(北から)



32号土坑断面(南から)



1号竪穴状遺構全景(南から)



1号竪穴状遺構断面A(南から)



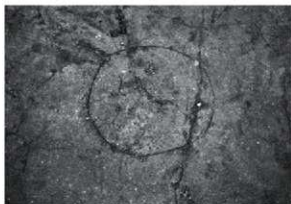
1号竪穴状遺構断面B(西から)



1号集石全景(東から)



1号集石近景(南から)



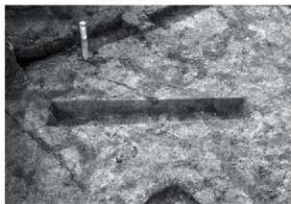
2号焼土(北東から)



2号焼土断面(北東から)



4号焼土全景(東から)



4号焼土断面(北から)



5号焼土全景・断面(南から)



作業風景(西から)



1号溝平面(東から)



1号溝断面(東から)



現況(北から)



全景(北から)



現況(南から)



全景(南から)



南北ベルト1 II B12k(東から)



南北ベルト1 II B12(東から)



南北ベルト1 II B12(北東から)



南北ベルト1 II B12g・h(東から)



南北ベルト1 II B12(東から)



南北ベルト1 II B12e・f(東から)



南北ベルト2 II B11i(東から)



南北ベルト2 II B11h(東から)



南北ベルト2 II B11g~h(東から)



南北ベルト2 II B11g(東から)



南北ベルト2 II B11e~f(東から)最後



南北ベルト2 II B11e~d(東から)



南北ベルト3 II B10(東から)



南北ベルト3 II B10h(東から)



南北ベルト3 II B10e(東から)



南北ベルト3 II B10d(東から)



東西ベルト4(北東から)奥に中環火山灰、手前下に南部浮石



東西ベルト5(北東から)



東西ベルト6(北東から)



作業風景



作業風景



II B8g 土器(a577)(北から)



II B8g 土器(a588)(北西から)



II B8g 土器 左(a617)右(a618)(南から)



II B8g 土器(a581)(北から)



II B9g 土器(a456)(北から)



II B9g 土器(a302)(南から)



II B9g 土器(a624)(北から)



II B9g 土器(a626)(北から)



Ⅱ B10g 土器(a527)(北から)



Ⅱ B10h 土器(a556)(南から)



Ⅱ B10h 土器(a360)(東から)



Ⅱ B11h 土器(a559)(南から)



Ⅱ B11h 土器(a380)(南東から)



Ⅱ B11h 土器 左(a558)右(a560)(北東から)



Ⅱ B11h 土器(a382)(南東から)



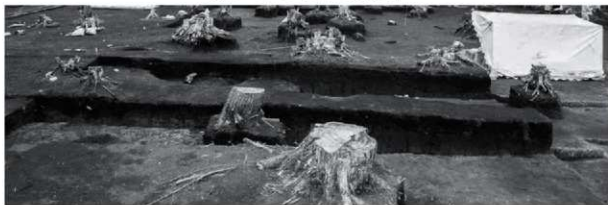
Ⅱ B8i 土器(a565)(北から)



全景(北東から)



東西ベルト1・2 II B12~13o(南から)



東西ベルト1・2 II B14~15o(南から)

写真図版32 捨て場2(1)



東西ベルト2 16~18(南東から)



東西ベルト3 II B 10~12(南から)

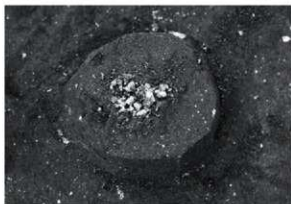


東西ベルト3 II B 10~12(南から)



南北ベルト1 II B12I~n(東から)

写真図版33 捨て場2(2)



ⅡB13p 琥珀出土(南から)



ⅡB15n 土器(a871)(東から)



ⅡB13o 土器(a1060)(北から)



ⅡB13o 土器 左(a874)右(a873)(西から)



ⅡB14o 土器(a891)(東から)



ⅡB14o 土器(a1063)(北東から)



ⅡB14o 土器(a881)(東から)



ⅡB14o 土器(a882)(南から)



全景(南東から)



断面(北東から)



遺物出土状況(南から)



遺物出土状況(南東から)



カマド全景(東から)



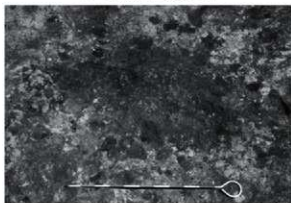
カマド煙道断面(南西から)



カマド燃焼部断面(南東から)



カマド燃焼部焼土断面(南西から)



炉1検出(南西から)



炉1断面(南東から)



Pit1全景(南東から)



Pit1遺物出土状況(南東から)



Pit2全景(南東から)



Pit3遺物出土状況(西から)



Pit3全景(南東から)



Pit3断面(南東から)



Pit4全景(南東から)



Pit4断面(南東から)



全景(南東から)



断面(北東から)



断面(南東から)



カマド全景(南東から)



カマド煙道部断面(北東から)



カマド断面(南東から)



カマド断面(北東から)



カマド袖・燃焼部断面(南東から)



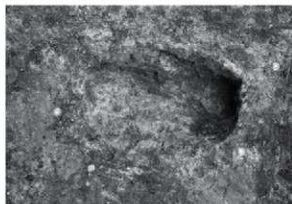
カマド燃焼部断面(北東から)



土器出土状況(西から)



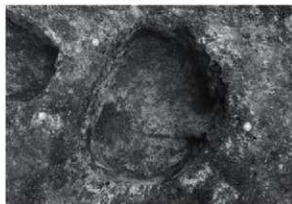
琥珀出土状況(南東から)



Pit1全景(南東から)



Pit1断面(南東から)



Pit2全景(南東から)



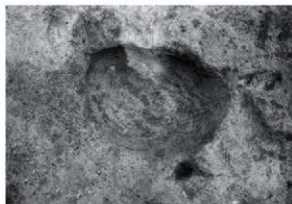
Pit2断面(南東から)



Pit3全景(南東から)



Pit3断面(南東から)



Pit4全景(南西から)



Pit4断面(南西から)



貼床断面(北東から)



貼床断面(南東から)



掘り方全景(南東から)



2号炭窯全景(南から)



2号炭窯断面(南西から)



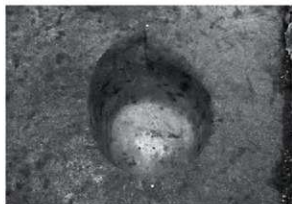
2号炭窯断面近景①(西から)



2号炭窯断面近景②(西から)



2号炭窯断面近景③(西から)



41号土坑全景(南東から)



41号土坑断面(南西から)



42号土坑全景(北から)



42号土坑断面(南西から)



43号土坑全景(北から)



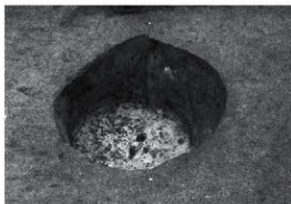
43号土坑断面(北東から)



43号土坑副穴断面(北から)



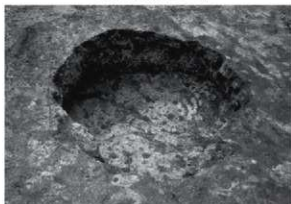
作業風景



44号土坑全景(北西から)



44号土坑断面(北東から)



45号土坑全景(東から)



45号土坑断面(南東から)



46号土坑全景(北東から)



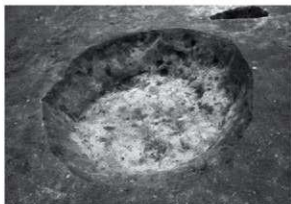
46号土坑断面(南から)



47号土坑全景(東から)



47号土坑断面(南から)



48号土坑全景(北東から)



48号土坑断面(南西から)



49号土坑全景(南から)



49号土坑断面(南西から)



50号土坑全景(北西から)



50号土坑断面(南東から)



51号土坑全景(東から)



51号土坑断面(南東から)



52号土坑全景(東から)



52号土坑断面(南東から)



53号土坑全景(南東から)



53号土坑断面(南東から)



54号土坑全景(東から)



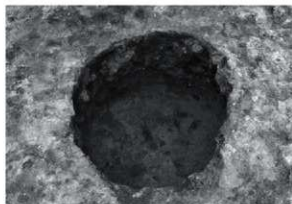
54号土坑断面(南東から)



55号土坑全景(南西から)



55号土坑断面(南から)



56号土坑全景(北から)



56号土坑断面(南東から)



57号土坑全景(北から)



57号土坑断面(南東から)



58号土坑全景(北西から)



58号土坑断面(南東から)



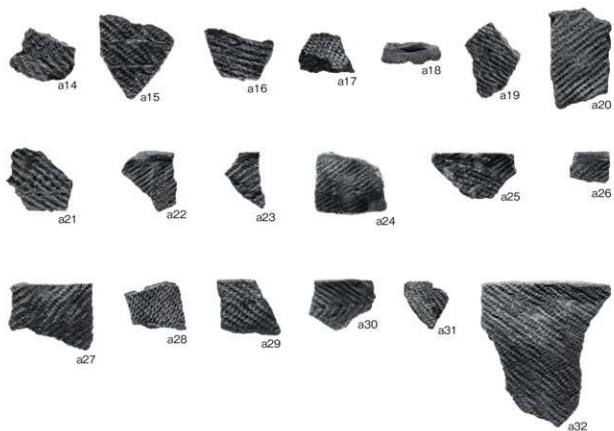
59号土坑全景(南東から)



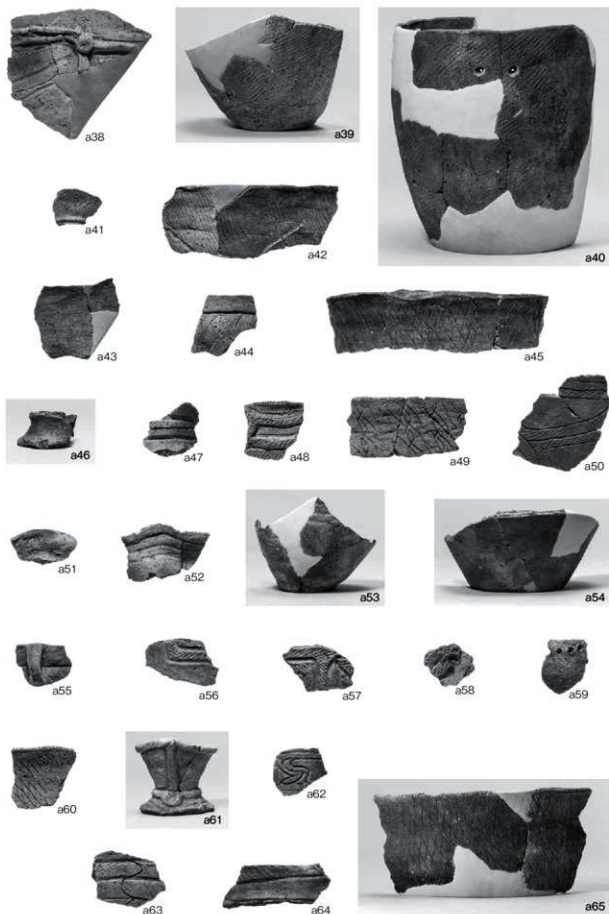
59号土坑断面(南東から)



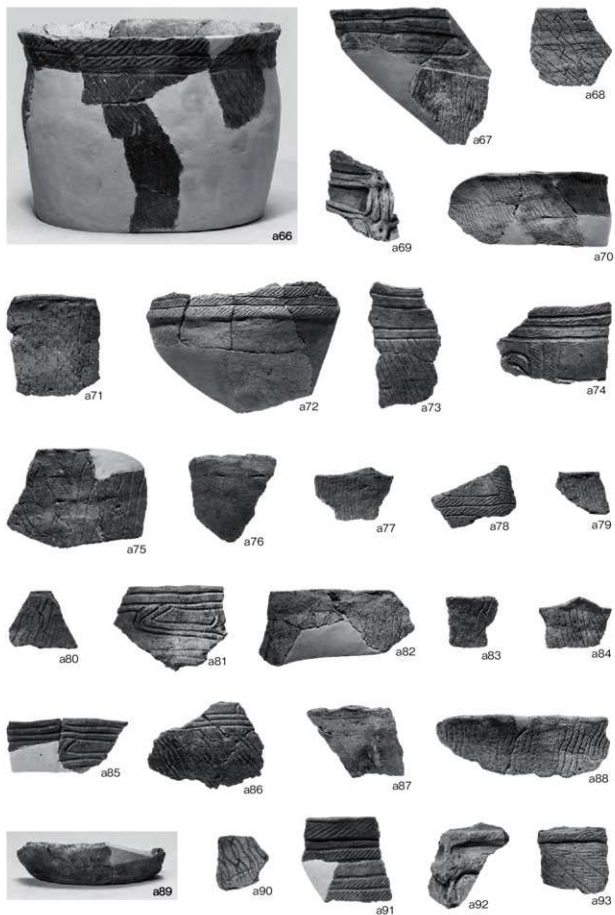
写真図版 47 遺構内出土土器 (1)



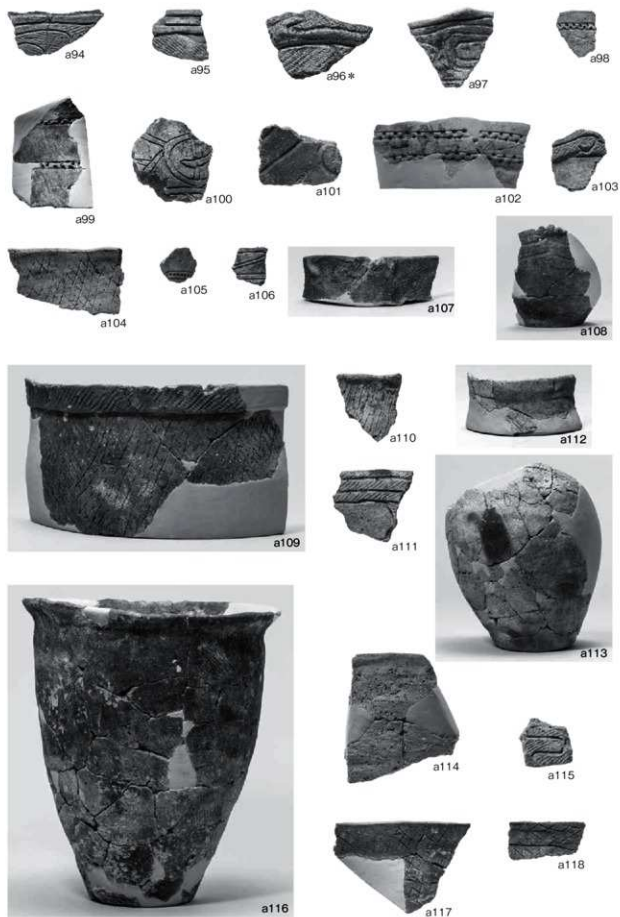
写真図版 48 遺構内出土土器 (2)



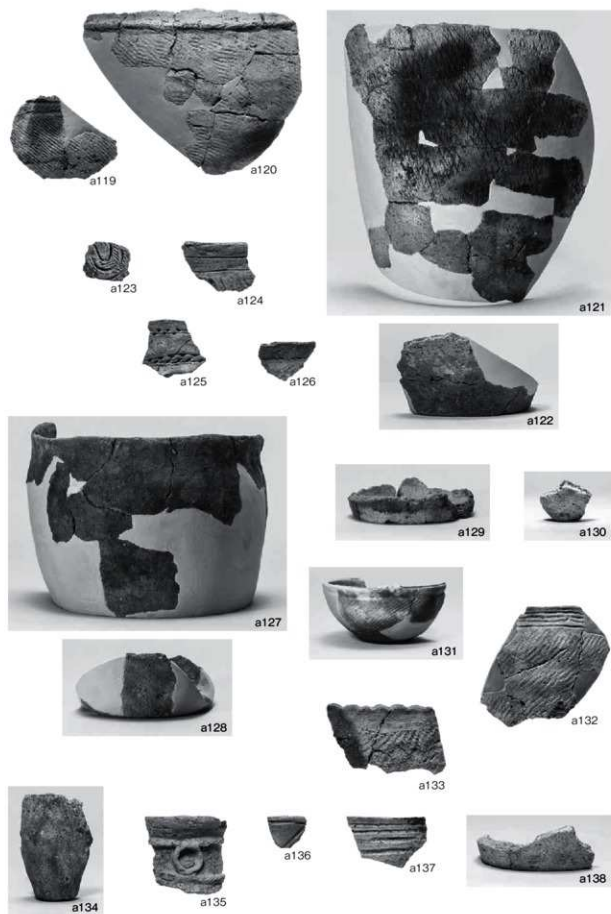
写真図版49 縄文時代後期以降の土器（1）



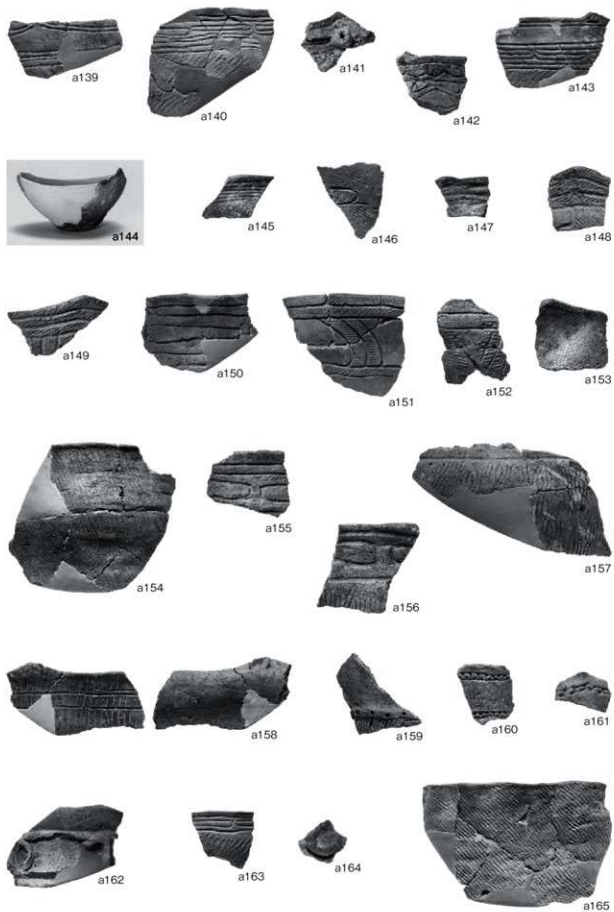
写真図版 50 縄文時代後期以降の土器（2）



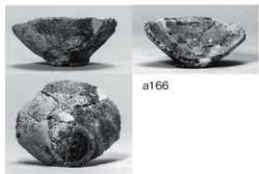
写真図版 51 縄文時代後期以降の土器 (3)



写真図版 52 縄文時代後期以降の土器（4）



写真図版 53 縄文時代後期以降の土器 (5)



a166



a167



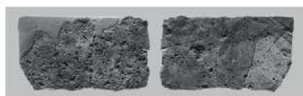
a168



a169



a170



a171



a172



a173



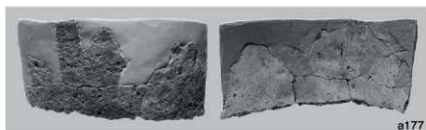
a174



a175



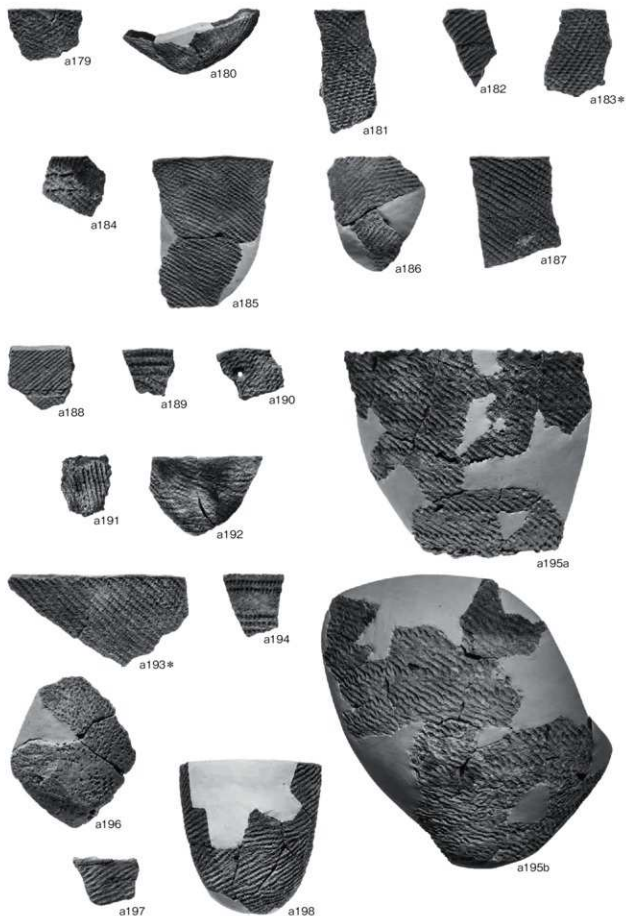
a176



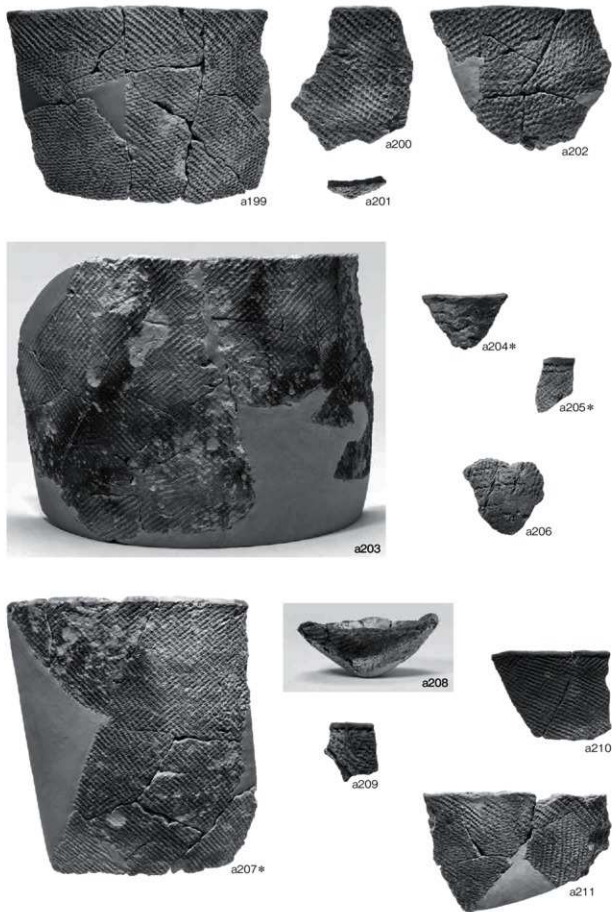
a177



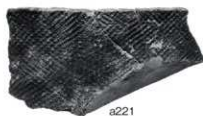
a178



写真図版55 縄文時代草創期～前期の土器(1)



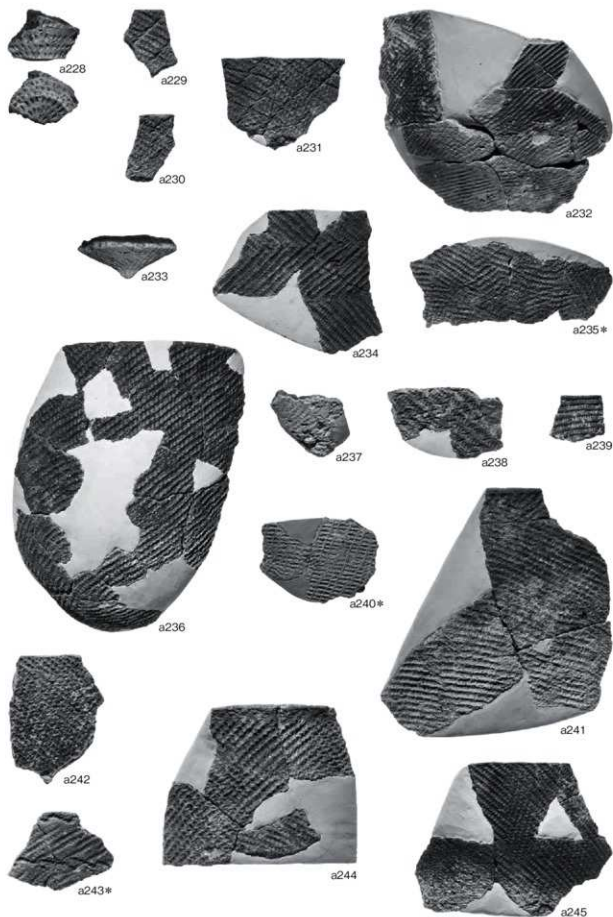
写真図版 56 縄文時代草創期～前期の土器（2）



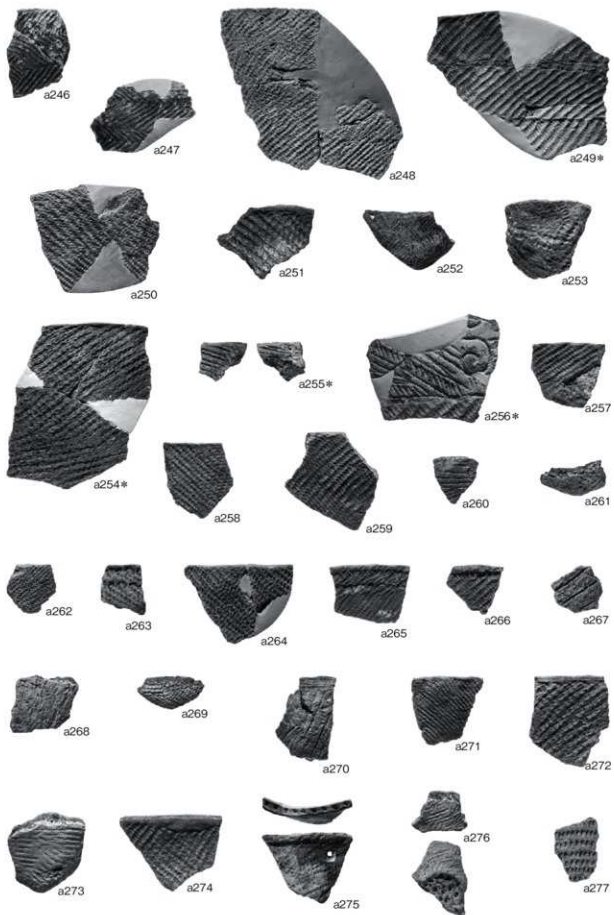
写真図版 57 縄文時代草創期～前期の土器 (3)



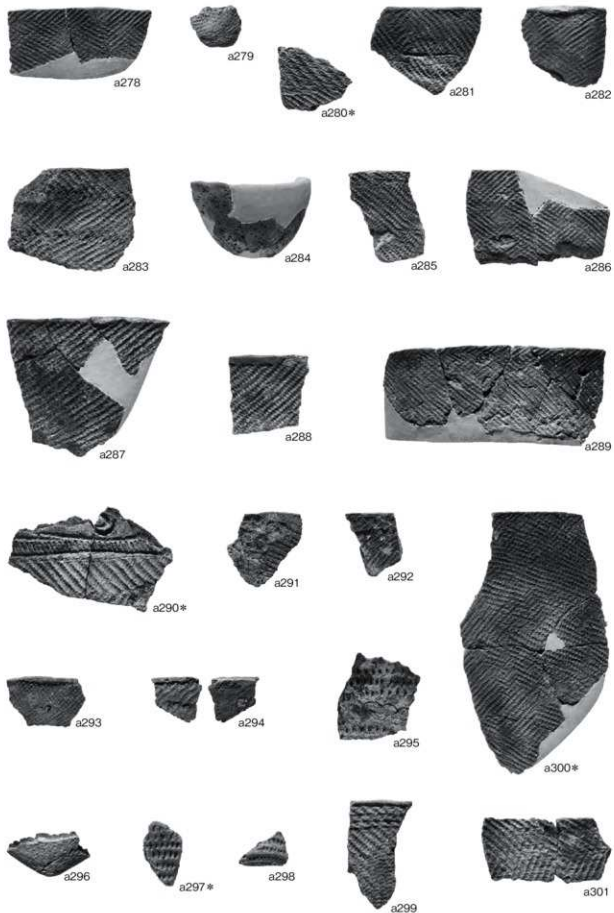
写真図版 58 縄文時代草創期～前期の土器（4）



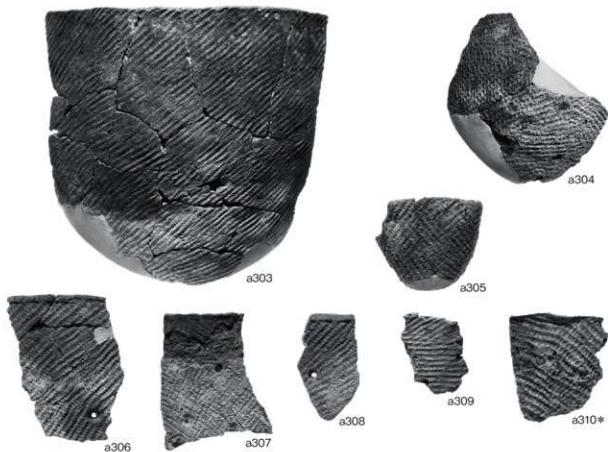
写真図版 59 縄文時代草創期～前期の土器 (5)



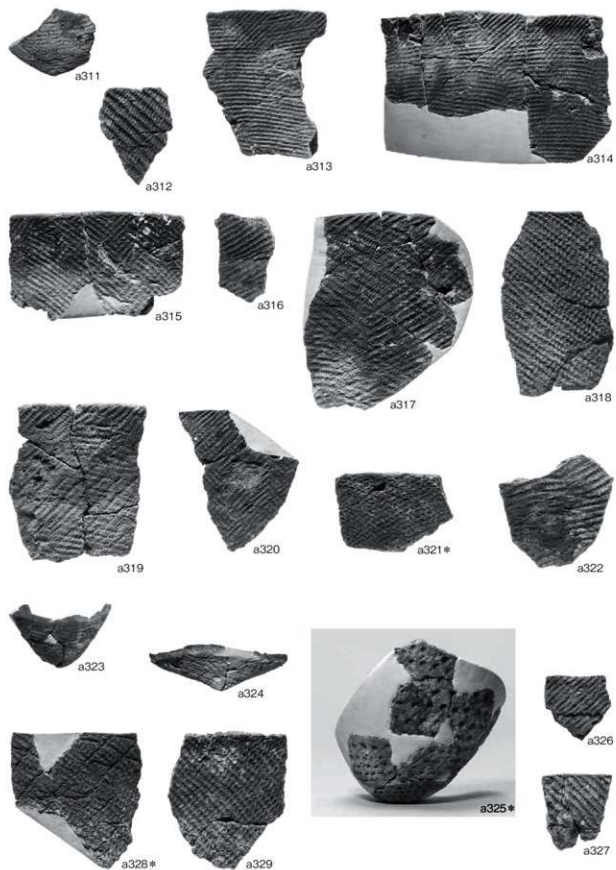
写真図版 60 縄文時代草創期～前期の土器 (6)



写真図版 61 縄文時代草創期～前期の土器（7）



写真図版 62 縄文時代草創期～前期の土器 (8)



写真図版 63 縄文時代草創期～前期の土器 (9)



a330*



a331



a332



a333



a334*



a335



a336



a337*



a338*



a339



a340



a341

写真図版 64 縄文時代草創期～前期の土器 (10)



a342*



a343



a344



a345



a346



a347



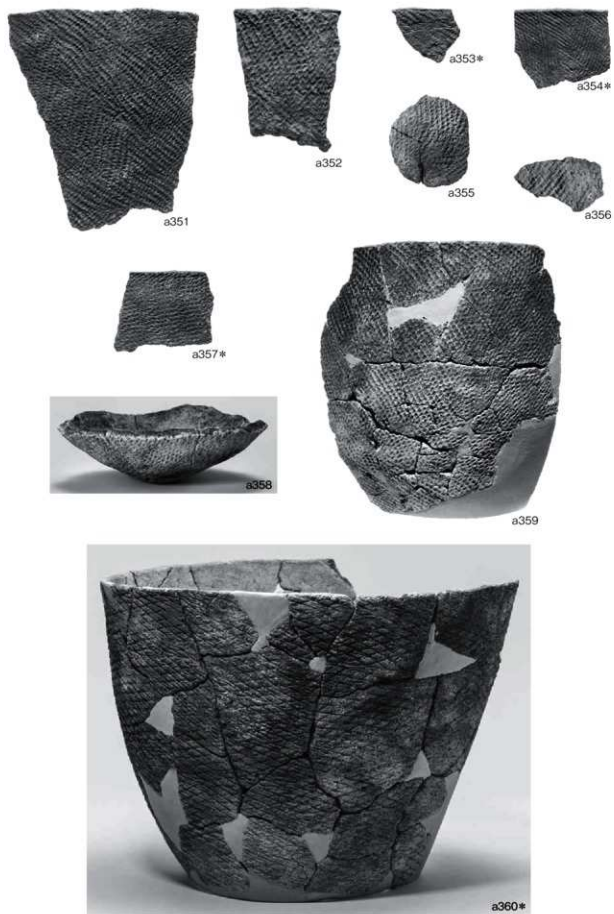
a348*



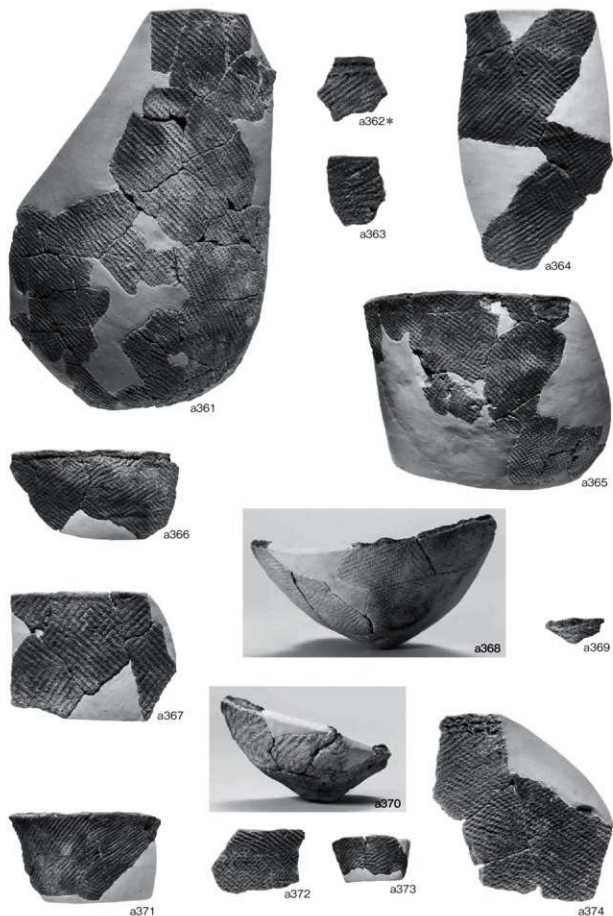
a349



a350



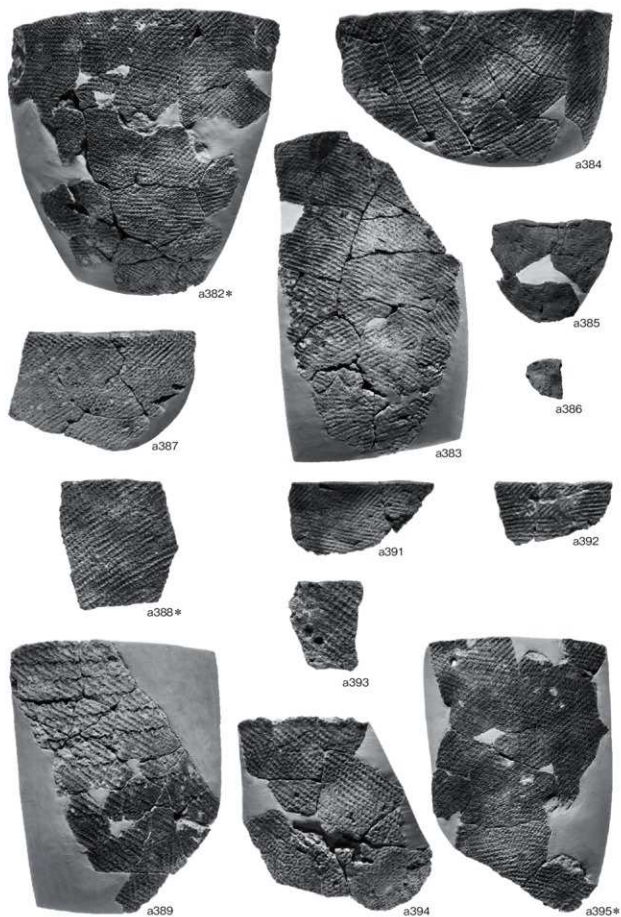
写真図版 66 縄文時代草創期～前期の土器 (12)



写真図版 67 縄文時代草創期～前期の土器 (13)



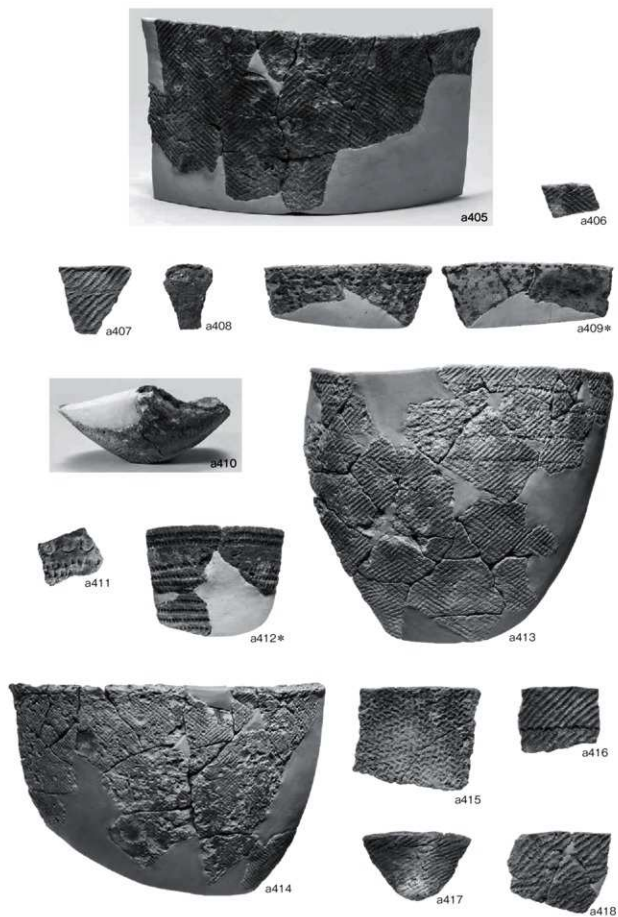
写真図版 68 縄文時代草創期～前期の土器 (14)



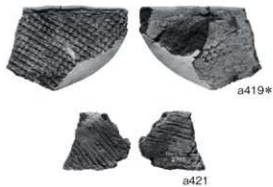
写真図版 69 縄文時代草創期～前期の土器 (15)



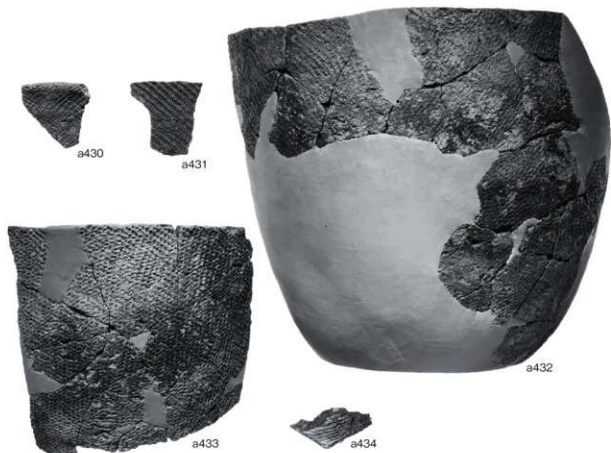
写真図版 70 縄文時代草創期～前期の土器 (16)



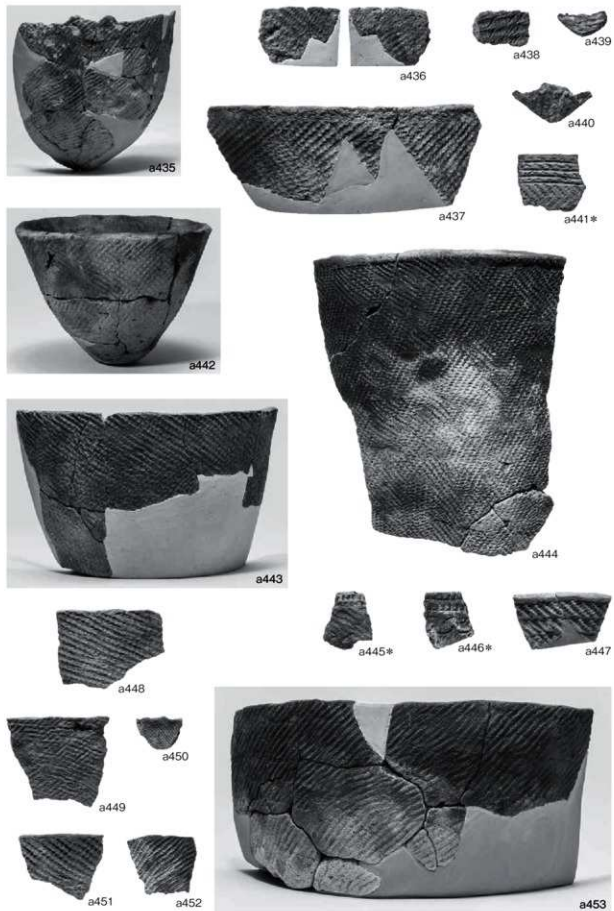
写真図版 71 縄文時代草創期～前期の土器 (17)



写真図版 72 縄文時代草創期～前期の土器 (18)



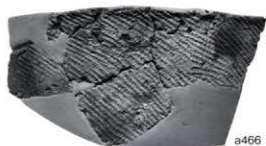
写真図版 73 縄文時代草創期～前期の土器 (19)



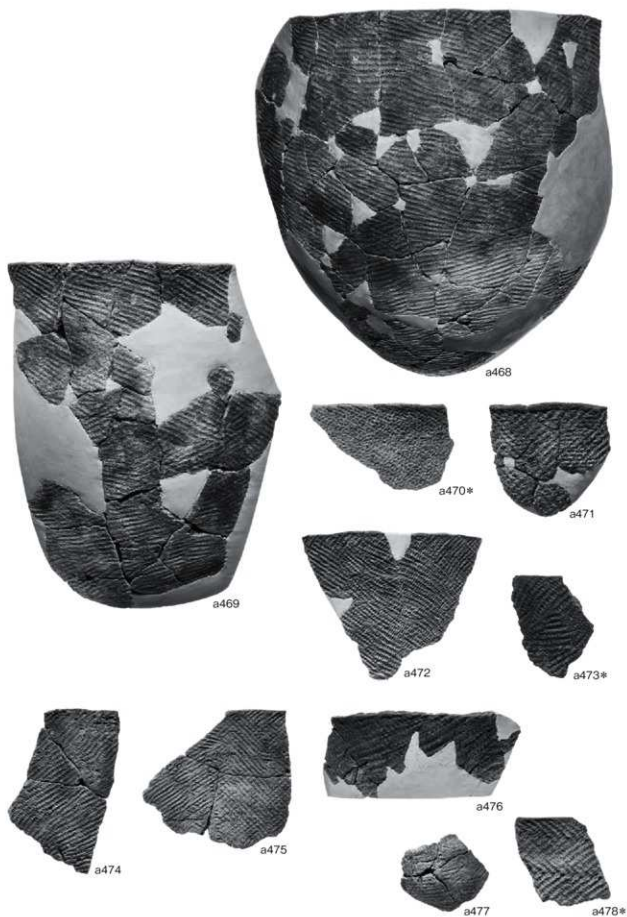
写真図版 74 縄文時代草創期～前期の土器 (20)



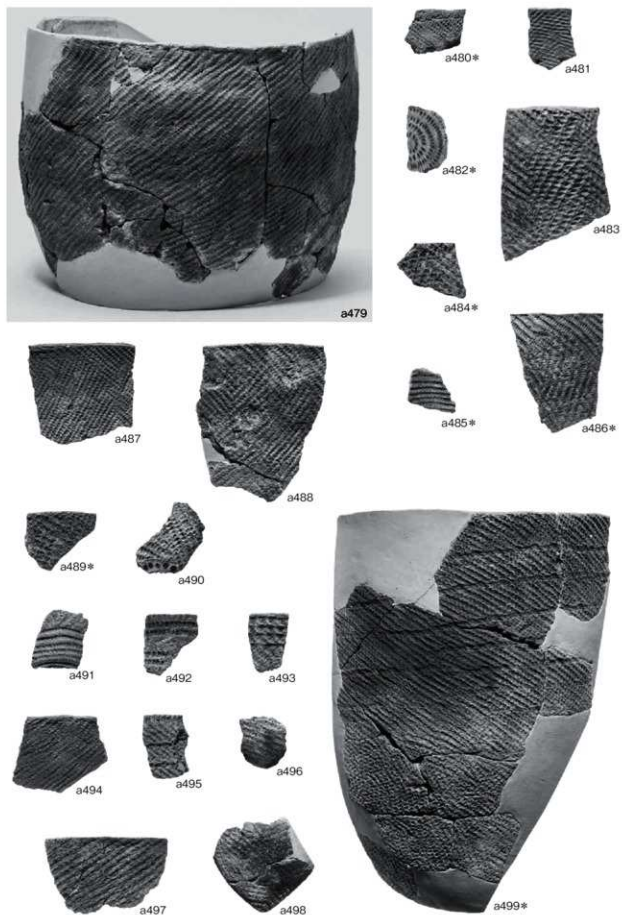
写真図版 75 縄文時代草創期～前期の土器 (21)



写真図版 76 縄文時代草創期～前期の土器 (22)



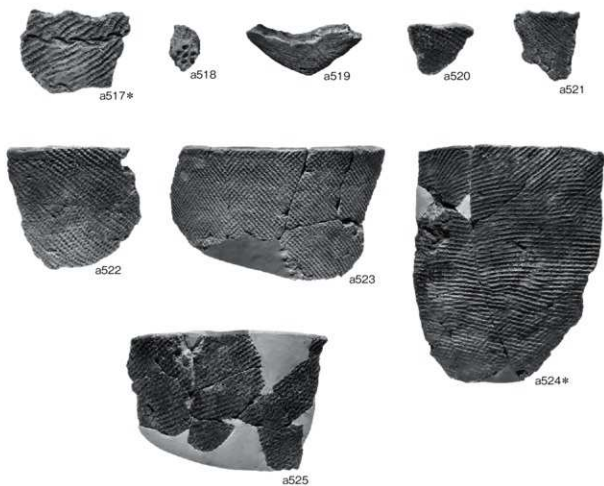
写真図版 77 縄文時代草創期～前期の土器 (23)



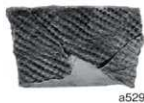
写真図版 78 縄文時代草創期～前期の土器 (24)



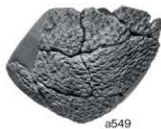
写真図版 79 縄文時代草創期～前期の土器 (25)



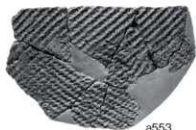
写真図版 80 縄文時代草創期～前期の土器 (26)



写真図版 81 縄文時代草創期～前期の土器 (27)



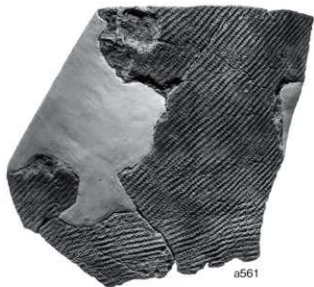
写真図版 82 縄文時代草創期～前期の土器 (28)



写真図版 83 縄文時代草創期～前期の土器 (29)



写真図版 84 縄文時代草創期～前期の土器 (30)



写真図版 85 縄文時代草創期～前期の土器 (31)



a565



a566



a567



a568



a571



a569*



a570



a572*

写真図版 86 縄文時代草創期～前期の土器 (32)



写真図版 87 縄文時代草創期～前期の土器 (33)



写真図版 88 縄文時代草創期～前期の土器 (34)



写真図版 89 縄文時代草創期～前期の土器 (35)



写真図版 90 縄文時代草創期～前期の土器 (36)



a583



a585*



a584



a588



a587



a589



a590



a592



a591



写真図版 92 縄文時代草創期～前期の土器 (38)



写真図版 93 縄文時代草創期～前期の土器 (39)



a607



a608*



a609



a610



a611



a612



a613



a614

写真図版 94 縄文時代草創期～前期の土器 (40)



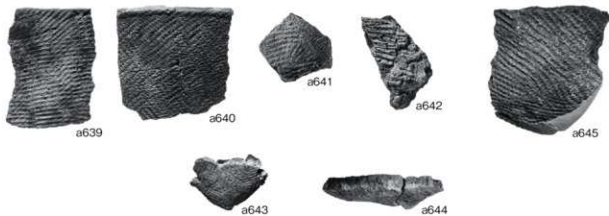
写真図版 95 縄文時代草創期～前期の土器 (41)



写真図版 96 縄文時代草創期～前期の土器 (42)



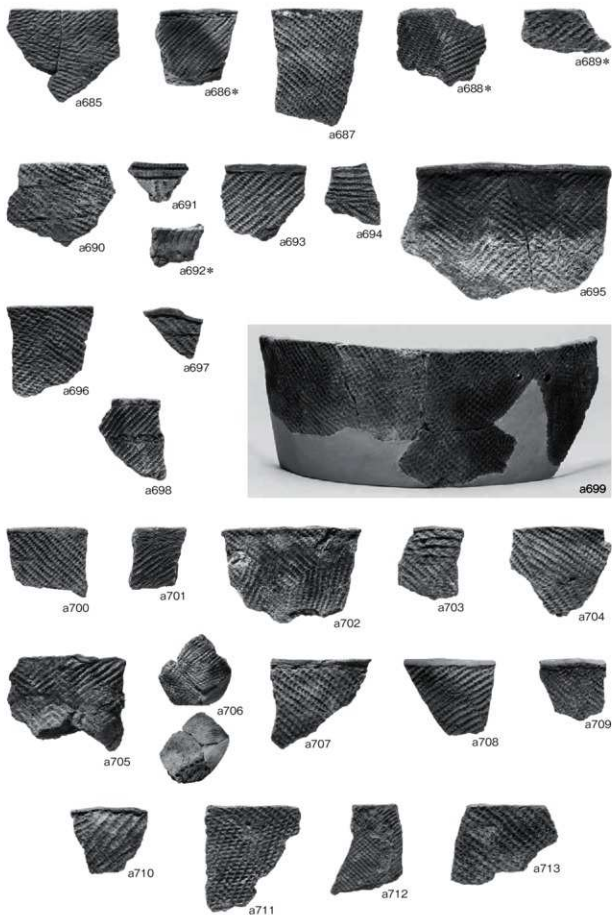
写真図版 97 縄文時代草創期～前期の土器 (43)



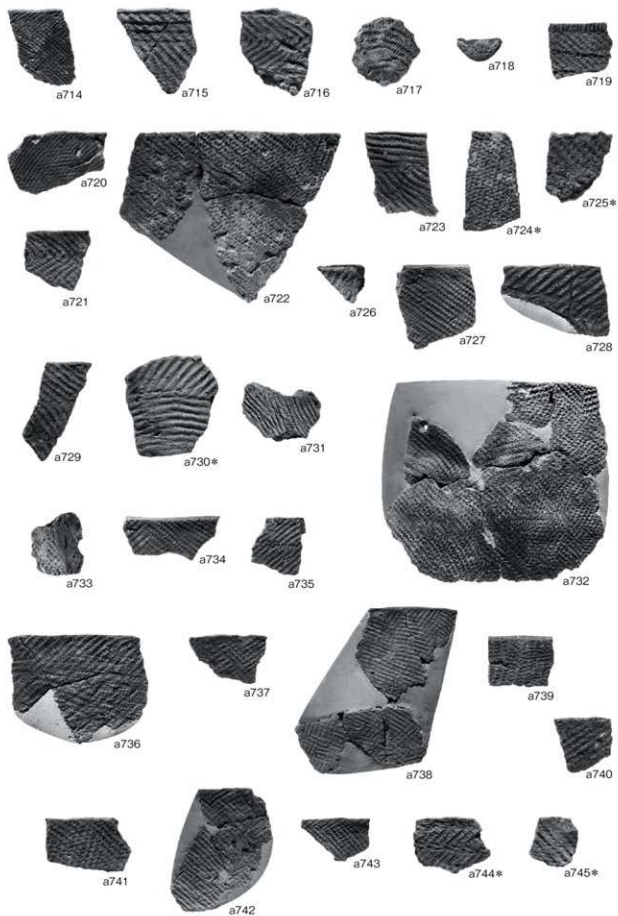
写真図版 98 縄文時代草創期～前期の土器 (44)



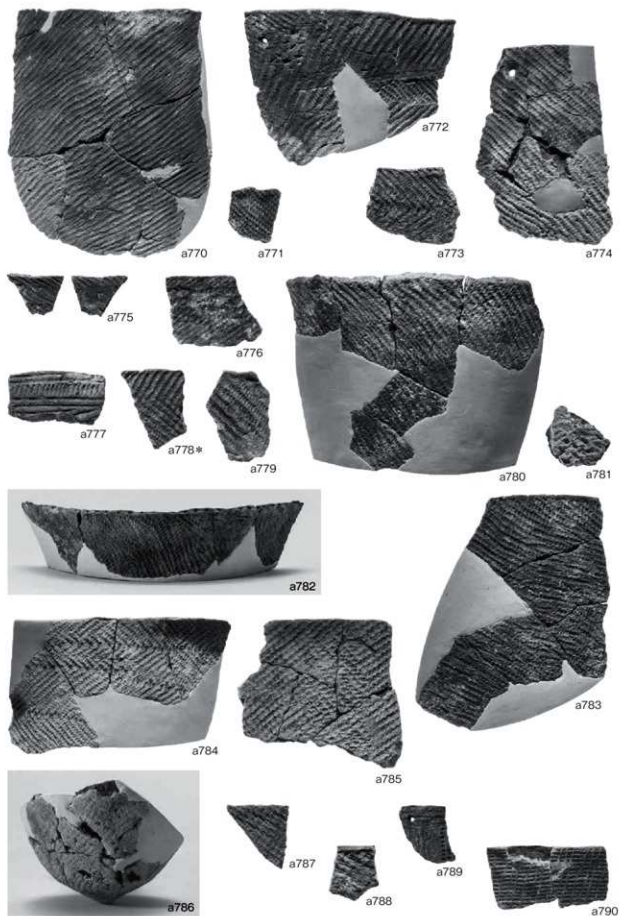
写真図版 99 縄文時代草創期～前期の土器 (45)



写真図版 100 縄文時代草創期～前期の土器 (46)



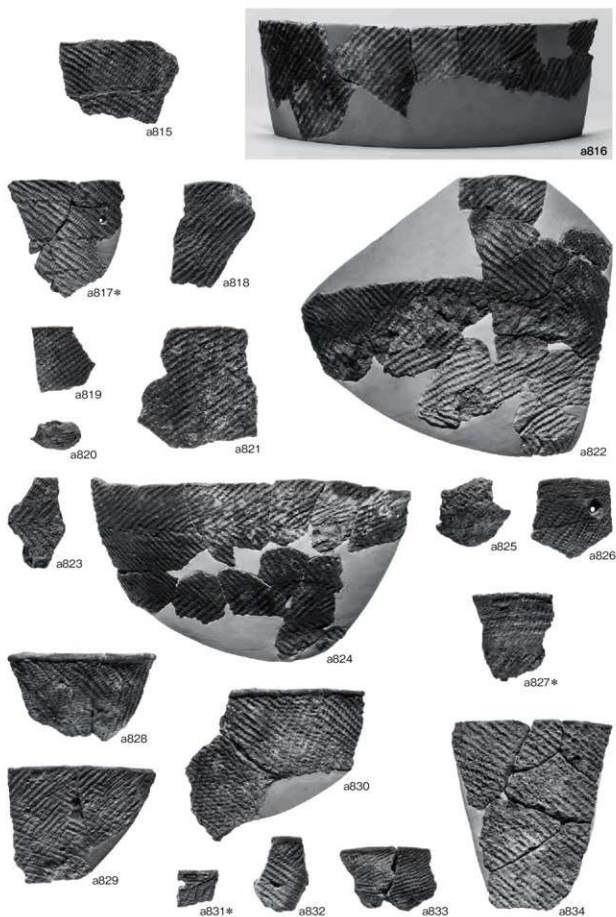
写真図版 101 縄文時代草創期～前期の土器 (47)



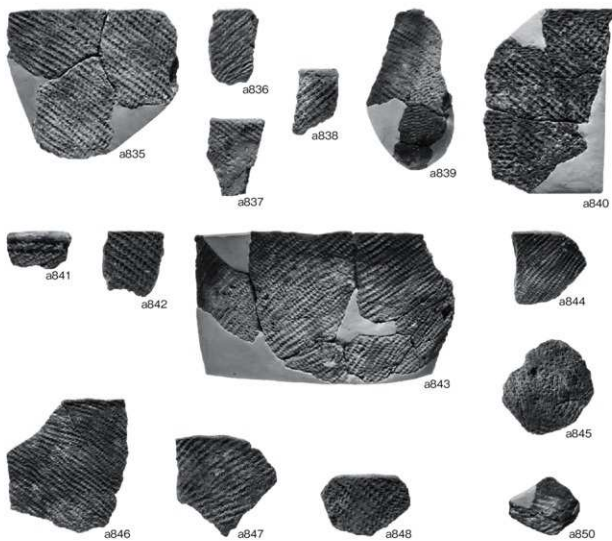
写真図版 103 縄文時代草創期～前期の土器 (49)



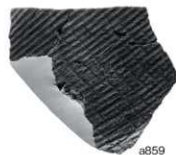
写真図版 104 縄文時代草創期～前期の土器 (50)



写真図版 105 縄文時代草創期～前期の土器 (51)



写真図版 106 縄文時代草創期～前期の土器 (52)



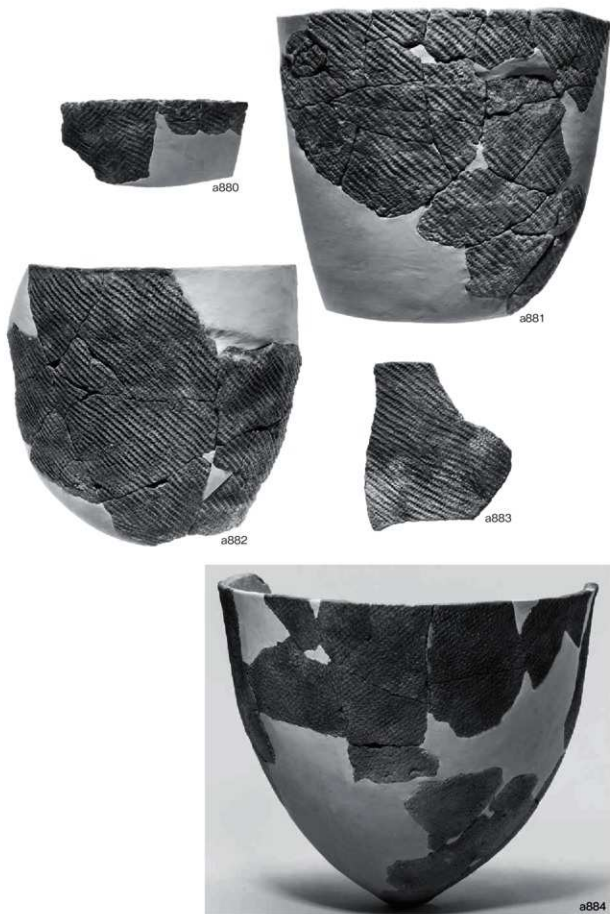
写真図版 107 縄文時代草創期～前期の土器 (53)



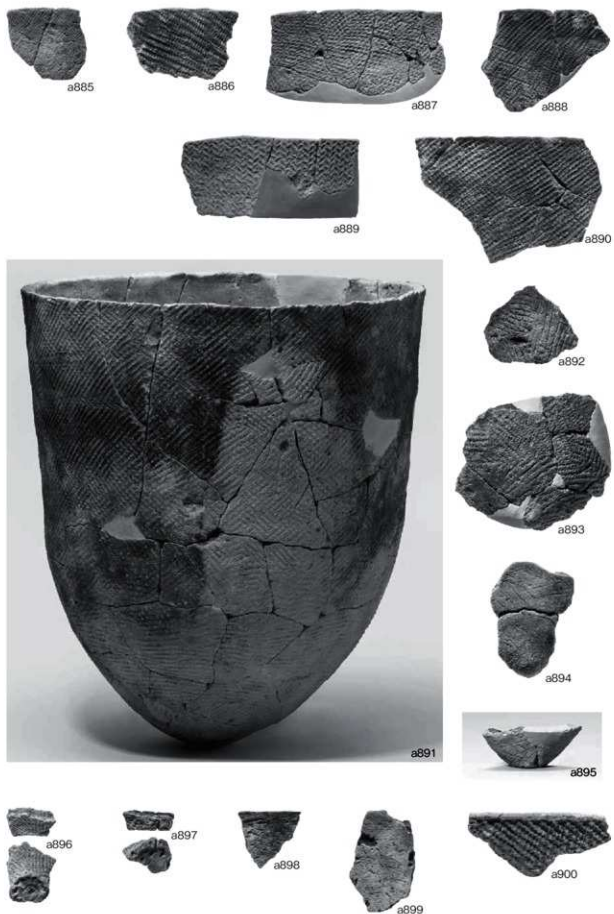
写真図版 108 縄文時代草創期～前期の土器 (54)



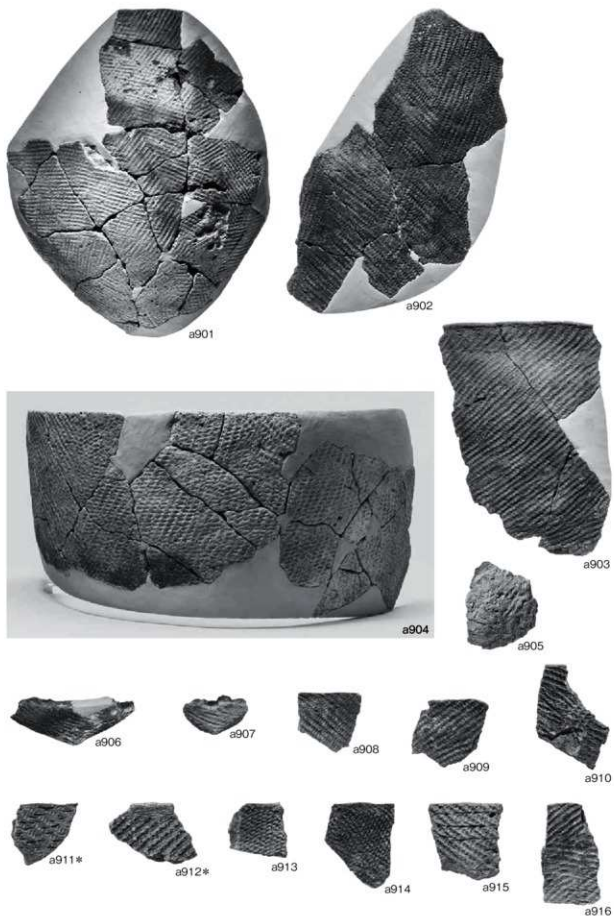
写真図版 109 縄文時代草創期～前期の土器 (55)



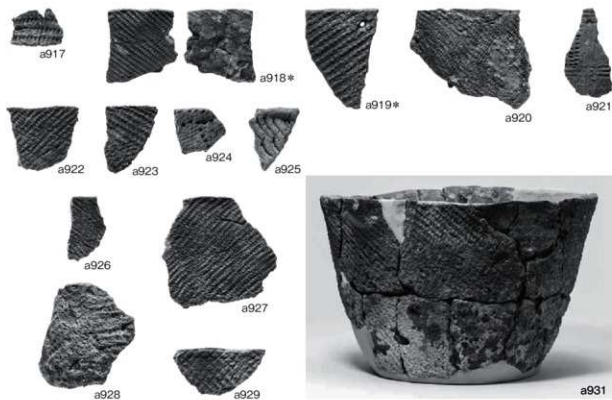
写真図版 110 縄文時代草創期～前期の土器 (56)



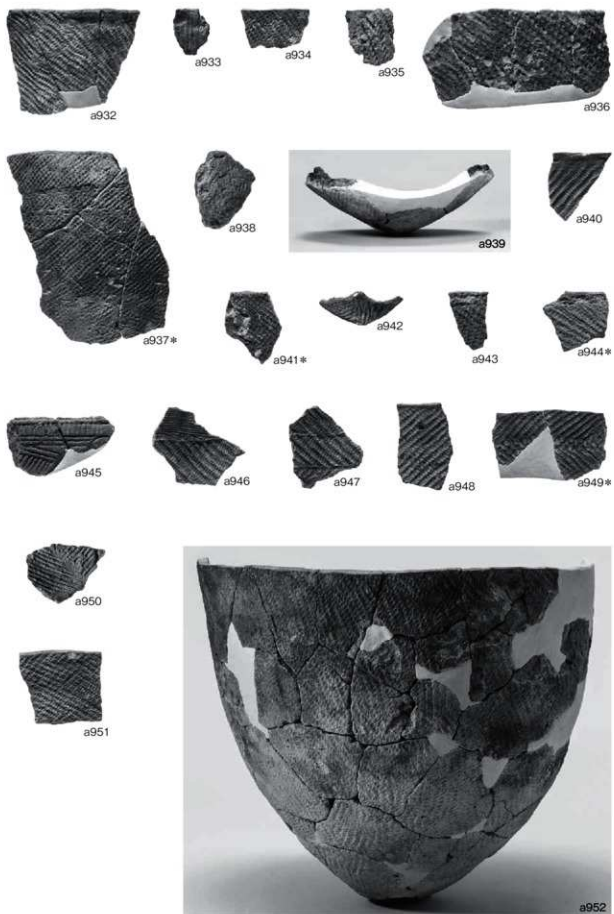
写真図版 111 縄文時代草創期～前期の土器 (57)



写真図版 112 縄文時代草創期～前期の土器 (58)



写真図版 113 縄文時代草創期～前期の土器 (59)



写真図版 114 縄文時代草創期～前期の土器 (60)



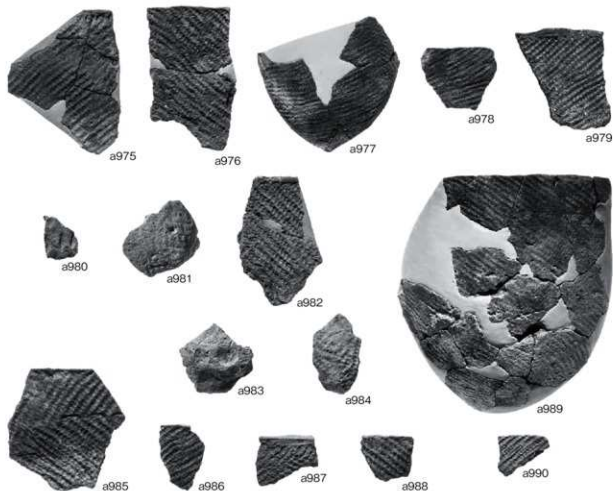
写真図版 115 縄文時代草創期～前期の土器 (61)



写真図版 116 縄文時代草創期～前期の土器 (62)



a974*



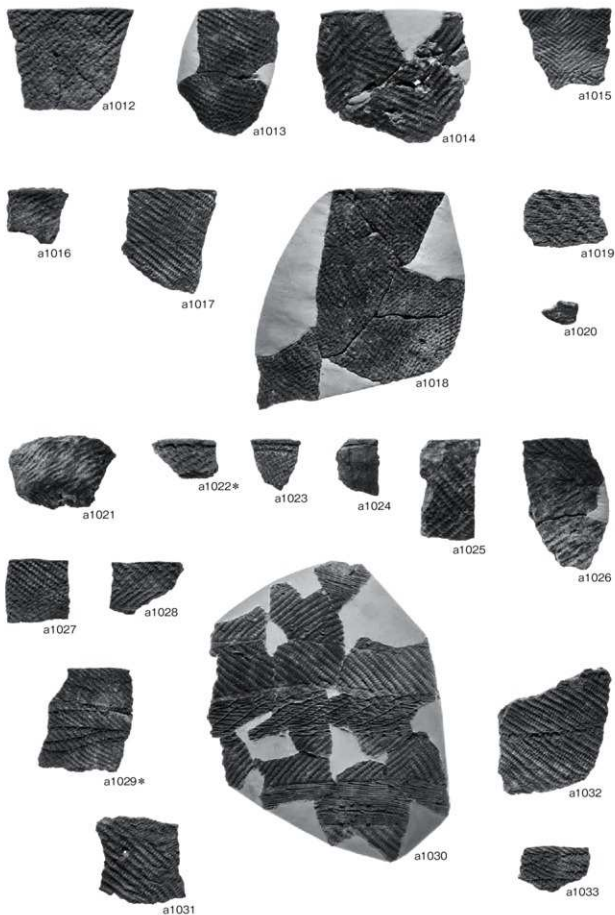
写真図版 117 縄文時代草創期～前期の土器 (63)



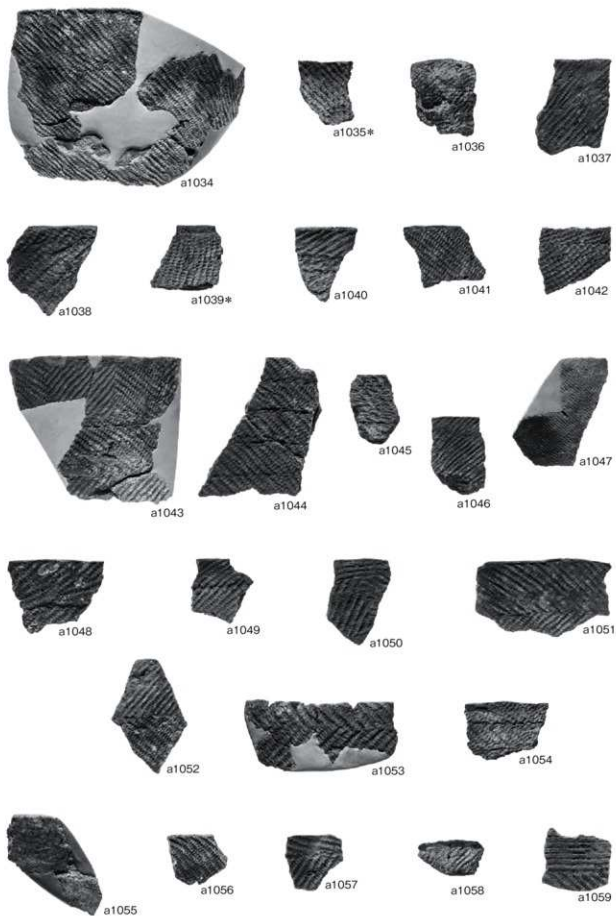
写真図版 118 縄文時代草創期～前期の土器 (64)



写真図版 119 縄文時代草創期～前期の土器 (65)



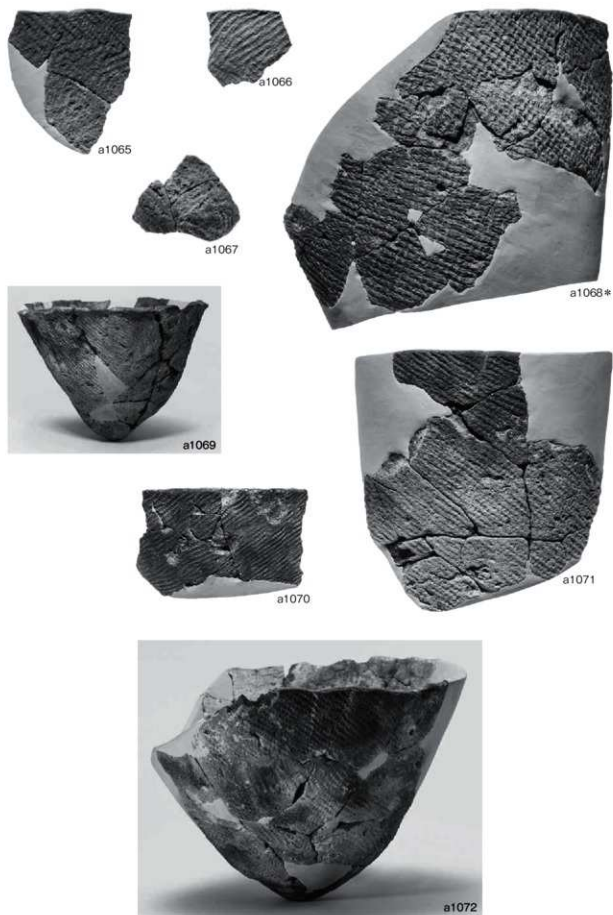
写真図版 120 縄文時代草創期～前期の土器 (66)



写真図版 121 縄文時代草創期～前期の土器 (67)



写真図版 122 縄文時代草創期～前期の土器 (68)



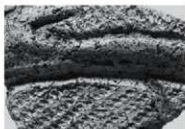
写真図版 123 縄文時代草創期～前期の土器 (69)



写真図版 124 縄文時代草創期～前期の土器 (70)



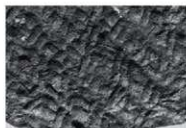
a36



a96



a183



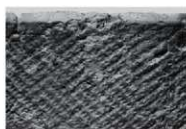
a193



a204



a205



a207



a216



a217



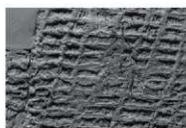
a219



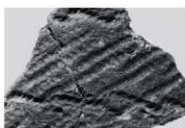
a226



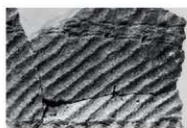
a235



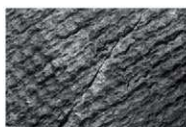
a240



a243



a249



a254



a255



a256



a280



a290



a297



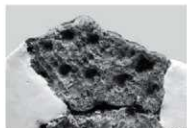
a300



a310



a321



a325



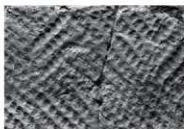
a0328



a330



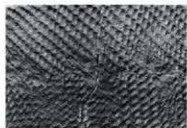
a334



a337



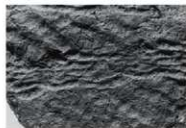
a338



a342



a348



a353



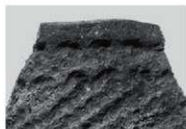
a354



a357



a360



a362



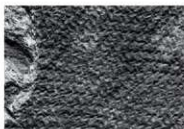
a376



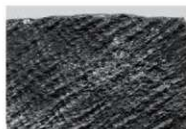
a380



a381



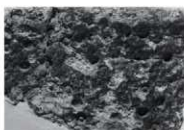
a382



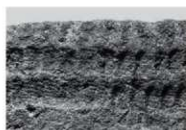
a388



a395



a409



a412



a419



a428



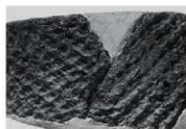
a441



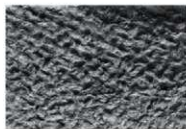
a445



a446



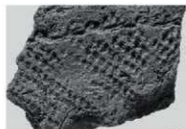
a460



a470



a478



a480



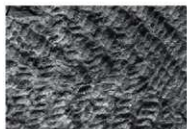
a482



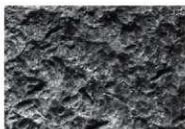
a484



a485



a486



a489



a499



a502



a504



a506



a508



a517



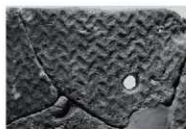
a524



a527



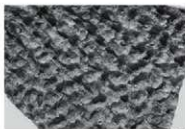
a545



a560



a569



a575



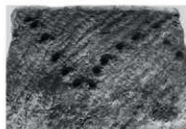
a585



a598



a600



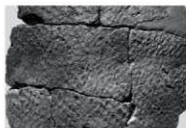
a602



a603



a608



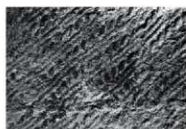
a616



a617



a627



a634



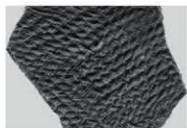
a638



a648



a649



a651



a653



a660



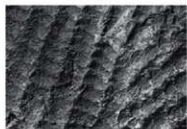
a662



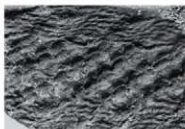
a667



a686



a688



a689



a692



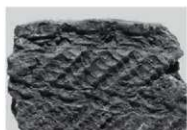
a724



a725



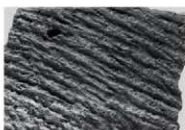
a730



a744



a745



a752



a778



a800



a802



a817



a827



a831



a864



a911



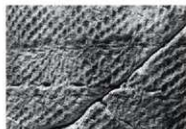
a912



a918



a919



a937



a941



a944



a949



a954



a969



a970



a974



a992



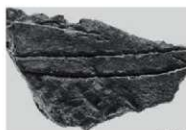
a1022



a1039



a1068



a1077



a302



a423



a543



a556



a572



a576



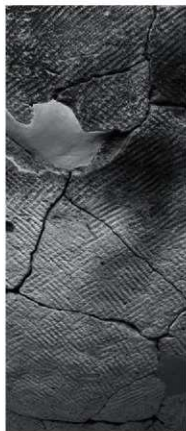
a578



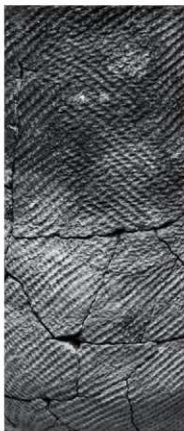
a579



a891



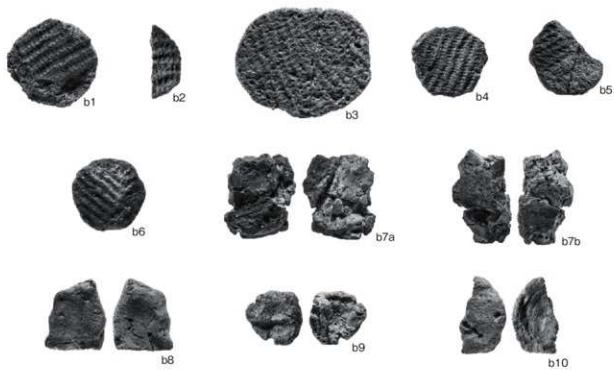
a930

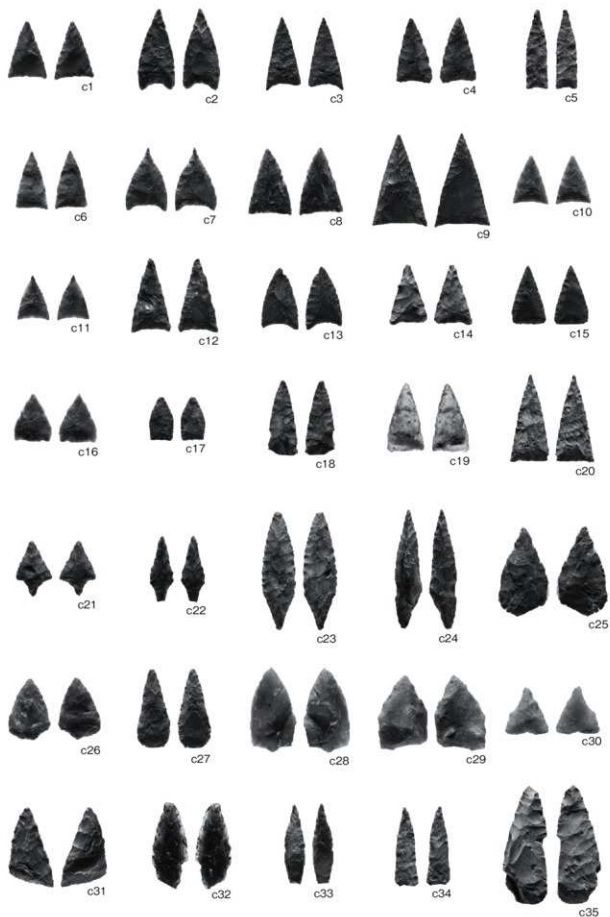


a973



a1030





写真図版135 石器・石製品(1)



c36



c37



c38



c39



c40



c41



c42



c43



c44



c45



c46



c47



c48



c49



c50



c51



c52



c53



c54

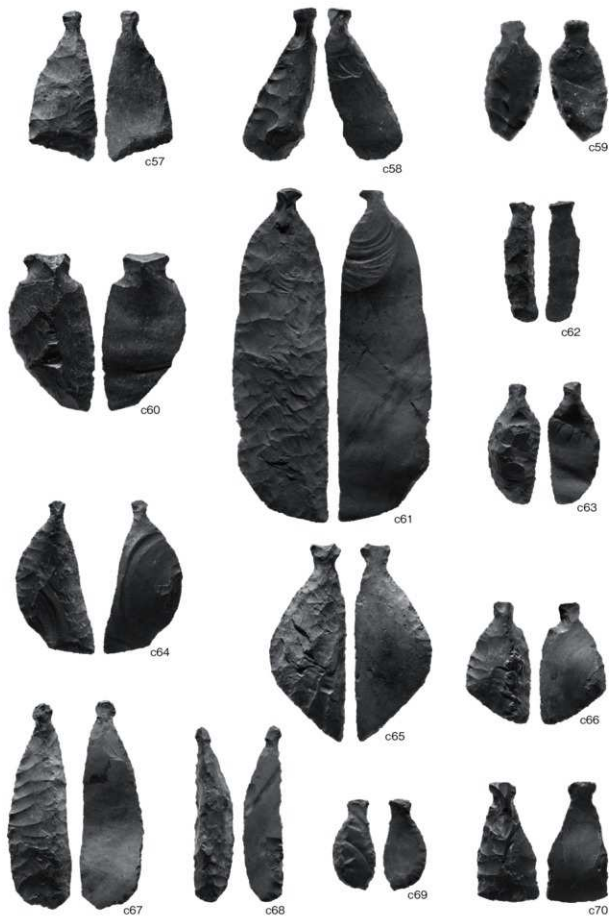


c55

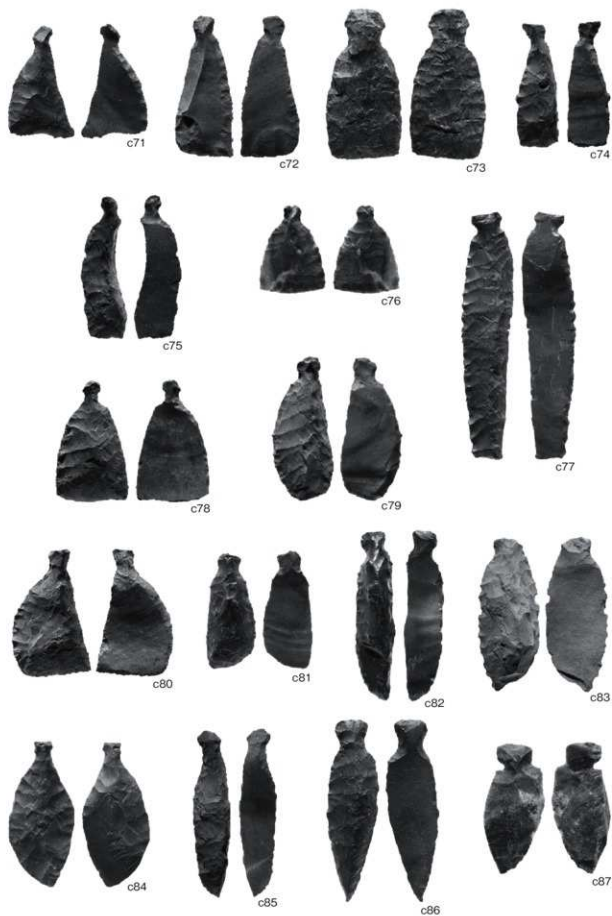


c56

写真図版136 石器・石製品(2)

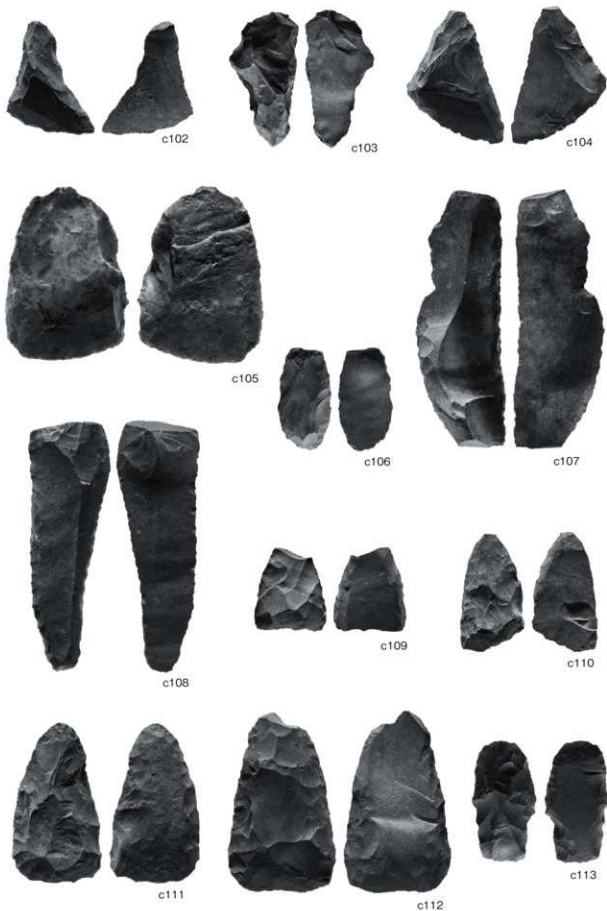


写真図版137 石器・石製品(3)



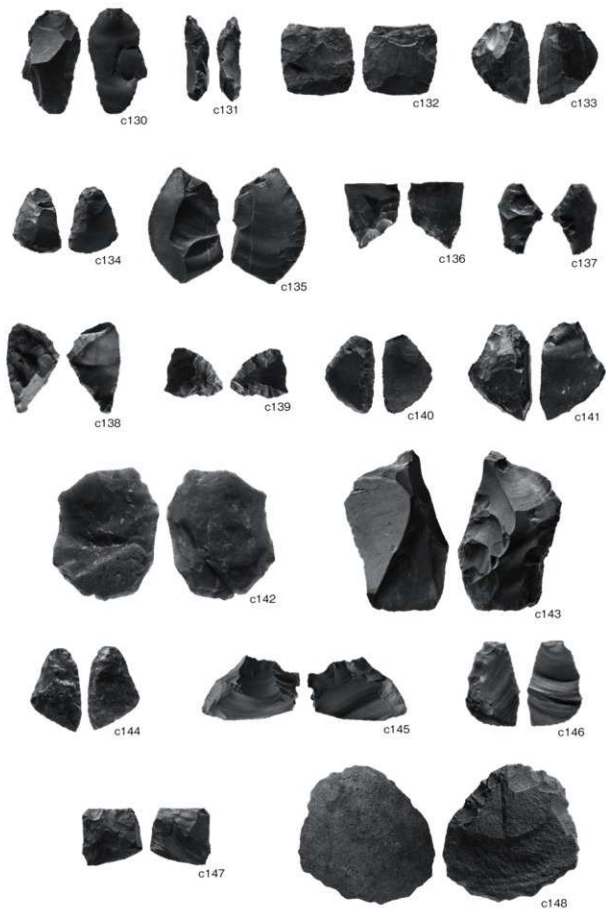
写真図版138 石器・石製品(4)





写真図版140 石器・石製品(6)





写真図版142 石器・石製品(8)



c149



c150



c151



c152



c153



c154



c155



c156



c157



c158



c159



c160



c161



c162



c163



c164



c165



c166



写真図版144 石器・石製品(10)



写真図版145 石器・石製品(11)



c191



c192



c193



c194



c195



c196



c197



c198



c199



c200



c201



c202



c203

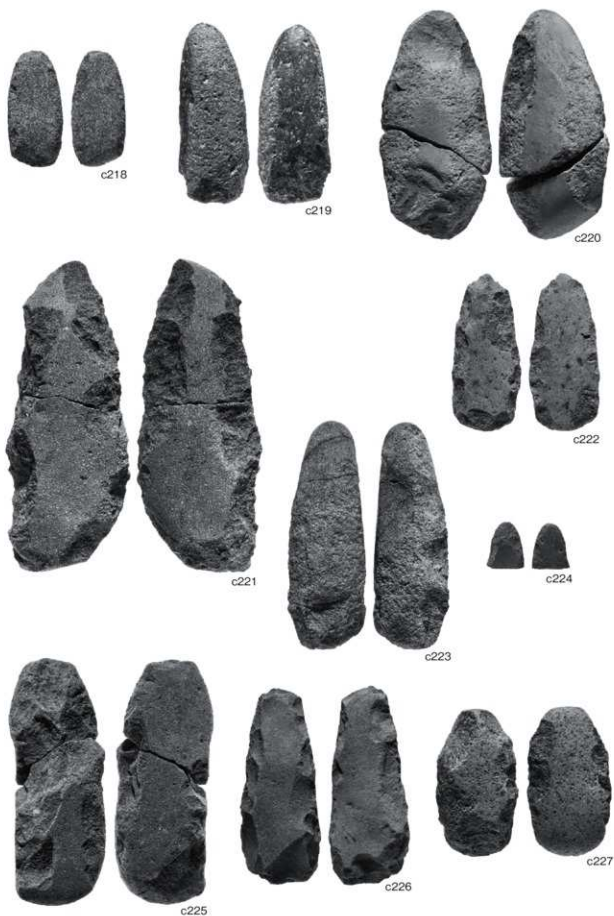


c204



c205





写真図版148 石器・石製品(14)



c228



c229



c230



c231



c232



c233



c234



c235



c236



c237



c238



c239



c240



c241



c242



c243



c244



c245



c246



c247

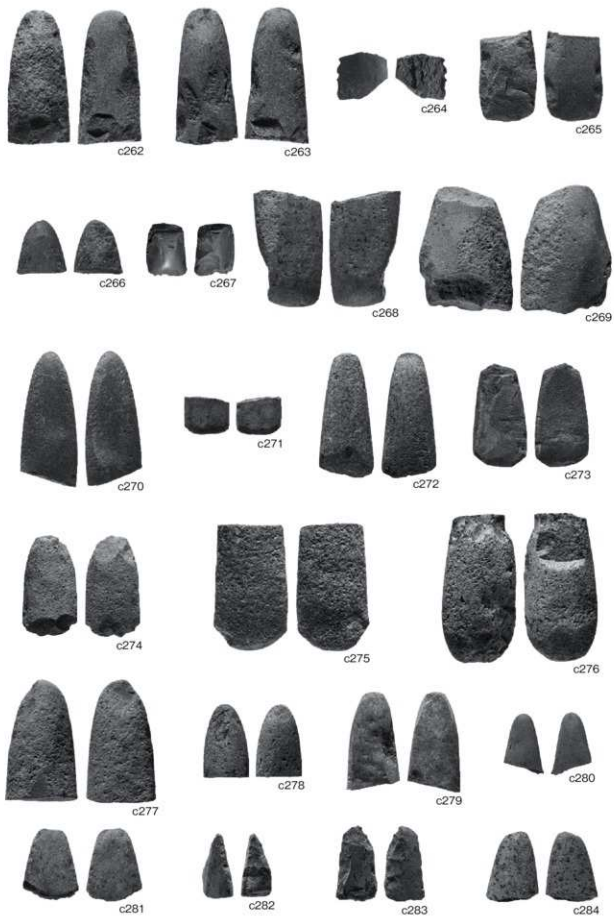


c248



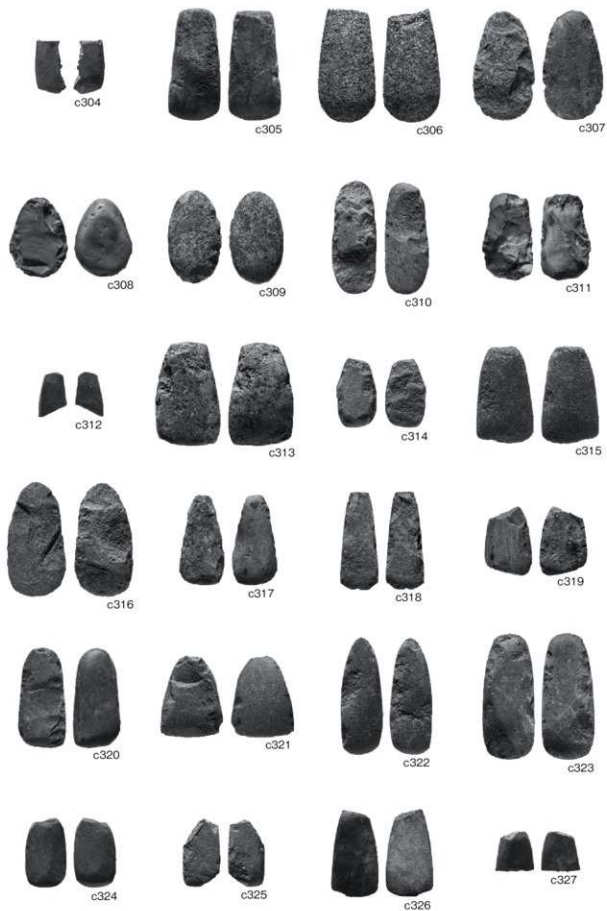
c249





写真図版152 石器・石製品(18)





写真図版154 石器・石製品(20)



c328



c329



c330



c331



c332



c333



c334



c335



c336



c337



c338



c339



c340



c341



c342



c343



c344



c345



c346



c347



c348



c349



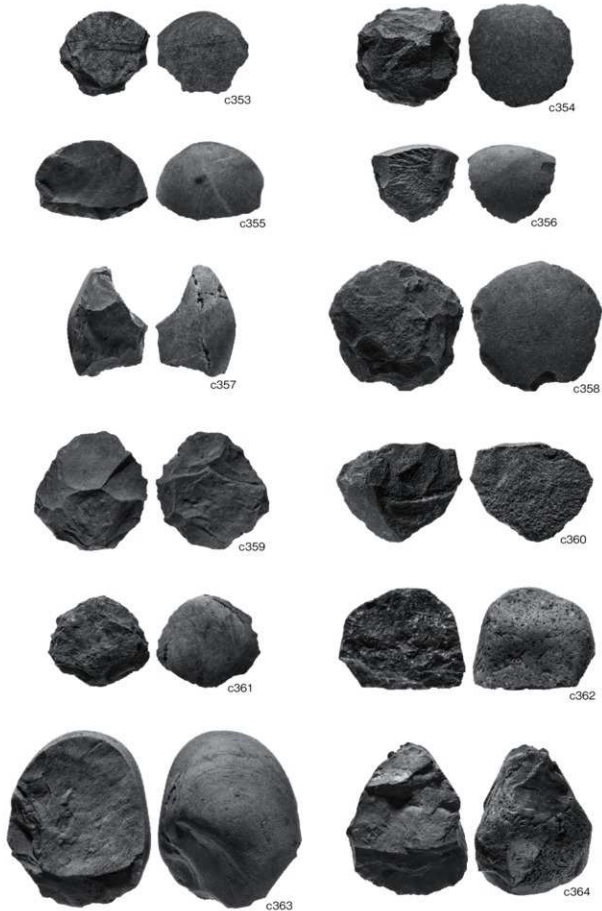
c350



c351



c352



写真図版157 石器・石製品(23)



c365



c366



c367



c368



c369



c370



c371



c372



c373



c374



c375



c376



c377



c378



c379



c381



c380



c382





c393



c394



c395



c396



c397



c398



c399



c400



c401



c402



c403





c415



c416



c417



c418



c419



c420



c421



c422



c423



c424



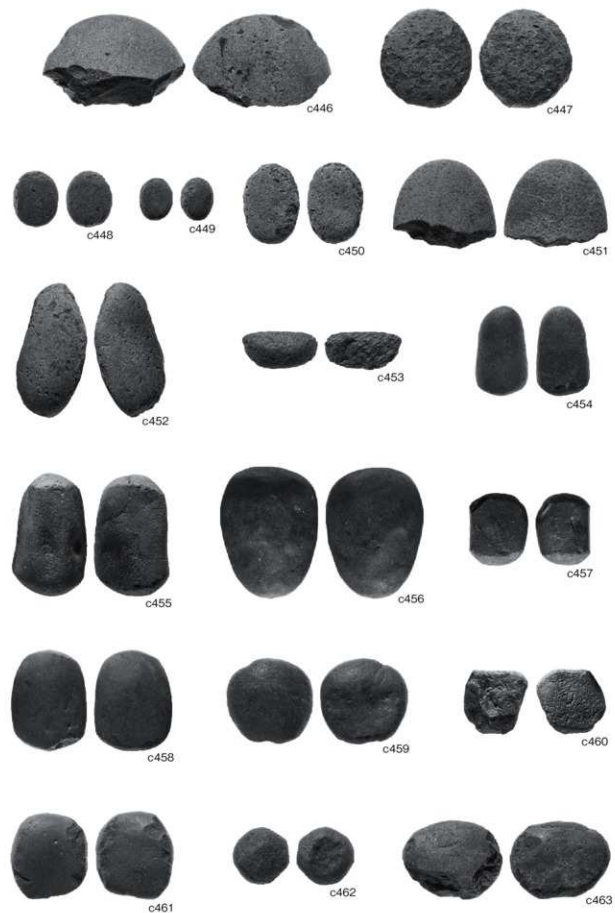
c425

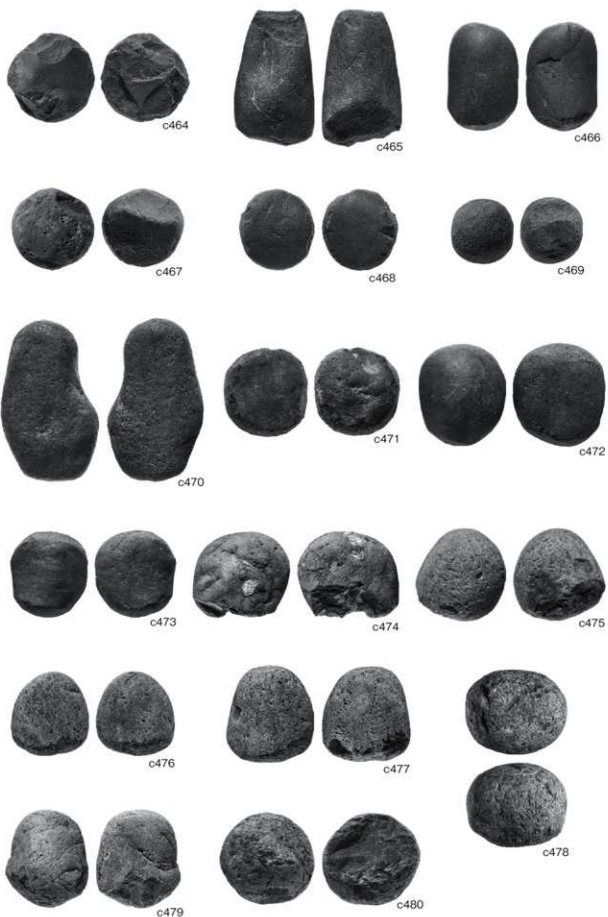


c426











c481



c482



c483



c484



c485



c486



c487



c488



c489



c490



c491



c492



c493



c494



c495



c496



c497





c508



c509



c510



c511



c512



c513



c514



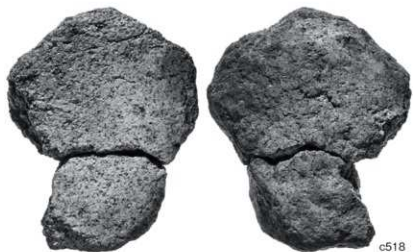
c515

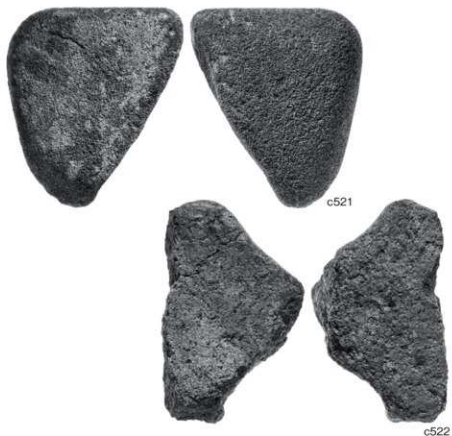


c516

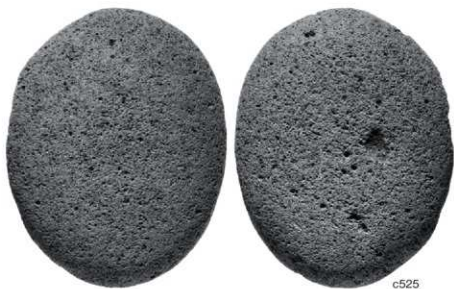


c517





写真図版173 石器・石製品(39)



c525



c526



c527



c528



c529



c530



c531

c532



c533



c534

c535

c536



c537

c538

c539



c540

c541

c542





c562



c564



c563



c565

c566



c567



c568



c569



c570



c571



c572



写真図版 179 土器 (1)



写真図版 180 土器 (2)







c2001



c2002



c2003



c2004



c2005



c2006



c2007



c2008



c2009



c2010



c2011



c2012



c2013



c2014



c2015



c2016

報告書抄録

ふりがな	かぬかほまいいちいせきほくつちようさほうこくしよ							
書名	鹿糠浜Ⅰ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第727集							
編著者名	杉沢昭太郎・溜浩二郎・高木晃・趙哲済・村上絵美・丸山直美							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2021年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かぬかほまいいちいせき 鹿糠浜Ⅰ遺跡	ひろのちようたぬいち 洋野町種市 ちわり 15地割 あどかぬかはまらな 字鹿糠浜地内	03507	IF58-1399	40度 23分 22秒	141度 43分 16秒	2017.06.01 ～ 2017.12.15 2018.04.05 ～ 2018.05.31	6.450 1.350	三陸沿岸 道路建設 事業
	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鹿糠浜Ⅰ遺跡	集落跡(平成 29年度調査)	縄文時代	配石遺構 1	縄文時代草創期・ 早期・前期・後期 ・晩期、弥生時代 後期の土器、土製 品、石器・石製品	縄文時代前期初頭 から前葉にかけて の土器(早稲田6 類c)に相当する)を 多量に含む捨て場 の検出。縄文時代 晩期の製塩土器が 出土			
			捨て場 2					
	堅穴建物 2							
	土坑 31							
集落跡(平成 30年度調査)	縄文時代	飛鳥～奈良時代	堅穴建物 2	7c後半～8c前半代 の土器器・土製品 (紡錘車・垂飾品)				
		近現代	炭窯 1					
	縄文時代	円筒形陥し穴 3						
	縄文時代	フラスコ状土坑 10						
	時期不明	土坑 6						
要約	鹿糠浜Ⅰ遺跡は種市丘陵の東端、和座川左岸の標高53～61m前後に立地する。調査区は北西から南東にかけて延びる7,800㎡で、北側から谷部・斜面部・丘陵部に分かれる。平成29年度調査では主に北斜面部から丘陵部にかけての調査が行われ、To-Cu降下以前、縄文時代前期初頭から前葉にかけての捨て場が確認され、そこから該期の良好な土器が多量に出土した。また、縄文時代後期の堅穴建物や配石遺構も確認されている。平成30年度調査は北側の谷部を中心に行われ、7c後半～8c前半の堅穴建物や確認されるなど、古代集落の一部であったことが判明している。また、縄文時代前期の円筒形陥し穴・フラスコ状土坑も確認され、縄文時代の土地利用が北側まで及んでいることが確認された。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 727 集

鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

(第 1 分冊 本文・遺構図版・写真図版)

印刷 令和 3 年 3 月 5 日

発行 令和 3 年 3 月 12 日

- 編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話(019)638-9001
- 発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号
電話(0193)62-1711
- (公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話(019)654-2235
- 印刷 (株) 白ゆり
〒020-0122 岩手県盛岡市みたち 6 丁目 1-50
電話(019)643-6060